THE CENTRAL REVIEW

中央公論

二月號

第三十一年第二號　第三百廿七號

健脳丸のむ人脳のよい人

島村博士證明
健脳丸
脳病良薬
KENNOGWAN

活動の時も健脳丸
靜思の時も健脳丸

脳のよい人成功する人





◀主効▶

□脳充血 □頭痛
□逆上症 □耳鳴
□神經痛 □眩暈
□脳貧血 □健忘
□卒中 □便秘
□中風 □癲癇

五週分二圓
三週分一圓廿五錢

◀特長▶

少量宛持薬とせば逆上を引下げ通便をよくし恐る可き脳充血を快治し中風卒中を未發に防ぐ特効あり

二週分八十五錢
三日分二十錢

本舗 大阪、東京 丹平商會薬房
全國各薬店

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮内立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝	藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢 但支那を除く）

冊數／國別	内國	國外
六冊	金壹圓五拾錢	金壹圓[illegible]拾錢
十二冊	金參圓	金四圓[illegible]拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號[illegible]二期附錄號臨時號に[illegible]を申請く[illegible]し、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分前金[illegible]の方は內[illegible]錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用必ず一割增の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料及送料共）
一金五圓迄　金七錢

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年十二月廿四日印刷納本
大正五年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　[illegible]
印刷人　高木[illegible]

發行所　東京市本鄕區西片町十番地　中央公論社
電話小石川[illegible]九一九
振替貯金東京三十四番

印刷所　東京市牛込區[illegible]　秀英舍

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

大正五年二月一日發行（毎月一回一日發行）

二月號

第三十一年第二號　第三百廿七號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

健脳丸のむ人脳のよい人



活動の時も健脳丸

靜思の時も健脳丸

脳のよい人成功する人





◀主効▶

□脳充血　□逆上症　□神経痛　□脳貧血　□卒中　□中風

□頭痛　□耳鳴　□眩暈　□健忘　□便秘　□癲癇

◀特長▶

少量宛持薬とせば逆上を引下げ通便をよくし恐る可き脳充血を快治し中風卒中を未發に防ぐ特効あり

五週分二圓　三週分一圓廿五錢

二週分八十五錢　三日分二十錢

本舗　大阪、東京　丹平商會薬房

全國各薬店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

慶應大學教授
戸川秋骨先生譯
エマーソン論文集

(七版)上卷目次
◎歴史論 ◎自恃論 ◎報償論 ◎靈法論 ◎戀愛論 ◎友情論
◎細慮論 ◎勇壯論 ◎大靈論 ◎圓環論 ◎智力論 ◎藝術論

(三版)下卷目次
◎詩人論 ◎經驗論 ◎人格論 ◎作法論 ◎進物論
◎自然論 ◎政治論 ◎名目論 ◎實在論 ◎改革論

◎中外英字新聞評『簡潔にして光彩ある邦文を以て巧に飜譯せり。寸鐵殺人の警句は殆ど毎行に盈つ』

總クロース金文字入
◎上卷 正價壹圓四拾錢 郵税拾四錢
◎下卷 正價壹圓二十錢 郵税拾貳錢

大歡迎 三版

英國デゼルチス著
高橋五郎譯
心靈學講話

(寫眞版五頁入)
四六版總クロース全一冊
正價金八十五錢
郵税八錢

◎心靈學(サイキック、フキロソフキー)は天下の最新哲學である。所謂「新思想派哲學」とは即ち此學の事である、◎心靈學は第一に現世と靈界との交通を研究するものである、◎心靈學は吾人と亡靈との交通を成立せしめ、幽靈や遊魂の談話及び筆記を得て吾人死後の狀態を講究する者である、◎亡靈や遊魂の如き靈怪との交通を開く術を交靈術と名けるが、本書は此交靈術を詳述し交靈現象を研究した者である、◎本書は斯く交靈術の研究に由て、吾人が死後に於ける靈魂の不滅を證明し、併せて健全なる新倫理を確立した者で最新進化論の泰斗ワルレス博士も極口推賞した斯界有名の新書である

東京市本郷區西片町十番地　玄黃社　電話下谷一三一九番　振替東京七九九五番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論



二月號
第卅一年第二號
第三百二十七號

支那帝制問題の前途如何

(一)

支那の革命成功して清朝を倒ふし袁世凱氏大總統に任じてより未だ四歳ならず四百餘洲の天地僅に兵塵の收れるを見、內外の政務亦た將に其緒に就かんとするに際し、昨秋に至り國體改正の議あり米人グウトノウ博士の帝政論を機會に袁氏の家子郎黨、楊度一派は籌安會を組織して袁氏を帝位に登ぼすの準備に着手せりと報ぜられ、十月に入り我政府は英露佛伊と提契して帝政の延期を勸告せしも、北京政府は表面急速斷行の意なきを以て答へ其實代行立法院を開きて帝政を決議する等着々帝政實行の準備に忙はしく、上海なる江南機器局の暴動ありしも一二日にして鎭定し、既に新朝の年號を洪憲と定め、事實

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

永井荷風著書

日和下駄

東京散策記

再版發行

四六判鼠表紙上製
全四號活字全一冊
挿繪風景畫十七葉
定價金壹圓

東京は如何なる處ぞ。舊時の江戸の文明は如何なる變遷を經て現時の東京文明を生みたるか。はた將來の東京は如何に開展せんとしつゝあるか。「日和下駄」は是れ過去現在未來に亘りて大日本帝國の首府東京を評論したる藝術的著作なり。

縮刷 荷風叢書

新型新裝上製各三百餘頁
各冊定價六拾五錢
三冊既刊
二冊近刊

■牡丹の客

□歡樂□春のおとづれ□深川の唄□狐□花より雨に□牡丹の客□曇天□新歸朝者日記

■新橋夜話

□掛取り□色男□風邪ごゝち□短夜□五月闇□名花□晝すぎ□妾宅□松葉巴□淺瀨□わくら葉

□既刊□

■冷笑 長篇
■新橋夜話
■牡丹の客

□近刊□

□紅茶の後
□すみだ川

東京丸の內三菱廿一號館　**籾山書店**　振替東京二四一七番　電話本局二一三二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證劵訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話長本局一八五六、五一五〇、一三八七番
振替貯金口座東京一一七一七番

支店 大阪市東區本町一ノ一三(電話長本局二三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり



中央公論第卅一年二月號目次



WILLIAM M. CHASE



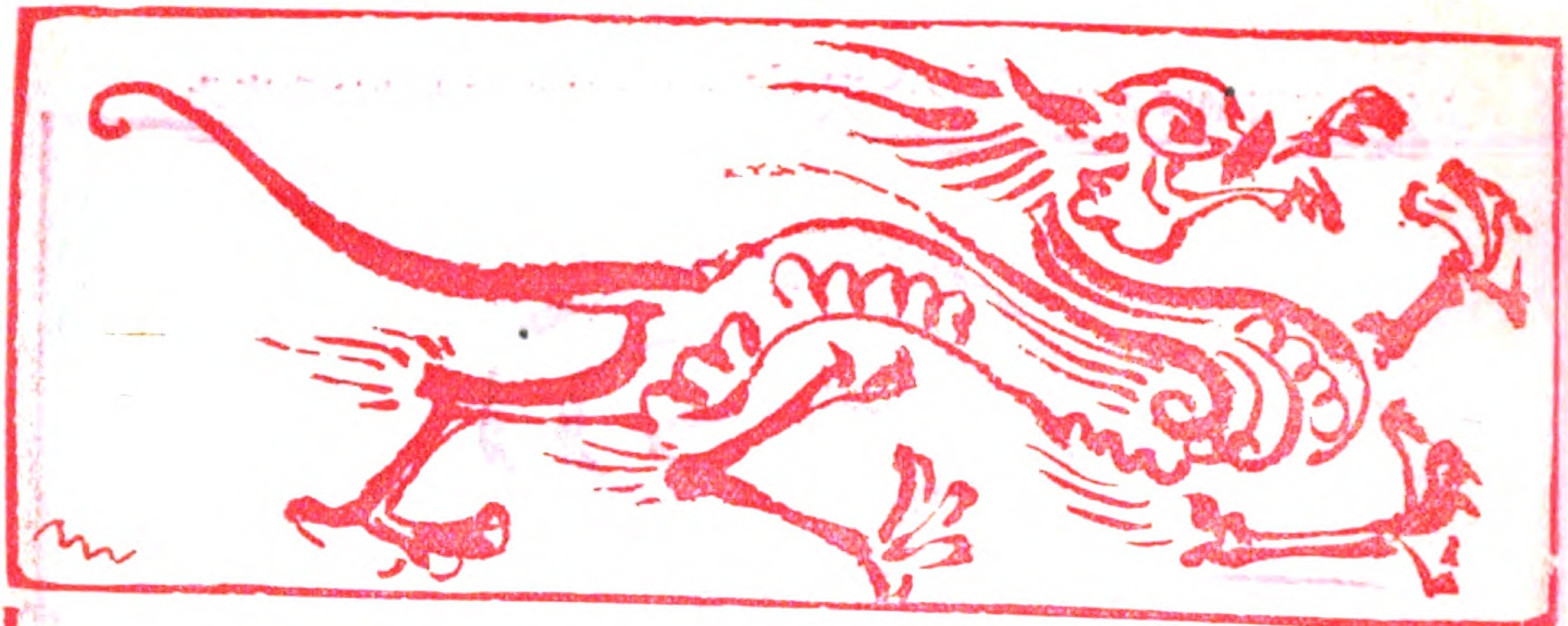
Portrait of Miss L.



中央公論第廿一年二月號目次

▲公論

▲說苑



▲評論

《小說》

弊廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

WILLIAM M. CHASE



Portrait of Miss L.

中央公論



二月號
第卅一年第二號
第三百二十七號

支那帝制問題の前途如何

（一）

支那の革命成功して清朝を倒ふし袁世凱氏大總統に任じてより未だ四歳ならず四百餘洲の天地僅に兵塵の收れるを見、內外の政務亦た將に其緒に就かんとするに際し、昨秋に至り國體改正の議あり米人グウトノウ博士の帝政論を機會に袁氏の家子郎黨、楊度一派は籌安會を組織して袁氏を帝位に登ぼすの準備に着手せりと報ぜられ、十月に入り我政府は英露佛伊と提契して帝政の延期を勸告せしも、北京政府は表面急速斷行の意なきを以て答へ其實代行立法院を開きて帝政を決議する等着々帝政實行の準備に忙**はしく、上海なる江南機器局の暴動ありしも一二日にして鎭定し、旣に新朝の年號を洪憲と定め、事實**

上袁總統を陛下と稱し百官有司孰れも已に臣禮を執ると傳へられしに際し、舊歳末に至り突如として、雲南獨立の報あり、幾許もなく貴州之に同し、四川、兩廣亦動搖し、一般に支那騷亂の兆あるは吾人の憂慮に堪へざる所たり。

頗る信ずべき報道に由れば十二月十七日排袁派の領袖李烈鈞、龔振鵬、熊克武は雲南府に着し直ちに擧兵に着手し、翌十八日雲南將軍唐繼堯は李烈鈞を訪問し直ちに雲南忠烈祠に於て李烈均、熊克武、方聲濤、龔振鵬と共に雲南武官黃毓成、楊福璋、楊震等を會し獨立排袁の擧に關し軍事財政外交の諸問題を議せりと云ふ、此日雲南府駐在各國領事亦來り祝辭を述べ、某領事の如きは「此一擧ありて支那尚ほ其人あるを知る努力せよ」と大に激勵せりと云ふ、越えて二十一日南洋地方華僑より現金六十萬兩を送り來り又た此日小銃山砲其他軍需品の多量某地より輸送せるもの到着し、而して二十二日には今次擧兵の首腦たる蔡鍔また戴戡其他と共に雲南に入れりと云ふ、其他の領袖輩亦た續々此地に集まり、雲南は乍ち討袁派の本據たるの觀ありて、此より廣西廣東、江蘇を始め各地の同志と内外策應し大に謀る處あるべきや察するに餘あり。

雲南の反袁領袖輩はまた一の檄文を發布して袁氏の罪惡を數へ獨立の理由を告白せり其要に曰く、

清朝晩年の非政の結果、支那の國家的生命は方さに滅亡に瀕せり、國民は列國競爭の間に在りて國家の滅亡に近けるを見て憤慨に堪へず革命義軍を起して清朝を斃し、共和民國を創立して國家統一の必要上袁世凱を推して大總統に擧げたり、此より後二箇年間は愛國の士は皆な一致して袁を助け新政府

の基礎を定むるに努力を惜まざりしが、素と斯くするは或一人の利益を增進せんが爲めに非ず只だ將に傾覆せんとする國家を濟はんとする爲めに外ならざりしなり、然るに袁世凱が其在職四箇年間に於ける施政の跡を見るに一の光明ある點を認むること能はず、其志す處一に自家及び一族の利益榮達を謀り、詐僞狡猾策の至らざるなく國會を破壞し、國論を壓迫し、密偵を發ち、國士を放逐せり、又た袁政府は二億の外債を起したるも其使途に至りては公明の檢査を經るに堪へず、歐洲開戰以來外債の途絕ゆるや苛稅を誅求し內債を强制し、虐政の結果到る處民人塗炭に苦むに至れり、更に袁は其不信義の外交に由り外國の侮を招けりと論じ、內憂外患交も臻りて忠良の士は政府を去り獨り亂臣賊子のみ國柄を執りて益々國家を慘害せんとす、而して遂に帝政を企てゝ列强の警告を誘致し、更に終に其干涉を招ぐの恐なしとせず、是れ實に國家最大の恥辱にして、若しも袁をして其志を擅にせしめんか遂に外國に臣事し又は拳匪事件の二の舞を爲すに至らんも計る可らず、是れ即ち雲南を始め各地袁政府より獨立を謀らんとする所以にて、其目的たるや(一)共和政體を保持し、(二)中央政府と地方政府との區域を限定し、(三)憲法政治を實施して宇內の進運に併行し、(四)列强と信義を厚ふして以て國家の位地を高うするに在り。

彼等また宣言して曰く

中華民國四年十二月雲南政府獨立以前に係る一切の條約は今後と雖も槪ね有效に屬す、各友邦人民の生命財產商業にして本軍政府領域以內にあるものは本軍政府に於て一切保證すべく、又國際義務を遵

守して將來に於ける一切の國際往來は本軍政府より殊に代表者を派遣して各友邦公使領事と直接交渉すべし、本軍政府は更に天地に誓つて自今願はくは文明進化の原則を遵守し以て克く内は共和國眞正の幸福を享受し、外は忠信誠實を以て外交方針を立てんことを期す云々、

斯くて各方面に同志を求め、貴州將軍及官憲已に加盟して獨立を宣布し、四川將軍陳宧廣西將軍陸榮廷廣東將軍龍濟光の去就未定なるか、四川重慶に於ける劉存厚部下第一師團已に排袁軍に内應せりとも報ぜらる、想ふに該三省の各將軍は決して袁氏の無二の忠臣には非ず、若しも北京政府の派遣せる曹錕將軍にして能く其率ゆる三師團の兵を以て速かに雲貴を鎭定すると能はざるに於ては四川、廣西、廣東は他省に先んじて排袁の旗幟を擧ぐるに至らんと殆んど疑ふ可らざるに似たり、然るに曹錕將軍の策戰は其部下を二分し一は四川路を取りて進み、一は洞庭湖を渡りて沅江を溯りて貴州に入らんとするが如くなるも、四川路の方は兎も角も、貴州に向はんとするには洞庭湖減水の爲めに汽船を利用する能はずして戎克に由るの外なく、爲めに岳州より沅江口に至らんには二十餘日を要すべく、討伐軍の進行決して容易ならず、抑も雲南貴州は支那南西の一隅に位し、山嶺疊重して最も交通に不便なり、水運の便としては只一の沅江の水路あるも、是とても、其江口より常德まで六十浬間增水期間に小蒸汽の通航を見るに止まで常德より溯江四百餘浬は急湍多くして僅に輕舟小艇の上下に便するのみ到底軍隊の必要に應ずべき大輸送に堪へず、其他は假令四川よりするも、廣西よりするも上り坂の狹隘なる山路あるに過ぎずして、一夫路に當れは能く萬夫を支ふべき險要少なしとせず、即ち守るに易く攻むるに難しとは之を

こそ言はめ、官軍の侵入には最も不便なりと云はざるべからず、獨り佛領安南方面よりは蒙自を經て雲南府に至る鐵道あり、單線なるが上に路程山間懸岸多く降雨に際し線路崩壞して交通杜絶を告ぐること屢〻ありと雖も、兎に角斯の如き山嶺疊重の奧にまで鐵道の便あるは頗る珍重するに足れり、然るに此方面の交通たるや毫も袁政府に便ならずして却て大に排袁軍に便利なるべきは睹易き道理にして、現に小銃野砲等多く雲南に到着せりと云ふもの又は排袁派の領袖多く日を期して此地に集れりと云ふもの皆な此鐵道の賜に非ざるはなし、故に若しや交通の便不便を以て云はんか雲貴の排袁軍は後方勤務比較的自由自在にして軍器糧食の供給を受くるを得べきも、袁軍は深く雲貴に入るに從ひ物資供給の便を失ひ非常の困難に遭遇すべきなり、故に若しも蔡鍔李烈均唐繼堯の輩猥りに事を急ぐことなく固く雲貴の險を守りて徐々に四隣の變を待つの擧に出でんか曹錕將軍如何に焦慮腐心するも容易に排袁軍の根蔕を拔くこと能はざるべきは識者を待たずして知るべきなり、曾て清朝の初に當り平西王吳三桂の此方面に據りて反旗を飜へすや清朝は已に朱氏の遺類を巢滅して國勢冲天の勢ありしに關はらず、康熙十二年より同二十年に至るの久しきに亘りヤット討伐の功を終へたり、而かも吳三桂中道にして死し嗣子不肖にして父の業を繼ぐべき才幹なき上に、猥りに兵を荊楚方面に出して天下を爭ふの輕擧を敢てすることなくば猶ほ數十年を維持するを得たるや想像に餘あり、然るに今日の雲貴に據るものは佛領安南方面に對し鐵道の便ありて物資の供給に事缺くの憂なき耳ならず其敵とする袁氏の勢力は未た根蔕深からずして康熙時代の清朝と比較すべきに非ず、且つ四川、廣東、廣西の形勢は大に排袁派に利ならんとするものあり、

現に排袁派の大立物たる岑春煊は其郷里なる廣西に在りとの報あるより察すれば兩廣の勢力家を說きて排袁の擧に出でしむるに全力を傾注しつゝあるは明かにして、四川の將軍陳宧また北京に於て帝政に快よからず爲めに幽閉の人となり居れる副總統黎元洪の舊幕下なりと云ふを以て察すれば時の勢を見て去就を決せんとする人たるは想像に餘あり、斯くて兩廣四川の態度一たび判然するにも至らば南方一帶は殆んど排袁の勢力を以て强壓するに至るべく、江蘇將軍馮國璋、山東の張勳の如きも遂に排袁派に與みして起つに至らんか、且つ之に加ふるに河南の白狼社亦同鄕の袁世凱に心服せず平素不穩の形勢あり、陝西、甘肅の馬安良、革福章亦た回敎徒を率ゐて何時に奮起せんも計る可らざる耳ならず、蒙古も亦た平穩無事ならず、蒙匪は宗社黨の煽動あらば必ず排袁の旗下に集るべく、宗社黨第一の人物たる前將軍升允は南方の排袁派と結托して北京を狹擊するの方略を定むるなきを保す可らず、要するに今次の舊革命派の爆發は前年の南京第二革命又は最近江南機器局の暴動等の失敗に鑑み其用意頗る周到なるもの、如く、袁氏の帝政計畫を機として爆發せるも其籌策は必ずしも倉卒に立てられしものに非ざるが如し、故に若しも北京政府の措置機宜を失するに至らば或は支那大亂の導火となりまたは極東の重大事とならんも計り知る可らず。

（二）

我々日本人として支那の國體問題を觀る素より頗る興味ある問題たるに相違なきも、支那が共和たると帝政たるとは吾人が表立ちて容喙すべき限に非ず、元來舊淸朝の如きも同じく帝政とは稱しながら我

邦の萬世一系の帝室とは自ら其根帯を異にするものありて、或は共和を唱へ又は帝政を說く處の支那政治家の心裡亦邦人の心を以て忖度し難きものなくんばあらず、吾人が曾て我『公論』欄上に於て論じたるが如く臣下として其君主に謀反し又は自立して帝王となると云へば我邦人の考を以てすれば惡虐無道の振舞に相違なきも、支那に於ては必ずして然らず、支那二十四朝の交迭は以て我邦の公卿又武門の閥族政府の交迭と比較すべく、即ち宋の唐に代り、元の宋に代り、又は淸朝を甞ふしたる袁氏か自ら帝位に登ると云ふは宛も鎌倉幕府出で丶藤原氏、平氏に代り、室町政府成りて鎌倉に代り、又は德川氏出で丶豐臣氏の天下を執りしと云ふと多く擇ぶ處あらず、我に在りては天子より政治の御委任ありと云ふの形式に由り天下の權柄を執り、彼に在りて天命に由り九五の位に登ると云ふの相違あるのみ、故に袁世凱氏が今日大總統たり明日帝王たるを觀るも吾人は之に對し毫も我邦一流の大義名分論に拘泥すべき所以を見ず、佛國のナポレオン三世が曾て大統領の職に就きながら未だ數年ならずして一朝クウデ・ターの結果皇帝と爲り濟して平然たりしと何の擇ぶ所かある、皇帝に爲りたればとて大總統たりし時に比し多く尊敬すべき所以なく閣下の敬稱を改めて陛下と云ふの外一國元首として事實上尊嚴に於て毫も損益ある可らず、故に吾人は支那帝政に對しては感情上よりしては更に痛痒相關せずと雖も、若しも政體變更の結果隣邦の治亂に影響する所ありとすれば是れ自ら別事にして吾人は決して對岸の火災視して止むべきに非ず、極東の治亂は直に我邦の禍福と大關係あれはなり、昨年十月を以て發せられし五國協同の提議に係る帝政延期勸告の果して其時機の宜きを得たるや否やは自ら別問題なりとするも、之を勸告する

は主義として毫も不都合のことに非ず、善隣の關係上支那治亂の前途を慮りて袁政府の注意を促すは必ずしも獨立國たる支那民國の體面を毀損する所以なりと謂ふ可らず、然に支那の排袁派は該延期勸告を以て拭ふ可らざる汚辱を加へられしものと解し、袁政府は之を無用の干渉と見做し表面好意を謝しつゝ裡面には着々帝政斷行の準備を急ぎ、已に事實上帝政の實を行ひ將に近日を以て中外に向ひ袁氏登極式を擧行せん計畫せるに際し突然として雲貴反亂のことあり、袁總統が農商總長周自齊氏一行を我邦に特派せんと企てたる所以のもの、其形式は御大典を奉祝するを目的とすと云ふも、其内實は帝政協賛運動に在りと猜せらるゝもの蓋し理由なきに非ざるが如し、想ふに支那帝政論者の脚地より觀れば五國の延期勸告は迷惑至極の事なりしに相違なく、若しも帝政問題の提起されし當初に際し竊かに表立たざる方法により延期の勸告を試みたりとせば支那政府として其忠告を聽るゝ上るも頗る都合宜かりしならんなれども、五國の勸告は其時機と云ひ方法と云ひ、袁政府をして多大の苦境に陷らしめしは爭ふ可らず、是れ彼等が餘りに調子に乘り過ぎて成功を急ぎし結果にして自業自得なりと云ふべきも、彼等としては相當に哀訴すべき理由ありと思惟するなる可し、五國の立場よりせば雲貴獨立は即ち延期勸告の故なきに非ざりしを證明し得たりと爲さんも、袁政府としては五國の勸告は寧ろ排袁派に一種の辭柄を與へ却て爆發を催促せりと見做すも亦止を得ざるなり、兎に角今日の場合内には排袁派の獨立運動あり外には五國の壓迫ありて北京政府遂に帝政斷行を中止せりとありては優柔不斷徒らに其弱きを示すに過ぎずして、排袁派より愈々輕侮さるゝのみならず、其味方よりも亦た見限らるゝなきを保せず、袁氏は遂に座し

て寂滅するの外なきの苦境に立たん、元來袁世凱なる人が今日の地位を得たる所以のものは[illegible]的功に由るに非ず、唯だ彼れの經歷智術を以て支那を統一し其平和を回復するに最適任と認められて推戴せられしに由れる耳、即ち彼れの位地名望術數を打て一團となし其力を認められしに外ならざれは、一成功より他の成功に移り行く間は彼の位地は必ず安全ならんも、一たび或重大事件に蹉し失敗せんか彼の威望は乍ち去りて皆無とならん、世人が曾てナポレオン三世に於て見たる國內人心の反覆は蓋し不幸にも或は袁氏に付て復た見んとする所ならんか、故に袁氏の爲めに謀れば、此際是非とも帝政を斷行し兎に角成功の威力に由り國內の排袁運動を壓倒せんとするより外に策なかるべし、世間もし袁氏が列國の忠告に聽きて帝政斷行を中止すべしと觀測するものあらば吾人は之を以て全然袁氏を解せざる迂愚の見と云ふを躊躇せず、然れども此際列國の同意を得ずして帝政を斷行するは北京政府の最も不利とする處なるは明白にして、五國中支那と最も關係の深き我邦に對し極力運動を試みんとする亦自然の成行と見ざる可らず。

世評に由れば支那は或る實業上の利權を提供して交換的に我が帝政贊同を得んとするものに似たり、其一例の日支交渉案中の第五項の如き其全部を容るるは英國に對する遠慮より敢てし能はざる可きも、其一部を承諾する位の事は恐らく覺悟し居るべし、又た我實業界の一方に於ても奇貨措くべしとして支那の提議に相槌を打つもあるべし、然れども我政府が果し世間に想像せられつゝある如く主として帝政延期を唱へ列國を勸誘したりとせば、此際或る一二利權に目眩みて態度を一變せりとありては、帝國の面目

丸潰れとなる道理なれば、如何に北京政府が裡面の運動に努むるも到底我賛同を得んこと困難なるべし、吾人の見る處を以てすれば此際支那政府が利權提供を云々するは極めて拙策にして寧ろ支那政局の事情を具陳し哀訴歎願するを以て得策とせん、蓋し支那を統一して形式的にも平和を保持し得べきものは袁世凱氏以外殆んど物色し得べからずとは世界の通論にして、列國の延期勸告も袁氏の爲めに謀り延期を必要とすとの見解に出でし譯合なれば、此際帝政を斷行せざれば、袁氏の地位保持する能はざる事情明白なるに至らば列國亦自ら前日の勸告理由を再考するの必要なからずや、之を譬へば袁氏の帝政に於ける宛も大家の獨息子が遊蕩に大金を費せし後の如し、親類會議に由り如何に叱責するも、過たるは追ふ可らず、後日を戒め借財を皆濟し、仕儀に由れば其好める女を納れて妻となすも亦止むを得ざるべし、吾人は我大隈内閣の面目上今更ら帝政を認むるの甚だ困難なるを思ふ、然れども袁世凱氏失脚せんか支那の統一、平和は容易に望むべからずして、或は群雄蜂起の時代を見るに至らんも計知る可らず、即ち袁氏を援け排袁派を抑壓せよとは云はず、唯だ我國利國權の保護と何の關係もなき帝政に强ゐて故障を入れて袁氏を失脚せしむるに至らんとするの理由を解するに苦しむ耳、然ればとて帝政を斷行すれば必ず排袁運動を壓倒し得べしとは保證し得べからず、但た之に邪魔を入れて袁氏の信用を失墜せしめんより寧ろ斷行せしめて威信を加へしめん方動亂鎭定の望稍〻多しと思惟せらるゝのみ、但だ帝國政府の方針に就ては延期勸告の時に於て已に一定せり今更如何に北京政府の哀訴歎願あるも寸分も異變あるべからずと云はゞ夫までなり、吾人は臨機應變の名人たる大隈首相が支那の新局面に對し遂に如何の態度を取

るべきかに對し多大の興味と注意を拂はずんばあらず。

（三）

萬々一帝政斷行を中止すべしとするも排袁運動は爲めに多くの影響を受くる所あらざるべし、何となれば袁氏既に其奥の手を示したる以上袁氏排斥の理由は依然として存在す可ればなり、之に反して帝政を斷行すべしとせば北京政府は稍其威望を加ふと共に反對派の熱心も亦增加すべしと想像せざる可らず、孰れの場合にも現に已に爆發し且是より益々彌蔓せんとする動亂は兵力を以て鎭定するの覺悟なかる可らず、袁政府は今や四年以前の滿洲朝廷の位置に立ち雲貴方面の獨立軍は當時の革命黨の立場にあり、武漢南京を本據とせる革命は乍ち世界の視聽を牽きしも、雲南貴州を本據とする今日の排袁諸軍は田舍騷動の觀を免れず、然れども若しも成功を永久に期し、前革命當時に於ける苟且妥協に終るが如きことなからんとせば、今次の計畫は却て大に思慮を費やせし形跡ありと云はざるべからず、蓋し一擧にして袁氏を倒ふし共和主義の爲めに天下を執ることを得ば排袁派の滿足此上なかるべきも、左もなくして事稍々面倒ともならば雲貴、四川を根據として持久の策を行ひ時機を待つ亦た頗る可なり、雲貴の一部は古の益州にして、雲貴四川に一獨立國を建つるは即ち諸葛亮の遺策を行ふなり、三省を合すれば其廣袤に於ては朝鮮を除きたる我日本に二倍し其人口に於ては四千萬を算す、而して四川は鹽、絹、漆、藥種を産し、雲貴は最も寶石、金、白金、銅、錫、鐵、亞鉛、石炭等鑛物に富むを以て、教育を盛にし技藝を奬勵し、概して政道宜しきを得ば優に一獨立國として列國に認めらるゝ亦難しとせず、遠く支那の

前途を想像すれば雲貴、四川の一獨立國として分立せんことは寧ろ支那民族の幸福たらんも未だ知る可らず、然れども斯る永遠の理想は恐らく現在の排袁派領袖輩の腦髓に宿らざるべし、彼等の唯一の目的は南方諸省を糾合し又は北方にも味方を得て袁氏一派を北京より放逐し自ら代りに政權を執らんとするに在るべし、斯くて爭は兵力の强弱に歸し、兵力の强弱は更に財力の多少に歸すべきを考慮せざる可らず、而して更に具體的に之を云へば袁政府果して幾許の外債を起すを得べきや又た排袁派の軍資調達の程度果して如何と云ふに歸せざるを得ず、之を前年の第一次革命當時に付て見るに列國政府は嚴正中立の態度を取り北京政府に對しても革命政府に對しても絕對に資金を融通せざるの方針を採り大體に其態度を破らずして南北協和の時に至るを得たり、是れ一方に借せば他の一方に對し不公平となり、双方に借せば爭亂を永續するの不幸を見るべきを以てなり、即ち此の列强嚴正なる態度は確かに平和克復を促し得たりと云はざるべからず、然れども當時南北とも內密の裡に又は私立會社の借欵の名の下に多少の借金を爲すを得たりき、北京政府は屢〻四國借欵團に哀願せしも承諾を得ざりしが、遂に獨商瑞記洋行(アルンホールト、カルベルグ)より三百萬圓を借り得たり(一九一一年十一月)、其他には遂に外債の助を得ること能はず、淸朝の內帑金、皇族又は富豪の献金等により多少の融通を爲得たるに過ぎず、之に反し南方政府は却てより多くの外債を募り得たり、即ち一九一一年十一月に招商局汽船會の名を以て香港上海銀行(英國)より二百二十萬圓、一九一二年一月に江蘇鐵道の名を以て大倉組より三百萬圓又同年二月に漢冶萍會社の名を以て三井より三百萬圓を借入れたり、是等は名義に於て私立會社の借金な

れども其實は革命軍の費用に供せられたり、即ち南方は是等の大合社ありて自ら外債を起すの便利を有したり、南方が其富力に於て北方に優るが故に外債を起すにも大に便利を有するの狀態以て察すべきなり、一九一三年五月第二革命の將さに起らんとするや當時多年の懸案たりし五國借款（初め米、英、佛、獨の四國なりしが、中間日露の加入により六國となり最後に米國の脫退により五國となる）は遂に調印せられ其二億五千萬圓の前渡金中五百萬圓は直に支拂はれ（五月十日）以後每週五百萬圓を支拂ふの約束成立ちしを以て、北京政府は何の苦もなく第二革命を鎭定するを得たり、此一事を以て觀るも軍資の有無は如何に直接の關係を戰爭の勝敗に及ぼすべきかを知るに足らん、隨て今次の動亂の前途に關しても第一には袁政府の帝政斷行如何に由ることなれども、外債の援助如何は亦實に双方に取り死活の問題たらずんばあらず、想ふに列國政府は恐らく第一次革命の時と同じく北京政府に對しても、雲貴軍政府に對しても儼正中立の態度を持し、借金は孰れに對しても爲さゞる方針に出づべきは疑なし、但た私人的の形式に由り爲さるべき借金にまで干涉して制止せんことは頗る困難なるべきを以て、袁政府又は排袁軍に對し私人貸借の方法に由らば目下歐洲大亂最中とは云へ多少の金融出來ざるにも非ざるべく、殊に米國は近來英佛に對する軍需品供給の爲め方に資本横溢の狀態に在るが故に擔保品の如何に因りては競ふて借金談に應ぜんとするならんか、而して雲貴、四川の鑛山又は鐵道敷設權の如き最も有望の擔保物たらんこと想像に餘あり、抑も雲貴、四川の鑛脈に豐富なるは夙に歐米人の垂涎する處にして、數年前英佛間は特に一種の協商成立するものゝ如く、米國また此間に注意を怠たらざるに似たり、佛國が老開、蒙自を經て安南鐵道を雲南府に延長し、英國また緬甸方面の雲南國境片馬に根據を置きて經營頗

る努め居れり、緬甸鐵道をマンデレーより延長してバーモーに至り、更に片馬に通じ大理府を經て四川成都に達せしめんとする計畫は地形の關係上事頗る容易ならずと雖も其早晩成就すべきは疑ふ可らず、斯くて雲南、四川、貴州は表面の關門たる支那中土方面を經由せず寧ろ裡門とも云ふべき安南、緬甸方面より歐洲との交通を開くに至るべきことは此等各省の前途を想ふ上に於て忘る可らざる事實なりとす、然れば何れかの方面より雲貴の排袁門が軍資供給の道を開くことを得ば其根蔕は乍ち意外の鞏固なるを致し、袁派全力を擧ぐるも容易に鎭定の功を奏するを得ざるべく、隨つて今次動亂の前途或は意外に長期に亘り、歐洲大動亂と聯關して極東に如何の變局を生起せんも未た知る可らず。

（四）

雲貴の獨立は一面我外務當局をして先見の名を爲さしめしが如きも、延期勸告當時に比し一層の難局に逢着せしめたるは爭ふ可らず、袁氏一派の帝政計畫は不幸にして大失策たるを免れずと雖も、其一たび計畫せられ將に實行を見る近からんとするに際し外國の勸告を名として之を中止せんことは彼等に取り頗る迷惑の事情ありしなるべきは察すべく、更に雲貴反亂を恐れ延期せりとありては袁政府は愈以て其弱さを示すものにして、從來袁氏の成功を信頼して北京政府を支持し來りし張勳段祺瑞の一派にも亦た終に見放さるゝなきを保せず、而して支那平和の保持に袁氏の必要缺くべからざる人物たるを思へば帝政贊同亦た止むべからずと説くもの亦一理なきに非ず、然れども帝政延期を勸告したる我當局は到底今日に於て帝政贊同の意を表する能はざるべし、動亂を恐れて帝政延期を勸告しながら、動亂の起れるを見て帝政斷行に贊同すべき理由なければなり、結局五國は袁氏の帝政實行を默許する位に止まるを以

て落ちとなさんか、然れども之を默許する程ならば初めより延期勸告を爲さゞる如かず、吾人は延期勸告當時に於ける我政府と英佛露伊との關係を知らず、又た支那政府に對する勸告の程度の詳細を知らず、從つて帝政問題に惹起せる新局面に對し政府の執るべき態度を具體的に論ずるの材料を有せず、袁政府の運動に對し帝國政府は果して何處までも延期勸告の趣旨を貫徹せんとすべきや、又は飜然態度を一變し支那統一の必要に鑑み帝政斷行に同意すべきや、或は遂に不得要領、御人好の本色を現はし袁氏をして其志を擅にせしめ我政府は顧みて他を云ふの態度に出でんが、但し之に對する我政府の處置如何は極東安危の繫る處とも云ふべく、當局の責任蓋し實に輕らずと謂つべきなり。

終に一言注意を促さんとするは他なし、我國が支那に對し儼正中立の態度を持し、北方の帝政派に偏せず、南方の共和派に黨せず、以て支那人民をして徐ろに其國家改造の大業を成就せしめんことに在り若しも支那問題に關係ある個人に就て見れば或は袁政府に同情あるものあり又は南方革命派に味方せんとするものあらん、然れども國家としては徹頭徹尾儼正中立の態度を持せんことを要す、支那政治家の我邦に寄寓するもの、滿朝派あり、革命派あり、袁政府の味方あり、吾人は彼等が我中立態度に累を及ぼさゞる限り十分の保護を與へて棲息の自由を享有せんことを希望す、彼等各派の政治家も亦た必ずや我邦が或一派を助け他の一派を抑へ以て偏頗の態度に出づる可らざる所以を解するなるべし、若夫れ現在の時局に對しては我邦は能く公明包容の態度を持して渝らず、以て極東の平和を保ち列國の利益を奄護し、同時に支那運命の開展に向ひ聰明なる指導者たらんことを要す、大隈内閣の措置果して能く國家最高の希望に副ふことを得べきや否や。

日露益々親和

露國皇帝陛下が御近親なるゲオルギ、ミハイロウイッチ太公殿下を特使として我　天皇陛下の御登極を祝させられしは、歐洲大亂最中に際し皇帝親しく出陣中と云ひ、特に其誠意の存する處を見るべく、我邦上下に深厚の滿足を與へたるは申迄もなし、吾人は此一事を以て日露兩國が益々親和し、殆んど同盟と擇ぶなき關係を生ずるに至れる好箇の表徴として大に祝せんずんばあらず。

抑も今次歐洲戰亂の爆發するや吾人は本誌上我邦が露國を後援して大に其對獨戰の進捗を助くべきを論ずる處ありしが、我政府亦た吾人と見を同うし機會ある每に應分の援助を爲し來りしが、昨秋に至り軍器の不足なりしより露軍頗る不利に陷るや、我政府は全力を傾けて露國政府の需用に應じ、露軍が近來ガリシヤ方面に於て聊か頽勢を恢復せんとするが如き我邦の援助また與り少ならずと思ふ每に吾人は深く滿足せざるを得ず、其速に獨墺軍を國内より蕩掃し英佛伊及び我邦と共に名譽ある平和を贏ち得んことは吾人中心の希願たらずんばあらず。今や袁政府の帝政を企てたる失策に起因し、極東の天地或は兵塵に蔽はれんとするの憂なき能はずして、日露の親和を要する今日の如きはあらず、曾て故伊藤公の英京に到り英の外相ランスダウン侯と日英同盟を協商するや公は同時に日露協商の必要を說きしに、ランスダウン侯は言下に『左もあらば殊更に善し』と答へたりと云ふ爾來不幸にも日露開戰し伊公の志と違へりと雖も、公は終に日露親善を謀らんとして哈爾賓に到り凶手に斃れ兩國の關係は爾來年と共に親和し以て今日あるを致せり、伊藤公の志亦た遂に酬ゐられたりと云ふべきか。

自然哲學の主潮

中澤臨川

一、假説論

私のこゝに自然哲學といふのは、最も狹い意味にこの詞を用ひたので、最近に於て、物理科學の哲學的または觀念的方面が何んな傾向を採りつゝあるかを概論するのが此の篇の主旨である。

廣い意味での自然科學を大別して二大部門とすることが能きる。それは生物科學(バイオロジカル、サイエンス)(生物學、心理學等)と物理科學(フィジカル、サイエンス)(物理學、化學等)とである。そのうち物理科學は生命顯象を除外した自然界の顯象を取扱ふので、換言すれば、機械的因果律の行はれる世界を對象とする學問である。而してこの科學が單純幼稚な記述または分類から推理的統一の域に進む爲めには、それはあらゆる自然顯象の奥に横はる根本原因或は根本存在を推定し、其處から進んで、いかなる顯象をも抱合的に説明することの能きるやうな一般法則を立てねばならぬ。

人間が『物それ自ら(ディング、アン、ヂッヒ)』に觸れうるや否やは哲學の最高問題で、カント學派や實證論者は之を否定し、ベルグソンの徒は之を肯定し樣とする。然し、科學はさやうの問題に與らずとも可(よ)い。と言つて、科學に想像力が

不必要であるといふ理由(わけ)ではない。それどころか、今日の純粋科學の進歩は、一にマックスウェルの所謂『至當なそして充分な觀念』(appropriate and sufficient ideas)の發見と發達とに負つてゐるのである。かやうな觀念を我等は假說(ハイポセシス)と呼ぶ。假說の起原は比喩である。人間が一つの新らしい初遇の經驗を說明する爲めに之を知悉してゐる既知の經驗になぞらへて推理するのが即ち比喩である。然しその比喩が『至當でそして充分』である爲めには、それは既知の諸顯象を抱括的に說明しうるばかりでなく、推理的にそれから未知の顯象を豫知せしめるほどの力あるものでなければならない。かやうな場合我等は之を活假說(ウオーキング・ハイポセシス)とよび、之から我等は顯象の奥に横はる根本原因または根本存在の最も『確からしき』映像を得るのである。

物理科學の取扱ふ對象界は、一に機械的因果律の行はれる世界に限られてゐる。さればこの科學に屬する假說にも亦おのづからの制限が置かれる。第一にそれは質が量と同じ法則のもとに立つといふことを肯定する。之は機械的因果律の當然の結果である。量を取扱ふ數學と異質(熱、光、電氣など)の世界を相手とする物理科學とを結び付ける連鎖として力學の存在するのはその必要からである。そこで物理科學上の假說が正しい爲めには諸顯象の數學的解說が能きなければならぬといふ條件が起つて來る。第二には之も因果律の當然の結果として、假說が認めて以て根本原因または存在となす所のものは必ずや保存性のものでなければならぬことを要求する。なぜなら、相當な原因なしに、又は相當な結果を現はすことなしに、創造され或は破滅されるものは、理智の世界に存在することを許されないからである。されば物的存在の究極券證(アルチメート・テスト)は『保存の法則』(Law of Conservation)である。或る意味に於て恒存するもの、即ち不滅不増なる物のみが物理科學の對象に値ひする。

近時、科學に對する不信疑惑の聲が高まるにつれて殊に假說を呪ふ聲が諸方から聞えた。第一に假說は實

驗の結果でなくて想像の産物たる一の觀念であるから、それには發見者の個人的性向が多分に手傳つた不安心のものであるといふことである。この非難には充分の道理があつて、現存する著名な科學者にも斯ういふ考を懷いてゐる人がある。英國のシュスタアなども或る著書の中で次のやうに言つてゐる。『我等が人間の知識の或る部門に於て二つの反對說に逢遇した時、我等は或る場合には一方の說に牽かれ、或る場合には他方の說に牽かれる。かく我等が遲疑することとなしに兩說の一を排斥するのは、推理の結果でなくて、强い本能的感情に依るのである。かやうな場合我等は、我等の選擇が以前からの研究より得た信念に導かれたものだと思ひ、即ちそれが推理能力の健全な、然し無意識的な働きに基いてゐるのだと自負する。「常識」とも呼ばるべき斯樣な本能の働きは、既に廣い方面から證明された問題の一部分に適用するだけには差支ない。然し我等が根本的性質の問題を決定するに當つて、單純な性向(ベイアス)——或は僻見でありえ、或は眞の本能的手引でもありうるところの——を賴り(たよ)として可いであらうか』と。

かやうな哲學的疑義は眞理欲を有する人間には何時(いつ)も繰返される問題である。然し人間の理智が萬能でない限り、いづこにも誤りはありうる。科學は實に人間の理智の過失の歷史である。萬已むを得ない過失は人間それ自らが負ふべきものであつて、假說といふ方法の罪ではない。たゞ我等の努むべきは、いかにして其假說から誤を少なからしめうるかといふ事である。それには能ふだけ多くの實驗に照して、その假說を各方面から檢閱しまた訓練する必要がある。一の假說が眞の活假說でありうる爲めには、それは單なる形而上的瞑想又は詩的想像であつてはならない。例へば、物質構造に關する近世の思想は既に古代のデモクリタスやルクレシアスの思想の中にあつたと言はゞ言へ、それが『原子說』として活きるにはダルトンの實證的天才を要したことを思はなければならぬ。かく實驗と並行しまた訓練されてこそ初めて假說の價値を生ずるので

ある。次に假說が直ちに究極の眞理を談らないからといつてそれを單なる方便と看做さうとするのは懷疑家の態度である。懷疑家はいづこに於ても思想と進歩との敵である。オリバー・ロッヂが斯う言つた。『科學者が一の說を立て、之を支へ之を固執するのは、之を眞なりと考へるからでなく、之が眞なるを望む爲めであるといふ如き思想は、彼が全く眞理の探求者でなく、從て彼の職業に對する反逆者であるといふことを談るものである』と。

第二に、右のやうな根本的疑義から一歩退いて、假說の具體的價値に對する問題に這入るなら、そこに實驗と假說との間に橫はる一種の逆背說(アンチノミイ)に逢遇する。實驗重きか假說輕きか、實驗は假說と手を携へる必要を見ないのではなからうかといふやうな問題が起る。是等の問題は分りきつたやうであつて、その實往々議論の種を蒔くのである。それはちやうど哲學上に於ける先驗論と實證論との爭ひに似てゐる。

この問題を解くに當つて、第一に明白にして置かなければならぬ事は、科學に於ては實驗は眞理の唯一の源であるといふことである。直接我等に新しい何物かを敎へ、また我等に確證を與へるのは實驗である。假說は暗示するが、然し直接に與へまたは確かめない。ではあるが、その爲めに假說の價値が寸毫も傷けられるわけではない。假說には假說の獨自の領域がある。

一には、我等は觀察し實驗するだけでは滿足しない。我等は總括(ゼネラライズ)せねばならぬ。『自然の統一』を信ずるのが人間の本性である。この本性を滿足させる爲めに、哲學あり科學ありと言つてよろしい。で、科學に於て總括の任務を掌る假說も亦人間本然の要求の發動であるのだ。

利用(ユース)の點から言つても假說は重要な任務を帶びてゐる。極端な實驗尊重論者が、何等觀念の分子の雜り氣(まじりけ)なしに彼の實驗を行ひうるやうに考へてゐるのは由々敷誤りである。いかなる人間にも此の世界に對する彼自らの既成觀念が潜んでゐる。かやうな觀念は無意識

ではあるが、しかし頑固である。我等のいかなる行爲にも必ずそれが附き纏ふ。彼が不用意である時は科學者の秤(はかり)の上とレトルトの中へさへも。第一に我等の用ふる言葉なるものが、習慣的の雜多な觀念を含んでゐる。思想家乃至科學者にとつて、この因習的の觀念ほど恐ろしい障害はない。かやうな觀念が科學的實驗者の方向を支配せずに濟むといふことは考へえない事である。之を逃れるには何うすればよいかといふに、我等の心を空虛にするか、それとも他の有用な觀念を以て之に代ゆるかである。然し、第一の方法は言ふべくして行へない事であるとすれば、我等は第二の方法に依るのほかはない。そこで假説の必要が起る。假説とは前々からの實驗に照らされいろ／＼の方面から試練され、最も正しとせられてゐる一の觀念である。されば、假説を實驗の手引とするといふことは、取も直さず、濁つた既成習俗の觀念に代ゆるに自覺的な有效の觀念を以てするといふことになる。

假説にはもつとそれ以外の效用がある。假説は定まつた正しき方向に實驗を導きその效率を高めるばかりか、未知の事實を我等に暗示する。例へば、化學上の週期律(ペリオヂツク、ロオ)が幾多未發見の原素を搜し出すに役立つた如きがそれである。人間日常の行爲が必ずしも價値あるものばかりでないやうに、科學上の實驗といへども有益なものは稀有(けう)であらう。無益な實驗から成るべく善き實驗を判別するやうに指導するのが假説の使命である。

或る學者は事實上から實驗派である。例へば、この派の者はエネルギイの第二方則（利用の方則(ロオ、オブ、アベーラビリチー)）を以て實驗的に熱の顯象を説明するのが簡單で且つ充分であると看做し、氣體飛動説(カイチチツク、セオリイ、オブ、ガス)の無用を稱道しようとする。これは一應は尤のやうで然うでない。讀者は次の比喩を見られよ。

時計といふ器物が自然に存在したと思へ。その表面にある長短二本の針が二六時中動いてゐる。之を見た我等には、それが何うして動くか、何んな方則に從つて動いてゐるかといふ疑問が起る。我等は實驗の結果

その長針は常に短針の十二倍の速度を以て回轉するといふ法則を得る。然し、我等はその內部の構造に就ては少しも知るところがない。我等の想像はいろ〳〵と思案の揚句是等の針を動かすには、その內部にかうかうかういふ彈條と歯車とがあつて、かういふ工合に針を動かすのだらうといふ確からしき信念に達する。そこで一派の人は、そんな想像を不要とし、たゞ針の動く比例の法則だけで充分だと思ふだらうし、他の一派の人は內部の機關に關する假定を重要視するだらう。讀者はどちらが正しいと思ふ。勿論兩方が正しいには違ひないが、前者の說は簡單で具體的であるだけそれだけ、他の意味を伴はない。然るに後者は複雜で一見不必要な想像のやうに見えるが、その抱擁の範圍は廣い。若し長針と短針との廻轉比例の違ふ他の時計が新たに發見されても、我等は內部構造の原理から直ちに之を說明することができ、且つ是等の樣々の顯象を包括する一般法則を立てることが能きる。

假說の用は右に說いた如くである。一體、今の人は科學を信じ過ぎてゐる。或る理由から之を侮蔑する人が極端に走り過ぎるのも、これ迄拂つた過重の信用を裏切られた反抗心があるからである。然かし科學だとて人の子の造つた一產物である。それが近世人の期待したほど完全な物でありえよう筈がない。殊に科學は人類の產んだ比較的若き子である。我等の藝術、哲學などの長子でさへ今以て方向に迷てゐるではないか。科學に餘りの多くを望むのが我等の妄想である。それにも拘らず、科學は今日長足の進步を爲しつゝある。デカルトがイオニアの學派を笑ひえた如く、現今の我等はデカルトとニユートンとを一笑しうる。否な、ケルビン、マックスウェルの天才を以てさへ、此の廿年來の進步をば豫想しえなんだらう。我等は我等の假說を嘲る前に、探究の努力と待つことを知るの忍耐とを養はねばならぬ。

二、實在の問題

先に述べた如く、物理科學の對象たる物的存在は『保存の法則』に從ふものでなければならぬ。玆に保存

とは數量の上での不變を意味するのである。この世界には、質又は形に於て千變萬化する雜然たる現象を一貫して、常に數量的に保存される或る量（マグニチュード）がある。變化の中に恒存するかやうな量こそ、物理科學上の眞の實在（Substance）であらねばならぬ。

今日の物理科學が認めて實在となすものに凡そ二つの量がある。それは質量とエネルギイである。質量保存則とエネルギイ保存則とは、少くとも今日までの物理科學の基礎を形造つた二大法則である。この二大法則が立てられてから、初めて我等の科學は眞の意味の科學となつたと言つていゝ。

一の量（マグニチュード）を以て實在それ自らと看做すといふことは可笑しくとられる。量は物の屬性で、その量の奧には之を有する或物（サムシング）がなければならぬ、して、その或物こそ眞の實在でなければならぬ、と考へるのが我等の思索の本然である。そこで、古來の學者は質量の奧に『物質』を、エネルギイの奧に『力』を想像した。ヘッケルの如きは更に一歩を進めて、物質とエネルギイとは唯一つの實在の不可離な二屬性だと考へた。かやうな考察は哲學的または神學的には至當で且つ必然と言はねばならぬ。然し、かやうな思想を科學の領土にまで輸入することは何うであらうか。科學は唯だ正確な外的經驗と之を導くに足りる必須の假說を有するだけで充分である。例へば、或る物體の運動の變化に當り、直接之を我等に告げるものは、之に伴ふエネルギイの變化である。エネルギイの變化に由てのみ我等は運動の變化を經驗することが能きる。そこで科學は唯だ此のエネルギイの變化を取扱ふだけで充分である。我等は特に立入つて斯樣な運動を支配する一種の『超人』なり『神』なりを聯想する必要がない。一つの物體が地上に落ちるのを見て、之を牽きまたは押すところの或者の働きを想像したのが、ニュートンの『力』の觀念の根源ではないか。かうした神秘的な、神人（アンスロポモルフィック）的の思想は、神學の威壓を脫することのできなんだ昔としては無理もないことながら、このニュートン力學が二千年このかた一種の惰性となつて、何れだけ科學の正當な

發達を妨げたかわからない。古來の物理學者は力の保存則を發見しようとして無意識の間に散々苦心して來た。然し力は保存されるものでないから眞の物的實在ではない。之に代つて保存されるものは唯だエネルギイである。

質量とエネルギイとは別の保存則のものとに立ちながら、而も決して離れて存在するものでない。一の現はれるところには必ず他が隨伴して現はれる。質量とエネルギイとは不可離である。所で、かういふ疑問が起る。この兩者が離るべからざるものであり、且つ兩者とも保存されるものでありながら、銘々が獨立の存在であり、銘々が勝手な保存則を維持するとは餘りに不自然である。要するに、物的世界に於て實際保存されるものは唯だ一ではなからうかと。で、兩者を結合する $E=Mc^2$ なる式に於て、Eを單なる係數(コンスタント)と見れば見られるし、Mを單なる係數と見ることも能きる。要するに、科學者の本能的傾向によつて、或る場合には質量が重く視られ、或る場合にはエネルギイが重く視られるのである。

質量保存則はその初め物質保存則として現はれた。つい近世まで科學者の眼に映じた世界は可秤物質(ポンデラブル・マツタア)の世界に限られてゐた。即ち重量のある、秤(はかり)に感ずる物體のほかには質量はないものと思はれてゐた。ジェ・ジェ・タムソンが荷電體にはその荷ふ電氣による質量があるといふことを證明したのは近頃の發見である。重量即質量の思想は昔からの習慣であつた。で、質量保存則はその初め化學者(ラボアジール、一七八九年)の秤の上から出たもので、次の如く現はされた。曰く、一の體系内に於ける物質の重量の總和はその間に起る如何なる物理的及び化學的變化にも拘らず常に同一であると。之は可秤物體の重量保存に關する一の實驗的法則にとどまつて、それ自らは眞である。然るに、それが物質保存則と見られるときには既に一の假說と化したのである。その間の推理の間隙(ギャップ)は何ういふ風に塞がれたかと言ふに、重量が保存される限りその物の質

量が保存される、然るに質量は物質の唯一根本の本性であるから、物質は保存されるのだと。

かやうな思想は重量と質量とを同一視するところから起つてゐる。元來力學上の質量の定義には二いろある。一は之を重力の係數と見ることで、地球上ではそれが重量となつて現はれる。然るにこの定義には不完全な所がある。今我等が總ての星の世界から無限に離れた一つの場所を想像し、其處へ一の物體を置いたとするに、この場合その物體にはまさしく重量はない。然るにその物體の質量も同時に消えたと考へることが至當であらうか。さすれば保存される何物もない筈である。矢張、保存される質量は依然としてあるが唯だそれが重量に現はれないだけだと見るのが至當であらう。要するに之は定義の不備である。

他の質量の定義は之を慣性の係數と見るとである。慣性とは物の運動の變化に反對する力であつて、質量の多いものほど慣性が強いと看做されるのである。この定義から行けば、質量は必らずしも重量を意味しない。で、現にこの地球上にも、この定義による質量を有しながら重量とは關係のないものがある。電氣には慣性がある、然し電氣は重量を増さない。要するに、質量には可秤物質による質量と電氣による質量との二種類があるのである。

然らば、かやうに廣められた意味での質量が矢張保存則に從ふや否やといふことは、現に學者間の疑問になつてゐる。最近に電子の發見があつてから、我等の質量に關する觀念は大きな變化を閲した。電子の有する質量を檢するにその全部が電氣によつてゐることがわかる。即ち電子とは質量は有るが重量のない物である。別に電子が凡ての物質の究極構成分であるといふ説が立てられて、畢竟するに、この世界にはニユートン的の質量といふものは存在せず、あらゆる質量は電氣による質量であると斷定してゐる學者がある。そればかりか、一電子の有する質量はその速度によつて違ふといふ事實が確かめられた。之に由て之を見れば質量は必ずしも保存されるものでない。その保存され

るものは寧ろ質量の原因なる電氣量にある如く見える。然し、是等の事は今日まだ斷定されるには早や過ぎるのである。

實在論に於て質量說を主張するものとエネルギイ說を主張する者とあることは先に述べた。曩のボン大學の教授で、マックスウェルの光の電磁波說を實驗的に證明したので有名なヘルツの如きは、質量論者の優なる者である。彼の說に從へば、この顯象界を現はす象徵(シンボル)としては、時間及び空間の觀念のほかに、今一つ質量の觀念だけで充分であつて、力(エネルギイ)とか原子とかいふ觀念は餘計なものである。在るものは唯だ『運動しつゝある質量』に過ぎない。我等がエネルギイなる詞を持出す必要のあるのは、二つの運動の相互關係を言ひ現はす場合に限られる。エネルギイは一方に運動の原因を意味し、一方には運動の結果を意味する。されば運動する質量その物が實際の存在であつてエネルギイは之に伴ふ二次的の觀察であると。

エネルギイ保存則(メーヤー、一八四二年)が最初に發見されたのは、機械的の仕事と物體の有する運動のエネルギイとの間に於てであつた。それが異質の顯象界、例へば熱とか電氣とか化合とかいふ顯象にまで擴大されるに就ては、等量(ゼクイバレント)に關する實驗的法則を必要としたのである。熱エネルギイの單位なる「一カロリイ」は機械的エネルギイの 41,830,000「エルグ」に相當し、電氣的エネルギイの單位なる一「ジョール」は熱の0.24「カロリイ」に相當するといふこと、それのみならず是等のエネルギイは等量關係を以て相互に可逆的(レバーシブル)であるといふことが確かめられてから、此保存則は總ての顯象界の底を貫通する一大法則となり、やがてはそれが普遍的性質のものであるといふ信念を得て初めて假說化したのである。(讀者は一の實驗的法則と之から導かれた假說とを常に注意して鑑別せねばならぬ。)

形の上から分類すると、總てのエネルギイは靜(Potential)、動(Kinetic)二つのうちの何れかに歸する。動エネルギイは或る質量の運動によつて直接にはこば

れるものであり、靜エネルギイは質量と質量との間にある塡充物の媒介によつて働くと做されてゐる。今日の學者が認めて以て此の塡充物となすものは假想的の「エーテル」である。されば エーテルは總ての靜エネルギイの座である。で、此分類に從てエネルギイ保存則を言ひ現はすと、一體系內の靜、動二つのエネルギイの總和は相互間に形の轉換がどう行はれやうと常に同一であるといふことになる。

次に質の上からエネルギイを分類すると、今までの習慣では、機械的エネルギイ、熱エネルギイ、光のエネルギイ、電氣及磁氣のエネルギイ、化學的エネルギイといふ風に分ける。然かしかやうな分類は我等の感覺的印象によつた極く原始的な方法で、嚴格に科學的とは言はれない。殊にこの分類法にはいろ〳〵な誤解が伴ふ。例へば、熱はエネルギイそれ自らであるが、電氣はエネルギイ自體でなく、エネルギイを荷ふ或物であるといふやうに、詞の上にも不徹底な處もある。私の私案によれば、次のやうな分類法はどうであらうかと思ふ。それは、第一可秤物質によるエネルギイ、第二電子によるエネルギイとするのである。機械的エネルギイ、熱(分子及原子の運動によるエネルギイ)、形及容量のエネルギイ(分子の位置によるエネルギイ)化學的エネルギイ(原子の位置によるエネルギイ)等は前者に屬し、電氣及磁氣のエネルギイ、放射のエネギルイ等は後者に屬する。

『永久運動』の問題は『鍊金術』のそれと共に斯學上歴史的興味に充ちた問題である。我等が放射能體を發見して原子の變轉といふ事實を經驗してから、鍊金術の夢の再び復活した如く、物體の內部構造に關する我等の知識の發達に伴れて、永久運動の必ずしも不可能でないといふことが證かされた。永久運動の行はれないのは唯だ我等の眼に觸れる粗大の世界に於てであつて眞の世界即ち分子や原子や電子の世界は、完全彈性、純粹運動、永久運動の世界であることがわかつた。永久運動は內部世界の普遍狀態である。換言すれば、動エネギルイが唯一のエネギルイであるといつてよい。

再び實在論に戻らう。ヘルッが眞の物質的實在は唯だ質量ばかりだとしたに反し、有名な化學者のオストワルドは、エネギルイを以て唯一根本の原因及び實在となした。彼の說に從へば、總てはエネギルイである。世界にはエネギルイのほかに何物も存在せぬ。何事か起る處には必ずエネルギイが伴ふ。質量とはたゞエネルギイと關聯した一の物理學的係數に過ぎない。で、物質とか物體とかはさまぐ\のエネルギイが平衡狀態をなす時に初めて現はれる餘計な觀念であると。猶ほオストワルドは、この思想を擴大して生命界にまで及ぼし、意識もまた一種のエネルギイであるといふ意見から、彼獨特の「一元論」なる哲學を立てた。彼の哲學が幸福な產物であつたかどうかは茲に問はずとして彼の思想は尠くとも自然哲學の墳場に於ては最も理解のある說の一つとせねばならぬ。

三、構成論の一

——各種の「原子說」——

質量なりエネルギイなりを實在と看做すときに、是等の實在は如何なる有樣で存在し、どういふ風に互に關聯して一の體系または全體を形造つてゐるか、換言すればその構成いかんといふ問題が起つてくる。

物理科學上の構成論を明白に區別することは困難ながら、その思想の奧底を流れてゐる傾向から鑑識すると略ぼ「原子說」(Atmic theory) と非原子說とに分つとが能きる。茲に言ふ原子說とは廣い意味でいふので、必ずしも世間に通つてゐる物質の原子說の意味ではない。詮り、一の顯象が、同一で且つそれ以上不可分な單位顯象の集合から成ると看做すのが原子說である。之に反し、非原子說はかやうな單位の存在を否み、一の顯象を連續的に、且つ無限可分的に見ようとする。今日のエーテル說はいかなる點から見ても非原子說の傾向を多分に有する構成論の一である。若し原子說なる詞に語弊があるとすれば、之を「單位量說」(Quantum theory)と名けるのが至當であらう。

構成論に關する二傾向の最も適切卑近な例は、物質

の分子原子說と連續說とである。前說によれば、總ての物體は分子の集合から成り、分子とはそれ以上機械的には分つことのできない物質の單位である。然し、分子は化學的方法に依て更により小なる原子に分けることができると。この說にはまた分子や原子の集合の有樣を間隙的と見る考が含まれてゐる。然るに、之に反し後說を主張するものは、物質の構成が連續的であるとなし、物質はその占むる空間の全部を間隙なく塡充してゐて、無限に分ちうるものと考へるのである。然し今日では、かやうな連續說を信ずるものは殆んどなく、獨り分子原子說が優勢を誇つてゐる有樣である。

分子說は氣體飛動說をえてから數段の進步を閱みした。此說によれば、氣體を構成する各分子は皆動エネルギイを有してゐて、めい／＼獨立に大きな速度を以て運動しながら、相互に衝突し、またその容器の壁に衝突して、斷えずその方向を變へつゝも、猶永久運動を續けるゐると看做すのである。で、マックスウェルが（一）分子の形は球形であること、（二）分子は完全彈性であること、（三）分子の表面は完全に平滑であること等の假定を置いて、この說から數學的演繹を施して見た處、その結果が一々實驗上の諸法則と符號するのであつた。そのことは、取も直さず、氣體飛動說の確からしさを證明するばかりでなく、マックスウェルの置いた假定の正しいことをも證明し、分子說の内容を豐富にしたものである。猶、その後、ペランやミリカンが『ブラウン運動』を藉りて、飛動說から實驗的にさまざまな分子及び原子の絕對的（比較的に對して）大さ、重量等を算出したのは忘るべからざる功績である。次に我等はこの飛動說が、最近に液體にまで擴げられたことを記憶せねばならぬ。

ダルトンが原子說を發見したことは、科學史上特に秀でた出來事である。彼は自分の立てた倍數比例の法則に一歩を進めて、この法則の因て起る爲めには、化合に加はるいろ／＼な元素が銘々に同一の終局粒子の集りでなければならぬといふ結論に達した。玆に「終

局」とは不可分の意味で、ダルトンは斯様な粒子に『原子』と命名した。之が近世の物質原子說の起原である。

ダルトンが幾多の違つた原子の獨立存在を證する左券として擧げた唯一の性質は、是等の原子が有する獨特の原子量であつた。そのほかの、色、香、磁氣性などの性質に到つては、化合する他の對手によつて極端に變る。かく原子量のみをたつた一つの本據とする原子說は、懷疑家を滿足さすべく理由が餘り薄弱であると言はゞ言へる。然るに、最近に到り、我等はこの說を確かめるに有力な他の證據を得た。その一は各原子がスペクトラムの上に現はす獨特の吸收線で、他の一は各原子の放射する固有のレントゲン線である。是等の二特性はそれ〴〵の原子によつて相違し、一の原子がどんな化合物を造らうとも、それだけは變らずに保存されるといふことがわかつた。之によつて我等の原子說はいよ〳〵眞理に近づいたのである。

ダルトンの原子說は、最初各原子はその同一といふことと不可分といふこととを特性附けたのであつたが、それが次第に時の信用を經るにつれて、後にはその解釋が極端まで持ち運ばれ、原子とは物質世界の不死永遠な終極構成分であるかのやうに思ひ做されたのは注意すべき事である。然るに、最近に到り、電子及放射能體の發見は是等の觀念に一大動搖を來した。先づ第一に、原子が終極不可分の物であるといふ說の崩されたのは勿論、同種の原子の重量は皆同一であるといふことも、實はその集合體の計算から割出された統計的の言ひ現はしで、その一つ〳〵の原子量には多少の相違がありうる筈だといふ說も出て來たのである。それにも拘らず、ダルトンの原子說は今でも猶一局部の眞理を現はしてゐる。即ちそれは、原子が終極不可分のものであるといふ思想を除けば、一の實驗的法則として眞である。

電子の發見は在來の物質構成說に一大革命を來した。その最初の發見は、稀薄な氣體内に於ける放電といふや〻人工的の方法によつたのであるが、電子は必

ずしも稀有の存在物ではない。それは極く少量には常に大氣中に存在し、電燈球の心線からも出で、赤熱された金屬や紫外光線に晒された金屬からも發散し、或る化學反應に伴つても生ずる。殊にラジウムの如き放射能體からは自然に多量の電子が射出されるのである。して、今日までの實驗により、總ての化學的元素は何れも電子を含んでゐるといふことが分つた。して見れば、電子は總ての原子の構成分であると言はねばならぬ。

電子の性質を究明するに、それは陰電氣の一定量を有し、其質量に於て水素原子の一千七百六十分の一、直徑に於て水素分子の約十萬分の一に當り、常に高速度を以て馳走してゐる。而して如何なる源から得た電子も、その速度の遲速のほかは、全く同一性質の物であることが確かめられた。即ち電子はまた一種の「單位(カンタ)量」である。要するに、今まで最小不可分として信ぜられて來た八十有餘の原子は、その實究極の物でなくて、或は電子の集りから、または電子及び他の「本源(プリモー)原子(アトム)」の集りから成ることが明らかにされた。古來幾人かの化學者が夢みて來た原子の原子説は、漸くその曙光を得たのである。そして「物質の電子説」がその「原子説」に代らうとしてゐる。玆にいふ電子説は矢張先に定義した廣い意味での一種の原子説であることは言ふまでもない。

化學的元素から人工的に電子を分つには、强度の熱または壓力を加へねばならぬ。或る程度以上の溫度に於ては總ての化合物が分解される如く、原子にも之に强いエネルギイを與ふれば分解されるものと想はれる。而してそのエネルギイは單に總量的に强いばかりでなく、原子のやうな微小な物に加へられるに能く適當した集中(コンセントレーテッド)的のものでなければならぬ。然るに、かやうな集中的の强エネルギイの源が今日まで得られなかつた爲め、我等の知識は原子で行きつまつてゐたと見られよう。所が放射能體から高速度で出る「アルファ」線や「ベエタア」線は我等の欲する資格を具へてゐる。で、之等の線を物體に當てることが電子を分離するに

最も好き方法である。バターソンの計算に依れば、「アルファ」線をなす一ヘリウム原子が有するエネルギイはその物が攝氏6.5×10^{10}度にあると同樣であるといふことである。ジェ・ジェ・タムソンは之等の放射線を利用して、いろ／＼の原子から電子を分離してみた。その結果によれば、例へば水素原子からは一個の電子が、水銀原子からは八個の電子が得られた。またバルカの實驗によれば、一原子內にある電子の數は略ぼその原子量を示す數字の半數に相當するのだと言ふ。これから見れば、炭素原子には六個、酸素原子には八個、トリウム原子やウラニウム原子には各百個以上の電子が含まれてゐる計算である。

若しも原子が全く電子の集りであるならば、重量から言つて、水素の一原子は一千七百六十個の電子から成らねばならぬ。然るに水素原子からは唯だ一個の電子しか分ちえないといふのが事實であるらしい。然らば原子の構成には他の「本源原子」が手傳つてゐなければならぬ。その本源原子の何なるかは今日では不明であるが兎に角それが陽電氣を帶びた物であることは事實と推測される。

ウィルソンは「アルファ」線及「ベエタア」線が空中に放射する有樣を寫眞に撮ることを成功した。で、是等の線の進行の模樣を見るに、一定距離間直線を描き、最後に或角度で折れて止まる。此事實は何を談つてゐるか。第一に是等の物質が或る距離の間直線を描きうるといふとは、普通ならば氣體飛動說に照して許すべからざる事である。それは空氣の分子又は原子と幾萬回かの衝突をなして、複雜な屈折の道を採らねばならぬ筈である。で、先の事實を說明する爲めには、我等は是等の物が、その有する高速度に於ては空氣の原子內を貫通して馳走しうるものと看做すほかはない。換言すれば、原子は充實的のものでなくて、矢張間隙的の構成をなしてゐると想像される。第二に、是等の線が最後に屈曲を描いて停止する理由は、それが初めて何か硬い物に衝突したことを意味する。之は原子の內部に或る力強い中心物があるといふことを談るのではな

いか。また是等の線が原子內を通過する途すがら、原子から電子を反撥分離するといふことも頷かれる顯象である。唯だ電子との衝突はさほどの力を要しないので、是等の線の方向を曲げるほどでないのであらう。

ウィルソンの寫眞から得た是等の觀念から原子の構成を案ずるに、中心に『本源原子』があり、その周圍を繞つて、ちやうど太陽系の遊星のやうに電子が配列されてゐることが分る。ジェ・ジェ・タムソンの說に依れば、一の原子に一個の電子を伴つた一個の本源原子が加はると次の原子量の原子が出來るのである。

然らば原子內にある幾多の電子は何んな有樣で配列されてゐるかといふに、タムソンは理論的に之を導き出した。原子量の少ない物では電子は表面に一列に配列されるが、次第に原子量が加はつて電子の數が或る極限に達すると、それは二列にわれて二重配列法をとる。かくて原子量の多い原子に到るほど、電子の配列は三重、四重と增して行くのである。で、原子の有する本然的性質は內部にある電子の作用により、その第二次的性質は表面の電子の作用によるとせられてゐる。

右で私は稍や詳しく最近の原子構成論に說き及んだ。今から廿年前までは誰人も夢想だにせなんだ未知の世界の研究――而も科學界に大きな革命を起した研究を談るとしては、多少の過重に已むを得ないことである。

電子の發見は、一方には電氣に關する在來の假說をも覆して、所謂『電氣の原子說』または『電氣の電子說』を立てしめた。

電氣が原子的構成を有することは次の實驗から證明することが能きる。レントゲン線其他の放射線を空氣中に通ほすと、空氣の分子の一部は電氣を帶びた小粒子に分れる。かやうな粒子をば我等はイオンとよぶ。今イオン化された空氣を或る器に盛り、その中へ油の噴霧を撒くと、器中のイオンは油の小粒に附着する。で、若し器物の上下の被ひを二枚の金屬で造り、之に一定壓力の電氣を掛けると、イオンを帶びた油の小粒とに

下の金屬の電氣との間に引力又は斥力が働いて、油粒は交互二枚の板の間を或る速度を以て往還する。我等はこの速度を測定するとに依て、イオンの有する電氣量を知ることができる。で、さうして得た幾つもの結果を比較するに、此等の電氣量は常に倍數比例の法則に從ひ、一定單位量の集合から成るとが分かる。猶ほ、他の方面からいろ〳〵實驗を代へてみるに、その電氣は必ずしも分子のイオン化に依て生ずるものでなくともよい。或はそれが摩擦に依て起こされたものであらうが、他の源から來たものであらうが、右の結果には少しも變りがない。また電氣を荷ふ小粒は油と限らず水銀でも、グリセリンでもよいのである。之に依て之を見れば、上述の倍數比例の方則はあらゆる電氣顯象に當て箝まるもので、電氣が原子的構成をなす確かな證左である。

然らば右の「電氣原子」とはいかなるものか、換言すれば電氣の單位量奈何といふに、米國のミリカンの測定に依れば、その數字は 4.77×10^{-10} 靜電單位である。而して詳細な計算の結果によれば、一電子の有する質量は皆な右の數字に依て現はされた單位電氣に依る質量で、普通の重量的質量などは更に含んでゐないことが分かる。之は餘程面白い顯象で、換言すれば、電子とは單位陰電氣それ自らである。此に於てか電氣原子說は電氣電子說と異名同義に歸し、「電氣原子」とは取も直さず電子なのである。

昔は「電氣液說」が稱へられて、電氣とは連續的な一種の液體として考へられてゐた。然るを最近の電子說に於ては、之を電子なる小粒子の無數の集合と見るのである。唯だ玆に昔から一つ不明な點は電氣に陰陽の二種があるか、それとも唯だ一種類のみかといふことである。一元論者の說によれば、萬づの物體は皆な電氣を有してゐて、或る場合その物體に於てその量が特に一定量を超過することある時、その物體を稱して陽(又は陰)電氣を荷つてゐるといひ、其反對の場合を稱して陰(又は陽)電氣を荷つてゐるといふのであると。今日と雖も我等は陰陽兩電子說を採るべきか、それと

も陰電子即ち所謂電子の一元說を採るべきかはたやすく決定することが能きない。なぜなら、物質から解放された純粹の陽電子なるものは今日まで發見されず、其存在さへ疑はしいのであるから。で、いろ〳〵な方面からの考察は、寧ろ電子一元說の優勢を認めてゐるかに見える。

最も注目すべき事實は、最近五六年來、光及びエネルギイに關する原子說が稱へ出された事である。

放射即ち光の傳播が連續的でなく、或る單位量の束から成立つといふ如き說は、在來信ぜられたエーテルの構成論を無視したもので、マックスウェルの電磁波說からファラデーの力線說へ逆戻りするやうな無稽の意味に採られないでもない。然し事實は奈何ともできないのである。レントゲン線其他の放射線を或氣體に向けると其處にイオン化の顯象が起るとは先に述べた通りであるが、そのイオン化は萬遍なく各分子に起るわけではない。最も强いレントゲン線に依ても、たかだか百萬中の一分子がイオンに分離する位のものである。この顯象は何う說明すべきであるか。若し是等の放射線の波先が連續的のものであるとすれば、之に晒された氣體のあらゆる分子が平均にその力を受けるわけで、此場合特にイオンに分離する分子はその結合力が弱いとせねばならぬ。而して分子の結合力は主に溫度と關係するのであつて、溫度の高くなればなるほどその力は薄弱になり、從つてイオン化する分子數も溫度に比例して增すべき道理である。所がマクラングの實驗に依れば、分離するイオンの數と溫度との間には些の關係がないといふことが知れた。この奇妙な結果は、分子のイオン化がその結合力の大小に依らないことを證明するものでなくて何であらう。從てまたそれは放射線の波先が從來信ぜられた如く連續的のものでないといふことを暗示せずに濟まうか。

レントゲン線のイオン化能力に關する更に驚くべき事實は、一の斯線がその通過する氣體から電子を分離するに當り、その電子の速度は常に同一であるといふ

ことである。即ち斯線の源から半「メートル」の所で分離される電子も、四拾「メートル」の所で分離さるゝ電子も、その速度には變りがない。之を換言すれば、レントゲン線が各電子に分與するエネルギイは斯線の強度とは更に關係がないといふことである。更に實驗の結果に依れば、それは電子の分離される原子の種類にも關係のない事がわかる。で、それは唯だ斯線の透過力(硬度)即ち週波數に依てのみ相違を來すのである。この顯象は矢張在來の波動說を以ては說明のでき兼ぬる事實で、たゞ次のやうに解釋するほかはないのである。先づ第一に我等はレントゲン線の源なる陰極線(電子の集合體)の有するエネルギイが或る單位量から集成されてゐるものと考へる。その陰極線が障壁に當ると、そのエネルギイの一部が波動のエネルギイと變つて、玆にレントゲン線を生ずる。そのレントゲン線が氣體を通過する場合、電子を分離して、逆に之にエネルギイを與へる。かやうな變化の間に全體のエネルギイの量は次第に頽廢・るのであるが、然かし其固有の單位量には少しの變化もなく、たゞ單位の數が減ずるのだと見られない事はない。すると、もとの陰極線の電子が有してゐたエネルギイの單位が、レントゲン線を經由して再び他の電子に移るのは些しも不思議がない。

依之之を見れば、レントゲン線の波動は連續一樣のものではない。なぜなら、若しさうとしたら、その強度によつて之が分離する電子の速度は一々相違せねばならぬ筈であるから。換言すれば、斯線の波動のエネルギイは同一固有の單位線條の束から成り、その線條の數は減ずることがあつても、單位線條の强さは何時でも同一不變であると看做されねばならぬ。して、この理が若しレントゲン線に成立つものなら、他の總ての光に就ても同一の事が言はるべきである。約言すれば、エーテル波動の構成は原子的または單位量的である。

右のやうな事實から、正直に「光の原子說」を稱え出したのはプランクであるが、一方プランクは理論的に之を證明しやうと企てた。彼は波動のエネルギイが

$\frac{\varepsilon}{\omega}$(茲にωは波動の週波數、hは一の普遍定數)なる單位から成るといふ假定を置いて放射のエネルギイに關する一の公式を算出したが、それが實驗の結果と能く合するので、益々斯の說の確實性が證據立てられた。我等は右の$\frac{\varepsilon}{\omega}$なる量に名けて『光の單位量（ライトクアンタム）』とよぶ。で、ミリカンの測定に依れば普遍定數hの價は6.55×10^{-27}エルグ秒である。

光の原子說がやがて一種の『**エネルギイ原子說**』であることは、讀者の既に想到されたことと思ふ。波動エネルギイは上述の如く原子的に構成されてゐねばならぬ。然らば他の形のエネルギイは何うであるか。唯だ放射顯象に關するこれだけの單獨な事實だけからでは、一般エネルギイの原子說を導くに論理的必然を欠いてゐる。然るに、比熱に關する最近の發見は、全く違つた方面から矢張同樣の說明を求めてゐるかに見える。能く知られたデュロン及びパチの法則に依れば、原子量と比熱との積は一個の定數で六「カロリイ」に近い數である。之を他の言葉で言ふと、一の原子が一度だけ昇溫するには、いかなる原子に於ても常に同一の熱量を採るといふことになる。然るに最近ネルンスト等の研究に依れば、充分の低溫に於てはこの原子熱は六「カロリイ」より次第に遞下することが明らかにされた。それのみならず、この遞下顯象の起るのは總ての物質に一樣といふでなくて、原子量の小なる物ほど高い溫度の處からそれが始まるといふとが實證された。然るに氣體飛動說から解釋された意義によると、溫度とは分子の有する運動のエネルギイの强さを現はすもので、溫度一度だけを上昇させる爲めには、我等はその物質の分子の運動を一定の早さだけ增加させねばならぬ。で、若しその物質に與へられた熱量が各分子に平均して行き渡るものとすれば、低溫に於て規定以下に原子熱の下つた場合は、分子の速度は溫度の上昇に必要なだけ增加しないわけで、甚だ不合理である。之はどうしても次のやうに說明するほかはない。即ち、低溫度に於ては分子又は原子の唯だ一部分だけが溫度の上昇に要する正規のエネルギイを採るのであると。

換言すれば、熱エネルギイは原子的の性質を有してゐて、倍數的に分子なり原子なりに附與されることがわかる。即ち玆にもエネルギイ原子說が成立つのである。次に、原子量の小なる物ほど即ち飛動の週波數の大なる分子ほど固有の單位エネルギイは大なるわけであるから、從て正規の比熱法則に達する溫度は高いといふことになる。されば先の〻の法則は玆にも正しいのである。

私は以上に於て今日行はれつゝある各種の原子說を述べ終つた。要するに、昔からの物質原子說の改造から電氣原子說の樹立、光及びエネルギイの原子說の發見に到るまで、最近二十年間に於て斯の方面に遂げられた發達進步は眼ざましいものであつた。多忙といへば今日の物理學者ほど多忙な者はなからう。なぜなら、彼等は總てを新しい基礎の上に建設する任務を有してゐるのであるから。

四、構成論の二

――エーテル說――

物質の連續性を信ずる說や電氣液說やは、最も具體的な非原子說の例であるが、今日はその何れも殆んど行はれてゐない。で、現今最も有力な學說のうちで、非原子說的傾向を多分に有してゐるものとしてはエーテル說を擧げねばならぬ。普遍的塡充物(メヂアム)としてのエーテルの觀念は、大本に於て「空間」の觀念を則(のつと)つたもので、たゞその眞空性に代ゆるに充實性を以てしたまでのことで、其他の連續性(コンチニユイチイ)、無限可分性の如きは、全部その儘を借りてゐるのである。オリバー・ロッヂが斯う言つた。『我等の知る範圍に於て、エーテルとはより小なる元素または原子に分つことの能きない一の完全に等質的な不縮的な又連續的な物體の如く見える。實際それは連續的であつて、分子的ではない』と。で、エーテル說では、かやうに考へられた塡充物が宇宙の唯一の實在であつて、總てのエネルギイはその中に座を占め、原子も電子もその內の一部に起つた特殊狀態に過ぎないと看做される。かやうな說が一種の非原子說

である理由は之でわかると思ふ。

讀者の知らるゝ如く、物理學上に「距離作用」(action at distance)といふ言葉がある。その意味は、我等が空間的に相離れた物體間に行はれる作用(重力、電氣的引力の如き)を說明するに當り、それが直接に眞空を透して起るものと見て、其間に何等媒介物の考を入れない場合を指したものである。然し全く相離れた物の間に何等かの作用が行はれうるといふことは、尠くとも我等の普通理性では信じえられない事である。之を潜在意識内の透感能力(テレパシイ)に譬へて、物界に於ても矢張距離作用の可能を想像する如きは、既に科學的推理を外れたものと言はねばならぬ。

かく距離作用を不可能とする以上は、我等は其作用を傳播する或物を捜さねばならぬ。それは普通の物質ではなからうにしても、兎に角或物であり、一の連鎖である。而して此世界には物質間の眞の直接作用は殆んど無いと言つてよい。それは物質の構成から自明の理である。例へば我等が或る物體を壓縮したとするに、此場合眞にゆがめられる物はその分子でも原子でもなくて、是等の物の間を充す塡充物である。各原子が直接に接觸することは有りえない。されば物質間の作用はその間の塡充物を通ほさなければ一も起りえないのである。我等はかやうな塡充物を名けてエーテル(Ether or Æther)といふ。

ニュートンは重力の說明に當つて、最先にかやうな塡充物の必要を感得した。で、若し何等かの理由により物體の附近に於てこの塡充物の壓力が弱く、之を距たるほどその壓力が增加するものとすれば、かやうな狀態にある二物體は互に相牽かれると想像した。今日に於ても、重力の說明は殆んどこれ以上に出でないのである。

然かし、空間塡充物の必要が切實に感じられ出したのは光の說明に就てゞである。光が一定の速度を有する波動であることは疑ふべからざる事實である。此の如く其傳播に一定の時間を要するといふ事それ自らが

必然的に一の塡充物の觀念を含んでゐるのである。それが何物かの波動でない限りはいかなる波動も在りえない。されば光の傳播には必ず之が媒介物を要する。然しかやうに高速度の傳播を媒介する爲めには普通の物質は全く不合格である。そこで我等は一種特別の塡充物を想定する必要がある。所謂「光る(ルミニフエラス)エーテル」の說の立つたのはそれが爲めである。

かやうなエーテルは宇宙間に充實普遍した或物と想像されなければならない。マックスウェルが斯う言つた。「宏漠たる太陽系内の又太陽系外の領土を以て、「創造者」が彼の王國の多變多樣なる秩序の象徵を植えつけることを忘れた廢地の如く考へる日は過ぎ去つた。我等は既に其處に此の驚くべき塡充物の充ち滿ちてゐることを見出す。然かもその充つるの全きや人間の如何なる力を以てしても、空間の一小部分からでも之を取去る事が能きず、その無限の連續中に最微の疵(きず)一つ附ける事さへ能きないのである」と。然らばかやうな塡充物が光を傳播するにはそれ自ら如何なる性質を具有せねばならぬか。

推しなべて波動の媒介物に要する根本性質は凡そ二つある。それは彈性と惰性である。彈性は波動のエネルギイを貯藏し、且つ之を傳へたあとでその物が舊態に回復する爲めに必要であり、惰性は平衡點を越えてその物が振動するに必要である。玆に言ふ彈性とは、詳しくは容量の彈性で、固體や液體の有する如き不縮性の事である。然し光といふ特別の波動を說明する爲には、猶ほエーテルに右の二つよりほかの性質を附加せねばならぬ。光は一種の縱波(トランスバース・ウエーブ)である。所が、エーテルの如き不縮性のものが縱波を傳播するには形の彈性即ち剛性を要する。換言すれば、エーテルは固體と等しき或性質を持たねばならぬ。で、之を總括するにエーテルとは一定の惰性を有する等質的、連續的の完全彈性の物體であるといふことに歸着する。唯だその彈性のうち形の彈性までもその物本然の性質とすべきや否やは問題で、若し然うとすれば、エーテルは當然固體的の物でなければならぬ。

エーテルの觀念は、初め光の顯象を說明するだけに用ゐられた爲め、その構成を彈性的固體と見るのが簡單で且つ充分であつた。然るにその後電氣及磁氣に關する知識の發達するにつれ、是等顯象界の說明にも矢張一種の塡充物を假定する必要が起つて來た。で、最も適切な此の要求を最初に直覺したのはファラデェであつた。彼の電氣及磁氣の『力（ラインス）・線（オブ、フォース）』說はそれから起つたのであらう。彼は斯う言つた。『眞空と磁力との關係、及び磁石外の磁氣的顯象に關する一般性質を考へることによつて、私はその力の傳達を單純な距離作用であるとするよりも、寧ろ磁石外に左樣な作用があるのだと看做す方に甚だ多く傾いてゐる。斯樣な作用はエーテルの任務に歸すべきである。なぜなら、エーテルにして存在するものならば、それは唯だ放射を傳達する以外に他の能力をも持たねばならぬのが至當であるから』と。

かうしたファラデーの豫言を受取つて、之を具體化したのがマックスウェルであつた。光と電氣とが同じく空間の塡充物を要しながら、然もそれ等がそれ〴〵違つた塡充物を通ほして働くと見るのは、いかにも不自然な話である。奈何せん、光の說明に用ゐられた在來のエーテル——固體に型取られたエーテル——では電磁界の顯象を說明するに餘り窮屈であつた。その時、マックスウェルの天才は問題を逆轉して扱つた。彼はいかにして在來の型のエーテルを電磁界に應用しようかとは考へずに、逆に電磁波の傳播を先にして研究し、その結果が今迄知られた光の傳播と何う關係してゐるかを詮索した。彼は電磁波の速度が光のそれと全く同一であることを發見した。同じ空間に存在し同じ速度を以て波動を傳播する塡充物に、幾色かの種類がありえようか。唯だそれ速度の同一であるといふ事——それだけで、光と電磁波とが同じ塡充物に依て傳播されるといふ事實を確認するに充分である。換言すれば、光は電磁波の一種であることがマックスウェルに依て證明された。

その後此說はヘルッに依て實驗的に確かめられ、い

よく／＼動かすべからざる眞理となつたのである。之に依て、我等のエーテル説はその面目を一新した。眼に見える光は一種の電磁波として、シューマン線からヘルツ波に亘る廣い放射顯象の一部を成すのであり、是等の放射線はめい／＼がたゞ波長の差を有するだけで同じくエーテル内の波動であるといふことが知れた。在來の光學（オプテツクス）は電氣學の一部門となつた。それほど此の發見は改革的な偉大の素質を藏してゐた。

かやうにその能力の擴げられるにつれて、我等の想像する空間の塡充物は、唯だ光の傳播者としての舊態依然たるエーテルでは濟まされよう筈がない。名は同じエーテルでも、「光る（ルミニフエラス）」といふ形容詞が第一に棄てられねばならぬと共に、彈性固體に則つた型が非常に窮屈になつて來た。之に依て肝心な靜電及び電流の顯象を説明することはどうしても能きない。

元來エーテルの彈性固體説はいろ／＼と不便な點を有してゐる。若しそれが一種の固體であるとすれば、その中を物體が運動するに當つて必ず幾許かの抵抗を現はすべき筈であるが、實際は少しも左樣な模樣が見えない。可成大きな速度を以て空間を廻轉してゐる地球の表面に於てでも、我等はその微徴をさへ感じない。すると、エーテルが本然に形の彈性までも有してゐるといふことは不可解な話である。殊に靜電及び電流の顯象は固體エーテルでは全然説明することが能きない。では、この矛盾はどうすれば解けるかと言ふに今日の學者は一般に「完全液體」の説を採つてゐる。即ちエーテルを一種の液體と見るもので、その完全とは不縮性の完全を意味するばかりでなく、完全に粘性のないものと看做すのである。元來粘性は固體からの遺傳性で理想的な液體の有つべからざる性質である。既に粘性が無いとすれば、物體の運動に抵抗を現はさないのが道理で、上述の矛盾は自然に解かれる。して、之と同時に靜電及び電流の顯象にも解釋が附くのである。

かくの如く改造された現代のエーテル説を約實すると次のやうになる。宇宙間に散在する物質（物質とエ

ーテルとの關係は後に述べる）內に或る變動が起つたとする。その變動は周圍のエーテルに波動を與へるものであるとする。即ち電磁波を起すものとする。すると、その波動は完全彈性のエーテル液を傳つて無限の處まで波及する。之が放射である、即ち廣い意味での光である。然しこの場合波動に與かるエーテルはその位置を移動するのではない。それはたゞ一定位置に於て歪められ(Strained)また撥ね返すだけの作用を繰返す。さればエーテル內の波動は單に張力の推移であり、放射のエネルギイは總て靜エネルギイである。

然かし何がかやうな種類の變動を物質內に起して、エーテルに張力の波を與へるか。その變動はいかなる性質のものか。オリバー・ロッヂの實驗に依れば、いかなる機械力もエーテルの平衡を亂す原因には何等役立たないことが知れる。我等はたゞ電氣的にのみエーテルを攪亂することが能きる。充分の速度を有する荷電體の運動の變化――これだけが我等の知る處のエーテル波の源である。この事はマックスウェルの電磁波說から言つても然うでなければならない。して見れば、放射の顯象は機械的でなくて、全く電氣的である。で、實驗の確かむる處によれば、エーテルの有する彈性的歪みは全く電氣により、其墮性は全く磁氣によることが分かる。思ふに、物質內には必ず電子が含まれ、その電子は原子の中で一種の週期的廻轉運動をなしてゐる。かやうな電子の運動――詳しくはその加速度の變化が放射即ち光の源であると見るのが最近の說である。

我等はエーテルが一種の完全液體であるといつた。然し、物質の液體にはエーテルの縱波動に要するやうな剛性(リヂディティー)が欠けてゐる。でエーテルを固體と見るのも不都合であり、之を液體と見るのも不都合であると言ふ事になる。若し之を液體と看做すに就ては、何等か之に剛性を附與する條件を與へねばならぬ。然かし、本來から言へばかうした考へ方は因習性で、何もかも機械的模形に當て篏めようとするから起る事である。エーテルのやうな根本體(サブ、マッタア)を普通の物體を以て律しなけれ

ばならない理由は少しもない。殊にその彈性といひ彈性といひ電磁的性質のものであるからには、我等は普通物質の性質に關係なく、剛性と液體性とを同時に有する或物がエーテルであると想像して差支なからうではないか。然かし之に對して必ずしも機械的説明が附けられないわけではない。ケルビンは「廻轉エーテル」の説を立てた。之に依れば、エーテルの剛性はその軸を中心としての廻轉運動によつて得られるとするのである。高速度を以て落ちる水は刀でも之を切ることができない。また紙の板を非常な速さで廻轉すると彈性のある金屬のやうになり丸鋸の代用をさせることが能きる。かやうに物體が速度によつて剛性を生ずることは、エーテル液の剛性をうる理由となるのである。ジエ・ジエ・タムソンは廻轉するエーテルの運動量の力率(モーメント、オブ、モーメンタム)を計算して電氣量と磁氣の强さとの積 em に等しいとした。

エーテル説の解釋によれば、荷電顯象とはその物體の周圍に於けるエーテルの歪みが其物體の表面に及ぼす壓力又は張力の作用であつて、電流とは電導體を通ほしてのエーテルの流であると看做すのである。(此の場合初めてエーテルに一種の流動性がゆるされる)。然かしかやうな説明は決して滿足なものではない。殊に之を以て液體及氣體内の導電顯象を解釋しやうとするとき、そこに大きな缺陷が發見される。

古くから知られた電氣分解に關するファラデーの法則に依れば、液體内の電流の通過は必ず一定量の電氣を荷つた物質の移動によつて行はれる。氣體内の電流の通過も亦さうである。この顯象はエーテル説ではいかに説明が能きるか。先づこの點に疑を挾んだのが電磁波説の開祖マックスウェルであるのも一奇である。彼は自分で樹てた新説と此の顯象との間に存する明らかな矛盾に心附いた。彼の不朽の大著「電氣及磁氣」の電氣分解に關する章の中で、彼は「電氣分子」の存在を想像する必要を述べた後に斯う言つた。「この語は疎笨で、且つ此書の他の部分と調和しないが、少くとも

之に依て我等は電氣に關する既知の事項を明瞭に言ひ現はし、併せて我等の前に橫はる諸種の難解の事項を推知することが能きる」と。

マックスウェルの天才が想像し出した「電氣分子」は、その後電子の形で發見された。そして電氣の電子說が起つた。然らば電子とエーテルとは何んな關係に立つか。換言すれば、エーテル說と電氣の原子說とは如何にして調和されうるか。

エーテル說では電子を如何に見るかといふことを說明する前に、物質に關する斯說の解釋から說かねばならぬ。抑もエーテルから物質を說くといふことは、エーテルを物質の模型に當て篏めるといふこととは全然反對の態度で、物質を第二次的の存在と考へる見方である。かやうな觀念は一面から言へば非原子說に傾いたものであり、亦他面から言へばエネルギイ唯存說に傾いたものである。物質をば「同一場所に集つたエネルギイの複合體」といふやうに考へる思想は、古くはボスコヴィッチの力の中心としての原子の說から、近くはオストワルドの學說に系統を引き、他面からは茲に述べようとするケルビンの物質の「渦輪說」に亘つてゐる。ケルビンのこの說は原子を以てエーテル液の中に生じた一種の渦輪（ボルテックスリング）と想定するのであつて、その輪の形狀即ち卷き方によつて種々の違つた原子が出來ると見るのである。かくて一たん出來上つた原子は再び消えることのないのは勿論、之を形造るエーテルは永久に周圍のエーテルとは離隔されたまゝ存在するのである。

この渦輪說は實に巧妙を極めたものであるが、物質內の或る變動がなぜ放射の原因になるかといふことに就ては少しも談つてゐない。換言すれば原子の構成內の電氣的作用の說明を含んでゐない。即ち原子內に廻轉する電子に就て更に告ぐる處がない。で、かうした缺點を補ふ爲めにラアモアは原子のエーテル渦動說をすてゝ、電子とはエーテル內にある本然的歪みの中心であるといふ說を立てた。エーテルそれ自らの渦動は存在せずに唯だ歪みが存在する。永存するのはこの歪

みだけで、之を受けるエーテルの部分は歪みの中心の移運に從て變る、といふのが此說の要領である。偖は、之によればかやうな電子は物質を構成する唯一の根本原子で、物質とは唯だ一の電氣現象に過ぎないと見るのである。さればこの說はエーテル說の方面から行つた物質の電子說であると言へる。

私は以上で大略エーテル說の歷史を說いたが、最後に今一言附加すべき事がある。それは前章の終りで述べた光及びエネルギイの原子說と斯の說との關係に就てゞある。一八七三年にマックスウェルが放射の電磁說を開展するや、學界は一時之に眩惑された有樣であつた。世間では此說を目して電氣及光に關する眞理の最後の言葉であるかに受取つた。で、其後の四十年間は殆んどこの天才の發見した根本概念を擴大し實證する爲めに費されたといつてよいほどであつた。然るに之に對する反動か或る方面から擧つた。一九〇一年にプランクが發表した一論文はその初擧であつた。之によつて彼は放射のエネルギイと波長との關係に就ての實驗の結果が電磁說からの歸納と相違する事を示し、光の傳播が一定單位量の倍數を以て行はれなければならないことを說いた。然るにこの革命的思想はさまざまな方面から急に勢を得、アインスタインやネルンストのやうな有力な學者の實驗と相待つて益々火の手を擧げた。連續充實的なエーテルを根柢に假定した電磁說と光の原子說とが何う調和されるかといふことは、今後の研究に待たなければならない最重要な問題の一つである。今日では唯だ便宜な數學上の假作としか採られてゐないファラデーの力線に深い意味があるのではなからうかとも想像される。物質も電氣も「原子」に分解される今日、我等が連續的エーテルの觀念を固執する必要はなかりさうに思はれる。電子から發散するファラデー管のばらばらな束——恐らく渦動から成る束——がエーテルを構成すると考へて差支を生ずるであらうか。たゞそれが光の干涉其他の顯象を說明するに困難であるといふ理由で一概に拒めるであらうか。現

に角此事は未來の解決を待たなければならない問題で之に就てミリカンが次のやうに言つてゐる。

「今日の光の波動説は如何なる形の單位量說とも兩立しないやうに思はれる。放射に關する微粒子說が何時か波動説を壓倒するといふことは自分には考へられない。磁場及び交番電流の諸事實は左樣な事の可能を拒むかに見える。然しそれかとて、放射エネルギイの空間に於ける限定分布を許すか、或はそれが或物の完全倍數で發射する事を許すかするやうな構造をエーテルに與へることが能きないといふ先天的理由は毫頭ない。何人も今日まで之を爲し得なんだからとて、それが不可能であるといふ事の證據にはならない。五十年前に我等は原子の存在することを知つてゐた。然しその構造に就ては知る處がなかつたので、それには構造がないと考へるのが習慣であつた。今日我等は原子の構造に就て多分を知つた。之と同時に以前の原子の位置をエーテルが取つた。我等は電磁的エネルギイを搬ぶ一の運搬者のあることを知つてゐながら、その構造に就ては少しも知らないので、それには構造がないと考へてゐる。……然し我等はこの運搬者の性質に就てより多くを學ぶべき時期に達した。確かに今日ほど物理學が其學徒に重任を負はした時代はなく、又た今日ほど是等の任務に向けられたより多くとより好き頭腦を要求する時代もない。」

景氣恢復と一般經濟界

法學博士　堀江歸一

日露戰後不景氣の由來

日露戰爭後我國の經濟社會は一時非常の活氣を催ほし、有價證券の市價の昂騰するに隨つて、種々の新事業は全國到る所に發起せられ、未だ事業に着手せず、利益を擧ぐるに數年の歲月を要する會社、數年を經過するも尙ほ收利の見込不確實なる會社の株式すら盛に資本家に依て應募せられ、會社を創設して株式を發行すれば、一葉の紙片を化して一箇の財産たらしむるを得るの觀を呈したることありき。而も當時我國の經濟社會に斯る好景氣を生ぜしめたるは、何等確乎たる原因ありて、然りしに非ず。日露戰爭中政府が外國に募集したる外債の收入を軍事費として國内に撒布し、戰爭終熄の間際にも亦巨額の外債を募集し、戰後經營に要する經費として、之を民間に費消し、自ら一般の資力を豐富ならしめたる一方に、講和條約の不始末に對する世間の非難を掩はんが爲めに、政府自ら人工的政策を弄して、一時の景氣を作爲したるが爲めのみ。故に一度び恐慌を惹起すや、好景氣の時代に發起計畫せられたる新事業は盡く其基礎に動搖を生じ、當初の經營を全うして、我國經濟上の實力を涵養するに資するものなく短時間の好景氣時代の一過したる後には、我國には戰時に國民に課せられたる重稅の苦痛外債募集に基く對外債務の負擔獨り其害毒を逞うして、經濟社會を擧げて、不景氣の狀況に沈淪せしむるの已むを得ざるに至らしめたり。

斯の如く經濟社會の沈衰したる以上は、財政計畫も亦勉めて緊縮を旨とせざる可からず、財政適度に緊縮せられてこそ國家財政と國民經濟との間に調節を保ち

又財政の經濟に加ふる壓迫を輕うして、他日の經濟發展を促すの一助たるを得るの道理なるに、我國財政當局者の無謀なる、其官僚內閣たると、政友會內閣たるとを問はず、戰後に於ては常に軍備の擴張、積極政策の實行を以て、當面の急務なりとし、逐次經費を增加し歲計を膨脹せしめて已まず、戰時に增徵せられたる諸種の租稅は戰後に亙りて、繼續せられ、歲計の均衡を維持し難きに至るや、公債政策の下に、外債を發行し、其收入に依て一時を彌縫するの窮態に出で、斯くて內には通貨膨脹して、物價に異常の騰貴を招き、外には對外債務の負擔を加重し、輸入貿易の增進を促すと共に、輸出貿易の伸張を妨げ、國民をして對外債務加重の結果、兌換制度の前途に不安の念を懷かしむるに至れり。時に第二次桂內閣の如き公債借換の計畫を遂行するの必要上、人爲的に一般の金利步合を低下せしめんとしたるものあり、又時に山本內閣の如き、行政整理の下に、多少の經費を節約して、若干の減稅を行ひたるものありと雖も、大勢の趨く所は容易に之を左右するに難く、戰後七八年間を通じて我國の經濟社會は常に不景氣に苦しめられ、商工業不振の嘆を免かれざりき。

景氣恢復の兆候

我國經濟社會の悲境斯の如き場合に於て、偶々歐洲戰爭の勃發に際會し、我國亦交戰國の一として、此戰爭の渦中に投じ、獨墺諸國との交通杜絕し、聯合諸國との往來亦自由なるを得ざるに至るものとすれば、益々我國の經濟社會を苦しめ、其否運を甚だしからしむ可きは、何人も想像する所にして、歐洲開戰の當初我國民一般に戰爭の我國に及ぼす影響を憂慮し、經濟社會の前途を悲觀したるは、敢て怪むに足らず。吾輩の如き亦實に悲觀說を懷くの一人なりしが、之を實際に徵するに、歐洲戰爭の我國に及ぼしたる經濟上の影響は少なくとも今日までの經過を以て論ずるときは、我國に幾多の利益を齎し、經濟社會の景氣の如き、或は之が爲めに全然恢復するに至らざるやの觀なしとせず。斯る變調の經濟社會に誘導せられたる原因は一にして

足らず。試に其重なるものを數ふれば、左の如し。

(一)外國貿易の順調殊に輸出の增加。

(二)軍需品の輸出、輸入貿易の減退に依て、軍需品製造事業並に輸入品代用工業に及ぼしたる刺戟。

是等事業の繁昌に依て、當業者並に從業者の收めたる利得。

(三)數年間に亘る金融の緩漫に依て、內地に於ける事業計畫の奬勵せられんとする氣勢。

(四)米價の騰貴。

近年我國の外國貿易が政府の慣用したる外債政策の爲めに、常に巨額の輸入超過を呈し、殆ど其底止する所なきの狀を示したるは夙に世人の知る所なり。然るに一昨年歐洲開戰以來自ら輸入貿易を制限して、貿易の逆勢を矯制するを得たり。但し一昨年度の貿易狀態たる、輸出貿易の減少したるよりも、更に大なる程度に於て、輸入貿易の減少したる結果として、貿易の均衡を得たるに過ぎず。眞實有利なる貿易の均衡を得んとするには、輸出貿易に大なる增進を告ぐることを以て、必要の條件とす可きは論を俟たず。然るに昨年の貿易狀態は此條件に適し、大正二年度の輸出額六億三千二百萬圓、大正三年度の輸出額五億九千一百萬圓に對して、昨年度の輸出額は七億六百萬圓に上り、一方に輸入額は五億三千八百萬圓に止まれるか故に、差引一億六千八百萬圓の輸出超過を見るを得たり。貿易の順調は必ずしも喜ぶに足らず、絕對に之を喜ぶは重金主義者の亞流のみ。唯我國の如き國際貸借の關係上、債務國の地位に居るものに於て、輸入貿易に著しき減少なく、一方に輸出貿易に大なる增進を得て、其結果として輸出の超過を收め得たるものとせんか、經濟社會の歸嚮す可き自然の徑路に就き、又輸出超過に屬する債權を以て、他方の債務に當り、漸次對外債務を輕減するの利益に接するを得べし。

我國が昨年度の外國貿易に於て、巨額の輸出超過を得たること前記の如し。而して輸出貿易の增加たる戰爭に關係なき第三國の市場に於て、從來歐洲の交戰諸國より供給を受けたる物資に缺乏を訴へ、我國の輸出

品が自ら其缺を補ふの地位に立ちたることゝ、聯合諸國の軍需品を需要する勢甚だ盛にして、我國に其供給を求むるに至れることゝの二點を以て、重なる原因とす可し。而して軍需品は民間當業者の供給したるものと、政府自ら所有する兵器の類を供給したるものとありて、前者は盡く貿易表に計上せられたりとするも、後者に至つては必ずしも然らざる事情あり、随て實際の輸出超過額は貿易表に計算せらるゝよりも、多額に上ることを認めざる可からず。此點に於ては彼の英國が貿易表に上らざる軍需品の輸入を行ひ、貿易表に現はるゝよりも、遙に大なる輸入の超過を招きて、其決濟に苦むものと比較して、我國は正反對の地位に立つを得たりとす可し。既に聯合諸國より軍需品の註文到來して已まず、我國大小の工場は之に應じて、其供給に當り、一方に輸入貿易は大正二年度の六億三千二百四十六萬圓、大正三年度の五億九千一百十萬圓に對して、昨年中は五億三千八百萬圓に居り、我國の需要する物資は外國貨物の輸入に依て充されず、其足らざる所は內國の產出に依て之に當らざる可からざるが故に、自ら內地に於ける輸入品代用に關係ある製造業は大なる奬勵を受け、昨年來鐵、綿布、羅紗を始め化學工藝品の製造を掌る當業者が官有の兵器製造所と共に非常の繁昌を加へ、諸外國の船舶不足に乘じて、活躍しつゝある海運業者と相俟つて、景氣恢復の勢を促進しつゝある所以なり。

日露戰後の投機熱勃興以來我國の經濟社會が不景氣の禍を蒙れること甚だしきものあり。此間商工業は甚だしく沈衰して、世間を擧げて、秋風の落莫たる感を懷かしめたりと雖も、一方に國民が斯る不景氣の時代に、消費を節約して、資金を蓄積し、以て他日の機會を待望したることは、之を爭ふ可からず。最近兩三年間我國の金融常に緩漫にして、金利の低落を告げたるは、不景氣の結果、新事業に投ぜらる可き資金の需要乏しきに至れることを以て、一の原因とす可しと雖も、同時に既往數年間に亘る國民の貯蓄に依て、資金の供給潤澤と爲れる效果の少なからざるに居ることを閑却

す可からず。既に資金の供給豐富と爲り、一般の金利歩合低落し、増殖したる資金は放下せらる可き目的物を求むるものとすれば、其資金は自ら株式市場に注入せられて、有價證券の市價を騰貴せしむ可きこと論を俟たず。昨年來貿易の順調、正貨の吸收、軍需品賣却高の增加、海運業の活躍等幾多の好材料の出現するや、多年國民に蓄藏せられたる資金は一擧に株式市場に投ぜられ、軍需品又は輸入品代用工業に關係ある株式、海運事業に關係ある株式を中心として、諸株式の市價一齊に騰貴したるは敢て異とするに足らず。況や二年間の豐作を承けて、著しく低落を來し、政府の調節策を必要とすると認められたる米價が昨年來漸く騰貴して、農民の經濟を豐にし、地方の景氣を恢復するの一助と爲れるに於てをや。

新事業の勃興如何

然れども軍需品關係の事業が繁昌し、輸入の杜絶したる貨物に對する代用品製造業が隆盛と爲り、海運業者又は個人の船主が收益を增加したりとするも、其利益の及ぶ所は社會の一局部にして、必ずしも之を以て景氣恢復の實を得たるものとす可からず。彼の株式市價の騰貴に依て、其所有者又は投機業者が座して暴利を占めたりと云ふが如き、景氣恢復の點に於て、深く顧みるに足らざるなり。眞實社會が市場の活躍に依て利益し、景氣恢復の緒に就くには、新事業が世間到る所に勃興し、資本家に放資の目的物を與ふると共に、人に職業を授け、物資に對する需用を增加し、廣く利益を社會に普及せしむるの時を待たざる可からず。然らば經濟社會現時の狀況を以て推移して、果して斯る時機の到來を期待するを得るや否や。資金國內に充實し、株式市價騰貴の結果、利廻の降下したる今日は即ち新事業發起の時機として適當なるものゝ如く、又彼の日本染料會社グリスリン製造會社の株式應募が非常の盛況を以て、世間の迎ふる所と爲れる事實の如きは、新事業勃興の機運を促しつゝあるものと認められざるに非ず。然も機運の到來甚だ遲々として進まず、景氣恢復の實現せらる可くして、必ずしも然らざるは何故

なるか。自ら此點に就て一考を煩す可きものあり。

今日我國事業界の一部に繁昌の兆あるは、要するに歐洲戰時に際して、世界經濟社會の局面に變動の生じたる餘響に外ならず。軍需品關係の事業や、輸入品代用の工業が繁昌するの事實は即ち此道理を證明するものなり。若しも我國の企業家が新事業を發起するものとすれば、此方面に指を染むるの至當なるは勿論にして、彼等の現に爲す所亦然るものあるを認むと雖も、抑も彼等は歐洲戰後に於て是等の事業が如何なる狀態に就くものと考へつゝありや。先づ軍需品に對する交戰諸國の需要に就て見るに、歐洲諸國は今日戰時已むを得ざるの事情に會して、軍需品の供給を我國に仰ぐと雖も、之を以て正常の策と信ずるに非ず。否戰後に於て交戰諸國の間に軍國主義の思想旺盛と爲り、近き將來に於て再び今回の如き大戰爭を演出するの危機に居るものとすれば、少なくとも軍需品の供給を外國に仰ぐの方策を以て、國家に取つて危險なるものとし、自給主義を以て、軍需品供給の一大方針とす可きことと疑を容る可からず。露西亞の如き、國內工業の發達幼稚なる國は一擧に自給主義を應用せんとするも、之を徹底するに困難なるものある可く、此困難なるの間、戰後に於ても或る程度まで繼續して我國に軍需品の供給を求むることある可しと雖も、他の諸國に對して、同一の事あるを望む能はず。然らば今日我國の事業家が戰時偶然の事情に依て歐洲諸國の軍需品需要の增加したる故を以て、之に應ずる爲めに、事業の規模を擴張したりとせんか、戰後に於て忽にして生產過剩の狀態に陷ることを免がれず。政府が歐洲に於ける鐵の賣止に遭ひ、一方に鐵に對する需要の增加したる故を以て、數年度に亘る製鐵所擴張の計畫を思ひ立ち、近く議會に其經費を要求するが如き、事情の之に似たるものなきを得るか、吾輩の疑を懷く所なり。

更に藥品染料其他化學工藝品に關する事業に就て考ふるに、今日是等諸品の代價暴騰し、當業者に莫大の利益を與へつゝあるは、畢竟獨逸が聯合諸國の海軍に依て、東洋との交通を遮斷され、是等の產物を我國に

供給するの道杜絶せられたることを以て、重なる原因とす可し。故に戰時の今日我國に是等供給の杜絶したる輸入品に代用せらる可き貨物を製造する工業發起せらるゝも、戰後外國の供給自由と爲れるの日に於ては、外國の競爭に依て、事業の經營上に大なる困難を蒙るを免がれず。染料會社の如き、國家と特殊の關係に居るものに於ては、或は此困難に當るを得るとするも、他の會社に於ては必ずしも其然るを得ず。此危險の目前に横はるに拘はらず、我國の資本家が戰時偶然の事情に依て、需要の増加したるに乘じて、軍需品供給の事業を擴張し、戰時競爭品の輸入杜絶したるを奇貨として、化學工業を創設するが如き、無謀の行たるの譏なきを得ざるなり。

國際貸借の將來如何

我國の如く國際貸借上、債務國の地位に居る國が常に貿易上輸出超過を維持して、以て債務の決濟に當るの必要あるは論を俟たず。昨年度の貿易に於ては一億七千萬圓に近き輸出超過を呈し、爲めに對外債務を決濟したる上に、尚ほ累積する在外正貨を利用して、外債の一部を償還し、以て將來に於ける對外債務の負擔を輕減するを得たりと雖も、戰後に於て我國が常に昨年度と同一程度の輸出超過を持續することは果して之を望み得るや否や。輸出超過の事實たる、輸入の減少と軍需品に對する需要並に第三國市場に於ける交戰國の物質缺乏の爲めに生じたる輸出の增加とに基くこと既に曩に述べたる所の如し。戰後歐洲諸國が戰時に蒙れる傷痍を治癒する爲めに、物質の輸出に全力を注ぎ、一方に我國は商工業の好景氣に促されて、外國貨物を需要せんか、輸入貿易は必ずしも戰時の今日に於ける如く永く不振の狀に居るものとす可からず。內に財政の困難ありて、外に在外正貨の蓄積せらるゝもの著しき以上は、在外正貨が財政上に利用せられて、爲めに輸入の增進を促すは最も明白の理數にして、一方に內國に於ける輸入品代用工業の發達遲々たる以上は、此點よりも輸入貿易の增加するを免がれざる可し。

而して他の一面に輸出貿易の狀況を考ふるに、軍需

品の輸出の永續せざる可きこと前論の如くなるに加へて、第三國の市場に對する輸出品の販路と雖も、交戰諸國の狀態舊に復する以上は、戰時に於ける今日よりも、我國に對する競爭の激烈と爲るを免がれざるを以て、從前と同一の程度に之を維持するを困難とす可し。唯米國が中立國として歐洲戰時に有利なる地位に立ち、經濟社會に非常の活氣を呈しつゝあるは爭ふ可からざる事實にして、而して米國が我國の輸出市場たり、又米國經濟上の繁榮が今後兩三年に亘つて、繼續するものとすれば、此關係より我國の輸出貿易を伸暢せしむるに足るが如しと雖も、他の重要輸出市場たる支那が革命運動の頻發に加ふるに外資輸入の杜絕に依て、容易に景氣を恢復する能はざる事實に想到するときは、必ずしも我國輸出貿易の前途を樂觀するに難きものありとす。

產業政策確立の必要

大隈內閣は其首相大隈伯の老耄せるが如く、羸弱瀕死の境に居るものなり。斯る內閣に對して、產業政策の確立を望むは、無用の業に似たりと雖も、此事たる經濟上の時局問題として、極めて重要なるを以て、內閣の運命の如きは姑く之を不問に付し、一言して以て他日の實行を待たんとす。蓋し一國經濟社會に於ける景氣の消長は多く自然の運行に基き、好景氣の數年に亘りて維持せられたる後には必ず不景氣の時代を招致し、不景氣の數年に及ぶ間自ら他日の好景氣を誘導するに至るは、恰も一年に四季の別ありて、交互順環すると異なるものなく、妄に人工を以て好景氣を持續し、不景氣を回避する能はずと雖も、尙ほ人智を以て、寒暑の劇變を左右するを得るが如く、國家の產業政策宜しきを得るときは、或る程度まで好景氣の期間を永くし一方に不景氣の期間を短縮するの望なしとせず。日露戰後歷代の內閣は財政策の方針を誤まりて、國民をして永く不景氣の慘苦を味はしめたり。知らず我國の爲政者は好景氣の時代に處して、永く國民をして其利益に浴せしむるの方策を有するやを。之を我國當面の問題に就て見るに我國にして戰時に偶發したる有利

なる貿易の狀態を戰後に亘りて、維持せんとする以上は、輸入貿易抑制の方面に於ては、戰時輸入杜絕し、又は供給不足したる爲めに其缺を補ふの目的を以て起らんとしつゝある製藥化學工藝の事業に對しては、適當の獎勵法を講じ資本家をして安じて事業の創設經營に當らしめざる可からず。即ち戰後日獨兩國の關係舊に復して、獨逸より是等產物の輸入し來るの日あらんか、今日我國に於て同種事業の經營に當る者は其基礎の未だ鞏固ならず、收利の尙ほ不充分なる時に於て、外國の競爭を蒙るを以て、斯る場合には國家に於て其獨立を維持するに足るの保護を與ふる保證を與へざる可からず。而して此種の保護は保護金の下付を以てするか、內地市場獨占の形態を以てするか、將た又關稅政策上の保護を以てするか、當業者に取つて重大なる關係あるは勿論、最後の方法を利用せんとする場合には豫め今日より關稅政策の方針を決定して、戰後第一着に日獨兩國間に解決を要する經濟問題たる條約改正に臨まざる可からず。這般の問題に對して、大隈內閣に確乎たる成算の存するものありや否や、吾輩の疑ふ所なるのみならず、最近の事實に徵するも、今日露國に對して、或る要求を致すに最も有利なる地位に立つ我國が露國の爲めに農產物果實等に對する輸入稅を引上げられ、浦鹽斯德方面に於ける我國の輸出を妨遏せられたるが如き、大隈內閣が戰後經濟上の施設に就て、何等の定見なきことを證明するものに非ずや。更に輸出貿易の方面に就て考ふるに戰時我國が第三國市場に擴張したる貿易品の販路にして、今日戰爭に從事しつゝある諸國の競爭に依て、戰後蠶食せらるゝ勢の免かれ難きこと前論の如く、而して我國は之を維持するの必要ありとすれば、戰時の今日より豫め之に處するの方策を立て、輸出貿易を獎勵するの急要なるは論を俟たず。然も政府は此點に於て何事を爲したりや。今日まで全然這般の施設を怠れるは何人も認むる所にして、或は近く議會に戾稅適用の範圍種目を擴張する法律案を提出するやに傳へらるれども、政府の行はんとする戾稅改正の如きものを以てして、輸出品販路の擴張に資するものなきは既往の實驗に徵して、之を知るを得べし。

景氣の恢復は政治上の關係に於て、將た又經濟上財政上の關係に於て、政府の熱心に希望する所なる可く好景氣の下に經濟社會活躍すれば、多少の惡政も國民に依て寛假せらるゝと共に不景氣の下に經濟社會沈衰すれば、社會各方面の攻擊悉く政府に集中し、不景氣を招致したる責任も亦政府の負はざる可からざる所と爲るを常とす。大隈內閣は經濟上に無爲無能なる一方に、政治上に罪惡を重ね、天下の指彈を招ぎつゝあるの際偶々歐洲戰爭に際會し英國に强要せられて、求めて戰亂の渦中に投じ剩餘金を空費し、人命を損傷するの愚を敢てしながら、歐洲戰爭の餘波を受けて、景氣恢復の端に接せんとするが如き誠に天祐を得たるものと云ふ可く、內閣の諸員にして經綸の才能を備ふる者ならんか、此機會を利用して以て景氣の恢復を確實にし、以て彼等の渴望して已まざる政治上の壽命を將來に繫ぐ可き筈なるに、今日に至るまで此點に於て何等爲したるものあるを見ず。斯の如く爲れば、一端緒に就きたる景氣の恢復も歐洲戰爭の終熄と前後して、空しく消散し、其跡を留めざるに至るは知る可きのみ。大隈內閣こそ老耄の首相を中心として、無經綸の輩を集めたる最劣等の內閣に非ざるやの感なき能はず。斯る內閣の興廢の如き、固より吾輩の意に介する所に非ず、唯此內閣あるが故に、歐洲戰後國際經濟界の危機に處して、我國が之に乘ずるの道を誤まり、目前に到來する景氣恢復の機運をも失はんとするに至つては國民として之を無視する能はざるなり。彼の平生經濟界に身を置きて、銖錙の利を事とする實業家の一團の如き、斯る無能無力の內閣の下に、好景氣招致の機會を喪失して、平然たるに至つては、其愚遂に測り知る可からざるなり。

「愛の爭鬪」に現はれたる兩性問題

平塚らいてう

―岩野清子氏に―

清子さん

私があなたに始めて手紙を差上げたのは、あなたも御記憶でせうが、今から四年あまり前、それは丁度私が雜誌「靑鞜」を創刊した時でした。その頃の私は勿論あなたに就いて何もさう知つては居ませんでした。只あなたは豫て遠藤清子氏として女權主張のため治安警察法第五條解禁の請願運動をされた元氣な婦人だといふこと、そして今は半獸主義者と云はれてゐる詩人岩野泡鳴氏と同棲し、自由な戀愛生活を營んでゐられるといふこと位をだれから聞くともなしにぼんやり耳にしてゐたに過ぎませんでした。それに私は何故か其當時あなたと總ての點で自分とは比較にもならぬ「おとな」だと考へて居ましたから(また實際さうに違ひないのでせうが)突然さう言ふ未知の「おとな」の前にたとへそれは手紙をもつてするにしても、自己を發表し、自分の使命とするところや、その仕事などを述べ、御同意ならば多少の助力を願ひたいやうなことを申出るのは何となく氣おくれのすることだつたのでした。と同時に自分よりも一時期前に活動されたあなたが今日年少の私に對してどんな態度をおとりになるかといふ好奇心も幾分か有つて居りました。そして私はとうとうあの簡單な手紙を書いたのでした。

それはあなたから言へば丁度あの「愛の爭鬪」の中の「池田日記」に屬する頃のことで、思ふにこの書の中に載せられなかつた部分にあるものでせう。

ところがあなたはすぐ返事を下さいましたね。しか

もそれは矢張り簡單な表面色も香もないやうなものではありましたが、何故か私の心には實に誠實をもつて滿され、情熱を中に包んだものとして響いて來ました。といふのは一方に於て私は他の幾人かの文壇に於ける先輩婦人に對しても、ほゞ同樣な手紙を送つたり、或は直接面會を求めたりしましたが、是等の婦人の多くから私が受取ることの出來たものは、私の方の僻目かも知れませんが不幸にして多くは冷笑か、皮肉か、揶揄か、然らざれば何の誠意もないやうないゝ加減なお世辭かでありました。まだ世間といふものを全く知らなかつた其當時の私はかういふ日本婦人の狹量と嫉妬と、邪氣と、不純な感情とに先づ第一に不快を感じさせられてゐた時でしたから、一層あなたの卒直な、純な、何處にも厭味といふものの影さへない所謂「男」らしい態度を氣持よく感じたのかも知れません。私は始めて一個の知己を得たといふやうな心强ささへいたしました。

それ以來、私の心の裡にはあなたのあの張りのある、しつかりした文字から受けた感じなども手傳つて、强健な肉體をもつた血色の良い快活な婦人としてあたの像が描かれて居りました。

併しその像はあなたから「枯草」といふ小說を受取つたその時から少しづゝぐらつきはじめました。何故ならそれは眞の理解も愛情もない結婚生活を送る女の孤獨な、空虛な、淋しさを描いたものでしたから、そしてその女はどう考へても瘠せた、疲れた、蒼い顏をした暗い女としか思はれませんでしたから、しかもそのお作の何處か幼稚で、ぎごちないのに、却て人を動す眞實な或もののあることや、また他の色々な點から想像しても、作者自身の生活を書かれたものとしか思はれませんでしたから。

其後あ、なたは上京なさいましたね。それはたしか明治四十五年の春、花の散りかけた頃でした。私はあの田端の筑波園の丘に立つて、ぽつと紅に續く荒川堤の櫻を遠く眺めながら、今日はじめてお目にかゝるあなたを色々想像しながらお待ちして居りました。あなたは

隨分おくれて御良人の泡鳴氏と御一緒にいらつしやいましたね。初對面の私はまた意外の感に打たれたのでした。と同時に私の心に描いてゐた像はその瞬間に於て跡方も壞れて了ひました。何故ならあなたは――ほんとのあなたは大きな丸髷をつけた、小づくりな、瘠せた、どちらかと言へば派手好きらしい厚化粧の奧樣でしたもの。けれどそれはほんのひとめ見た時の印象に過ぎなかつたことをお斷りしなければなりません。私は暫くお話してゐる間に、あなたの外見とあなた自身との間に非常な隔りのあること、そこに全く調和しない不自然な何ものかのあることにすぐ氣付きました。私は正直に申しますが、あなたの濃いおしろいの下のお顔の窶れを、どうして見のがすことが出來ませう、また煙草を召上るあなたの細い、筋立つたお手が絶えず神經的に震へてゐるのも氣になつてならなかつたのです。

「何故だらう、この方は何處かほんとに生活に疲れた、心の飢えた人のやうだ。」

私は心にかう囁きながら「枯草」の女主人公のことを竊に思ひ浮べなければなりませんでした。そしてあなたの背後に淋しいものの影を擴げて見たりして居りました。

けれど、その時の私はどうしてあなたが、

「私は自分の苦悶を人に訴へることはしない。私は心に泣いても、顏に涙を見せないことにしてゐる。私は主人と同棲後、今日迄絶えず心は泣き暮したが、親友にも、只一人の親にも洩したことはない。」「私は結婚生活に經驗がない。始めて男性に心身の全部を許してしまつた今日私の結婚生活に對する幻影は早くもさめてしまつた。古人が結婚は戀愛の墓だと言つてゐる。私は其人の努力によつて内外一致した戀愛生活が眞の結婚生活だと信じてゐた。結婚が戀愛を葬るのは當事者の努力が足りないためだと思つてゐた。併しこれは私一人のイリユージヨンかも知れない」(四四一頁、池田日記の中より)

といふやうな日記をひとり竊につけていらしたことに考へ及びませう。

清子さん

私があなたの私生活若しくは内生活を多少なり知る

やうになつたのは全く巣鴨にお移りになつてからのことです。ですから「愛の爭鬪」の大部分を占めてゐる大久保時代のあなたの生活は私には全く知らないことばかりです。私はあなたから泡鳴氏のあなたに對する愛に就いての不滿や、おふたり間に何日かの沈默の續いてゐるといふことや、また或時は離婚の話さへもちあがつたといふやうなことをそれとなく伺つたりする度毎に私はいつも何故かおふたりの共同生活の最初の出發點に何等かの誤りがありはしなかつたかといふことを直感するのでした。ところが今度日記を拜見していよ〳〵ます〳〵私の想像の間違ひでなかつたことを思はずにはゐられません。少し誇張に過ぎた言ひ方かも知れませんが、あなたの同棲數年間の惡戰苦鬪の歷史とあの最後の破綻とは實に最初の出發點の中にすでに〳〵充分に備へられてゐたやうに私には思はれます。更に言へば泡鳴氏が提出された同棲と結婚の二條件のその一つを承諾されたその瞬間に實は總てが決定されてゐたやうに思はれます。

あなたの記すところによれば、おふたりの共同生活は實に短時日の間に、しかも驚くべく無雜作に、手取早く實行されて居ます。初對面から同棲するに至る迄、面會すること僅に前後三回、その間の日數僅に九日とは、これが意識的な、反省的な近代男女の行動としてはまあ何といふ稀有なことでありませう。

思ふに單純な、性急な、そして自惚れの强い――言はゞ或意味で人の好い泡鳴氏はあなたの友人某氏からあなたが氏の小說を讀み、氏とその小說中の主人公の心持を話してみたいと言はれたといふことをお聞きになつた丈でもう多少あなたが氏に牽き付けられてゐるものだ位なことは早合點し、あなたに對して好意をもたれると同時に、逢はない先きからもうあなたの上に男性の野心をかけてゐられたのかも知れません。そうしてその野心をもつてあなたを訪問されたのかも知れません。さうです、その野心はなほ泡鳴氏をしてあなたの前に――あなたに對して敬虔な態度をとらせたり、初對面から自分の過去の生活を告白させたりした

のでせう。殊にその當時の氏は家庭生活に於ける破船者として異性によりて滿さるべき思想上、感情上の滿足を缺いていられたのですもの、私にはどうもさう思はれてなりません。然るに不思議にもあなたはこの點には殆ど氣付かれなかつたかのやうです。そして自尊心と自信――惡く言へば自惚れの强いあなたは、と同時に芝で生れて神田で育つた江戸兒を誇りとしていらつしやる、どこか淡泊な、總べてに對して疑ひ深くない、從つて容易に人を信じる――殊に自分に對して敬意を拂つたり、讃辭を呈したりするものを容易に信じる、この意味で矢張り隨分人の好いあなたは、泡鳴氏の「敬虔な態度」を「性」を離れて個人としてのあなたを尊敬するものとばかりおめでたく解し、並せて氏があなたの前で直に自己を語られたのをも單に恬淡な氏の美質の致す所とばかりおとりになりました。これは第三者から見ればあなたが早くもあなたの前に置かれた泡鳴氏の無技巧な係蹄に一歩踏み込まれたので、氏から言へば確に成功の第一歩だつたに相違ありません。

やがて氏からは二つの條件が提出されました。それは同棲と結婚の要求です。

まあ私の考へでは、婦人の立場からまたは人類といふ立場から眞の戀愛なり結婚なりに對して或る理想を有つて居る今日の新婦人の多くならば、この際幾分侮辱されたやうに感じて腹の立つのが普通のところだらうと思ひます。なほそれには對者をかうも理解し得ない男の不明に對する輕蔑の念も伴ふでせう。否、そればかりではありません、是等の婦人達が結婚の基礎條件としてゐる相互理解も相愛もまだ成立してゐないのに、また是等のものが成立する丈お互に接觸する時も機會も與へられてゐなかつたのに、一躍してこんな提出をする男の、人生の一大事を重んじない輕卒な態度に對してまづ第一に非難と反感とを有つべきではないでせうか。

然るにこの場合のあなたの態度は實に簡單、明瞭、恰も敏腕な事務家が事務を處理するそれのやうな態度

をもつて、何の疑惧するところもなく、即座に第一條件の同棲を承諾し、第二條件の結婚を拒絶なさいました。しかもその理由とするところも亦簡單、明瞭、次の如くであります。

「私は愛なくして男と結婚する事は、自分を辱かしめ、又男を欺く罪惡だと信じてゐる。で其點は拒絶した。然し一家に同棲することは岩野氏が私の人格を尊敬し、私の意志を强制しない限り差支ないと思つたので承諾した。」

何といふ大膽な、何といふ淺慮なといふよりも現實その者に對して盲目な、何といふ恐ろしいとでせう。

成程この理屈もこれ丈切り放して、一片の抽象的な理屈として見るとき一應はいかにも尤もらしくも聞えるでせう。併しともすればあなたを誤るものは、否あなた自身を欺くものはこの現實そのものを見ない、言はゞ個性化されない安價な、抽象的な理屈のもとに複雜な關係のもとにある人間の行爲を規定し去らうとする態度ではないでせうか。思ふに岩野氏から言へば第一條件と第二條件とはそれを内容的に見れば恐らくは同一のものであつたでせう、よしまた全然同一のものでないとしても同棲は結婚に至る過程として意義あるもので分つことの出來ない關係のものであつたでせう。ですから第一條件が承諾されたといふことは氏にとつては第二條件も承諾されたと實は同じことなので、少くともそこには時の問題があつたばかりだらうと私には思はれます。聰明なあなたがこの點に氣付かれない筈はないと思ひますけれど、あなたはこの内的に分離し得ない兩者の關係を殆ど無視して全く二つの別々なものゝやうに外面的に、輪廓的に、形式的に固定的に取扱つていらつしやいます。それともあなたは同棲してゐる中に、そこから愛が生れて來ないとも限らぬ、そしたらその上で第二條件を承諾しよう位な漠然とした期待若しくは豫想をお有ちになつたのでせうか――たとへ明に意識していらつしやらなかつたまでも。それにしても私にはあなたのこの御心持がどうもよく解釋されません。

次にあなたは同棲を承諾された以上、岩野氏の上に、

あなたの人格を尊重し、あなたの意志を强制しない人である、少くともその可能性のある人であるといふ確な信をお置きになつたものと見做さねばなりませんね。ところが日記を通じて現はれたところから判斷すれば、前にも述べた通り、あなたを所有しやうとする男性の野心をはなれては、そのための手段若しくは方便として以外には、あなたの人格そのものを單に尊敬してゐる人だといふ事實上の證據を私は不幸にして遂に認めることが出來ないのです。なほあなたは自序の中で、この點を更に說明して、「私は友人同士が便宜上の共同生活をするといふ意味で、すべて同等な資格で、お互に個人として相助け相補ふといふことを條件として氏に共同生活することを承諾したのであつた。」とお書きになりましたね。併しこれも要するに實際をはなれたあなたの獨りぎめで、事實に於ては何の效果もないことに終りはしないでせうか。たとへ岩野氏がそれを承諾し、その條件に從ふことをお契ひになつたとしても、果してそれが實行し得られるかどうかといふ實際についての觀察と考究とを經ないで、否寧ろ事實不可能な事情の上に置かれてゐる條件や、さういふ事情の上で結ばれた契約なら、言ふ迄もなく矢張り畢竟空の空なるものだらうと思ひます。況んやこの際あなたを所有したい――あなたによつて男性の慾望の滿足を得たいといふ願望に燃えてゐる泡鳴氏として、何でそれをお拒みになりませう。たとへあなたがもつと〳〵困難な條件をおつけになつたとしても恐らくは總て承諾されたことだらうと思ひます。それがかういふ場合の男性の共通な態度ではないでせうか。一個の女性を得るための順序としてまた、手段としてこの位な一時的讓步若しくは自己犧牲は寧ろあまりに男性にとつて容易なことに相違ありません。

かう言つて來ますと、結局あなたが不明で――詳しく言へば、あなたの單純なそして人を疑はない純な性情や自信や自尊心が却て相手の計略にあなたを乘せさせたので、要するに矢張りあなたは欺かれて、知らず識らずの間に、ぢり〳〵とその穽の中に引きづり込ま

れて行つたといふ形になります。

併し清子さん

これはどちらかと言へば外面から見てのことで、私は他方に於て、その當時のあなたの內部生活がどんな狀態にあつたかと言ふことを勘定に入れてるのを忘れてゐるものではありません。そしてぢつと落着いてそれらのことを考へるとき同情の淚さへ自から浮んで參ります。

それは當時あなたがあなたの生命の全部であつた戀に破れた深い痛恨を抱いていらしたといふことです。あなたはそれに就いてはその戀を忘れたさに紀念の地を去つて、他に移轉したいといふ心が頻りに動いてゐたからといふやうな極表面的なこと以上、少しも中心にはいつたことに言ひ及んでいらつしやいませんが、私の憶測を述べることを御許し下さいますなら、あなたをして岩野氏との同棲を承諾させた眞のしかし見えない力は、實は矢張り戀に破れた淋しい空虛な心が、その空虛を新にしかも突如としてあなたの前に現はれたひとりの異性によつて多少なり滿さうとする或る無意識な欲求ではなかつたでせうか。そしてこれは私から言へばあなたがご自身で認めていらつしやる他の理由よりも最も有力な、最も深い潛在理由なので、同時にまた他日あなたが岩野氏の愛を絶えず不滿なものにお感じになつた根本源因の一つをなしてゐるのではないでせうか。かう見ればいくらか解釋がつくやうに思ひます。

清子さん、かうして淸い、美しいセンチメンタルな若しくはロマンティックなラブに破れたその生々しい傷手をもつてゐるまだ男を知らない女と「幾多の女と放縱な生活をし、戀愛を刹那々々の衝動に任せて、そこに反省も自制もないらしいやうな」過去をもつた男とが「便宜上」(男女の共同生活にかぶらせる言葉としてこれは何といふいやなそして淋しい言葉でせう)といふ意味(思ふに名義)で共同生活を始めたのです。そこからやがてどんなことが生れてくるかは、少しも

のを考へる人なら、誰れでも想像するにさう難くはないでせう。

以上述べたところによつて、私が先におふたりの愛の生活の最初の出發點に或る誤りがあると言ひました。その意味をあなたはほゞ御了解下さつたことゝ思ひます。

清子さん

果しておふたりの間には戀愛に對する思想若しくは解釋の上の相異といふ外面の形をとつてこの慘ましい事實が現はれて來ました。併しこれは決して單なる思想上や主義の上の問題ではありません、實におふたりの間の愛そのものゝ性質の相異、換言すれば慾望の種類の相異だと私は思ひます。そしてこの相異はまた相互の個性の相異や、年齢の相異や、「性」の相異や、過去の生活――特に性的の――の相異などからきてゐることは言ふ迄もありません。

かうしてあなた自身は友人同士が便宜上共同生活をするといふ意味でお始めになつたにも拘はらず、同棲後間もなく男の切なる要求のために日夜苦しめられるやうになりました。この苦悶はあなたがものゝ外側ばかりを氣にして、その眞の中身をおしらべにならないことに起因するので、言はゞ自業自得だとでもいふのでせうけれども、それがどんなに堪へ難い壓迫だつたらうといふことは私の第一の戀に於けるこれと類似の經驗からも十分にお察しすることが出來ます。そして私はほんとうに殘念に思ふのです、あなたが相手その人を見あやまつたことと、その選擇を誤まつたことを。今更幾度繰返しても甲斐のないとですけれど、私は私自身の氣やすめのためにもう一度言はせて頂きます。「何故あなたはあの時同棲なんか承認なさつたのです。」と言ひたいのです。若しあの際あなたがそれさへ承諾なさらなければ、おふたりの間は或はもつと違つた形に發展したかも知れません、そしてそれは、却てあなたが望んでいられる浪漫的愛を育てるに都合のいゝ狀態だつたかも知れなかつたと私には思はれるので

すこあなたにとつて理想的なものと終生忘れることの出來ない中尾氏との戀も、若し中尾氏が獨身の男子であつて、そして一つ家に住んで朝夕自由にあなたと逢ひもし話しもし得る間柄であつたならばあゝした數年に亘る靈のみの戀は到底成立しなかつたらうと思ひます。（尤もその愛が戀ではなくて、小倉氏の所謂「性愛」――最後まで春的な要素を伴はない兩性間の愛情――と名づける性質のものだつたならば自から別問題ですが、あなたが最後に失戀の苦い經驗を失はれたことから想像すれば少くともあなたの側に於てはそれが立派な戀であつたと言はれると思ひます。）何故なら戀する者はその相手から遠ざけられてゐる間は、その慾望は絶えず共にありたいといふことの一事を出ません。即ち逢ひさへすればもう總てが滿足されて仕舞ふのです。そして逢ふことが困難なれば、困難なるほどその感情は却て益高められ、淸められて、靈的な、浪漫的な色彩を加へて來ます。ところがその慾望が滿されゝば、そして戀人等が常に共にあるやうになれば、今度は相手を互に所有し合はうといふ慾望にそれが變するのは自然のことですもの。

一切の愛をその發生的關係に從つて自然的愛、浪漫的愛、夫婦的愛、母的愛、同族的愛の五種に分けて說明しやうとした米國の社會學者レスター、ウオードはその浪漫的愛と自然的愛との根本的差別の主なるものとして、後者はその相手を所有しなければその慾望が滿足されないのに反し、前者は相手が自分の傍にさへゐさへすればそれでもう滿足が得られるといふ意味のことを言つて居りますが、これは興味あるそして注意すべきことだと思ひます。またこんなことを言つて居ります。浪漫的愛は常に反覆される神經的震動の絕えざる連鎖で、その神經的震動は非常に强烈なものではあるが、別にそれがこれといふ働きをするのではない、言はゞそれ自身のために只存在してゐるのである。またこれが肉體的のものであることは明かなことで、接吻、抱擁の如き種々なる肉體的動作によつて强められる。そして浪漫的愛の十分な滿足は、この神經震動を

自由に活動させることにあるので、決してそれ以上に出ないのである。若しそれ以上に出るものがあれば、それは自然的愛への復歸である。しかもかういふ復歸は完全な、そして永久な幸福には全然不必要なことである。浪漫的愛の優越點は久しく繼續すると同時にその强さを失はないといふところにある。

淸子さん、私はこれによつてあなた方おふたりの愛の不一致とそれから生ずる爭鬪とがよく說明されるやうに思ひます。即ち岩野氏の愛は一切の愛の根源であり、愛の中の最も原始的なものである、從つて最も肉體的な、またそれだけ一時的なウォードの所謂自然的愛に相當するものではないでせうが。然るにあなたが氏に求めてゐられるものは、その本來は矢張りそこから流出したものには相違ありませんが、もつと發達したもつと複雜になつた、もつと精神的になつた從つてもつと持續性のある所謂浪漫的愛なのではないでせうか。此處に私はあなたの泡鳴氏の愛に對する絕えざる不滿があるのだと思ひます。果してあなたは四十三年二月十九日の日記に次のやうに書いていらつしやいますね。

「……刹那の滿足で翌日は行路の人となつても構はぬといふやうな發作的な戀に何の力があらうぞ。淋しい明日を豫期して、今日の歡樂に醉ふなどといふ事は私には斷じて出來ない。そんな果敢ない戀なら、私には全身を捧げることが出來ない。君と私とが今日まで胸の鼓動を等しうすることの出來ない原因は此點にある。焰のやうな熱した戀を、生のある限りお互に續けやうといふのでなければ、それは戯の戀である。賤むべき肉の戀である。私にはそんな一時的な戀と豫期して愛されたくない。私は男の性慾の道具になりたくない。そんな戀に犧牲を拂ひたくない。

私は戀をする以上は、其戀と生死する丈の熱をもつてゐる。第一の戀は此點で相容れないため破れた。私は戀を衝動として取扱ひたくない。少くとも永遠性のものとして、純一無二のものとして取扱ひたい。それが出來ないなら私は寧ろ戀をしまい。」

なほこの種の苦悶は他の箇所にも屢々繰返されてゐるのを見ます。

併し何といつても、あなたは今や友情以上のものを氏にて對して抱く様になつて居ます。のみならずいつまでも滿されない男性の慾望はそれが滿されなければ

満されないほど烈しいそして切なものとなつてあなたを壓倒して來たに相違ありません。かういふ際、これ迄の多くの女がしたやうに、また現にしつゝあるのだと想像せられるやうに、あなたもあなた自身の戀の嚴肅な一部命令に反いて、愛するものの苦痛をみるに堪へないで、または愛するものにその慾望滿足を與へてやりたさに、あなたはとうと浪漫的愛を捨てゝ自然的愛の中に身を投ずることによつてその處女をお捨てになりました。斯うしてあの最初の第二條件の結婚が事實に於て承諾されたのです。

それならその結果はどんなものでせう。

あなたは益々堪へ難い淋しさの中に突き落されるばかりでした。そこには何の滿足も幸福もまた、一時的の歡樂さへもありませんでした。浪漫的愛に憬れてゐる魂を其内部の要求に逆つて、自然的愛に復歸させ、その慾望に滿足を與へやうとすることは堪へ難い苦痛に相違ありません。併しいかにあなたが浪漫的愛の憧憬者であつても、この愛を完全な、理想的な兩性關係の極致として、そこに始終しやうといふのがあなたの最終の願ひではなかつたでせう。言ふ迄もなく眞の戀は靈から肉に至るものでなければならぬ、斯くして靈肉一致の境に達したのが眞の結婚でなければならぬと考へていらしたあなたは思ひ上つた浪漫的愛の過程を經て、その結果として生れる一男一女の對等な結合であるウォードの所謂夫婦的愛の理想に至らうとするのが矢張りあなたの愛の生活の終局の努力であつたのでありませう。そしてそれは正しいとだつたと私は思ひます。誤つた結婚生活の辛い經驗から結婚そのものを呪ふ人も多いやうですけれど、ここにいふ眞の意味での結婚は何といつても兩性關係の最も進化した、そして最も心理的な、精神的なものであつて少くとも今日の文化の度に於てはこれが最も完全に近い理想的な兩性關係でなければならないと私は信じて居ります。然るにあなたのその努力を悉く慘しい迄に失敗に終らせたのは何でせう。私は矢張り其最初の出發點の誤りだといふことをここでも繰返さねばなりません。

そしてあなたがあなたの愛の相手として最も不適當な人をお撰びになつたことを悲しみます。と同時にこれらのことが、あなたに可なり附き纒つた缺陷と私には感じられる。形式を重んじ、ものの輪廓にばかり拘泥して、ともすれば肝心な中身とその實質を見落すところからきてゐることの多いのを思はずにはゐられません。

なほ「巣鴨日記」の中に記された別居事件についても申したいことが澤山ありますけれど、稿を改めて書くことにし、此處では故と觸れませんでした。最後に友人としての同棲第一日から別居に至るまでのおふたりの間の經濟的關係について私の抱いてゐるあなたに對する不滿や疑問を申上げることもまた他日に讓ることにいたしませう。

色々書きたいことはあつたのですけれど、かうして書いてみると、大切なことを言ひ落したり、どうでもよかつたことを長々と書いて仕舞つたりして自分ながら不滿に堪へません、けれどもうぐずぐずしてゐる時がありません。いづれお目にかゝつたとき補足いたします。

(五、一、一九)

政局進展の倫理

若宮卯之助

(一)

今や日本は、世界の日本で無く却つて世界は或意味に於て、日本の世界である。若し日本にして義理と人情とは個人の事、品位と約束とは國際の道德にあらずと爲し、當面或は永遠の利害を度外視して、單に翻弄の爲に、敢て世界を翻弄すると云ふやうな遊戯心の唖

きに應ずるとせよ。而して即今即時、英露に敵對して獨逸の戰友と爲るの自由と氣紛れとを有するとせよ。而して日本の兵力と、經濟力と、取り別け優越なる地理上の形勢とを以て、實現し得べき一切の敵對行爲を徹底して實現するとせよ。已に內部の動搖あり、已に他國の垂涎ある印度は果して英國の寶藏であらう乎。已に個人主義の過度の延長に惱み、已に勞働階級の我欲の增長に脅えたる濠洲は、果して更に朝日の御旗を望んで大いに慄かぬであらう乎。今や太平洋は殆ど日本の湖水である。否、印度洋亦殆ど我家の泉水である。若し日本にして露國と太平洋との關係を根本的に斷絕して、而して西比利亞鐵道の痲痺を見るに至るとせよ。東亞の大陸も亦殆ど日本の庭園の如きものとなると否とは姑く問はず、已に一たび痲痺の經驗ある露國の戰鬪力は、更に其痲痺を感染して、同盟軍の前に其得意の背進を演ずるに至らぬであらう乎。短く言へば、今日に於て聯合國の死命を制するものは日本である。此意味に於て、而して此刹那に於て世界は實に日本の世界である。

（二）

世界は或意味に於て、明かに日本の世界であるに拘らず、日本帝國は、其の充實の意味に於て、尙ほ未だ日本國民の日本で無い。日本は今や摩擦の日本である。政府と人民との反撥の日本である。政權を以て人民を誘惑し、籠絡し、若くは脅迫するの日本にあらざれば民權を以て政府に反抗し、殺到し、若くは政府其の物を糺彈する日本である。政府の人氣取りと其の人氣失ひとが、左右の足の互に前後して進むが如く、進行する日本である。今や島田議長の忘前失後と大隈首相の顚言倒語とを一代の偉觀とする帝國議會に於て、馬の問を受けて鹿を酬うる、無責任の摸範的大臣と、討論の議場と角力の道場とを混同する、同じく無責任の一國の選良とが、此の奇怪にして物騷なる、反撥、摩擦の時代を、最も巧妙に表象する日本である。此の反撥、摩擦の日本を表象する帝國議會の少數黨は、彈劾に次ぐに彈劾を以てしたる、賣り言葉に買ひ言葉の行きがゝりに於て、身を以て大隈首相に逼りながら、「君主權

の侵害』を否定しやうとしたる、大膽なる無作法なる血迷へる議員を出だせるが如く、調子を失へる、軌道を外れたる日本である。此の軌道を外れたる日本の亂調子は、四海波靜かならざるも、尚ほ我に太平の春を祝くの餘裕ある、松の内に於て、人もあらうに、『高遠の理想』あり、『偉大なる自覺』あり、其の味方の所謂『世界の偉人』たる大隈首相其人に、敢て、爆發せざる爆彈を投ずるが如き、危險なる狼藉者を出した不祥事に至りて、實に頂點に達して居る。若し政權爭奪の、野心の角の突き合せを以て、此の摩擦と反撥との、往々にして不祥なる刹那の日本の、基本の事實とする乎。然も此の政權の爭奪は、此の刹那の日本に始まれるもので無く、此の刹那の日本に終るべきもので無く、其の古きは政治的動物も共に古く、其の久しきは地上の人類と歴史を共にすべきものである。然らば此の刹那の日本の政治的混亂は、其の原因を何いの處に潛めて居るであらう乎。敵の肯ふ所は恐くは味方の否む所である。黨人と黨人とに、互に我田に水を引かしめたならば、鳥の雌雄は、之を辨ずるも、其の善惡正邪は容易に分ち難きものと爲るであらう。情實は力である。野心は力である。意地張りも力であり、行き張も力である。欲しい惜しいの力であると同樣に、ニコポンも、大風呂敷も、共に力である。此の一切の力が、他の多くの力と共に、此の刹那の日本の政治的混亂を釀成するに與れるは、完全に之を點頭くことが出來る。然しながら、暴風にも中心があり、洪水にも起點がある。此の政治的混亂の中心たり、起點たる、基本の事實は終に人間智能の外に逸するであらう乎。味方の爲に辯ずるの黨人は、敵の爲に誣ゆるの黨人と共に、等しく公平の立場を缺くものとせよ。政治現象の忠實なる觀察者―然り此の觀察者のみ、此の事實を適當に、公平に看到する資格を有して居る。此の公平なる、忠實なる政治現象の觀察者に於て、此の刹那の日本の政治的混亂の起點は極めて明瞭である。即ち少數黨を以て、多數黨を倒したる憲政上の變則的事實が飾り無く、其の起點を成して居るのである。

(三)

薩長妥協の苟合黨として、絶對多數の横暴黨として、政友會の成就したる過去の罪業は、其怨すべきの一切を悉く怨するとしても、尙ほその應報は、少くとも分量上の問題として殘るべきであるかも知れぬ。其の權力より逐はれたる、一時性の失意と煩悶とは、其の黨派の訓練に更に緊張の機會を與へて、却つて後來の歷史を飾るべき素地を成すかも知れぬ。政友會の善事と惡事とは、觀る人の如何に依りて、其の性質を異にし、其の分量を同くせざる問題とせよ。然も所謂海軍事件が、政友會の直接の責任に歸せざることは、如何なる僻目と雖も、之を容認するの義務を辭すべきで無い。絶對多數の政友會が、直接己れの責任に屬せざる事件の爲に、自ら權力を退くの餘儀なきに至つた事實は、日本の憲政史上、嚴密の分析を要する複雜なる問題であるが、此の問題は、我等の當面の問題に直接の關係が無い。我等の當面の問題は少數黨が多數黨に代りて、遂に大隈內閣の成立するに至つたと云ふ事實其のものである。

(四)

大隈內閣は其の起原に於て、少數黨の內閣であり、其の性質に於て、一時性の內閣であつた。大隈伯は長壽慾の强き人である。伯の長壽慾は、其の少數を多數と爲し、其の一時性を永久性と爲すの慾心となつた。而してこれ實に大隈內閣の要政の一切の源泉を成すものであつた。一切の政治は、悉く其の慾心の命ずるが儘となつた。

『世に完名無し』。如何なる政府も一切の惡を爲すもので無く、同樣に如何なる政府も一切の善を爲すもので無い。然も大隈內閣に於ては、其の善事は明かに消極的、惰性的であり、其の惡事は、鮮かに積極的であり、創造的であつた。

日本帝國の何ものと何事とが非立憲であるにせよ、元老の存在の如く、非立憲であるものゝ無い。而して此の非立憲の元老の、偏僻なる愛國心に投ずることは大隈內閣の長壽慾に於ける基本の要件であつた。斯く

して現れたものは增師案である。

二個の增師案は、歐洲戰亂の終局を待ちて、徐ろに之を講究するの餘裕を有せざる、緊急の問題であつたであらう乎。帝國議會の解散を賭してまでも、飽くまで之を爭ふの必要を有して居た重大の問題であつたであらう乎。馬鹿の智慧は後からつく。今日に於て日露の親善が、單に其の親善の度を增すに過ぎざることは其の歐洲の交戰國が、暫しは共疲れの勢を免れ得ざると同じ比例である。之を總ぶるに增師案の成立は、執拗なる軍人及び軍人的元老の滿足の外にして、先づ〳〵長州陸軍の國民的後援に了つたやうなものである。

（五）

大隈內閣は、其の假相が政界の暗礁であり、其の眞相が軍人の片意地であつた增師案の通過を成就して、日本帝國非立憲の總本山たる元老の歡心を、其の本願の通りに、買收した。斯くして其の長壽慾の第一條件の充實されると共に、當然に增長したものは、其の第二の條件たる人氣取りの奴隸心であつた。斯くして一切の人氣取り、一切の人氣取りに附隨する一切の罪惡、一切の輕卒、一切の權謀は、大隈內閣の嚴乎たる特色となつた。

其の大隈內閣の、長壽慾の第二の條件たる人氣取りの中に於て、其の最も露骨なるは、所謂米價調節等の無責任であつた。責任支出と言へば男らしく、米價調節と言へば政策らしく、而も其の實質に於ては、單一なる人氣取りに憧れた、剩餘金の浪費に過ぎ無かつた。

此の人間萬事殆ど金の世の中に於て、姑く之を金の問題とせよ。金の問題として、國庫の負擔の問題として、所謂米價調節と、所謂海軍問題とを、公平に商量せよ。其の法律の網に罹ると否とを度外して、單に之を國民膏血の問題として對校せよ。腐敗を以て觀れば薩州海軍の腐敗は長州陸軍の腐敗の上に出づるもので、シーメンス事件の怪しさは、泰平組合の怪しさに優るものであるかも知れぬ。然も陸軍の有效は海軍の有效に異らずに、日清、日露、及び日獨の大小戰役は、平

等に其の役目を果して、國家の礎を固めて居るが。人氣取りに始まつて、人氣落ちに終つた大隈内閣の米價調節の實行に至りては、純粹の浪費に出發して純粹の浪費に到着しただけに過ぎなかつた。罪を以て權力より逐はれるに至つた山本内閣の、鋭意して絞り出せる多額の剩餘金は、斯くして大隈内閣の全く茶々無茶なる、向ふ見ずの、人氣取り、相場師肥やしの爲に甘まく／＼と消費された。

（六）

袁の政府を窮地に導かうとして、自ら進退兩難の行き詰りを描いたものは、大隈内閣の對支外交であるが、此の外交も元を糺だせば選擧準備の對内政策に根柢した、恫喝虚勢の、輕卒なる一念の、發動であつた。言ひ換へれば大隈内閣長壽慾の論理の結果として、日支親善の外交方針は、日支反目の危機を激成する、反對の方針となつた。彼れも人氣取り、此も人氣取り、國内も國外も、大事も小事も、驢事も馬事も、苟も政府の爲し得べき一切の事は、人氣取りを中心の原理として計畫せられ、實現せられ、執行された。此の人氣取りと、此の人氣取りの上の、元老の御機嫌取りとの、十全なる準備の後に於て、澁柿を變じて甘柿と爲すが如く、不可能を變じて可能と爲し、少數を變じて多數となすの目的を以て、投機的に、斷行せられたものは帝國議會の解散であつた。

能く泳ぐ者は溺る。能く泳がざる者も亦溺る。日本帝國歷史以來の、唯一無二の、探偵政治家たる故大浦子爵の選擧干渉の辣腕は、流石に『蝮の兼武』を謳はれた、年功の凄味を見せ、味方をして頼ましめ、敵をして怖れしめ、其の人氣取り、其の御機嫌取りの、最後の目的たる、少數を多數と爲すの、際どき藝當を演じ盡くして、大隈内閣の長壽慾の爲に、最大の勳功を樹つるに十分であつた。然しながら韓非が說難を作りて說難に死せるが如く、大隈内閣の長壽慾の爲に、偉勳を樹てた大浦子爵が其の政治的壽命を短くして、自ら好まざるの隱居刑に自ら進むで服したことは、運命の惡戯であらう乎。因果の應報であらう乎。不幸にして若

くは幸にして、大隈内閣の偉勳は國家の法律に於て瀆職となつた!。

少數黨を以て多數黨を倒した、憲政運用上の、變則の事實を起點として出發した大隈内閣が、其の思考し得べき、其の實行し得べき、一切の權略を弄したことは、其の巧妙なる、或は拙劣なる、人氣取りと、御機嫌取りとを籠めて、尙ほ悉く之を政治圈内の事件と看做すことが出來る。然も、一たび瀆職事件の露現以來、其の内閣の政治は、一々に道德上の批判を仰ぐべきものとなつた。

『内腐りて蟲を出だし、魚枯れて蠹を生ず』、瀆職事件其のものに於て、已に存在の意義を喪失したる大隈内閣が、『董督不行屆』の責任を自覺し、若くは自覺したるを粧ひながら、猶ほ且つ帝國欽定憲法第五十五條を居据り的に解釋するの鐵面皮を示すに至りては、國家は或は最高の道德であらうとも、政治は此に至りて至上の罪惡であると謂はねばならぬ。

(七)

鷄を殺して朝寢を貪るは、痴人の事であるが、新聞記者を買收して、民意尙ほ我に在りと謂ふは、『偉大なる自覺』ある大隈首相の宣言である。口は重寶なもの、時としては重寶に過ぐるもの、瀆職事件に無責任を感ずる程の惡良心の鋭敏なる大隈首相の誠實は、今更之を疑ふを野暮の至りとして、扨て此の刹那の我が對支外交と新聞記者との奇妙なる關係の如きものが、曾て一たびなりと存在したであらう乎。我等は『二十萬兩(テール)と、帝制承認と而して其の寢返へり』との三ッ巴の咄々怪事は、恐らく無根の事實として、敢て之を信ずるもので無い。其の直接の結果の成敗如何に拘らず、到底日支兩國の間に、無用なる外交上の難關を更に增加して、新に猜疑と離間と、反間との機會を作るもの、、對支警告の最後の結果であることは、少くとも我が外交の金縛りを自ら演ずるに至ることが、單獨不講和加入必然の結果であると同一である。僞善は愛國心の一要素なりとせよ、泣寢入りも亦國民の義務なりとせよ、而して擧國一致は、外交的成功の豫件なりとせよ。我等

は此の道德的墮落の線路を急行する、大隈內閣に對してさへ、外交上には、尙ほ其の失敗を警戒して、切に其の成功を祈るばかりである。

(八)

任意の謹愼を以て、法律の制裁を免れ得る如く、誤解せしめたる大浦不起訴の問題は、瀆職、居据り以後の不道德內閣に於て必然に生起すべく、而して必然に內閣の壽命を短縮すべき、危險なる性質を新に得たのである。我等は故大浦子爵の不起訴と、其の不起訴に關聯する尾崎法相の詭辯とに對しては、冷靜なる、政治現象の觀察者たる立場より考へても、單に現實暴露の悲哀を感ずるばかりである。瀆職事件は已に成立した。其の不起訴と否とは必ずしも重大緊要の問題で無い。問題は瀆職事件の如く、居据り事件の如き、非立憲の大罪が、何等の刑罰を蒙らず、何等の報償を受けずに居れりとすれば、國家は果して其の政治の健全なる進行を期するを得るや否やの點に於てのみ、重大であり緊要である。

然しながら我等は、己れの目の梁木を忘れやうとせず、兄弟の目に物屑を視やうとしたるにあらざるも、猶ほ大隈內閣より善事よりも不善事を、成績よりも敗績を擧げやうとしたる傾がある。而も我等は一切の物の、全部の惡を含まざるを知るものである。我等は大隈內閣が、他の何れの內閣と雖も、到底企て及ばざる、今日までに其の類例なく、今日以後に於ても亦恐くは有るまじき、政治上の成功を稱たへずに居ることは出來ぬ。成功とは何ぞや、大浦子の永久的退却、即ちこれである。

人壽は多きを貪るも、百二十五才を超ゆるもので無い。肉體上の大浦子爵は、敢て瀆職事件を待つまでも無く、遲くも三十年を出でずに、永久の退却を以て、英雄兒女、法界一味の平等世界に入るべき一個の飯袋子である。這個飯袋子の退却、それ自身は、決して政治上無比の成績で無い。無比の成績とは、大浦子爵に權化せる探偵政治の退却である。大浦子爵の蝮流探偵政治、少くとも一種の隱居刑を免れざるものでありと

云ふの先例は、大隈內閣の最大なる成績として特筆大書の價を有するものである。

次ぎに稱揚すべき大隈內閣の成績は、瀆職事件を中心としたる彈劾案の問題に於て、所謂中立議員の如何はしき正體を暴露したる痛快なる事變である。中正會の花井卓藏氏は曰く、內閣居据りは非立憲である、然しながら宮內大臣の責任に歸着すべき乃木家事件を包含する彈劾案には贊成するを得ずと。宛然これ刑事辯護人の口吻である。

宮內大臣の責任に歸着すべきものであると云ふ乃木家事件の不法を重しとするか、內閣全體の責任たる居据りの非立憲を輕しとするか。若し政治家の行藏進退にして、舊刑法の如く重きに因つて處分すべきものであらば、政治家としての花井卓藏氏は、輕きものゝ爲に重きものを犧牲として進退する奇々妙々の事をやる人間となるのである。彈劾案の採決に棄權したる公友倶樂部の小林丑三郎氏曰く、進んで黨爭の渦中に投ずるを好まずと。人の嗜好は天性である。餘計な事には候へ共、たつて黨爭がお嫌とあらば、衆議院議員を辭職なさるまでのことである。

之を要するに、已に政治家の入學試驗に及第した花井卓藏氏は、今や其の卒業試驗に落第しやうとする人であり、小林丑三郎氏は、彈劾案の課題を以て已に其の入學試驗に落第した人である。同じく彈劾案に浮名を流した大場茂馬氏に至りては、一切のものに制限の有するが如く、自己廣告にも亦自ら制限の有することを立證して、廣告心理學に活ける材料を提供した仁者である。而して此の三人者の共に法學博士であるを觀れば、虛名と政治との二個の異物であることも亦自ら明瞭である。

（九）

大命何人に降るべき乎と云ふは、恐くは臣子の分內の事で無い。然も、大命願くは斯人に降れかしと云ふは、毫も臣子の分外の事で無い。今や大隈內閣の罪惡破綻は、內治外交を通じて、遺漏無く發現された。今や問題は單に後繼內閣如何の問題に繫がつて居る。否、

大隈内閣を如何に破壞して、後繼内閣を如何に組織するかの問題に繫つて居る。言ひ換へれば、問題は今や單に政局進展の問題ばかりである。

現在日本の元老的、軍閥的時代に於て、内閣破壞の問題は、要するに策略の問題である。而して後繼内閣の問題は、終に人物の問題である。策略の問題は、之を暗中飛躍の策士に一任せよ。人物の問題は、宜しく正々堂々たる議論の問題と爲すべきである。

後繼内閣の問題に關する最大の俗論は、後繼内閣其人無しと云ふの俗論である。日本に果して人物無き乎。日本は、如何にして、如何なる人の努力に依つて、東海の孤島より世界の强國となつたであらう乎。日本は如何にして世界を或意味に於ける日本の世界と爲しつゝあるのであらう乎。日本に人物は在る。唯だ其の人物の輩出に障礙を有するだけである。之を政治的に言へば、如何にして最大有力の人物を政治の局面に推し出すことが出來るであらう乎。これ實に政治的人物の問題に於ける眞の内容である。言ひ換へれば、政治的人物の問題は、人物の問題で無くて、人物輩出に關する方法の問題である。而して其の方法として、最も有效なるものとして、已に經驗されて居るものは、後繼内閣の持廻りである。日本の政治に於ける無責任の總本山たる元老の箔の剝げるのは、即ち元老の實力の露現して、元老的政治が一歩一歩、國民的政治の方向に近くのは、實に内閣持ち廻りの奇怪にして有難き習慣の御蔭である。若し日本に此の有難くして、奇怪なる内閣持ち廻りの習慣が無かつたならば、我等は恐くは大隈内閣の成立を見なかつた筈である。

憲政の本義を論じて吉野博士の說を駁す

法學博士　上杉愼吉

本誌の五十頁に亘る長大論は次號の本欄に掲げらるべし

貴族院論

▽貴族院の權威の當、不當

法學博士　佐々木惣一

一

貴族院に就て研究すべき問題は、大體三つに分けて考ふることが出來る。第一は、立憲政治の精神に照して、一般に貴族院なるものゝ存在が合理的のものであるかどうかと云ふこと、第二は、貴族院の存在を認むとして、扨て其の組織を如何にすべきかと云ふこと、第三は、立憲政治の精神から觀て、如何なる程度に於て、貴族院の權威を認むべきかと云ふことである。右の第一及び第二の問題に就ては種々の議論があるのであつて、玆に簡單にそれを御話することは出來ないが、唯次のことを言ふて置きたい。それは、現今歐洲の重なる國に就て觀ると、其貴族院の存在及び其の組織は、私の考に依れば、其の國々の議會制度發達の沿革に基くものである。それであるから、何等沿革の無い國に於て、初めて議會制度を造る場合に、貴族院を設くるを可とするや否やは、純然たる政治學上の理論に依て、冷靜に判斷すべき問題であらう。併しながら、それは議會制度に關する根本的研究に屬することであるから、今一場の談話で之を論斷し去ることは出來ない。それ故に、それは別箇の研究に讓るとするが、而も猶ほ重要なる一問題の解決を要するものがある。それは、貴族院が存在するものとして、扨て其の貴族院が、如何なる程度まで權威を有つてよいものかと云ふとである。即ち冒頭に示した三問題中の第三のものである。此の問題は、貴族院が如何なる方法で組織せられるゝとしても、(尤も、貴族院が國民の公選に依る議員を以て組織せらるゝやうなことがあらば、それは別として)、均しく生ずるものである。

貴族院に權威を認むべき程度如何は、全く立憲政治の精神に着眼して決せらるべきものである。抑も立憲政治の精神はいづくに在るか。學者の之を說明する言葉は種々であるが、その中心點が、國家が政治に國民を參與せしめ、而して之に參與した國民の多數の意見を重んじて政治を行ふにあること、疑を容れない。其の國民の多數が政治に參與するの手段として、衆議院なるものが設けられて居る。貴族院も亦國民が政治に參與するの手段ではあるが、併し國民の少數が之に參與するの手段である。それ故に、衆議院と共に貴族院を置くのは、多數の意見に少數の意見を

加味するものに外ならぬ。然らば、國民の多數の意見を重んずると云ふ立憲政治の精神から云ふと、當然の結果として、貴族院の意見よりも衆議院の意見の方に重きを置くべきものである。憲法の規定其のものから云ふならば、固より貴衆兩院は各々獨立して同等の權限を以て事を議するものであるから、憲法論としては、貴衆兩院の意見が一致する場合には事が纏まり、貴衆兩院の意見が一致しない場合には事が纏まらぬと云ふに過ぎない。所が、實際國務の施行の上から觀ると、貴衆兩院の意見が一致しない場合には、それが貴族院及び衆議院が夫々憲法上の權限を行使する結果に過ぎぬと云ふ憲法論だけでは、滿足することが出來ぬ。何故かと云ふに、若し、如何なる事に關しても制限なく貴衆兩院の意見の不一致を認むとするならば、國務の施行は殆んど不可能と爲る、少くとも困難と爲るからである。そこで、國務施行の實際から觀て、貴衆兩院の權威の間に、或範圍に於て、差異を置かねばならぬ。そして、それは既に述べた如く、成るべく衆議院の意見を重んずるのが、立憲政治の精神に合ふと云ふの外はない。此の原則は貴族院と衆議院との關係及び貴族院と政府との關係の兩方面に於て行はるべきものである。

二

立憲政治の精神から觀て、衆議院の意見が重んぜらるべきであると云ふ原則は、貴族院の行動に對しては、貴族院は衆議院の意見を重んずべきものだと云ふ準則を與ふることと爲る。併しながら、此の準則は無制限に行はるべきものではない。何故かと云ふに、若し貴族院が常に必ず衆議院の意見を重んぜねばならぬとするならば、之れは寧ろ、貴族院を無くするに若かぬからである。それであるから、苟も貴族院なるものの存在を認むる以上は、貴族院が衆議院の意見を重んずべしと云ふ原則の行はるべき範圍を研究せねばならぬ。固より此の如き範圍を定むる憲法其の他の國法の規定があると云ふのではない。立憲政治の精神に照して之を考ふべきものに外ならぬ。

抑も帝國議會に於て議せらるゝ事は、何れも國民の利害の關係するものであるが、其の中で國民の多數に取て利害關係の大なるものは、一般國民の財產又は身上の負擔を定むる事又は此の如き負擔を基礎として計劃を爲す事である。然れば此の如き事を定めるに當ては、嚴正に國民の多數の意見を重んぜねばならぬ。乃ち此の如き事に就ては貴族院は衆議院の意見を重んずるが至當である。例ば租稅の事、兵役の事、豫算の事の如きはそれである。此等の事に就ては、貴族院は衆議院の意見を重んずるがよい。それは、勿論憲法上の規定からの權限に差異があると云ふのではない、憲法の運用上それを適當とすると云ふのである。若し然うでなく、租稅法案や兵役法案や豫算案が、衆議院を通過するも、貴族院の反對の爲めに成立せないとすると、それは、要するに、國民多數の負擔に關する事が國民の少數に左右せらるることと爲るのである。其の立憲政治の精神に非ざること疑ない。

三

次に問題と爲るのは、貴族院と政府との關係である。現今の立憲國に於ては、政府は其の存立の基礎を議會に置いて居る。此の事は、所謂議會政治の行はるる場合には、政府は議會の多數黨に屬する者から組織せられて居るのだから、勿論であるが、縱令議會政治でなく、所謂超然内閣の行はるゝ場合であつても、均しく政府は議會に其の存立の基礎を置く。議會の反對を受けては、政府は存在し得ないのである。

所が政府に對する議會の態度に就ては、貴衆兩院一致して居る場合と然らざる場合とある。政府に對する貴衆兩院の態度が一致して居る場合中には、或は兩院共に政府に贊同することもあり、或は兩院共に政府に反對することもある。前の場合には政府は明に存立の基礎を議會に有するのであるが、後の場合には政府は存立する餘地がない。從ていづれにしても何等困難なる問題を生じないのである。

所が政府に對する貴衆兩院の態度が一致せない場合には困難が起る。此の場合政府は存立の基礎を貴族院又は衆議院の何れに置くべきか。私の考では、此の場合政府は一に衆議院の態度に依て其の存立と否とを左右せらるべきものだと思ふ。政府が衆議院の贊同を得て而も貴族院の反對を受くる場合には、政府は仍ほ存立の理由を有つて居るが、之に反して政府が貴族院の贊同を得て而も衆議院の反對を受くる場合には、最早や政府は存立の理由を失ふたものと云はねばならぬ。何故なれば、立憲政治の精神は、政治に參與する國民の多數の意見を重んじて政治を行ふに在るから、政府の存立には、政治に參與する國民の多數を代表する衆議院の贊同を要するからである。政治に參與する國民多數の意志を代表するものとしては、國家は衆議院以外には何等の制度をも設けて居ない。然れば、苟も國家の制度として衆議院の存する以上は、政府に對する國民の意見を知るには、衆議院の意見を見るの外はない。勿論衆議院の意見が實際上悉く國民の意見と合致して居ると云ひ得ないかも知れぬが、併しながら、國家制度の上より公式には斯く見るより、他に方法がないのである。衆議院以外には國民の意見を知るべき公式の機關が具はつて居ないのである。故に吾々は、兎にかくにも、衆議院の意見によつて、政府に對する國民の意見を知ることとせなければならぬ。それであるから、政府は衆議院の信任を得て居る間は存立してよいのである。尤も是れは貴族院と衆議院との兩者の關係を云ふのであつて、衆議院の内部に於て、少數黨が多數黨乃至中立黨を動かし、政府反對の意見を強大にせんと計ることは固より妨げない。併し衆議院の少數黨が衆議院自體を動かし得ないからとて、貴族院の力を借りて政府を倒さんとするならば、それは實に憲政を毒するの甚しきものである。

四

以上述べた如く、貴族院と衆議院との關係に於て、國民の多數の負擔に關する問題に就ては、衆議院の意見を重んぜなければならぬとし、又

貴族院と政府との關係に於て、政府の存立は基礎を帝國議會に置き、若し兩院の意見一致せないときは、衆議院に基礎を置くべきものであるとするのは、もとより憲法の規定によつて斯くするを要すると云ふのでなく、憲法の運用上斯くすることが立憲政治の精神に合すると云ふのである。單純に憲法の規定から云へば、貴族院は如何なる法案に就ても、衆議院の意見を顧ずして獨立の決議を爲し得べく、又、政府は、衆議院の多數黨に基礎を有すると否とに頓着なく、存立し得べきものである。換言すれば、貴族院が衆議院の意見を重んぜずとも、又政府が基礎を衆議院に置かなくとも、それが憲法違反と爲るのではない。併しながら、それは尠くとも立憲政治の精神に反して居る。斯の如く立憲政治の精神に反することを非立憲であると云ふ。憲法違反と非立憲とは同一のものではない。然るに世人は、動もすれば、憲法違反と非立憲を混同視する傾向があるから、之に就て一言するの必要がある。憲法違反は、讀んで字の如く、憲法に違反した行動を云ふのである。憲法違反は元より非立憲であるが、非立憲であるといふのは、單に憲法違反の場合のみを指すものでなく、たとへ憲法違反でなくても、憲法の運用上立憲政治の精神に反する行動があるならば、それはすべて非立憲と云ふべきである。故に憲法に違反せないからとて、それで以て直ちに立憲的であるといふことは出來ない。それであるから、政府其の他の國家の機關は、憲法違反の行動あるべからざるは云ふまでもなく、憲法に違反せなくても、立憲政治の精神に適つた行動をして、憲法の運用を完からしめねばならぬ。例へば彼の衆議院の信任を失つた場合に、政府は依然としてその職に安んじてゐる如きは、非立憲である。此の如く憲法違反と非立憲とは嚴重に區別せなくてはならぬ。然るに世人が政府その他の機關の行動に對し、立憲又は非立憲と辯護し又は攻擊するに當り、其の行動が單に憲法違反たるや否やを標準としてゐるやうである。それは大に誤つてゐる。

然れば政府其の他の國家機關の行動は、單純に憲法違反に非ずと云ふので滿足すべきでない。更に立憲政治の精神に適つた行動を爲すの必要がある。貴族院が、或場合に、衆議院の意見を重んずるのは、そうせなくつても憲法違反にはならないとしても、非立憲の非難を免れるために必要である。又政府が其の存立の基礎を衆議院に置くのは、そうせなくつても憲法違反にはならないとしても、非立憲の非難を免れるために必要である。

五

立憲非立憲と云ふことの理解が、國民一般に行き亙らなくては、立憲政治の實を擧ぐることが出來ない。殊に注意すべきは、前に述べた所の貴衆兩院の政府に對する態度の不一致の場合である。政府が衆議院の贊同を得て居る場合には、衆議院の少數黨が、或は中立黨を誘ひ或は多數黨の一部に斬込むことは、如何に激烈なる運動をするも妨げないのであるが唯其の貴族院を敎唆して政府に對する反感を挑發せしめ、又は貴族院の力を以て政府を潰倒せしめやうとするやうなことがあるならば、そ

れこそ政黨自身が立憲政治を破壊するものである。私の考へるところでは、各政黨が自黨の主義に依つて政府を助け或は之を倒さうとするは決して惡くはないが、衆議院の多數黨を基礎とする政府が、貴族院のために倒されてしまふのは決してよい現象ではないと思ふ。貴族院と衆議院との權威の爭ひの問題に就ては、各政黨は一致協力して衆議院の重きを爲さしむることに努めなくてはならぬ。貴衆兩院の意見衝突の結果、貴族院のために政府が倒れねばならぬと云ふ有樣では、立憲政治は實現出來ない。尠くとも立憲政治を欲する政黨であるならば、衆議院の威力を强からしめなくてはならぬ。

然るに最近兩三年間に於ける我が政界の現狀は如何であらうか。實に遺憾なるものがある。衆議院の少數黨が政府を倒さんとする場合、其の手段の如何を問はない。或は貴族院をして政府に對し反感を起さしめ、或は貴族院の反對に賴で政府を倒すを欲するやうなことはないであらうか。若し衆議院に多數黨を占める政府が、貴族院の反對によつて倒れると云ふことが、年々繼續するならば、何の立憲政治があると云へるか。政治は實に少數者の意見に依て左右せらるるのではあるまいか。曾て山本內閣が、時の衆議院多數黨なる政友會に基礎を占めたにも拘らず、貴族院の攻擊に依て倒れた。私は收賄の嫌疑ある內閣が倒れると云ふこと其のことは別に惜しくもなかつたが、併し、政府が衆議院に多數黨の基礎を有するにも拘らず、貴族院の爲めに倒れるのは、憲政の將來に向て惡い先例を遺すものではないかとの憂を懷き、或場所で之を語つたことがある。不幸私の憂は必ずしも理由なきものでなかつたやうである。現內閣の政策に不滿足を抱く者の中、現內閣が貴族院に依てでも倒れさへすればよいと思つて居る者は無いであらうか。山本內閣が時の多數黨であつた政友會に基礎を有せるにも拘らず。貴族院の爲めに倒されることを悅んだものが、時の政友會反對黨にあつたやうである。今又同志會反對黨には、今の多數黨たる同志會及び與黨に基礎を有する現內閣が、貴族院の爲めに倒されることを悅ぶものは無いであらうか。若しありとせば現今何れの政黨たるを問はず、すべて皆立憲政治の精神を忘却せるものと云はねばならぬ。私は立憲政治の實現の爲めに盡力せられつゝある幾多の尊敬すべき政黨領袖諸氏に對して、一の希望を述べたい。將來の憲政上の大問題は貴衆兩院の關係を如何にすべきかに在る。もし貴族院本位の政變が繰返されてゆくならば、立憲政治の妙は果していづくに求むべきであらうか。遠大の理想ある政治家たるものは、敢て眼前の小榮達に迷ふことなく、須らく立憲政治の根本義に想到し、遠き將來に着眼し、衆議院の重きを爲すの形勢を馴致せなくてはならぬ。此の點に於ては、一切の黨派が協力一致して努力すべきものである。我政治家諸氏は果して、貴族院を利用しなくては政權に近き得ないと云ふやうな政治現象を以て、滿足して居らるるであらうか。而して、此のことは、實は獨り政治家諸氏に對するのみではなく、一般國民に對しても切に注意を促したい。

▽貴族院論

司法省參政官 田川大吉郎

◎衆議院の光景は僕の語るを耻づる所である、今日の衆議院は如何に品負目に視ても、堂々たる選良の集團が、國のため其の肝腦を絞つて鋭意苦心して居る所とは思はれない、その相對する態度の輕佻にして、その用語の亂暴なる、研究の不足なる、爭議の粗惡なる、此分では殆んど駄目だとは誰しも齊しく思ふ所、僕は衆議院議員の一人として、生意氣と誹られんも、失望の間に懊惱し切つて居る。

◎貴族院の空氣は、未だ味ふ間も無いが、先般來、請願委員會、特別委員會に三四度臨んで見て而して感じて居る所は頗る宜しい、或時の如きは頗る感服して、これで英人の所謂コンフエレンスである、衆議院の動もすれば戰鬪的喧嘩腰揚げ足取の風なるに比して、貴族院の議場には流石に禮節がある、そこにゆとりがある、そこに氣品がある、そこに研究的、協和的、諧調の空氣、獨逸の氣合があると思ふたこともあつた、固よりそれは兩三度、取り立てゝ言ふに足らざる僕の經驗である、去り乍らただ僅ながらも旣に此感じあり、僕は衆議院に失望した所を或は貴族院で復活せられんかと、希望を以て、興味を以て、更に研究する積りである。

◎去り乍ら、我國の貴族院を以て之を英國や獨逸の貴族院に較ぶれば其の成立の基礎が幾分疑はしくなる、僕は貴族院を廢止すべしとの意見を抱いて居る者では無い、却つて出來得る限り二院制度の妙用を發揮したいと希望して居る者であるが、それにしても、我國の貴族院と衆議院を組成しつゝある分子の差と、英國や獨逸の貴族院衆議院の差とを比較して視れば、自然にしてそこに別樣の感じが起る。

◎英國の貴族院には、貴族院向の内閣大臣が居て、衆議院には又衆議院向の内閣大臣が居る、言ひ換へれば、内閣大臣の中に衆議院に向ふ人と貴族院に向ふ人との別がある、卽ち甲の大臣は貴族院に向ふが衆議院に向はない、その如く乙の大臣は衆議院に向ふが貴族院に向はない、常に規則的に、截然と然だとは謂はないが槪して然だと言へる、最近に强制徵兵法案の提出に際し、首相アスキス氏は衆議院に演說し、陸相キチナー卿は貴族院に演說したとある、これも其の一例である、而して陸相キチナーが衆議院に演說したことは誰も未だ曾て聞かざる噂である。

◎斯樣な次第故、同じ内閣の同一の法案に對する說明でも、貴族院に於ての說明と、衆議院に於ての說明は互に相違した所がある、アスキス氏はアスキス氏の本領を、キチナー卿はキチナー卿の本領を、各々その本領相應に、若くば主張相應に發揮して、その力の入れどころ、精神の注ぎ工合にどこか違つた所がある、而してこれあるが爲に政府の方針意向の存する所は一層明白に領會せらるゝことにも爲り、兩々相通じて始めてその全眞を悟了せらるゝことに爲つて居る。

◎我國のは之に反し、總理大臣の貴族院に於てせし施政方針の演說は、

その更に衆議院に繰返す演説であり、外務大臣の外交關係の演説亦同じく、大藏大臣の衆議院に於てせし豫算の演説は又そのやがて貴族院に繰返す演説である、左れば其の演説は既におしたが如く一字も一句も一言も兩院の間に違つて居ない、又違ふては爲らない筈である。去り乍ら左程違はない、判におしたと同様の演説なら、何も二度繰返す必要は無いでは無いか、貴族院でなり、衆議院でなり、一遍それを試みたらそれで澤山では無いか、それで其の意味は衆議院で理解された如く貴族院にも理解されて居る、貴族院で理解された如く衆議院にも理解されて居る、現に衆議院で之を聽かず、貴族院で之を聽かなかつた全國の民は齊しく之を領會して居る、領會することに支へない仕組に爲つて居る、だから一遍で澤山である、重ねて繰返す必要は無い、英國のやうに人が違ひ、言葉が違ひ、議論の立て方が違へは、よし其の趣旨は大體同然であるにしても、之を繰返して説明し、質問し、論議する必要もあるが、我國の如く同一の役者のみでやる方針なら之を繰返すは全く重複である、無駄である、徒勞である、まるで其の必要の無い事かと僕は疑ひ惑ふて居る。

◎現に今回も、豫算が貴族院に回付せらるゝに及んで始めて活氣ある貴族院の質問は起つた、而してその質問は例の海軍擴張の計畫である、所謂八四艦隊と財政の關係に對する攻撃的質問である、之に次で國債償還基金の世に謂ふ還元論である、曾て一年五千萬圓を限度として償還計畫を立てたものを大隈内閣に至つて之を三千萬圓以上に減じた、此の三千萬圓を五千萬圓に返すか返さぬかの質問である。目賀田男、仲小路氏等が主としてその質問の衝に當つた、而してその質問振は隨分華やかであつた、衆議院の誰役よりも勝つて華やかであつた、然し乍ら要するに一つ事は同じ事、武富藏相に加藤海相、同じ役者が同じ事柄を説明するに衆議院と貴族院とに何の相違する所がある、千言萬語、舞台は幾遍か變つたに相違ない、質問の結果は遂に同じ事、質問の仕振りも亦同様であつた、仕方が無い、これに制度の然らしむる所である、寧ろ斯様な二重の説明質問は之を省いたらどうだ、英國は彼の如き制度だから彼の如き説明質問はある、若し我國の如き制度なら彼等は決して我國今日の如き二重の説明質問は爲さないだらうと僕は思ふ。

◎英國の貴族院は更に最高法院である、故に貴族院には復審法院長(譯し方は拙いやうに僕自ら思ふ)四名が議員として列して居る、而してこの位地は終身である、更にその議長は大法官である、大法官は申す迄も無く内閣員である、僕は此大法官か我國の司法大臣かと思ふて居る、我國では英國のアツトーニーゼネラルを或は司法大臣と評して居るが僕は當つて居ないと思ふ、大法官には前にハールデン卿があつた、今はバツクマスター卿が爲つて居る、ハールデン卿の此位地に就たのは敵も味方も當然と評して居た、バックマスター卿が其後を襲ふたに就ては敵味方とも異數の榮進と評して居る、何にせよ、貴族院は單に立法事業といふよりも司法事業の一部を負擔して居る、故にその議長には其方面の才幹練達の人を必要とする、故に貴族院の議長は概して法律家である、法律家として第一流の地歩を占め得た人である、故に、英國の辯護士社會に

は一の流行語があつて、その辯護士の特に名聲嘖々たる者は、彼は將來必らず貴族院の議長と爲るだらうと噂する、貴族議院長は英國法律家の占め得べき最高の位地だからである、此點に於ても英國の貴族院の組織は我國のとは違つて居る。

◎更に英國の貴族院はその精神界を代表して居る、英國の貴族院は俗界と精神界の貴族とより成ると稱へて居る、それだけ英國の貴族院には精神界の貴族たる耶蘇教の監督大監督が席を占めて居る、その數は確か二十六名と記憶して居る、其の始め英國を二十六大教區に分つたことがある今はそれを三十四教區に増して居る、その二十六教區時代に一區一人の割合で監督を貴族院に送つた、今日もその當時の數により三十四教區の各監督中在職年限の一番長いものから順々に二十六名を出して居るのである、その期間は終身である（英國の貴族院には世襲的に列する者と二代續いて列する者と一代限りのものと毎期に變る者とがある）是れ亦貴族院の衆議院に同じからざる要素の一つで、此の如くにして兩々分れて居る英國の二院はどうても我國今日の二院制度とは其趣を同じうして居ない。

◎つまり英國の二院制度はそれ相當の特殊の本領があり面目がある、我國のはそれに比すれば左樣に截然たる特別の面目本領が無い、我國の貴族院はその裏から見れば衆議院の如く、その衆議院は表から見れば貴族院の如く、貴族院も衆議院と同じやうな人に由り、同じやうな方法に由り、同じやうな立法計畫に與かり、衆議院も貴族院と格別違はざる人に由り、方法に由り、同じやうな立法計畫・致して居る、その間に截然たる相違のある英國の二院にしてすら或は同じやうな事をして居るでは無いかとの物議を免れない今日に、我國の二院制度に對し、どうしてるのだ、どこに違ひが有るのか、貴族院の權限と衆議院の權限とはまるで同じなのか、同一なのか、少しも差等は無いのかとの疑問の起る筈である、實際我國の貴族院は其の組成分子と働きの趣意が餘りに衆議院と相類して居る。

◎そこで誤解なからん爲に附け加へて置く、我國の貴族院の特色にその勅選議員と多額納稅議員に在る、これが列國のそれに較べて稀らしく感ぜらるゝ點である、同時にこれが我國の貴族院と衆議院の類似した、その相互に近き點である、看よ、勅選議員として貴族院に入り得る勳功、閱歷、名望の人は、取も直さず衆議院の議員たり得る性格、位地、力量の人では無いか、その間に何の差別か相違かある、多額納稅議員として現に貴族院議員たる諸氏は、當然に衆議院議員たり得る人達では無いか、現に其中の幾部は曾て衆議院議員たり、若くはその候補者と爲つた人達で無いか、我國の衆議院と貴族院とは此の如く其の成立の要素を互に相同じくして居る、少くとも相同じくして居る部分がある、而してその部分が實際上貴族院の働きの要部を占めて居る、而してその部分が前にも述べた如く列國の貴族院（少くとも英獨二國の）とその構成の要素を異にして居る、その英國の貴族院は御承知の通り六百二十名の議員より成り、皇族が三名、大監督が二名、監督が二十四名、公爵が二十二名、侯

爵が二十三名、伯爵が百二十四名、子爵が四十名、男爵が三百三十四名蘇格蘭の代表貴族が十六名、愛爾蘭の同上が二十八名、高級の判官が四名である、即ち所謂精神界の貴族二十六名を除く外は悉　俗界の貴族、貴族だけの集團と謂へるので、我國の如く平民階級の人士は少しも貴族院に入れられて居ないのである。

◎獨逸の貴族院は英國の貴族院と衆議院の内容を異にするよりも更にその内容を異にして居る、僕の聞く所に大過が無ければ、獨逸の貴族院議員はその國内の二十五分の王領地及び自由都市からの使節である、その使節は無論人民の選擇するのでは無い、各個の王が別々に任命するのである、而して領地の大小に由り派遣し得る使節の數に多寡ありとしても、いざ投票の場合の投票權は各王領地一個がその單位である、從つてその使節は各王領地の訓令の下に進退し一々自由に可否することを得ない、即ち其の位地は今日の各大使公使の位地と略ぼ同格にして寧ろ較々小なるものである、この貴族院に於て例の普魯西は二十票を有して居る、始めは十七票を有して居たのが、段々に小邦を侵略し、その權利を併合して此に達したと云ふ、貴族院では僅に十四票さへあれば以て憲法修正の他の動議を拒否することが出來るといふ話、故に普魯西は苟も其の意思に反する反抗修正の運動は何時でも自由に之を壓滅せしめることが出來る、左れば各州は有つても無きが如し、普魯西即ち獨逸と言ふ所以である、そは兎も有れ、獨逸の貴族院は略ぼ此の如き種類の議員より成つて居る、その英國の貴族院と異なることは一目にして明瞭火の如し、無論日本のとも大いに面目を異にして居る。

◎此の如く考へ來れば、我國の貴族院は、英獨のそれと比較し、若くば世界強國のそれと比較し、衆議院と相類したものの一つである、言ひ換へれば各國の貴族院は、それ〴〵その衆議院と同じからざる面目、性質本領、目的を有つて居るが、我國の貴族院は、その本領、目的、要目、性質が、列國のそれの如く衆議院と懸け離れて居ない一つである、卒然氣輕に、表面をのみ觀る人は必らずしも僕の此說に首肯かぬかも知れぬが、靜かに事の實際を觀察する人は、必らず僕の此說に首肯づくてあらう、序を以てこゝに言ふて置くが、伊藤公の帝國憲法を草するや、主として其の範例を獨逸に求めたと稱されて居る、而して以上の事の如き、伊藤公は獨逸のどこを學んだのか、どこに獨逸の香りを留めて居るのか僕の訝かしく思ふ所である。

◎以上の如く、我國の貴族院が衆議院と、その内容性質を餘り異にして居らぬ事實は、一、我國の民衆をしてその衆議院に失望したる餘憤を貴族院に由つて匡救せられんと、貴族院にたよる心を誘致しつゝある、實際我國の人民ほど望みを貴族院に繫けてる者は世界に比類が少い、但、それは衆議院が餘りに民心を失した場合の事である、然も近年の衆議院は年ごとにその品位、價値を低減する傾向あり、人民の貴族院に嘱望する傾向が日に〴〵其度を增しつゝあるやうに感ずる、二、それと同時に全く同じものは二つは要らぬ、一つで澤山だとの議論もある、實際純理的に言へば、我國の貴族院はその衆議院に對し、特別の面目本領を具備

せざる點に於て一番獨立の要求權が少いのである、他日衆議院が信用を恢復し、國民の感慨平靜に歸したる際に於ては、何故に二院を獨立せしむるか、一院で足るでは無いかとの議論を喚び起すであらう、我國の貴族院は此點に於て列國の貴族院よりもその獨立を疑はれ易い位地に居る。

◎去り乍ら此の如きは遠き未來の事である、今日に於ては衆議院の信用日に〳〵低下し墜落しつゝある折柄、貴族院の信用は比較的に昂騰しつゝある、貴族院にして飽まで平靜に大局に着眼し、公平事を視ば、その功力は益々伸張するのみであらう、是れ國の祥事か、人民の爲に慶すべきか否やを知らず、たゞ貴族院諸氏が心して此形勢に順應し、帝國のため帝國の進運に大過なからしめんやう、その純正の思想勢力を驅つて、倦まず、盡瘁せられんことを希ふのみである、此くすれば、我國の貴族院は或は世界に類なき別種の發展を遂ぐるかも知れぬと思ふ次第である。

▽貴族院の本領

關和知

日本の貴族院が其の組織の要素及び形式に於て趣を異にする以外憲政上の權能に於て、全く衆議院と同一なるとは云ふまでもない事で、只豫算の先議權を衆議院に與へて居ることが兩院に於ける相違の一點である。然しながら從來帝國議會の趨向を察すれば、衆議院に於ては夙に政黨の色彩鮮明にして一種の主張を以て立ち、殊に衆議院を通じて非藩閥もしくは非官僚の思想が絶えず衆議院としての運動を一貫し來つたるに對して、貴族院は動もすれば閥族官僚政治の藩屛となり、擁護者となり、衆議院の民主的運動に對して隱たる一敵國を現じ來りたるは、既往の我憲法史の明かに證據立てた所である。然るに最近に及びて政治上の變化に伴ひ貴族院は又單なる閥族擁護の機關にあらずして、其間自ら政治的獨自の立場と主張とを把持し、時としては衆議院以上の激烈なる調子を發現することあり。現に前年山本內閣當時に於ける貴族院の態度に至つては、全く衆議院に於ける政府黨の多數を度外視して貴族院獨自の權能を以て、遂に衆議院に基礎を有する山本內閣を破壞し去りたる事實は、慥かに貴族院の政治上に於ける道德的權威の偉大なる活動の紀念として之を認むるを得るのである。

爾來我政界に於ける貴族院は既往の如く、古手官吏、長袖者流の寄合ひたる所謂氣樂院たるの批難を脫却して、其位置、威力が共に重きを爲すに至り、政府も衆議院も貴族院の勢力を深き打算の中に置くにあらざれば、政戰の勝敗を決する能はざるの實狀を見るに至つた。貴族院の形勢如何、貴族院多數の意嚮如何が、今日動もすれば衆議院の形勢如何、衆議院の意嚮如何と云ふ事よりも一層大いなる注意を內外に惹くに至つたのは、獨り貴族院の進步のみならず又以て我憲政の發達を證するに足りる。とは云へども之と同時に貴族院が其特殊の位置及び組織の上に立つて專ら勢力を逞しうするに慣れ、政治的勢力の中心、衆議院を離れて却つて貴

族院に歸すると云ふが如き事態を現出せん事は、一面よりすれば憲政上最も憂慮すべき事柄にして、立憲政治に於ける眞意義眞精神は貴族院が常に下院即ち國民直接の代表的輿論を尊重するに存する以上は、貴族院の權力が過まつて衆議院を凌ぐに至らん事は深く注意せざるべからざる所である。只我國現時の政界に於ける如く、殆ど黨爭の極に達し、國民の幸福國運の進歩を度外視して單に政權の爭奪に之れ急なるの狀あるに對しては、道德的意義に於て貴族院が寧ろ議會の威嚴及品位の維持と向上に對し、公正堅實なる國論代表の任務を生じ來つたるは又是れ自然の勢であつて、吾人は此場合特に貴族院の責任の重大なるを感ぜざるを得ない。世間傳ふらく、衆議院に於ける在野黨が政府破壞の運動を試むるに方り其目的とする所は專ら民衆を煽動して依て以て貴族院を刺激するに在り。而して貴族院に於ける一部また殆ど衆議院に於ける反對黨と同一の趣向を以て之と響應するが如き言動、往々吾人の耳目に觸るるものあるは寔に遺憾とせざるを得ない。貴族院が既往の如く單なる政府擁護の機關たる如きは、吾人の斷じて與せざる所であると同時に、一面に於て黨派的感情の跳梁に委せ、眼中國家無き衆議院の破壞運動に黨する如きは又斷じて採らざる所である。貴族院が其有する權能と勢力とを自覺して時に一大活動を試むること、山本內閣當時の如き事情に於ては自ら是認せらるべき政治的道德の對症療法たるべしと雖も、此運動が政局の動く度每に貴族院に期待され、貴族院が同時に衆議院の黨爭と相和するに至らん事は特に留意せざる可からざる所である。況や國家內外多難にして國民上下協力して時局に善處すべきの秋、如何なるとありとも內政に於ける破壞運動の如きは絕對に排斥せねばならぬ。吾人は熱心なる政黨政治の主張者にして、憲政の中心が常に國論即ち衆議院に存する事を理想とするものなりと雖も、現時の如き國民的政治思想の低級なる時代に於ては其黨爭的傾向を更に貴族院に移入するを以て寧ろ政黨政治の弊害を助長するものなるを信ずるのである。左れば此際に於ける貴族院は、特に貴族院の勢力と權能とを自覺して嚴正なる政治上の批判と秩序の支持とを以て任ぜられんことを望むのである。即ち貴族院の本領は主として道德的の意義に於て存せんとを望むのである。蓋し貴族院の組織及び之が要素たる議員は全く黨派を超越したる位置に在り、從つて國務の判斷政策の批評に至つては政黨者流の陷り易き弊害に遠ざかり得べき性質を有つて居るからである。憲法上衆議院に對して何等異なる所なき貴族院が、其職務を行ふ點に於て特に衆議院と異なるものあるは這般政治的德義の公正なるべき此一點である。吾人は近來に於ける我政界の實狀及び衆議院の情勢に鑑みて、我貴族院が特にこの點に注意せられて、國家、憲政に對する本分を盡くされん事を希望して歇まぬ次第である。

▽民間分子を入れよ

法學博士　花井卓藏

○帝國議會は貴族院衆議院の兩院を以て成立すとは、憲法第三十三條に於て定めらるゝ所である。故に如何に民議民論が衆議院に行はれても、貴族院之を拒否すればそれまでゞある。是に於て貴族院に民間分子を入るゝの必要がある。民間に功勞のあつたものは學者と云はず、新聞記者と云はず、實業家と云はず、廣く門戸を開放して之を官吏階級に極限すると云ふが如き例を破るのが宜しい。

○今日の貴族院は仲々活氣があつて面白いが、何と云つても官吏出身者であるから民間の事情に通曉したるものとは云へない。嘗ては人をして貴族院は官僚の城塞に非ずやとまで思はしめた位であつて、大臣ならまだしも次官局長の如き事務官、府縣知事の如き行政官の休職辭職の場合に於て、恩賞的に貴族院に入れると云ふ遣口(やりくち)であつて、まだ〳〵仲々此習慣が熄みさうにもない。どうか此習慣を打破して民間人士を抜く事に仕度いものである。例へば今は故人となつた長谷川泰君の如き、或は岸本辰雄君の如き、幾千の醫師を作り、幾千の法律家を作つて國家民政に貢獻したる功勞は、到底次官局長が事務的に働いたと同様に見るべきでない。又三宅雄次郎君の如く其筆を以て政治上文學上に貢獻したる、而して其感化の民心に印象せる力の如き、其他、物色すれば社會に功勞ある人は相應にあると思ふ。

○現在貴族院議員の人數は略々衆議院と同じであつて、確か三百八十幾名かと思ふ。而して皇族以外の議員三百七十名を類別すれば、華族約二百人、勅選議員約百二十人、多額納稅議員四十五人である。斯の如く華族が絶對多數であるから、勅選と多額納稅者が全部連合しても華族には當たれない勘定である。剩へ勅選の中にも多數の華族が混つて居るのであるから、いよ〳〵以て平民の空氣を貴族院に入るゝの必要がある。所謂平民的勅選議員を増加(ふや)すのである。或は現行の制度を改正して多額納稅議員を廢して、何等かの方法を以て民間の分子を入れる事にしても宜しい。或人は長者議員を全廢し之に代ふるに民選議員を以てし、之に議會三分一の議席を與へ、其選擧方法は復選にする。即ち人民の公選に出でたる衆議院議員、府縣會議員、市會議員等をして貴族院議員を選擧せしむべしと云つて居る。予は此說には不贊成であるが、兎にも角にも一案として見れば見られぬでもない。何れにしても官吏の階級を以て、恰かも貴族院議員の被選擧區とするが如き慣習は甚だ以て面白くない。

○問題は少し違ふが、憲法は帝國議會を以て上下兩院によりて成立するものとせるに拘はらず、貴族院は貴族院令と云ふ勅令に依り、衆議院は衆議院議員選擧法なる法律に依る事になつて居る。同一權能を有する兩院の中、一方は法律、一方に勅令により組織さるゝと云ふ事は甚だ條理の貫かぬ事ではあるまいか。二者、憲法上性質を同うする以上は相共に之を法律にする必要はあるまいか。貴族院令は貴族院の決議を經ざれば改正する事の出來ない事になつて居て、衆議院關せず焉である。之に反し衆議院選擧法は法律であるから、衆議院の議決ありと雖も、貴族院之に反對すれば之を改正する事さへ思ふが儘には出來ないのである。現に貴族院之を修正し若しくは否決したる事さへもあつたのである。是等は

考ふべき問題ではあるまいかと思ふので序でながら一言添へて置く。

○近時の貴族院は活氣次第に加はり來たりて、議場に討論の盛なるは甚だ喜ばしき現象である。民間分子多く出づるに於ては、更に民議民論の重んぜられて上下兩院左提右携得る所大なりと思ふ。（談話筆記）

▽貴族院に於ける各派の現狀

男爵 田健次郎

貴族院に於ける諸政治團の内で最も大きいのは研究會であつて、會員の總數は百名以上もある。此會の中堅を爲すものは七十餘名の子爵互選議員であつて曾我子などを除いた殆ど全部の子爵が之に屬して居る。之に加ふるに伯男各互選議員數名と勅選議員の若干及び多額納税議員約十名程の會員がある。此會は非常に鞏固な會で、最も着實な性質を有つてゐる。此會は自ら進んで政治上の運動を起すことは極めて稀だ。と同時に非常に結合力が強いから、一度議決したら、殆ど一の除外例なしに足並が揃ふと言ふのが此會の特色である事は從來の實際の例に照して明かである。容易に動かざると共に動いたら一絲亂れず、一致の行動を取るのが此會である。世の中では動もすると研究會は軟弱であるとか、行動が機敏でないとか批難をするものがあるが、それは誤解である。個人的行動を許さず全體一致で行る事が此會の主眼であり、而かも政黨でないから豫め政見を立てゝ政府を攻撃するとか彈劾するとか云ふ態度を取る必要がない。問題其者に就いて、是を是とし、非を非とし眼中只國家あるを知つて他を知らないと云ふ本領を發揮して行く點を、世の中が見て甚だ因循だの姑息だのと云ふらしい。がこれは決して因循でも遲緩でもなく、會其者の性質から生れる必然の態度である。

次に世に所謂幸倶樂部がある。元來幸倶樂部と云ふのは寧ろ社交團體の名で、政治團體としては茶話會（約六十六名）と無所屬團（六十名餘り）と稱へるものとの二つから成る。此兩者は政治團體としては二つに分れて居るが、政治上の行動に就ては全く同一である。役員の組織などは別々だが、役員會でも部員の總會でも兩者全く混同して相談もし行動もするから、政治上の行動に於ては一團體である。而して此兩者を合せたもの即ち幸倶樂部は勅選議員が最も多數を占め、次に男爵互選議員の八割以上は此會に屬する。之に加へて多額納税議員が十名餘り。而して其の大多數を占めて居る勅選議員は各自一つの政治的經歷を有するものが多い。從て其中には歷代内閣に列した人が澤山ある。場合に由て隨分政府と議論を闘かはす事に立至ると、同じ會員でありながら双方に立分れて互に鎬を削る事もある。例へば山本内閣の當時、高橋是清(時の藏相)は倶樂部の一人だつたが之に向つて論戰した。又最近大浦も若槻も倶樂部員であつたし、現今では一木内相もさうである。斯う云ふ始末だから幸倶樂部の組織は研究會の如く、會の決議には飽くまで服從せしめ、會員

一致の行動を取らしめるやうな檢束はないのである。ある問題に對して各自、自由意志を發表して多數の謂ふ所を定めるのであつて、會の決議で束縛はしない。けれども事實に於て自ら大體の輿論が生し、それが大多數を制するのは、從來屢々大問題で政府と爭はねばならぬ場合に、僅か十人若しくは十二人位の除外例を以て多數が一つの行動に歸着して來た事實に徵して明かである。要するに幸倶樂部は各自それ〴〵政治的經歷を踏んで來た勅選議員が多いから、從つて異論の最も多いのもこゝである。然し大體の趨勢は大多數が方向を一にするのではある事は保證される。

土曜會は二十八名の會員が有る。二條公の如き人もゐるが、大體先づ勅選議員と男爵互選議員と多額納稅議員から成立つてゐる。此會は元來谷干城とか曾我祐準とかの子爵が居て、貴族院の議政壇上に侃々諤々の論議を以て頗る著はれてゐたものである。今日でも久保田男などは隨分論壇に異彩を放つてゐる。會の性質は幸倶樂部などゝさう大した相違もなく、研究會ほど檢束力が強くない。大體研究會や幸倶樂部などゝ意志の疏通を計つて、行動を共に爲て居るやうに見られる。

次に甲寅倶樂部。これは純伯爵互選議員から成立する。此伯爵團は仲々年少にして新知識のものが多い團體で、從つて論議も多いやうだ。勅選議員でもなく、而も新知識があり論客も多いのだから、一寸評すると、貴族院内に一の彗星たる觀を呈する。

最後に交友倶樂部がある。これは最も設立の新らしい團體で、勅選議員が二十四名程に、多額納稅議員が約十名許り之に屬してゐる。而して此倶樂部の中堅は西園寺内閣又は山本内閣の政府に居つた人が多いから、世の中からは動もすれば政友會派と目されて居るのは自然の勢である。此倶樂部はさう云つた人達から組織されてゐるので、從つて手腕家が多い。就中法律家が多い。であるから團體は成立ちや經歷其ものから云つて他の諸團體とは著るしく其色彩を異にしてゐて、從來餘り他の團體と行動を共にした事はない。貴族院に於ける最も獨立した而も有力なる、人材の揃つた團體は此の交友倶樂部であらう。

▽貴族院の本領を發起せよ

仲小路廉

貴族院に就ての意見を述べよとのことであるが、實は少し暇でも置いて呉れてのことならば多少順序立てゝお話をすることも出來るが、出し拔けの提案には實に閉口する。到底も纏つた議論は出來ぬが、然し折角の御依賴であるから、其意が平生感じて居る點又信じて居る點について一二の意見を述べて見たいと思ふ。

今や歐米諸國に於ても憲法政治をして居る。各國に於ては大抵皆二院制度の實を採つて居る。現に我帝國に於ても二院制度の制を定めて、貴族院は衆議院と其權限に於て殆んど差はないのである。只僅かに豫算先議に關する丈けの差のみで其他は一切同じてある。之について學說上の議論若くは制度上の議論がいろ〳〵あつて、之も我輩は相當に調査もし攻究もしたが、然し之は他人に讓つて我輩は今日實際のことを述べて見たいと思ふ。

我輩はどうか貴族院をして、實際に於て非常に有効なるものたらしめたいと思ふ。國民も亦多大の信賴を貴族院に置き、貴族院も亦國民より多大の信賴を受けに居るといふことを深く自覺して、其信賴に背かない丈けのことを實際にあらはすといふことにしたいと思ふのである。兎に角にも上下兩院の間に阻隔を來たして、其間の圓滑を缺くやうなことが

あつてはならぬのであつて、上下兩院共に憲法上極めて重要の機關となつて居るのであるから、衆議院は衆議院としてこゝに其院の性質に基くべき全能力を發揮してよろしいのであり、又貴族院は貴族院として之亦其職責について全能力を發揮してよろしいのである。兩院が其全能力を發揮することは、國家國民の利益とこそはなれ、決して不利益を持來すものではない。玆に於て國家も進步し國民も利益を享受する事になる。上下兩院の各其職責に属することを賦くまでも實行しどこまでも貫徹する覺悟あつて然るべきと我輩は思ふ。貴族院に賦くまでも國民上下の調和機關であるといふ考がなくてはならないのである。國民上下の連鎖となる、調和の機關となるといふ考を何處までも抱いて居らなくてはならぬのである。

玆に最も要ふべきことであり、且つはどうかすると時々唱へらるゝ議論として、衆議院の議決と貴族院の議決とが一致せざる場合に於て、單に之を衆議院の立場から見て、左も貴族院なるものが衆議院とは兩立しがたいものであつて、それが憲法政治上の阻害を來たして却て政局の疏通に妨げがあるが如くに言ひ做すものゝあることを耳にするのであるが、此等の人々は今少しく考を進めてよく〳〵實際の狀況を思考せられたならば、必ず思ひ當ることがあるであらうと思ふ。何となれば我輩等は素志として斯う考へて居る。先づ第一に豫算を初めとして法律案其他に於て衆議院の議決を經て、貴族院に交附されたる案については先づ以て衆議院の院議に重きを置いて、こゝに愼重に考慮を廻らして議事の進行に心を用ふるべきものであると思ふ。衆議院の議決に對して重きを置き之を尊重すると云ふ事は至當の事である。然しながら之と同時に、單に之を形式の上より見、皮相の見解を以て卒爾之を見るといふのは間違であつて、其議決に重を置くと共に宜しく國民全體の意志は如何といふ點について考慮を廻らさねばならぬと思ふ。何故とならば衆議院を通過して來る豫算案は、必ず衆議院の多數の協贊を得て、貴族院に交附されたものには相違ない。故に衆議院内に於ける多數は先づ一應之を國民多數の意見と見てよろしい。即ち國民を代表する多數者が之を議決したのであるから、先づ一應は之を國民の意志と見るがよろしい。さりながら如斯に見るは實は形式に走つた論であつて、決して內容に徹底したるものではない。衆議院內の多數が院外國民一般の多數と相一致して居る場合は、即ち適正なるバロメートルであると見てよろしい。即ち衆議院に於て至當に議事が進行せられて正當なる方法によつて議決せられ、眞に國民一般が認めて成程之は至當なりと考へたる場合に於ては、院內の意見と院外多數の意見とが一致して居るのである。斯くの如き場合に於ては至當の議決であり、至當の意見が代表されたものと見て、之はよろしく尊重して然るべきものと思ふ。斯る場合に於て又貴族院に於ても、至當に熟慮すれば國家國民の意志となるべきもので、斯る場合に衆議院の意志が至當と認めらるゝので、決して上下兩院の一致を缺ぐべき場合ではなからうと思ふ。然るに斯くの如く總て適當なる狀勢に衆議院が萬事を議決して行くものだといふことが、實際に認められない場合、即ちアブノルマルの場合があるのである。何となれば衆議院に於てはどうしても根據を政黨に置いて居るのである。已に根據を政黨に置く以上は黨派の關係として何れの黨と雖も黨の威力を張り、黨の面目を主張し、黨の利害を考へるといふとは、之は避けられ難いことであつて、どうしても黨としては黨の威力を主としなくてはならないことになる。其結果はどうなる。勢、道理の是非を措き、事の正否は第二に置いて、多數黨は必ず多數を基として無理矢理にも反對黨を壓倒せんとする。十分なる議論もなさしめたければ十分なる討議もつくさず、必要な場合に於ては一號令の下に多數の頭を揃へて一擧に

之を決議し去るのである。理否の如何に拘らず、道理の如何に拘らず、多數の力を以て壓倒し去る。斯る場合に於て少數者は何とする。實に其主張するところは正當であり、又其述べて居るところ全く國利民福に重大なる關係を有つて居るのであるに拘らず、あらゆる多數横暴の爲めに遺憾骨髓に徹するやうな感をしても、殆んど訴ふるに所がない。枉屈せる正當の意見を伸べるに由ないことになるのである。斯る場合に於ては却つて

院外即ち國民多數の意見は、院内に於ける少數者の意見を至當なりとし壓伏されて居るものゝ意見を至當として、何とかして此意見を伸張する道はないか、貫徹する道はないかと焦慮するのである。實に多數は多數なりとはいへ、其多數は實に無理な結束をして居るのである、腐敗極る方法を以て無理矢理に多數を制して、それによつて正義を壓伏し、正理を蹂躙して訴ふるに所なからしめるやうな事をする。かゝる場合に於て何處にそれを訴へる、いかにして正義、正理を主張することが出來るか。此場合に於てはせめて貴族院に訴ふるの外はないのである。正理を主張する少數者が何とかして貴族院に於て救濟さるゝ途はないか。矯正さるゝ道はないか。願くは貴族院の公平無私な立場に立つて、正理を正理とし公道を公道として至當な道によつて救濟されたい、鬱屈して居ることを伸ばして貰ひたい。斯る場合に於ては議院内の少數者は勿論、其道を以て貴族院に要求する。又國民の多數も何とか貴族院に於て至當に之が救濟さるゝ道はないかと、種々なる行動を執るのである。かゝる場合に於て貴族院は何とする。只衆議院を通つて來たのであるから、衆議院の多數の決議であるからといつて、理も非も顧みず、只に之に對して盲目判を捺すやうなことがあつたならば、之が果して二院制度の役目を全うしたものであるか。果して國民の信頼に背かぬものであらうか。それでは全く自己の職分を省みず、憲法上賦與せられて居る重大なる權限、否寧ろ職責を無視するといふことになるのである。斯樣な場合に於ては假令衆議院内に於て大多數を以て通過して居るものであらうとも、其多數なるものが無理なる方法によつて結束されたり、不當な道によつて横暴を極めて居ると見たならば、貴族院は宜しく院内に於ては少數者の味方となり、院外に於ける多數者の味方となり、正理公道の味方となり、其議決の内容其實質に對して十分なる攻究考慮を盡くして、己が職分を全うし以て國民多數の信頼に應ずるの途を講ぜねばならぬのである。斯くの如くになつて初めて貴族院は所謂國民上下の信頼に報い、其調和の機關となり、是に健全なる國家國民の意志を發表することゝなるのである。前年山本内閣の頃に衆議院に於て大多數を以て通過したる事柄も、シーメンス事件を初めとし海軍の腐敗問題に對して、當時の少數者たりし同志會の人々の主張を相當なりとして、貴族院は貴族院の執るべき意見を定めて、遂に時の山本内閣に反することになつたのである。蓋し當時の行動については多數の國民は深く貴族院に信頼したのであり、又現に同志會の人々までも、初て貴族院の力によつて自己の意見を達することが出來たのであるといつて喜んだのである。然るに今日又同志會を初めとして政府與黨の人々等が、地を換えて其手段の如何に拘らず、其方法の如何に拘らず、已れ議院内に於て多數黨であるといふが爲めに往々横暴に類することがあるのである。只多數の力を藉りて無理に反對黨の言論を壓伏して見たり、理非を盡さず討議も盡くさずして、無暗なる方法を以て一切の案を通過せしめて、之を貴族院に送り來るのである。斯る場合に於て貴族院は之に對して、不當なるものを不當なりとし、衆議院の議決は其當を得ぬものだと主張すれば、之を以て或は已れの不便より若くは政府の不爲より、彼此貴族院の行動に怨嗟を放つやうな事があつては相成らぬ譯けではないか。前年山本内閣の當時に於ては手を拍つて喜んだる同志會

其他の人々が、今年は又前年に反して、假りにも貴族院の行動に怨嗟の聲を發するやうな事が有つては、餘りに身勝手ではないか。餘りに我儘勝手ではないか。それは果して國家の意志であらうか。國民多數の意志であらうか。故に我輩は持論として貴族院は超然脫然として黨派の外に立ち、何等拘束せらるゝ處なく、飽くまで是を是とし、非を非として、只國家國民の意志は何れの點にあるかと云ふ事に就て、平生より十分なる調査を悉くして、以て宜しく一方に偏せず一方に黨せず、飽くまでも正理を正理とし、公道を公道として、國家國民の利益を增進せしむる事に全力を致すのが當然の事であつて、之に對しては何の遠慮も要らぬ。何の會釋もいらぬ。縱令千萬人と雖も我往かんと云ふ勇氣が無くてはならぬのである。然るに玆に甚だ面白くなく考へる事は、貴族院を操縱したいとでも思ふ人々は、銘々が自己の便宜よりして、貴族院は穩健溫和であるとか、大人しくして矢釜しく言はないのが、實に貴族院の特性特質であるとか云ふ、之は果して褒めるのであるか、貶すのであるか。穩健々々だと云つて、西と云へば西に向き、東と云へば東に向く、只何事も自分の思ふ通りに爲るのが穩健だと云つて、之を煽てるとは何だ。又其煽てに乘つて、それが貴族院の貴族院たる所であるとか、貴族院は左も溫和なものであるとか云ふのは、實に分らぬ話ではないか。此等は皆只自己の便宜、自己の都合許りよりして人を煽てるのであらうが、煽てるものよりも、寧ろ煽てに乘るものゝ恥づべき事であると思ふ。箇樣な事が追々進んで行つたならば、遂には貴族院が無くて濟む事になる。衆議院の多數者の議決のまに／＼、如何なる不當も、如何なる不都合も、之に對して一矢を酬はず、一言の抗爭をも試みずして、只々其云ふが儘になるといふならば、それこそ貴族院は無くて濟むのである。之が果して二院制度の設置の趣意に協ふや否や。否、斯くの如くして國論の中樞を保ち、歸一を保つことが出來ると思ふか。それこそ一時多數者の爲めには便利であるかは知れないが、國家國民永久の爲めには決して其當を得たるものではない。又かゝる事では斷じて貴族院議員たる職責を全うしたるものとは云へない。何處の處に威重がある。何處の處に權威がある。態度に威重なく、言論に權威がないならば、國家國民を何とする。故に吾輩は之が前年よりの宿志である。苟も貴族院内に議席を有し、其末班を汚して居る以上は、黨派の關係より超然たるは勿論、一切の羈絆より脫然として、何等拘束せらるゝ處なく、正理を正理とし道理を道理として、飽くまでも之を主張し、飽くまでも之を貫徹するのが當然であつて、斯く成りてこそ、初めて一方衆議院に於て、ともすれば極端に奔り、ともすれば偏僻に失せんとするものを責めて之を矯正し、中庸を得せしむる道もつくのである。之は實に我先帝陛下に於て憲法を創始せられたる際、二院制度を置かれた御趣意であり、伊藤公も此點について明瞭なる釋義を加へて居る。獨り我國に於てのみならず、各國に於ても亦然りである。

以上の趣旨よりすれば、貴族院は其本領として決して衆議院と衝突すべきものではない。假令意見一致せざる場合がありとても、それが即ち國民の倚る處である。所謂上下調和の機關ともなり、國論歸一の基ともなるのである。只貴族院としては何處までも謹むべきは我儘氣儘である。之はどこまでも見合せなければならぬと思ふ。徒らに尊大な風を構へて何事も感情によつて左右するのは宜しくない。正理に強く、道理に強いといふ事が肝要であると思ふ。

貴族院の制度其他各方面に亘つて澤山に考へて居る事があるけれども、此等は更に又、日を期して一の長大篇として我輩の意見を述べる事があるかも知れない。

千五百圓の大懸賞あり

文藝雜誌

創刊號 三月一日發行 ● 定價僅に拾錢

創刊號投稿を募集す。

時代は行き詰つた。文藝は行き詰つた。虚僞にして華麗なロマンチシズムの時代も、生硬にして幼稚なナチュラリズムの時代も共に我等の背後に過ぎ去つた。今こそ我等青年者の立つべき秋である、我が國土の上に根ざし、我が國民性の上に築き上げた偉大にして深酷、熱烈にして豐滿なる來るべき大文藝の爲に立つて道を淸めねばならぬ秋である。本會はこの目的の下に生れこの欲求の上に立つた。故に熱烈に人生を愛し眞面目に藝術を要求する人々であるならば、貴賤老若を問はず本會々員たるの資格を有するものである。

會員募集

本誌は會員以外には頒布せず詳細規定往復葉書にて申込次第進呈

初號執筆者

田山花袋　德田秋聲　森田草平　正宗白鳥　長田幹彦　鈴木三重吉　德田秋江　武林夢想庵

生田長江　內田魯庵　坪內雄藏　馬場孤蝶　中澤臨川　生方敏郎　吉江孤雁　水野葉舟

吉井勇　若山牧水　與謝野晶子　北原白秋　佐々木信綱　高濱虛子　河東碧梧桐　內藤鳴雪

文壇知名の大家は盡く本誌の賛助員なり

東京市麴町區三番町八十四
日本文藝協會
電話本局三四五七

(中付一の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

牛

岡本米藏君著

■木島櫻谷畫伯裝幀■

■富岡鐵齋畫伯口繪■

■湯淺半月先生作歌■

■米野鹿之助先生作曲■

東京時事新報評 一種の隨筆なれども其觀察正鵠にして日ふ所凡人の言ひ得ざる理を說く材を有ゆる社會事相に採り巧みに人を教ふるは著者が靈の感應也著者は獨立獨行今日の成功を獲たり其强固なる自信あり偉大なる力を所有して尙自ら其生を牛の歩みに譬へて此書を編む文章簡にして而も意充てり

大阪每日新聞評 「牛」と題せるは思ふに彼の禪の十牛の圖の意を酌みたるものなるべく我國民性の缺陷ともいふべき點を是非論評して新らしき處世法を提唱し併せて我が青年に對し大に海外雄飛の志を起すべきを慫慂す著者は貧兒より身を起し今日は紐育土地建物株式會社の社長たる奮鬪努力の人なり

太陽評 題して「牛」と云ふと雖も啻牛のことを書きたるに非ず古くは西國立志編近くは福翁百話などにも較べつべき教訓書である引例該博內容富贍古今に亘り東西に通じ日本國民として立つべき心得を說示すること極めて詳かで當に教育家の良參考書たるのみならず苟くも子弟を有する家庭には必ず一本を備ふるを要する良書である其牛と名づけしは牛に惹かれて善光寺參りの意を寓したるものであると云ふ

茗溪會審查評 牛といふも「牛に牽かれて善光寺詣り」といふ所より呼べるのみ。國家と人生とを主眼として、民族發展と海外事業とを諸方面より論究す。植民事業に從事する著者の私費出版にも近き本書の、必ず青年壯年を誨へ勵ます所あるべきを信ず。文章簡易明晰、中學三年以上。(修養書)

第五版出來

四六判上製裝幀淸洒函入美本

正價八拾五錢(送料八錢)

發賣所

東京本町

博文館

(中付一の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



女難

大窪逸人

「天下の糸平」と讃めて謂はれた男があつた。

その天下の糸平は、素と信濃の博徒の親分であつた。さうして、糸平の弟分に『馬平』と呼ばれてゐた男がゐた。馬平といふのは渾名であり、本當は「小澤又平」といふのが其の男の姓名であつた。

馬平に愛妾があつた。妾の名を「おいん」といひ、人は『おいん女郎』と呼んでゐた。それは華魁勤めをしてきた女といふ意味ではなく、おいんが博徒達の姐御として、よろづの切りまわしが、總てはき／＼と齒ぎれのよい、傳法肌に出來あがつてゐたのと、猶おいんの水際だつた自然に婀娜な繊姿とが、一つになつて、博徒達からは渇仰せられ、町の人からは窃かに怖れられ、多くの女達からは心々に猜まれもして、そこに「おいん女郎」の渾名が、町の界隈に流れてゐた。

町は伊那町といつて、天龍川に跨つてゐる人口九千ばかり、商業の殷な町であり、木曾街道が西に通じてゐる爲に、東海道を避けて行く博徒達は、伊那町在に一夜の草鞋を解いて東の上州から三河尾張の野の方に西に南に流れて行くのだつた。さうして、糸平親分の繩張に身を寄せた者達は、また馬平の盃をも啣んで、

おいんの鐵火振りに悦び服してゐた。

馬平とおいんとの仲に、二人の男の子が生れてゐた。その次男を「又四郎」といふのだつた。

又四郎は馬平一家のうちに、別して好い男であつた。母のおいんの血をそつくり禀けて、華奢な姿に勁みを帶び、白い纖貌に澁みがゝつた仇つぽいあたりが、母親の輪廓を、すつかり取つてゐた。彼は眞白な眉間のちようど眞中に、極く小さな黒子を有つてゐた。おいんは又四郎を、自分に換へて可愛がつた。

○

又四郎が成年ちかく發育してきた時分に、「博徒狩り」といふのが官憲の手で行はれた。それは博奕が嚴しい御法度になつた爲の當然の處置であつた。

糸平親分は早く其の縄張を疊み、狹い「伊那平」の野を後にして、横濱の開港場の方に裸一貫の活氣を資本にして、富を購ひに來てゐた。購はれた糸平の富は輪をかけるやうに、外から／＼と大きくなつてゐた。

諠ばかりが大きくなつてゐた又四郎も、何とかして活計の路を、身に著けて置きたかつた。さうして、伊那町在の片田舍で、馬平とおいんとの間に介まつて、いつまでも親の御飯をたべてゐるのが、嫌になり始めた。

その時分に、活動寫眞が初めて珍らしがられてゐた。又四郎は活動寫眞の興行を始めて、其の新奇な機關の辨理人になりたがつた。そこに意想外の大きな金高が、夥しい人々の見料として、又四郎自身の懷に吸收されてくるやうに想はれ始めた。さうして、自分が其の辨理人たるべき烈しい憧憬を母親に親しく訴へた。

おいんは又四郎の親訴を、否應なく受納した。二千圓ばかりの金子が、直ぐにおいんの掌の裡から又四郎の空の懷に移つた。

伊那平の近郷の「上諏訪」に、やはり又四郎と同じ年配の、「伊出丁二郎」といふ若者がゐた。又四郎は其の丁二郎と兄弟分の誼を契つてゐた。二人はおいんの許諾を得て、兄弟分が一所に活動寫眞を興行する爲に、名古屋に發つて行くことにした。名古屋で總ての機關

を調達して、其處で先づ一旗翻へさうといふのが、二人の間の目企であつた。父親の馬平は、若者達の新奇な覇氣を、默つて然し面白さうに眺めてゐた。又四郎は二十二歳、丁二郎は二十四歳であつた。

又四郎が伊那町在を出發する前夜に、馬平の家の者達は近所の人達を、呼び集めて、ちようど泊りに來てゐる丁二郎を合はせて、又四郎と丁二郎との首途を歡ぶ爲の酒宴を開いた。

その酒宴が始まりかけた時に、おいんは又四郎に斯ういふ意味のことを言つた。

「御前が巧く當てゝ何れほど金を儲けやうとも、それとも脱れて素寒貧に成つてしまうとも、それは御前と丁さんとが勝手放題に思ふ存分やつてみるが好い。唯だ一つ、御前には何うも女難が纏はりついてくるやうに思はれる。こればかりが如何にも心配でならない。それも旅の上の女に誑されたり、誑したりするだけの事ならば、御前達の年頃には取りたてゝ言ふほどのことではない。然し女の一念は若い男には解らない。本當に怖ろしい女の一念に祟られた末は、男の命にも魂にも直ぐ覿面に憑つてくる。さうして決して離れはしない。お前には斯うした女難が纏はりついて來はせぬか、これが如何にも案じられてならない。

それ故に、若しも心から是と戀ひこんだ女ができたならば、必ず母の手許まで何事も隱さずに手紙で聞かしてくれるやうに。母は何處にでも御前の居る所に直ぐに往く。さうして其の女を御前の思ふやうに添はせもしやうし、また何うにでもしてみせる。決して惡く取計ふことはしない。また縦し御前と女との間に如何なる邪魔が有り、如何に難儀な事が起らうとも、この母の腕一つで、必ず御前の思ふとほりに仕遂げさしてみせる。お前は母に無斷で、眞實の夫婦約束を結んではならない。必ず結んではならない。

丁さんも、若し又四郎が母の今言ふことに背いて、むやみに女と深みに陥ちて行きさうな時には、又四郎に意見するより前に、又四郎の母の私の方に直ぐに知らして貰ひたい。これは呉々も二人の心に留めて置い

て貰ひたい」

斯うした意味のことをおいんは長々と言ひ渡した。猶、さうした女が實際に既に何處かに見えて居るやうな口調になり、現に其の女と又四郎とを前に列べて話をしてゐる氣にでもなつたやうに、更に諄々と男女の道を說いたりした。

又四郎は盃をあげながら、たゞ笑つて聞いてゐた。彼は母親から生來初めての長談義を聞かされ、また其の心からしみ〴〵した聲を、新しく聞いたと思ふ他に何の感銘も其處に起きてこなかつた。丁二郎は、「へ、へ、」と只だ言ひながら、是も盃を干しながら傍聽してゐた。

そのうちに、酒宴が盛に賑かになつてきた。

馬平は毎ものやうに小さな盃を、顏を顰めては一氣に甜りつゞけてゐた。

翌朝になり、又四郎と丁二郎とは、送人を皆斷はつて、馬平の家を出發した。二人が門を出て往きかけた時に、門の前の小流の溝のふちに立つてゐたおいんは、

「又」と、又四郎を後から呼びとめて、振回つた又四郎の好美な若々しい顏を瞶めながら、

「昨夜言つたことを忘れるなよ」と、おいんは強く言つた。又四郎は只、

「うん」と答へたまゝ復た前方を振向いて歩いて往つた。丁二郎も更においんに頭を下げて、又四郎と並んで歩いて往つた。

○

名古屋で活動寫眞の器具や其他の屬品を調達することは、又四郎と丁二郎とにとつて豫想どほりに容易くは運ばなかつた。

それでも半月ほどの後には、兎に角に小屋を借り、技師といふのも傭ひなどして、先づ一切の準備を調へることが能きた。其の辯士には又四郎自身が躬ら當ることにした。辯士として看客の前に立つことは又四郎にとつて、宿望の一端が、的確に滿たされたわけであり、彼は其の爲に一入悅びを強くした。

未だ彼の悦びを大きくしたものがゐた。それは綾葉といふ新地の藝妓が、彼の主宰する活動寫眞の初日を觀にきて、且つ綾葉の眸と耳とが、觀覧席から遥かに然し親しく、辯士として初めて登場する又四郎の晴れやかな姿と聲とを、二人の間ばかりで勵ましてくれることであつた。

又四郎は悦び且つ喜んでゐた。名古屋に着いてから興行の準備が出來あがるまでの半月ほどの彼の努力が、漸く善く報ゐられるやうになつたゐた。彼は然し努力しつゞけながら、都の溫柔な遊蕩の巷に牽かれて行くことも忘れてゐなかつた。

彼は丁二郎と連れだつて、二つの若い心は全く一つに照合しながら、同じ家の別々の部屋に、各自が一人づゝの異性を擁へて、各々濕やかな夜に親しみつゞけた。さうして、又四郎の對象に綾葉が現はれてきた。綾葉自身の對象にも、又四郎が現はれてきたのであつた。それは同時に偶然の照應であつた。また相互の對象は自然に直ぐ一つに化合し、相對は絶對になつてしまつた。二人の一つの心には、その他に何も無いやうになつてゐた。そのうちに活動寫眞の興行計畫は開場するまでに、漸く捗つてきた。

開場する暫く前になつて興業に關する總ての交渉は丁二郎が殆ど主になつて、方々に開場の爲の渡りをつけてゐた。綾葉と一つになつてゐる又四郎は、總ての業務を丁二郎に自然に委任してゐた。然し愈々開場の直ぐ前に近づいた時に、又四郎は丁二郎の處理してゐる一切を、故らに檢査し始めた。さうして、小屋のしきが三百圓ばかり支拂はれてゐるのに就いて、又四郎は其を高いと主張し、丁二郎はまた其を廉いと反駁したりした。

其のしきの値の程度に就いては、從來の兄弟分の仲を懸け離すほどに、二人は强く爭はなかつたけれども、又四郎は自ら辯士になつて、登場するまでに、興行の表面に自分を現してゐるのに比べて、其の後丁二郎は興行そのものに就いて、聊かも接觸しないやうに、又四郎から扱はれるやうになつてきた。

又四郎がいろ／＼の悦びを抱いてゐるのに反して、丁二郎は當然に樣々の不平を藏し始めた。自分の仕盡した努力は、最後になつて全く報ゐられないやうに丁二郎に思はれた。それに又四郎には綾葉が纒絡してゐたけれども、誰も丁二郎には然うした心を傾ける人がゐなかつた。

得意の又四郎と、失意の丁二郎とが、同じ所に顏を合はしてゐた。さうして、丁二郎は、おいんに細々と手紙を書いた。「又四郎樣とあやはなる當地の小さな若い藝者とが」と、丁二郎は其の手紙に直ぐ書き始めた。

其の手紙が、おいんの手に開かれた時には、恰も此の物語の中心が悉く爛熟しきつてゐた。

○

綾葉は十九の厄年になつてゐた。悠柔な曲線ばかりで纖さく出來あがつてゐるやうに、內も外もすべてがおつとりとした嫋々しさに包まれてゐた。よく丸髷に結つたときには、さながらに花嫁の初々しい匂に掩はれてゐた。さうして、ことば數のすくない聲が、何時も舌のうへに溶けて、唇にかくれてしまうために、又四郎は綾葉から何か言ひかけられた折には、よく聞きなをしてみるのが、二人のなかの癖のやうになつてゐた。盃を三度とは重ねないうちに、綾葉はしづかに醉を催すと、直ぐ淨瑠璃を聽きたがつた。又それが何んなに下手な節まわしであつても、綾葉は豐かな二重瞼をふせて、心ゆくばかりに感情を凝らして聽きつゞけてゐた。それも自分では口吟さむこともしなかつた。たゞ聽いて、たゞ滿足してゐるやうに思はれた。又しまだに結つたときには、ちようど御暇を頂いて宿にさがつてきた大奧のお小間づかひのやうな、貞淑な彩りに包まれてゐるやうに眺められた。

綾葉は『橋さん』と呼ばれてゐた四十歳あまりの旦那に屬いてゐた。けれども、橋さんは綾葉の含むでゐる甘柔な純味を、試しにも知らないらしかつた。その甘さと柔かさとは、又四郎ばかりに自然に汲みわけられた、綾葉の眞味であるのに相違ないと、又四郎は獨

りで信じてゐた。綾葉も又四郎と世を換へても連れ添ひたかつた。さうしてゐるうちに、ある仲居が其の二人のことを、橋さんの耳に殘らず入れてしまつた。しかし橋さんは憤りもせずに、極く單簡に綾葉を離して他の方に向いて行つた。

橋さんと綾葉と別れたことが、又四郎に分つた時から二三日經つた後に、彼の活動寫眞を興行すべき小屋の持主から、しきの金子を丁二郎のところに返してきた。さうして、丁二郎は活動寫眞の興業を、そこできつぱりと斷はられた。

丁二郎は小屋の持主の全く不意の沒義道な所作を、其のまゝ又四郎に告げた。小屋の持主は只「私の小屋は私の自由には成らないわけが有り、其のわけが有る爲に、貴方がたに小屋を借して置くことは能きなくなつた」といふ極く辻褄の合はないことを、約束を撤する爲の理由にしてきたのであつた。

又四郎は其を聞きとると一途に憤慨した。彼は直ぐに小屋の持主の家に行つた。さうして、他國者を侮辱しやうとする對手の不埒を、痛烈に責罵した。實際にその日の翌々日には、初日を開場するまでに、萬事の手數が殆ど滯りなく運ばれてゐたのであつた。

小屋の持主は又四郎に、總ての紛糾を漸く告白した。斯ういふのだつた。

「あの小屋は自分が持主であるのに違ひない。然し殘念ながら抵當に入つてゐる。然も抵當の期限が已に切れてゐる。その對手は誰でもない、橋さんである。貴方は橋さんに必ず何か恨まれてゐるのだらう。さうでなければ抵當の期限が早くに切れてゐながら、一昨日まで最う殆ど二ヶ月餘りも、其のまゝ默つてゐてくれた橋さんが、突然今になつて、私が貴方との約束を直ぐに解いてしまふのでなければ、即座に小屋を差押へるなどゝ、さう滅相もない亂暴なことを、今更言つてよこすわけがない。また橋さんは、平生から其程にわけの分らない人でもない。むしろ善く捌けた大きな酒造家の主人である」といふ意味を、又四郎は長々と聞かされた。

又四郎は其の話を默然と聞きつゞけてゐた。さうして、對手が委細を説きをはると、

「さうですか、いや復た何れ、左様なら」

とだけ言つて、自分の宿に歸つてきた。

宿には丁二郎が待つてゐた。又四郎は聞いてきたことを丁二郎に話してきかせた。さうして、二人は的確に橋さんの存在を咒つた。そこに綾菜が二人の宿に、初めて訪ねてきた。又四郎からは繁々と新地に通つて行きながら、綾菜の方から訪ねてきたのは、その時が初めてゞあつた。

綾菜は又四郎に直ぐに次のやうなことを言つた。「私は橋さんの惡どい謀を、今しがた姐さんから聞いてきた。それは橋さんからの言傳けのやうに聞かされてきた。貴方は之を何と御思ひかは知らないけれども、私の心にしてみれば　自身の五體が、眞から切ない思に燒きつくされるやうに苦しくてならぬ。私は今更愚痴はこぼすまい。然し貴方は興行のためにも、私のためにも、隨分と盡しなされたことは、よく私に判つてもゐたし、默つてはゐながら蔭で獨りで心配もしてゐた。また其の爲に、貴方の懐が前とは餘ほど寂しうなりかけてゐるのも、私にはずつきりと察しがついてゐた。それは實は悲しかつた。悲しくをもひながら私は默つてゐた。口にだしては言はれなかつた。何故に默つてゐたらう――それは貴方に言ふだけ必ず愚かなことであつた。私にしても素より愚かなことであつた。言ひたい、言はなければならぬ聞いて貰はなければならぬとは、常々思ひこんでゐながらに、いつも心にしまつて置いた。素と〳〵二人の仲に、さうした勘定づくの事は、言ふて甲斐のある事ではない。貴方の今度の興行は、またそれ故に一層大事な、それは決して慾得づくのことではなく、二人の仲のためにも、何としても、貴方に儲けさしてあげたかつたし、きつと儲けて貰はなければならぬ、これこそ浮ぶか沈むかの二人の瀬戸際とばかり、私は思ひ案じてゐた。

それに橋さんは、何たる酷たらしい仕打をもつた人であらう。初日は愈々明日、明後日といふ今日になつ

て、眞から思ひがけもないえらい企みで、二人を操り自身は高見で見物しやうといふのではないか。あまり非道い。貴方の胸には私に其のまゝ好く推量がつく。よく推量がつくだけに、私は苦しい、悲しくもあり猶口惜しい。

　橋さんがあの小屋の權力を握つてゐることは、私は前から知つてはゐた。知つてはゐたが女の淺はかな、貴方に知らせてあげるのを、忘れるとはなしに忘れ果てゝゐた。この名古屋で幅利きの橋さんに睨まれては俄かに新しい興行を始めることは先づ難しい。もう懐の寂しい貴方は、是から何處に土地を變へて往つて、何を目的に仕換へる胸算か、それとも別の仕事の目企が有るのか。

　若しや貴方に別の仕事が今俄かに無いのならば、私は貴方に必ず聞いて貰はねばならぬことが、たゞ一つだけ此の胸に殘つてゐる。

　これは貴方の氣に入らないことは、始めから良く判つてはゐる。貴方はきつと私の言ふことを、直ぐ怒りなさるのに違ひない。けれども貴方より私の方が、此の事に就いては、好くわきまへてゐる。といふのは橋さんの心である。

　橋さんの眞の人柄は、それほどに惡い氣質の人ではない。あの人は謂はゞ斑の多い氣象の、端から端に直ぐ飛んで行くやうな肌あひの人である。さつぱりしてゐながら氣の難しい人である。それでゐて平生は割合に音なしいといふのが、橋さんの氣である。斯うした橋さんであれば、あの人の氣を換へさすのは、さまでに難儀なことではない。今度の酷たらしい仕打も、あの人が其の斑氣を起して、ふいと思ひたつてしたことに、必ず違ひない。さうして、今は何方かといへば、後悔してゐるはうであらうと、私には確かに思はれる。高見で見物をしてゐてやらうなどゝ、橋さんが言つてゐるのも、後悔しながら言つてみたことに相違はないと、私は思つてゐる。さて、そこで私は貴方に頼みがある。私は何も橋さんに未練などは、前から有らう筈がないけれども、此方から棄てた彼の人に、また

此方から私が工夫してみたい。それは今度の仕打を、あの人の方から取消さし、それに加へて、貴方と橋さんとをすつきりと仲よくさせてみたいのが、私の願であり、また此の願は、決して成就しないことはない。さうして私は誰憚らず、きれいに貴方のものにして貰ひ、貴方は此の名古屋を永い土地にして、何困らずに永いこと暮しつゞけて貰ひたい。私は此事を言ひたいばかりに、獨りで密かに貴方を訪ねてきた」

おつとりとして極く柔い、まつ白な眞綿のやうな感じばかりに、包まれてゐる女だと思はれてゐた綾葉の胸にも、それ相應の才覺が藏されてゐて、ことば數の少い唇にも、いざといふ事に臨めば、述懐めいた繰言に、筋のたつた情調が含まれてゐた。それ等は又四郎にとつて、全く思ひがけもなく綾葉の底にかくれてゐた閃めきであつた。

又四郎は又默然と、綾葉のことばを聽いてゐた。小屋の持主から、橋さんの辛辣な詭計を、それと打明かされて歸つてきたときには、彼の全部が憤怒に顫へてゐた。しかし、綾葉の優しい瞳にも觀破られてゐる如く、又四郎の懐金は、實は財布の底が最う我ながら見透かされるほどに耗つてゐた。興行を差止められてみれば、そこに挽回の手段は、何としても別に有りやうはなかつた。興行の初日に對する又四郎の悦びの幻影は、一擧に崩されてしまつた。その壞れた幻影の端々を取り繋ぎ、確かな實象に結晶させる爲には、綾葉の進言が餘ほど又四郎の心を牽いた。

又四郎は暫く默りつゞけてゐた。さうして未だ何とも思慮の纏まらぬうちに、是も綾葉の言を直ぐ傍で傾聽してゐた丁二郎の方を向いて、『丁さん、どうしたものだらう』と諮つてみた。

丁二郎は自分がおいんに送つた手紙のことを、先から考へてゐた。さうして、「おいん伯母が此の土地に大急ぎで來るならば、直ぐに綾葉に會ふのであらう。外面は本當に柔かな、内心には中々に毅かりした、分別も伎倆も有りさうな此の綾葉は、即坐においん伯母の氣に入つて、また然うなれば、自分からでも棄てゝ

は置かぬ伯母の彼の氣象は、又四郎と綾葉との戀仲をそれこそ何の苦もなく一手に纏めてしまうのに違ひない。活動寫眞の興行などは、おいん伯母は初めから餘り深くは考へてもゐないらしかつた。

それでも、是もきつと伯母の烈しい敵愾心が、橋さんを前に廻して、損得離れたきび〳〵しさに、又四郎の名を幟に麗々しく染めさせてしまうに違ひない。

俺は何うだ？　兄弟分とは言ひ條、殆ど又四郎の從僕が、草履とりか、何はあれ此の場面には、前にも後にも、椽の下の力持ちばかりに氣を腐らして、我ながら愛想の盡きた、ちようど油蟲のやうに、又四郎の何處かに粘りついてゐるのだ。男の器量を是まで下げきつて、どこに俺の立瀬があらう。

それにしても、今此の綾葉が、柄にもなく一肌拔いで、舊の旦那の橋さんと、情人の又四郎との間をば纏めにかゝらうとする——一つやらしてみるが好い。さうして段々深みに陷ちて行くが好い。又四郎のまた意久地のないこと、女の伎倆に自分をまかせて、自分は手も足も出ない破目に跪きながら、男一貫が他國まできて喘いでゐる。俺は默つて見てゐてやらう。綾葉の白腕の動き具合を見てやらう。さうして二人が愈々拔き差しのならぬどん底に陷ちかけたときに、俺が始めて顏を出し、二人と橋さんとの仲に兎にも角にも立つてみやう。そこに、おいん伯母が傍に來て、俺の立場を見るならば、俺と一所に伯母が入つてくる。俺が伯母に先づ萬端の手曳してやる。伯母の唯一の相談役に俺が選ばれる。俺の智慧袋が確かに伯母から重寶がられて、また然うなれば、伯母の力は俺を庇護つてくれることも判つてゐる。是れを機會に、俺の行末までも、あの伯母はきつと見てくれる。手紙を送つて置いたのも、實に我ながら思ひがけなく好いとをして置いた」

など丶丁二郎は聯想しつゞけてゐる所に、又四郎から恰も相談をかけられた。彼は、

『綾葉さんの言ふとほりに、然う出來るならば、それに越したことはない』と、直ぐすつきりと贊成して、そこに又四郎の決心も必然に同じことでなければ成ら

ぬやうに烈しく促した。

綾葉に然うした分別の起つてゐるのが、又四郎には頼もしくもあり、いとしくもあり、心は我と燃えながら引寄せられてるところに、丁二郎も言の下から明白な裁決を與へてくれたのに、又四郎は少からず感激して、是ぬ綾葉の思ふとほりを其まゝ容易に肯がつた。たゞ然し、「此方も男の胸があるからには、苟且にも面のたゝなくなるやうな仕誼ばかりは、何としても久離一切必ずともに止めて貰ひたい」と、又四郎は綾葉に堅く言ひ添えた。

綾葉ははつきりと眸を瞪りながら、「それこそ私とても兼々獨りで氣配つてゐた。貴方の氣もちを惡くさせるほどならば、總てがむだになるはうが、何れだけ好いかは言ふばかりなく當然のことではあるまいか。貴方に男の胸があるやうに、この私にも女の意地といふものがある。橋さんが若しも横車を此の上に猶未だ押さうといふならば、私は立派に橋さんを、其の場を去らせず懲しめて、女の意地をば立て徹す。私の言ふことが、虚か、實か、貴方がた御二人で、じつと見てゐて下されば、直ぐ明らかに判別がつく」との意味を、淀みなく述べきつてしまうと、暫く默つて、靜かに、うつとりと坐つてゐた。さうして、軈て歸つていつた。

○

その後に綾葉が、何うした手段を廻らしたのかは、又四郎に然し少しも解らなかつた。丁二郎にも素より解る筈がなかつた。三日ばかりの間は、又四郎が新地の何處の家から綾葉を聘んでみても、綾葉の在りかさへ彼には全く判らなかつた。その爲の電話の鈴の音が又四郎の耳に入るのさへ、彼は耐えきれぬまでに焦燥し始めた。また、綾葉の抱屋からは、たゞ居りませんとの單一の答ばかりが返つてくるのだつた。

三日めの夕方に、小屋の持主から、又四郎の宿に電話が繫かつてきた。又四郎は既に新地に行つて留守であつた。丁二郎ばかりが同じ部屋に殘つてゐた。丁二郎は其の電話を聞いてみて、忽ち愕いた。

小屋の持主は、丁二郎に何かは知らず先づ強かに詫を言つた。さうして、又四郎の留守なのを、此のうへもなく悔みながら「小屋の抵當は許された。總てが私の所有になつた。一切の約束を、前に復して、折角の興行を一日も早く開場して貰ひたい」といふ意味を、長々と懇請した末に「又四郎さんの都合の好い時を、電話で知らして貰ひたい、私の方から直ぐ訪ねて行つて、又四郎さんに會つたうへで、また委細の詫を述べたい」と、繰りかへして話しつゞけた。さうして、漸く電話を斷つた。それは丁二郎にとつて、眞に意外に暗轉した悉く不可解な場面であつた。

丁二郎は部屋に歸つて、自然に腕を拱いた。綾菜の白い顔が「わかりませぬかえ?」と丁二郎自身の顔を覗きこみに來てゐるやうに思はれた。しかし凡てが不思議であつた。

丁二郎は獨りで肩身が狹いやうに思はれた。床柱に背をよせてたり、肱枕に寢ころんでみたりしてゐるところに、また思ひがけなく綾菜が其處に現はれた。丁二郎は最初から、又四郎と綾菜とが、其夜も新地の何處かで嘸かし樂しく心に心を取り交はしてゐることゝばかり思つてゐたのだつた。その綾菜が、たゞ獨りで丁二郎自身の前に現はれてきたのが、彼には重ね〴〵不思議であつた。

然も綾菜のいふのを聞けば、又四郎と綾菜とは三日も續けて、顔もあはしてゐないのだつた。それに猶、又四郎が其の三日間を、毎夜毎晝宿をあけて、丁二郎ばかりが獨りで居殘つてゐたことを、綾菜は微塵も知らないのだつた。

「又四郎も綾菜も何をしてゐたのだらう」丁二郎は復更めて考へなをした。さうして、當の綾菜に其を訊ねてみた。

綾菜は然し默つてゐた。丁二郎には何とも全く應へずに、睫毛を俯せてぢつと默つてゐた。やがて溢れてくる涙を制へきれずに、潜々として綾菜は手帛を眼にあてた。聲を忍んで哽咽りながら、しばらく泣いてゐた。

丁二郎は呆れはてゝゐた。茶を淹れるのさへ忘れて連りに顫へてゐる銀杏がへしの濃い鬢と後毛とを瞰ながら、彼も默つてゐた。その部屋が其のまゝ暫く森閑としてゐた。

竟に涙を收めた綾葉は、丁二郎の膝のあたりを瞶めながら、「今度の總ての紛糾は、私から改めて貴方がたに聞いて貰ふときがあらう。たゞ貴方から又四郎さんに傳へて貰ひたいことは、私は今夜からもう藝者ではない。私は素人に成つてゐる。誰が私を落籍してくれたのか、また何故に私の身が斯う急に變つたのか、それらは又四郎さんの前で、私からしみ〴〵と話したい。たゞ私は自由の身になつた。今夜は舊の抱家で寢るけれども、明日にも又四郎さんが歸つて見えたならば、一時も早く私を呼び寄せて欲しい。さうして事の前後の成行を話しもしたく聞いても欲しい。人はさま〴〵の蔭口をきくものゆゑ、また何うしたことが又四郎さんの耳に入つてゐないとも計られない。しかし私には私だけの考があつて、とにかく有りたけの心のたけを盡しつくしてみたと自分では思つてゐる。私の話を私から聞くまでは、又四郎さんは決して心を動かさずに、必ず私を呼び寄せて貰ひたい」との意味を、はつきりと丁二郎に告げた。さうして手帛を細かく疊むで袂に入れると、綾葉は暇をつげて、歸つて行つた。

○

その翌日の正午ちかくに、又四郎は宿に歸つてきた。

いろ〳〵に獨りで思ひ亂れて、何の思案も未だつかずにゐた丁二郎は、小屋の持主からの電話の意味、綾葉が訪ねてきたことゝ其の話の意味、それらを落ちなく又四郎に傳へた。

又四郎は涼しい瞳を沈めて聽いてゐた。さうして、丁二郎の話の最後に、たゞ、

『ふん』とだけ言つたばかりだつた。

『うまく運んだやうだぜ』と、丁二郎が言ふと、又四郎は首を矢庭に激しく振つて、『風呂に入つてから話さう』と、さも卒氣なく言ひきつたまゝ、宿の着物に着

換えて湯殿に行つた。

湯上りの又四郎は、寧ろ蒼白い面をしてゐた。彼はピーコックといふ卷煙草をのみながら、次の意味のことを丁二郎に說いて聞かせた。

「俺は愚かな男であつた。俺は綾菜に欺されたのだ。三日の間、俺は新地に流連しながら、綾菜の在りかを尋ねあぐんだが、彼奴は最後まで顏を出さなかつた。それも未だ好いとして置かう。許すまじきは彼奴の所業だ。彼奴が此の前訪ねて來をつてからの、一切の不埒千萬な遣りかたを、今朝になつて俺は始めて聞いたのだ。彼奴は橋に連れられて、三日三晩といふものを岐阜あたりで巫山戲ちらして來やがつたのだ。さうして、今朝の一番汽車で、橋と一所にのめ／＼と歸つて來をつた。それを飽くまで知らなかつた、この俺の愚さ加減を嗤つてくれ。

未だ有るのだ。そのうへ綾菜は橋の手で落籍されたのだ。どの面さげて此の宿に來をつたか、そんな女を俺が何うしやうといふのだ。俺の懷加減か、そろ／＼好くないのを知りつくして、橋とそんな眞似までしやがつた上句の果に、未だ俺を絞りあげやうとする彼奴の度胸が、聞いて呆れるぢやあるまいか。

小屋の持主が何うしたといふのだ。女も憎いが橋の奴も腹がよつぽど黑くできてゐる。俺は恥さらしに旅に出てきたのぢやない。二千圓の金が何だ。御前は一人で國に歸つてくれ、俺は殘つて此の恨を美事に晴らしてみせる胸算だ。

御前が國に歸つたら、すつかり俺の母親に、仔細を聞かしてやつてくれ。兄弟分の仲ではあるが、是ばかりは俺の言ふとほりに仕遂げさしてくれ。何も言ふな賴む」

又四郎は辭色を決して、斯うした意味を、丁二郎に告げてしまうと、瞋恚と悲傷とに强迫されたやうに、雙方の頰が痙攣を起しながら、丁二郎の顏を眺めて、神經的に笑つた。

丁二郎は昨日から、愕きに愕きをかさね、たゞ只管に驚異の念に撲たれるばかりであつた。彼には何も彼

も確かに判斷するだけの、材料も頭もなかつた。又四郞の覺悟を、まともに聞かされて、彼の慴きは畏れに移つた。それが又四郞の幼い時からの、一途に烈しい氣象から推してみても、現在の恚と怨と、復讐と、何れは慘として呪ふべき終幕を、又四郞が演じだすのは丁二郞には直ぐ明らかに想見されるのだつた。丁二郞は「もう彼の手紙が、おいん伯母の手許に今日あたりは着いてゐる頃だ。伯母は一刻も早く、氣を忙がして仕度もそこ／＼に、飛んで來るのに違ひない。伯母が來てみてくれるまで、何としても又四郞の無分別を制へて置かねばならない。斯うなれば俺の責任が、否でも應でも強くなり、又四郞の兇行を、俺が未然に遮つて、彼の安全、俺の安全を計らねばならぬ。

それにしても此の又四郞が、止めろと他に言はれておいそれと思ひとゞまるやうな、生優しい男では決してない。何うした術策で、この又四道の殺氣を制へたものか、これこそ俺が心を潛めて、又四郞の氣に逆らはぬやうに、さうしてしつかり手綱を控へて置かねばならない」と、咄嗟に思慮を纒めた末に、彼は大きな嘆息を憤懣に堪えぬやうに吐いてみせた。

さうして、又四郞に斯ういふ意味の考を述べた。

「成程お前の言ふのを聞けば、俺はお前を止めやうにも、止めたくない。お前の恥は俺の恥、遣るなら遣るで立派に仕留めて見せてくれ。俺はお前の復讐を祈るばかりだ。若しまたお前が承知してくれるとならば、一臂貸すのも、俺の望だ。何しろ俺が獨りで國に歸るのは眞平だ。然し、俺がお前であつたとして、俺には別の考があり術策がある。橋にしろ綾葉にせよ、二人を一所に片づけるといふのは、それが果して巧く行かうか、假に一人でも殘したら、お前は何處に立瀬が有るのだ。それも此方が手を下すには、何時が日にでも手が下せる。よく仕損じて恥のうへに恥を塗る奴は、大概が逆上せあがつた性急のために、我と我から仕そこなふのだ。飽きぬ遺恨を晴らすなら、先づ第一に對手の機會を覗ふのが上分別ぢやないか。さうして、此處と思つた其の時に、橋と綾葉が固まつてゐる所を、

微塵の粗忽なく、一氣に二人を斃してしまふ。これが好い。確かに好い。

さて其の機會が來るまでだ。お前もおめ〳〵息をしてゐることも能きまい。それも俺なら斯うしてくれる」

丁二郎は猶引續いて又四郎に、策を授けた。

二人は其の夜凝議した。

○

活動寫眞の興行が、遂に開場された。それは綾葉が又四郎の留守の宿を、訪ねて行つた日の翌々日であつた。

その二日間に、又四郎は遂に綾葉を呼び寄せずにしまつた。然し、活動寫眞の初日の前日に、綾葉は又四郎を復た訪ねてきた。宿の帳場の番頭は、只だ「御二人さんとも宿が換はりましたよ」とだけ、綾葉に答へて苦笑した。綾葉は空しく歸つて行つた。

初日の入は殊のほか少なかつた。辯士として登場した又四郎は、舞臺の直ぐ下に、七日ぶりで綾葉を認めた。二人の視線は、刹那に會つて刹那に斷れた。檣さんらしい人の姿は、綾葉の周圍にも、其の他にも、又四郎の眸に映らなかつた。彼は自分の脚下に、人知れず坐つてゐる綾葉の爲に、氣を牽かれた。

又四郎の辯說は屢々激越して、生國の訛が爭はれず洩れて出た。その度ごとに、少い觀客は又四郎を揶揄ひ囃した。

映畫の時間にも、又四郎は暗の舞臺の片隅に佇むでゐた。彼は樂屋に綾葉が訪ねてくるのを避けてゐたのだつた。映畫の仄黃いろい光の反射をうけて、綾葉の小さな姿が、朧げに又四郎の胸に映つた。

綾葉の優雅な素人すがたに、見覺えのある著物の文や帶模樣が、又四郎の瞋恚を烈しく煽りながら、眸、頰、唇、顎、その貌のおつとりとした麗かさは、又四郎の胸に痺れるほどの疼きを與へた。さうして、綾葉は又四郎の面を仰ぎあげてゐた。二人の視線は、幾度か逢つては復た直ぐに別れた。別れるときは、又四郎の方から毎も離れてしまつた。

映畫の代謝するごとに、又四郎の辯說は、益々亂れ

て悶えるばかりであつた。觀客は强かに彼を皮肉に揶揄つたり、面白さうに侮辱したりした。また其の度に又四郎は吃々と唇を顫はした。彼は思つてゐた「何が故に橋が來てゐないのか、彼奴が綾葉と一所に來てゐるならば、此處は何といふ絶好な復讐の場だらう。この見物人のまへで、俺は舞臺から飛び下りさまに、二人を此の場で刺してしまうことが能きるのだ。實にこれほど好いことはないのだ。惜しい、實に惜しい。綾葉の奴、未だ俺の前に姿を現はして、俺の未練を俺きにきてゐるのだ。何といふ不貞腐だ。未練も何も此の俺が貴様に報いてやるものは、今に貴様が斷末魔のときに思ひ知るのだ。惜しい、橋の奴、何うして俺に見せつけに來ないのか、それとも何處かに紛れて來てゐるのか、綾葉ばかりを、俺の直ぐ前に突き出して、自分は何處かで眺めてゐるのか、奴は四十幾つだといふのだが、この中に來てゐるかも知れない。惜しい、實に惜しい。今夜は此のまゝ綾葉を歸すのが、俺には實に口惜しい」彼は辯士としての映畫の記憶を、縺れるまゝに漸く唇に聯ねながら、揶揄と侮辱の聲々に包まれて、敢然と舞臺のうへに硬直してゐた。

絶斷なく移つて行く映畫の最中には、又四郎は復たさまざまの妄想と幻影とに襲はれてゐた。「橋がゐる。綾葉と肩を並べて、二人が一所に坐つてゐる。好しと俺が覺悟して、樂屋の俺の着物の下に、横たはつてゐる懷劍を、この洋服のかくしに忍ばせて、戻つてくるや否や、鞘を拂つて舞臺から飛ぶ。橋の鳩尾に一刺、其のまゝ綾葉の左の乳下に一刺、たゞ二刺で物の美事に、男と女を死骸にしたときに、俺の心の悦とずがすがしさは何うだらう。駭き叫ぶ見物人に、懷劍を棄てゝ兩手をついて、俺は丁寧に謝罪する。監視巡査に縛められて、樂屋にゐる丁二郎に送られて、警察まで行くときの俺は、悠長に歩きながら、靜かに笑つて街を行く。

橋の血と綾葉の血とが一つになつて、古い疊に流れるうへを、俺は足の裏で蹈み躙つてやらう。何と一言奴等の最期に恨んでやらうか、俺は其の時に何と言ふ

だらう。殺して置いて念佛でも唱へてやらうか、殺してしまへば即座に恨はさつぱりと消えてしまうだらうか。そのとき俺は何んな顔をしてゐるだらう――」

又四郎の斯うした妄想は幾度か繰りかへされて、その度ごとに、次第に詳しく精彩を帶びてきた。果は瞭然として彼の胸に、それらの幻影がまざ／＼と映るやうになつた。

舞臺の映畫が消えて、電燈の光が天井から下ちてくると、又四郎は復た自身の現在に復歸した。さうして次の映畫の爲に、自分の記憶を、覺束なく査べてみたりした。

斯うして興行の初日は、漸やく最後の映畫を終了した。

又四郎は初めて樂屋に歸つてきた。そこに待ちあぐんでゐた丁二郎に、

「後を賴む」と、言ひすてゝ、彼は其のまゝ外出してしまつた。

綾葉が舞臺の直ぐ下に來てゐたのを、最初から知つてゐた丁二郎は、又四郎のそわ／＼した外出の擧動に就いて、直ぐ刄と血とを聯想した。丁二郎は又四郎の後を追ふて、樂屋の裏口から土間に飛び、路次に奔りでゝ、街上まで一息に疾驅した。しかし其は丁二郎の杞憂であつた。彼は又四郎が直ぐ前の曲り角で、俥を傭つて何處かへ乘つて行くのを認めて、漸く沈着することが能きた。さうして、樂屋に歸つてくると、綾葉が彼に面會を求める爲の、使の小僧が、彼に其の旨を傳へた。彼は又四郎の考を憚り、また意外の面倒を氣遣つて其の面會を明らかに拒絶した。

○

又四郎の乘つて行つた俥は、新地に入つた。

彼は綾葉に會ふことの能きなかつた三日の間に、力彌といふ別の藝妓と顏を合はしてゐた。その最初は、又四郎にとつて渴ききつた淡白なものであつた。自分の前に現はれてくるものは、綾葉でなければ誰でも好かつた。

其處に、嘗て又四郎と綾葉との仲を、橋さんに告げ

たことある仲居が、やはり又四郎の座敷に出入してゐた。其の仲居から、橋さんと綾葉とが、人知れず岐阜に遊び、猶、綾葉が橋さんに落籍されたことを、又四郎は漸く聞くことが能きたのだつた。

さうして、又四郎は宿に歸り、丁二郎と凝議した。復讐の機會を待つ爲に、財布の底を補はなければならぬ二人は、宿を換えて更に下等の旅籠に入つた。一時の耻に耐えて、小屋の持主の提言を收れ、しきを再び收めて、初日を開いた。猶そこには、綾葉に優る女と結んで、綾葉の變心に先づ報ゆべき、丁二郎の意見も又四郎に好く是認され、その爲にも初日の開場は一日の早きを爭ふて、懐中の暖かさを願はなければならないのだつた。

然うした間に、又四郎の極端に奔騰する心が幾分なりとも緩和され、或はまた新しい女によつて、又四郎の直截的の情調が、改めて置換されないともいはれない等と、丁二郎は私かに考へてゐた。

初日は然し悉く不成績であつた。猥りに豫想されてゐた大入などは兎も角も、席の四分の一にも當らなかつた客の數は、眞面に又四郎の胸算を崩してしまつた。然も、綾葉がゆくりなく現はれてきた爲に、更に烙きつくされた又四郎の心は、まさしく反應的に新しい力彌を無意味に摑むだ。彼は俥のうへで渦のやうに旋回する自分の感情に充たされて自分を忘れてゐた。忘れた自分を托する爲に、力彌と相見る悦びに縋つてみるより仕やうがなかつた。それは彼にとつて一縷の依托であつた。

力彌は始め又四郎を單純な客の一人として扱つてゐた。その他に何もなかつた。然し、其の活動寫眞の初日の夜に、十一時すぎて又四郎から聘ばれて行つたときに、初めて又四郎の眞實に觸れたやうに思つた。又四郎は歡樂も感激もなく、たゞ力彌の胸に棲みたかつた。さうして、二人の心は柔く交叉した。

○

初日、二日、三日と續けて、活動寫眞の看客は、益々減つて行くばかりであつた。

綾菜は初日後には遂に來なかつた。

又四郎は既に總てに對して、懊惱し且つ呪咀した。

丁二郎は、おいんの來着を待ちくたびれてばかりゐた。

收支の全く償はない三日間の興行に、又四郎の懷金は、四日目の興行を續けるだけの資力に不足を覺えるほど、殆ど悉く枯渇してゐた。その爲に、又四郎は力彌を見ることの能きないばかりでなく、自分と丁二郎との旅籠料を始めとして、尚未だ一週間も契約期間が殘つてゐる興行の、各種の費途に對しても、其の定まつた支拂を履行する的が全くなかつた。

又四郎と丁二郎とは、仄暗いランプの下で、復た凝議した。その時に丁二郎は、おいんに手紙を書いて送つて置いたことを、始めて又四郎に告げた。又四郎は苦笑しながら、その場に母親が現はれてくるのを欣ばなければならなかつた。それにしても、おいんの來るのは、日數のうへから考へてみると、已に遲れてゐた。丁二郎の手紙が着き次第に、おいんが伊那町在を出發してくるならば、名古屋に來てゐるべき筈なのだつた。さうして、若し此のうへ更に一日おいんの來るのが遲れるならば、日ごとに支拂はなければならぬ興行の費用は、直ぐに滯つて、おいんが金を持つてくるのにしても、それは全く後の祭になつてしまうのだつた。そこに契約は破棄せられ、い、しきも其の他の各種の保證金も、先方に沒收されて了ふのだつた。それは勿論何の猶豫も無い規則になつてゐた。

丁二郎は、寂しさうに坐つてゐる又四郎を見ながら「御前は今、綾菜を何う思つてゐる」と、訊ねてみた「折の有り次第に橋と並べて恨を晴らすのだ」と、又四郎は靜かな小聲で答へた。「恨をかへす前に、お前は綾菜を痛めてやらうと思はないか」と、丁二郎は再び訊ねた。「痛めてやるといつて、何うするのだ」と、又四郎は訊ねかへした。二人の問答は、それから綿々と續いて行つた。さうして、丁二郎は其の夜に、綾菜の抱屋を訪ねて往つた。

○

綾葉は床に就いてゐた。二階の六疊で、暫く待たされてゐた丁二郎は、初めて素顔の綾葉を見た。綾葉は蒼白く窶れてゐた。それらの總てが、丁二郎に復たも意外な事ばかりであつた。

綾葉は「又四郎さんは何うしてゐます」と、先づ訊ねた。「それこそ私が話しに來たのであるが、今は實に一刻も猶豫の出來ない場合に、立迫つてゐる。ゆつくりと、碎いた話を續けてゐる暇は無い。それ故に、要談ばかりを聞いて欲しい。さうして、又四郎に返辭をすると思つて、私に返辭をして貰はなければならぬ。よろしいか」と、丁二郎は言ひ始めた。綾葉はそれを素直に肯つた。

丁二郎は斯ういふ意味のことを述べた。「總て雙方とも、貴方も又四郎も、淺からぬ誤解を縺れ交はしてゐるらしい。然し、誤解は即ち誤解であつて相互が反目してゐるといふのではない。たゞし又四郎は最う憤懣しきつてゐる。又四郎が貴方に會ふのは、貴方の爲に非常に危險であるまでに、彼は極度に憤懣してゐる。それにしても、斯うした誤解は、時節が來れば何でもなく解ることには相違ない。又四郎にしても、さう何時までも肝を燒いてばかり居るわけにも行くまいが、こゝに又四郎にとつて、今は二進も三進も、全く動きのとれぬ、せつぱ詰まつた事に成つてきてゐるのを、貴方は御存じがないか知らん。若し御承知でないとすれば、私は今まで極く公平に、貴方の爲にも考へてゐたが、今からは又四郎と共に、貴方の敵にならなければならぬ。

他でもない。又四郎は乞食に成りかけてゐる。有體を言へば、私も彼に殉じて乞食になりかけてゐる。二人の懷中が手薄になつてきてゐたのは、貴方も疾くに御察しだつた。また如何にも其の通りであつた。然も貴方のお蔭で初日を開いた彼の興行は、悉く的が脫れて、早や明日の興行に差支へるまでに、吾等二人は行きづまつてゐる。考へてみると、最初橋さんに邪魔されて小屋の貸借を斷はられた時に、此の興行には既に

けちが着いてゐたのだ。然し、過ぎ去つた愚痴めいたことを、私は態々言ひに來たのではない。

貴方は今、又四郎を何う思つてゐるのか。それが聞きたい。それも言葉のうへで聞きたくはない。又四郎に對する貴方の考を、此の際きつぱりと、貴方自身の所業で以て、吾等二人に示して貰ひたい。それを極くくきれいに示しあかして貰ひたい。

又四郎と私とは、今夜かぎり興行を中止することに取り極めた。それは莫大の損害が、未だ殘り一週間の契約の爲に、二人の頭に蓋ぶさつてゐる。さうして、二人は氣を新しくして、岐阜に巡回して行かうとしてゐるのだが、その損害の爲に、足を拔くことが能きないことに成つてゐる。と言つて、吾等二人は此の土地を永く見限つてしまうといふわけではない。貴方の其後の心中を、底の底まで見定めることが能きて、さうして岐阜で立派に旗を上げた曉には、又四郎はきつと前非を後悔して、必ず貴方を迎へにくるであらうし、私にしても、彼に然うさせずには決して置かない。これは私の貴方に對する誓である。

若しも、貴方が又四郎を、通り一遍の他國者扱ひにして、此のまゝ妙に控へてゐやうとするならば、それでも好い。吾等の手だては唯だ一つだけ殘されてゐる。これは貴方に對する私の宿題である。

最後に、吾等二人は飽くまでも男である。此のうへ橋さんの手に係らうなどゝは、毛筋ほども考へてはゐないのだ。今日の此の話は、橋さんといふ人を、全く無いものと見たうへの話である。これも呉々含んで置いて貰ひたい」

丁二郎は斯ういふ意味を話してしまつて、綾葉の表情を理解する爲に、全意識を綾葉の顏に集注した。又四郎に對する綾葉の衷情に就いても、其の即離如何の眞實を會得することは、我ながら到底不可能であるやうに、丁二郎は思つてゐた。寧ろ解き難い重い疑惑を、彼は最初から綾葉の胸にかけてゐた。その疑惑の解決を、綾葉の表情に求めやうとして、丁二郎は瞬きもせず、綾葉の窶れた素顏を凝視してゐた。

綾葉は然し最初から、纖い撫肩を窄めたまゝ、兩手を膝の上に重ねて俯眼になつて、丁二郎の話を聽いてゐた。さうして其のまゝの姿と、其のまゝの面とを、聊かも動かさずに、話をすつかり滯りなく聽いてしまつたといふより他には、何の別徴も表はさなかつた。

丁二郎の話が終り、暫く經つと、綾葉の唇ばかりが纔かに動いて、「仰つたことは本當に良く解りました。これも何かの因縁ごとゝ思ふより他には、私には最う思ひやうがない。私のお答へ申すことは是より他には何も無い」といふ意味のことだけを、極く沈著した口調で、短くはつきりと言ひきつた。さうして、眉一つ動かさずに前のとほりの姿と面とを、さり氣なく保つてゐるのが、丁二郎に忽ち烈しい敵愾心を勃發させた。

丁二郎は綾葉の答を受取ると、無言のまゝで立ちあがつた。何か言はうと努めながら、語もみつからぬ間に唇も動かなくなつてゐた。彼は殆ど無思慮のまゝで自然に其の部屋を出て、階段を降りてしまつた。階下の長火鉢の縁に、二三人が坐つてゐた。その人達にも丁二郎は默り續けたまゝ、戸外に出てきた。街のうへで初めて立ちどまつた。さうして、自分の兩頰が外から嚴しく引き緊められるやうに、激しく疼いてゐるのを初めて覺えた。同時に何とはなしに涙の滲むでくる眼で、脚下の土の色を、丁二郎は佇みながら瞶めてゐた。

極めて放恣な感情が、丁二郎の全部に漲り始めた。一切を拋棄して、其のまゝ遠方に、獨りできれいに逐電してみたいやうな氣分が、彼を益々烈しく挑發した。さうして、彼は夜の街上を見亘した。軒燈が二列の波をつくつて、長く續いてゐた。それを見ると、彼は俄かに歩きだした。衰憊しきつた夢遊病のやうに、ふら／＼と左顧右盼して、意識に何の準據もなく、低徊するやうに街の片側を歩いて行つた。今會つてきた綾葉の話も、自分の位置から遠い彼方に懸け離れてゐる殆ど沒交渉の事を、聞いてきたやうな氣持になつてゐた。

そのうちに、彼の歩行は、自然に牽かれて行くやうに自分達の旅籠の門口まで、丁二郎の全部を蹌踉と運んで行つた。

○

又四郎は獨りで兀然と、部屋の壁に凭れながら箕坐を組むでゐた。そこに、丁二郎が歸つて來た。

丁二郎は、部屋の中央に、直ぐ肱枕になつて、長々と寢ころんでしまつた。さうして、懶いやうな聲を漸く發して、綾菜との會見の顚末を、何の感激も交へずに、掃き棄てるやうに又四郎に話して聞かせた。その丁二郎の、冷淡な態度を、又四郎は訝しく思ひながち、彼も默て其のまゝ仰臥した。二人は各自別々に默つて寢ころんでゐた。

興行の善後策に就いては、又四郎も丁二郎も、口を噤むだまゝ、其の夜は二人とも默りがりのうちに、寢床に入つた。

翌日になり、四日めの興行の準備を、其の日の晝のうちに終はらなければならなかつた。然し又四郎も丁二郎も、四疊半の部屋のうちで、前夜と同じやうに、二人とも默つて、何の準備にも著手せずに、其の日の朝を暮してしまつた。何故に二人が然う夜も朝も、默りがちに過してしまつたのかは、又四郎が後になつて細かに考へてみても、別に是といふ理由を思出すことが能きなかつた。たゞ自然に懵然と澱むだ氣分のうちに、自分獨りで沈むでゐたのらしかつた。

然うして、午前十一時ごろであつた。旅籠屋の番頭が、二人の部屋に入つてきた。其の右手に小さな薄紫の袱紗包を持つてゐた。

番頭は二人に對坐すると、其の袱紗包を、膝の前に離して置いた。さうして、「今、帳場に若い美しい婦人が來た。私に此の包を渡して、直ぐ又四郎さんに手渡して貰ひたいと述べると、其のまゝ歸つてしまつた。その他に、その婦人は何も言はずに行つた」と、述べた末に、更に其の事傳を確かに濟ましたことの念を押して、部屋を出て往つた。

又四郎は袱紗の柔い結び目を解いてみた。その中に

は、紙幣の束が厚い美濃紙に包まれてゐた。それは八葉の百圓紙幣と、四十葉の十圓紙幣とが扁い層になつてゐた。美濃紙の上包を開き、膝のうへで紙幣の數を繰りながら、又四郎は驚異に慄へた。傍で眺めてゐた丁二郎は、呼吸を塞めて、又四郎の指端を凝視してゐた。

紙幣の束を三度ばかり數へなをした又四郎は、膝のうへに其を載せて、疊のうへの袱紗を取りあげると、裏と表とを、うちかへし〳〵擴げながら、丹念に見査べた。さうして、綾菓の香が袱紗の何處かに移りついてゐるのを、直ぐに知ることが能きた。彼は其の紙幣の由來に就いて、忽ち强く昏惑しながら、丁二郎に、

『綾葉の奴が持つてきたのだ』と、我知らず獨言のやうに告げた。

『俺も然う思つてゐた』と、丁二郎は直ぐ答へた。

二人は元のやうに包み直した袱紗を横に置いて、其の金額の處置と、今後の興行とに就いて、暫く談合しつゞけた。

○活動眞寫の興行は、僅かに三日間で全く中止された。

又四郎も丁二郎も、不義理をせずに、諸々の缺損を償ふことが能きた。さうして、岐阜に巡回して行く胸算でゐた。

興行の初日から五日目の夜であつた。兎に角に綾菓と會つてみる必要に既に餘儀なく迫られてゐた又四郎は新地に行つて、綾菓を聘んでみた。然し、綾菓は復た遂に又四郎の前に絶えて久しい姿を見せなかつた。彼は其處に、薄紫の袱紗包と照らし合はして、最も痛切な屈辱を抱かせられたやうに思ひ込んだ。さうして力彌は直ぐに彼の前に現はれてきた。

綾菓の消息に通じてゐた仲居は、「綾菓さんは復た勤めに出ることに成つてゐるさうである。橋さんに落籍されたばかりで、復た直ぐに出るやうになつたのは橋さんの手許が相場の爲に、餘程不如意に狂つてしまつたからといふことである」との意味を、又四郎に告

げた。又四郎は自分に提供された袱紗の金が、爭はれず氣には成りなかん、然し、橋さんと綾葉との間が、未だ依然として存續し、然も自分の想像以上の拔き難い根柢のうへに結ばれてゐるのを思つた。さうして、從前から決して緩和されてはゐなかつた復讐心が、一時に又四郎の全部を烙きつくした。

彼は其のとき肌身に着けてゐた袱紗包を、懷中で緊しく握りしめた。その掌一ぱいに觸る紙幣の厚さを考へながら、力彌に「御前は俺に落籍される氣はない」といふ意味を、咄嗟の間に言ひきつて、力彌が愕き訝つてゐるのを見ると、面白さうに寂しさうに笑聲を起てた。

力彌の身體に就いては、其の周圍に、煩累がましい關係が附いてはゐなかつた。幼い時分から籍と一所に養女に貰はれたまゝ、時に從つて成育してきたのに過ぎなかつた。

その翌日の夕がたまでに、萬事が何の停滯もなく、すらすらと捗つてしまひ、力彌は又四郎の望みどほりにまた間接には綾葉の身代金によつて、極く容易く素人に還ることになつた。さうして又四郎は、前夜自分の前に聘ばれてきたまゝの力彌を、其のまゝの姿で、何よりも先づ自分の宿に連れだつて歸つてきた。

又四郎の然うした半狂態の突飛な所業を、丁二郎は憤り呆れながら、又四郎と並むでゐる力彌の挨拶を聞いた。さうして、自分が又四郎と共に、故鄕の上諏訪を出てきたことを、初めて深く後悔しながら、猶「もう斯うなつては、おいん伯母に向つては、俺は何も知らんと言ふより他はない」と覺悟をきめて、力彌の顏容を、彼はつくづくと見まもつてゐた。

ちやうど其の時に、それは誰にも全く思ひがけなく、帳場の番頭が其の部屋に入つてきた後から、おいんが續いて入つてきた。さうして、おいんは又四郎と丁二郎を見るよりも、力彌を横から凝視しながら、坐つてしまうと、

『丁さん、お前さんの書いて御呉れだつのは、此の女かい』と、丁二郎に訊ねた。

○

其の夜の午後十一時ごろになつて、おいんは漸く一部始終のこと〳〵を、ゆつくりと聽いてしまふと、短い纖い鐵煙管を帶に收めて、

「それは大した思ひちがひだ。私は今から綾栗さんの所に往つてこやう」と、初めて言つた。さうして、激しく手を拍いて、旅籠屋の婢に、俥を仕立てさせた。

又四郎と丁二郎との話を、交る〳〵聽きながら、最初から首肯いてばかりゐたおいんは、俥の來るまでの隙に、

「又も馬鹿、丁さんも馬鹿。力彌さんも至らぬ。綾葉さんは賢い、賢いが女の哀しさに是非もない。橋さんといふ人はえらいものだと讃めても好い」と、言ひながら大きく微笑して、

「齒に衣を着せずに言へば、力彌さんより綾葉さんの方が、又にはよつぽど出來すぎてゐるな」と、言ひつゞけた。

やがて俥の來たことを、告げに來た婢と一所に、おいんは立つて往つた。さうして、帳場に出たところに一人の中年の男が、其の旅籠に走りながら入つてきた。男は番頭を認めると、

「小澤又四郎さんは居りますか、直ぐ今會はし下さい」と、異常に動搖してゐるらしい聲で、その周圍を促したてるやうに言つた。

仄暗い上り框のうへに佇みながら、其の男を眺めおろしてゐたおいんは、

「小澤又四郎に何の御用ですか。私は小澤に緣のあるものですが」と、聲をかけた。男は、

「その小澤さんに會ひたいんで、早く會ひたいんで」と、息を切りながら、切に物躁しく言ひかへして、おいんを仰いでゐた。

「小澤は留守ですよ。あれは毎晩何處かで寢泊りをして、此の家に歸つて來ませんで、私で好ければ、何なりと仰つて下さいな、あれに然う傳へて聞かしませうから」と、おいんは徐かに嘘を言つた。男は忽ち激しく當惑したやうに、直ぐ顏を顰めて、靦面にもどかし

さうに。

「あゝ困つたなあ、困つたなあ、何處へ行つたのやろか御解りはありませんか。えらいことに成つてしまうた」と、愁訴するやうに言つた。おいんは其の男が、何事かの異變を齎して、又四郎を訪ねてきたのを覺つた。

「私も是から小澤に急用があるので、探しに行くのだが、會へば必ず傳へますから、何なりとも私に仰つて下さいませんの」と、おいんが言つた。さうして、男が、

「それなら何うぞ御頼みします。綾葉さんが今死にかけてゐなはります、小澤さんを呼んで居なはりますと、小澤さんに御傳へを願ひます」と言ふのを聞くとおいんは上框の緣に膝を中腰にかゞめて、

「私が惡かつた。又四郎は中に居ます。私は又四郎の母親です。今から二人で綾葉さんに會ひに行きますから、貴方も一所に案内して下さい」と、男に詫びて猶頼むだ。さうして、更に二臺の俥を呼んで、おいんと又四郎と使の男との三人が、急いで綾葉の許に深夜の街のうへを揺られて行つた。最後の俥のうへで、おいんは俥夫を屢々激勵しながら、また居のうちで、自分の氏神の鉾持神社と、守本尊の不動尊とを、只管に念じてゐた。それには「綾葉の生きてゐる瞳と自分の瞳と、縱ひ一目でも、親しく見かはして、そこに綾葉の息を寧く引きとらせたい」と、おいんは全心をかけて祈念を凝らしてゐた。

其の俥のうへの途中で、又四郎は全く咄嗟に、頭の頂きを後から攫み戻されるやうな力を感じると、忽ち仰むけに、首を激しく上げさせられて、暗い空を無意識に仰いだ。その力は彼にとつて刹那に受けた全く他動的の力であつた。彼は首を眞直に直して、その力を爭はれず怪訝した。煙草に火を點けて、喫煙しながら直前の不思議な力に就いて、暫く沈思した。解きがたき不安が、一時に彼を包みこんだ。さうして、直ぐ後から來る母親を呼びかけて、

「俺だけ歸らしてくれ、頼むから」と、嘆願した。然し、おいんは默つてゐた。默つてゐる母親と力爭する

ことは、又四郎の習性として、決して許されないやうに、彼の成立ができてゐた。

三つの倫は一列になつて、奔り續けて行つた。

○

綾葉は屍になつてゐた。それはおいんと又四郎とが會ひに來た五分間ほどまへに、生を奪られて逝つた。左肩から兩乳に掛けて、幾丈とも知れぬ繃帶が、綾葉の上半身を深く埋めてゐた。

『今、瞼を撫でゝ眠らしてやつたばかりで御座んした』と、綾葉の枕許に坐つてゐた其の家の女主人が、おいんと又四郎との挨拶の後に言ひ足した。さうして女主人は、又四郎をつくづくと眺めた。おいんもしみじみと綾葉の死顏を凝視した。

その六疊の部屋に、漲つてゐる死の影の下に、猶若い女が二人坐つてゐた。何れも壁の方に顏を俯せて泣いてゐた。又四郎は其の女達を、綾葉の朋輩として前に識つてゐた。さうして、總ての雰圍氣が彼自身を怨の焦點に置いてゐるやうに、獨りで思ひこまれてならなかつた。彼は眼を開いてゐるのも苦しいやうに思つた。殊に綾葉の死骸の長い輪廓が、彼の心に絡みついて、それは衝動的に、又四郎の全部を昏く鬱結させた。蠟を延ばして彫りつけたやうな綾葉の死顏よりも、死骸全體の横になつてゐる輪廓の方が、最も深刻な印象を、又四郎に永く貽して餘りあつた。彼は然うして愛憎の情から、悉く脱離して、眞に透徹したやうな氣分を味はつた。猶同時に、綾葉に對する追懷も、懺悔も、有らゆる情思が、徐かに拂拭されて、たゞ死そのものを憧憬するやうな、しみじみと柔い慕はしさはかりが、彼の鬱結した昏い情緒のうちに、強く搖曳し始めた。彼は思つた。

「俺は死人が美しくなつた。何の煩惱も執着もなしに一切と離れて、眞から安らかに、獨りで濟ましかへつてゐる。生きてゐるものが動かすまゝに、北枕に寢かされて、兩掌を胸のうへに組むでゐる。たゞ其だけだ。さうして何も知らずにゐるのだ。俺が現在綾葉に對して、何んな感情を抱くのにしても、綾葉は全く何も知

らないのだ。よしんば俺が綾菜の死んだのを、氣味が好い、態をみろと歡んだところが、綾菜が何を知るものか。死人は全く無心なのだ。その無心が俺は羨しい。實に羨しい」などゝ、又四郎が凝然と思ひ廻らしてゐるうちに、おいんは其の家の女主人に、

「別の部屋で暫く御聞き申したいことがありますが」

と、懇願して、二人は靜かに立上つて別室に出て行つた。

　二人は三十分ばかりして、元の部屋に還つてきた。別室で二人が、何を話し何を聞き、何を爲たのかは、おいんは遂に誰にも知らせなかつた。たゞ「綾菜は鐵道の軌條のうへで、列車に撥ね飛ばされて重傷を負ひ、左乳の裂傷が致命傷になり、さうして臨終の近くまで『又さんに會ひたい』とばかり、言ひ續けてゐた。ほんとうに氣が確かであつて、重傷の苦惱に取亂しもせず、遂には又四郎を見ることを諦めたのか、居あはした警官や醫者達に、はつきりと禮も言ひ、女主人と朋輩とに別れを告げ、自分の不所存を詫びもした後に、微かに呻吟しながら、人事不省になつてしまつた。綾菜を分けて深く可愛がつてゐた女主人は『小澤さんに言ひ還すことはないかい』と、强く綾菜に言ひかけたときに、臨終の刹那になつて、綾菜は復た意識をかへしたらしく、『又さんを恨まない。何も無い』といふ意味を纔かに應へて、其のまゝやす〱と佛になつた」と、おいんは女主人から聞いた話を、又四郎に言ひ聞かせた。

○

　その夜は、又四郎は綾菜の傍で、懇ろに通夜するやうに、おいんから言ひつけられ、女主人も其を切に懇望した。彼は綾菜の唇を、樒の葉で濡らした後に、生れて始めての困阨を痛切に感じながら、猶、死人の境遇を憧憬しながら、袂に入れてきた煙草ばかりを、心の依托にして、綾菜の死骸の裾に近く、所在に苦みながら坐つてゐた。

　おいんは旅籠に殘つてゐる力彌のことも案じられて、復た改めて綾菜を弔ふことにし、その夜は一先づ

又四郎の旅籠に獨りで歸つてきた。

旅籠には丁二郎ばかりが殘つてゐて、敷いてある床に就かずに、疊のうへに轉寢をしてゐた。力彌は其の部屋に居なかつた。おいんに呼び起された丁二郎は、力彌が二間向ふの部屋に、獨りで泊つてゐることを、おいんに告げた。

おいんは其の力彌の居る部屋に、直ぐ行つてみた。力彌は床に就いたまゝ、未だ眼を覺ましてゐた。「明日の朝起きてから、委しい話をすることにして、今夜は晩いから御寢みなさい」と簡單に、おいんは力彌に何氣なく言ひ置いて、自分達の部屋に歸つてきた。さうして、綾葉の自殺したこと、綾葉の家の女主人が他人の心情を好く汲みとることの能きる人であつたこと、等に就いて、おいんは其の夜の出來事と自分の所感とを、丁二郎にきれぎれに話して聞かせた。

丁二郎は前から餘程憊れてゐた氣分を勵まして、おいんの話に聽き耽りながら、「綾葉の死」といふことが何うしても自分にはしつくりと會得しかねるやうに思つた。

○

夜の更けるのにつれて、又四郎の心は、我ながら快いばかりに、何の障りもなく益々深く澄むで行つた。それと同時に、「綾葉」といふ一人に對して拘束される觀念が漸く薄れて行つた。有らゆる人の死を考へてゐた。さうして、「生は決して獨立してゐるのではなく、直ぐ背なかを合はして、生の裏に死が存在してゐる、表が生、裏が死、その生死の表裏を一所に具えてゐるのが、命の本質である」やうに思はれてきた。斯の凡常な法則を手にとるやうに覺つたことが、その時の又四郎には、自分の全體を掩ふばかりの大きな悅びを齎した。彼は綾葉の死骸が臥つてゐる蒲團の、裾の傍に兀然と坐りながら、蠟燭の赭黄いろい炎を視ながら、線香の親しさうな薫を聽きながら、猶、自分の考へついた新しい概念を、衷心から悅びながら、その概念のなかに嘻々として浸つてゐた。

彼は悅びながら聯想して行つた。「人の命のうちに、

生死の二面が含まれてゐる。生に命があるやうに、死にも命がなければならぬ。命の全部が、生ばかりに含まれてゐて、命と死とを全く別異のものであるやうに思ふのは間違つてゐる。生と死とは表と裏との二面であつて、其の本質は、同じ一つの命のうちに含まれてゐる。さうして、死の命は、生の命と根柢から共通するのであれば、死の命の能動は生の命に自然に感應する筈である。一人の死が、他人の生に反應する——」斯うした彼の聯想は、三時間ほど前に、俥のうへで自分の頭に加へられた奇異な力を思ひ起した。「矢庭に頭を後に引き戻されたのは、的確に綾葉の靈の能動であり、即ち爭ひ難き死靈の力の現はれたのだ」そこに又四郎は始めて、幽靈といふものゝ存在を是認した。さうして、直ぐ前に長くなつてゐる綾葉の死骸を、改めて眺めた。

然し、現實の死骸は、又四郎の心に、全く空しい殼として、瞳に映る形ばかりに過ぎなかつた。それは只だそれだけの物であつた。彼は綾葉の死骸を眺めながら、私かに微笑した。

傍には、女主人と五人の若い女達が、沈然と坐つてゐた。食ひ剩しの五もくずしの皿や、割箸などが、誰彼の膝と膝との間や前に、白い疊のうへを點綴してゐた。

又四郎は女主人に、綾葉の轢死しやうとした場所の方角を、詳かに訊ねた。さうして、其の方角は、彼自身が俥のうへで、ちようど眞後に當つてゐたことを知つた。猶、其の時に奇異な力が、自分の頭に加へられた刹那は、また恰も綾葉の臨終に相當してゐたことをも、併せて考へついた。そこに又四郎は綾葉の死に關聯し、更に深く思索し始めた。「死んだのは、此の家で死んだのだ。此の家は俺が俥のうへで、ちようど俺の前の方に當つてゐたのだ。死なうとした軌條の所が、俺の眞後に當つてゐたのだ。綾葉の體軀は俺の前の方に運ばれて來てゐながら、愈々臨終の刹那には、死を企てた場所の、俺の眞後の方から、綾葉の死念は俺を牽いたのだ。さうだ、今此處で死なうと思ひつめて、

最後の念力を凝めた時に、その綾菜の念力は、無限の强さで俺のことを思つたのに違ひない。その念力は、其處の場所に凝集してゐる爲に、體軀は此方に來てゐながら、死にめになつて、その念力の殘つてゐる所から俺を牽きつけたのだ。念力と體軀とが、もう別々になつてゐたのだ、さうだ、明らかに然うだ。彼は斯う信じながら、綾菜の念力そのものに、一途に慕はしい心が湧いてくるのを感じた。一脈の溫い情思が、そこに柔く溢れ始めた。また然うした自身の心と、綾菜の死後と心とが、二人の生前と全く同じく、融會し瞑合して、生死を通じて相互に感應するやうな情趣を、はつきりと胸に映した。それは名づけ難いほどの、深い床しさと懷しさとに掩はれて、果は漸く耐えがたき戀しさに移つて行つた。

「俺は綾菜の死骸などに、何も用は無い。綾菜の心と此の死骸とは、全く別々になつてゐたのだ。綾菜の心が殘つてゐる所に、俺は是非行かなければならない。それが綾菜の本望なのだ。俺が死骸の傍で、斯うして通夜に時間をとつてゐるのは、綾菜によつて、何にも成りはしない。俺は軌條の所に行かう。綾菜が最後の念力を凝らし、死を賭けて俺を思つてくれた所に行つて、そこで俺は親しく綾菜の心と會はう。これが本當だ。俺は然うしなければない。綾菜は俥で此の家に來やうとした俺を牽き留めた。彼は俺を呼んでゐる。彼の心は、やはり俺にだけ解るのだ。何うしても行かなければならない」又四郎は更に烈しい戀しさを、切々と心にしめて、そこに綾菜の死後の心を、しみ〴〵と確かに意識するやうになつた。それにつれて、綾菜と自分との生前の情交が始めて一時に、彼の胸を烈しく動かした。さうして、現在の戀しさは、その生前の追懷に唆られもして、有るに有られぬ切なさに、彼は忽ち强迫された。

又四郎は强い呼吸をしてゐるうちに、卒かに立上つた。女主人も綾菜の朋輩達も、又四郎の意外な所作に愕かされて、一齊に彼の顏を仰いだ。彼は默つて、小刻みに步き始めて、玄關の方にすら〳〵と出て往つ

た。女主人は聲をかけながら、彼の後に追ひ縋つて走り出た。玄關の上り框の上と下とで、女主人は又四郎の帶を、兩手で摑みよせた。さうして、彼の行先を訊ねた。

『歸るんです、歸るんです』又四郎は涙聲になつて連呼しながら、戶の鍵に手をかけてゐた。

『何處に歸りやすのや？』女主人は叫ぶやうに言つた。

　又四郎は其處に佇むで、全身の力を脫くと、狂つたやうに汪然として泣いた。無意味に『いかん、いかん』と、女主人は連呼して、何かは知らず否定しながら、是も涙を流して嗚咽した。その後に續いて出てゐた女達も、とり〴〵に纖かく泣いた。

　一途に緊張してゐた又四郎の心は、自分の涙と、他の皆の泣聲のうちに、暫く浸かつてゐた。さうして、綾葉の慘ましい死に對する悲哀が、始めて彼の意識を係はした。彼は綾葉と自分とに關する一切を、其の悲のうちに抛げて、更に悲しみ且つ悲しむだ。彼は痺れるばかりに頰を顫はして泣きつくした。

　漸く涙を制へた彼は、座敷に歸ることを、女主人に勸められながら、然し其の時には、綾葉の死骸の傍に行くことが、現在の悲のために自分には到底不可能のやうに思ひこまれた。前には同じ綾葉の死骸を直ぐ當面に眺めながら、寧ろ冷靜な心で、其の死骸を悉く無意味なものに結斷して、私かな微笑さへ感じたほどに全く何氣なく思つてゐたものが、後には其の死骸を見るに忍びないまでに、又四郎は大きな悲に鎖ざゝれてゐた。

　又四郎は女主人に愬へるやうに「自分は到底もう綾葉の傍に行くことは、何としても能きないのであり。明朝改めて必ず來る故に、今夜は此のまゝ自分の宿に歸して貰ひたい」といふ旨を、幾度となく繰りかへして、否應なく深く賴むだ。女主人は遂に其の賴みを、辛うじて受納した末に、一人の男を臺所の間の方に起しに行つた。

　又四郎が嫌ふやうに斷りつゞけても、女主人は寧しも肯かずに、二臺の俥を呼びにやつた。起されてきた

男は、俥を呼んで來ると、又四郎と同伴するやうに、女主人から命じられて、又四郎の後から、やはり俥で隨從してきた。其の男は前に綾葉の危篤を、又四郎に告げに來た男であつた。

○

歸る途中の俥のうへでは、何の異常も又四郎は感じなかつた。殆ど憊れきつてゐた彼は、間歇的に或は興奮し或は悄然と胸を昏くしてゐるうちに、俥は旅籠の狹い門の前に、梶棒を並べて下した。午前の三時まへ頃であつた。

曉ちかい深夜に、旅籠の門を叩くことは、番頭の強い反感を促すばかりであり、其の爲に裏口に軒下を廻つて行けば、臺所の戸の掛金を、食指を入れて內から脫し、其の戸を開けて入れることを、又四郎は疾くに熟知してゐた。

送つて來てくれた男に、又四郎は一枚の紙幣を强ゐて收めさせて、裏口の方に蹌踉と歩いて行つた。さうして、掛金を巧みに脫し、臺所の戸を開かうとした時に、我知らず胸の動悸が、卒かに强く迫つてくるのを覺えた。戸の片端に兩手の力を加へることを、暫く躊躇したほどに、彼は自身の心悸亢進の激しさを怪しむだ。同時に彼は自身を包みこむやうな大きな畏怖に襲はれた。さうして、戸の端に全身を投げかけながら、殆ど我を忘れて、力を極めて、戸を押し開いた。

其の家の臺所は、家の全體に較べては、かなりに廣く、十疊あまりも敷けるぐらゐの板の間が、障子を隔てゝ、狹い廊下に續いてゐた。又四郎は入つてきた戸を閉めてしまひ、掛金を舊のとほりに嵌めて、板の間のうへに上つて行つた。彼は只だ母親の傍に行き、其の顏を眞底から見たがつた。その時ほど、親子の情を切實に身にしめて、縋りつきたいほどに、從前には感じたことは、曾て一度もなかつた。それに何故か自分の母親は、杳かに懸絕れた遠方に離れてゐて、自分は其處まで容易に近づき難いもののやうに、又四郎は理由もなく思ひこんで、夢のやうな悲が、彼の何處かを掠めて去つた。

その悲を覺えた刹那に、又四郎は自分の直ぐ脚下に陽炎のやうに低く搖々と、浮游してゐるやうな朧ろな光を暗の底に瞰た。

その光は淡赭いうちに、縦かに黄いみを帶び、歪な卵形のやうな形を具えて、長い方の直徑は一尺ぐらゐか其とも一尺五寸ぐらゐもあつたらうか、又四郎には其の大きさを、はつきりと記憶に殘すだけの餘裕がなかつた。

其の搖々と自分の脚に纒絡するやうな光を瞰て、又四郎は殆ど喪心しかけながら、尙ほ未だ一縷の意識を咄嗟の最後に取りとめて、大きな聲をあげやうとした。然し、彼は胸さきを一面に制壓されたやうに、空しく唇を喘がして、

「はつ、はつ」と、息を切るより他に、一聲も喉頭を洩れて出なかつた。

切々と息を吐きながら、又四郎は兩脚を後に躍らして、その朧げな光を避けた。極めて淡く沈澱してゐる光、光といふより色といふ方が、好く適應してゐるやうな、其の赭黄いろい歪な卵型は、又四郎の脚下に纒かれたる如く、搖らめきながら近よつてきた。

又四郎は前面の障子に手をかけやうとして、幾度となく左右に飛躍した。然し、脚下に纏れつかうとするやうな光に、その都度直ぐに妨げられ、光は遂には活々と、又四郎の脚に添ふて搖曳し、更に離れさうには思はれなくなつた。彼は左往し右往し後退し、同じやうな動作を、我を忘れて續けてゐた。さうして激しく促迫する自分の息を、極度に強く吐き切りながら、終に殆ど眩惑して、板の間に我にもなく正しく坐つてしまつた。

光は又四郎の直ぐ前に、徐かに暗に融けて、淡黝く化りながら、そのまゝ是も動かなくなり、又四郎の膝頭に觸れるばかりの所に止まつてゐた。

臺所に沿ふ廊下を隔てゝ、その一部屋に、「衆さん」と呼ばれてゐた料理番の男が寢てゐた。その衆さんは、又四郎が、「はつ、はつ」と、吐く息の激しい空聲を聞いて、深い眠から漸く覺めた。さうして、誰か

ど酒に酔ひ、態々臺所まで嘔吐に來て、强かに苦しがつてゐるのであらうと、思つてゐた。

そのうちに、兼さんははた〳〵と迅く亂れる跫足を聞いた。それに又四郎が板の間に强く坐つた響が起きて、猶一しきり吐く息と引く息との、只ならぬ氣配を耳にして兼さんは跳ね起きさまに、廊下に飛び出ると、臺所の障子を素捷く開いた。さうして、兼さんは朦朧と暗を劃つてゐる光を、眼の下に認めると、忽ちし激い叫聲を起てた。

その兼さんの叫聲と共に、光は暗に護られるやうに忽ち黝く更に黑く、暗にまぎれて消撫した。それを、又四郎も兼さんが視てゐた。兼さんは又四郎が其處にゐたのを知らずに、更に叫びつゞけた。

又四郎に兼さんが障子を開きに來た跫音を聞くや否や、忽ち心を勵まして、動もすれば昏倒しさうになつてゐる自分を、遂に自分で保有しつゞけることが能きた。しかし、未だ其のまゝ坐つてゐた。

そこに、多くの人達が前後して殆ど一時に駈けつけてきた。又四郎はランプの火に照らされて、漸く呼吸を緩和させながら、明るくなつた板の間のうへに立ちあがることが能きた。

又四郎が臺所にゐたことは、兼さんにも、駈けつけてきた人達にも、悉く意外に思はれた。殊に、おいんは愕きに搏たれて、兼さんに事の仔細を訊きたゞしてみた。

兼さんは板の間のうへを、眞直に指ざしながら、「ぼんやりした光の團りが動いてゐるのを見て、思はず聲を出して皆を起した」ことから言ひ初めて、自分が寢床で始めて聞いた呼吸の聲や跫音などに就いて、その總てを說明した。

皆は肩をあはして佇みながら、兼さんの話を、默つて聽いてゐた。さうして、おいんの傍まで步いてきた又四郎の、夥しい汗に掩はれてゐる蒼白い顏と、充血してゐる眸とを、靜かに瞶めてゐた。

おいんは默つて聽いてゐた。兼さんの話が濟むと、又四郎に何氣なく『部屋に行かう』とだけ言つて、他

の人達には構はずに、そのまゝ廊下を、自分が先に立つて二人の部屋の方に歸つて往つた。

○

然うした擾ぎを毫しも知らずに、熟睡してゐた丁二郎は、おいんに呼び起されて、疊のうへに坐り直しながら、又四郎の來てゐるのを、烈しく怪しむだ。

おいんは丁二郎に、力彌を起して行つて、自分達の部屋に直ぐ呼んでくるやうに、言ひつけた。さうして冷い茶を湯呑に注いで、又四郎に與へた後に、首を垂れて、凝然と考に耽つてゐた。

力彌と丁二郎とが、やがて入つてきた。

おいんは鐵煙管から、煙を吸ひながら、猶暫く默りつゞけた後に、

「貴方は今夜の此の家の騷ぎを知つて御居でか」と、力彌に訊ねた。力彌は、「人の叫んだののと、人の走つて行つたのを、知つてゐたけれども、畏しさに寢床のなかに入つて聞いてゐた」ことを、未だ怖れてゐるやうな口調でおいんに直ぐ答へた。

おいんは「此處にゐる皆は良く聽いてゐて貰ひたい」との前提を置いて、又四郎が全く不意に歸つてきたことを、強く訊問した。

又四郎は綾菜の死骸の傍で、自分が考へ、その考がいろ／＼に變化し、さうして自分が爲やうとした事などを、落ちなく母親に告げた後に、猶、旅籠の倅で歸つてきて、臺所に入つた時に、兼さんが皆に話したその光が、自分の脚下に現はれて、終ひには板の間のうへに自分が坐つてしまつ事々を、更に悉く話し續けた。彼は母親に、それ等を自ら告白することが、それだけ自身を慰安するやうに思はれた。

その又四郎の話の途中に、力彌は恐怖に包まれたのか、疊のうへに胸を俯せて、泣き崩れた。

又四郎の話が終ると、おいんは餘ほど烈しく亢奮して、瞳を沈めながら、

「又、お前は狩られるぞ」と、涙聲で言ひきつた。

顏の汗を拭いてゐた又四郎は、慄然と打れて、おいんの瞳と瞶めあはせた。

その時に、力彌は胸を俄かに起して、おいんの方を向いた。さうして「私は最う一度籍を復し、身を賣つた身代金で、綾葉さんを懇ろに弔つて欲しい。さうして私も綾葉さんに、くれ〳〵も詫の心を盡したい」といふ意味を、涙を拭きながら、強く言つた。

おいんは復た久く默つてゐた。

陰森な夜の氣が、晨の氣に甦つてくるときまで、四人は默りがちのうちに、その部屋に膝頭を鳩めて坐つてゐた。おいんは力彌の願を漸く承認して、「何も皆、前の世の因縁と思はにやならん。實は私も然うして欲しいと思つてはゐたが」と、言ひかけて、復た默り、やがて「お前さんも綾葉さんも、何だか私の娘のやうに思はれてならん」と、言ひ添えて、最後に『綾葉さんを往く所に往かしてあげる爲には、皆が如何なことでも厭ふてはならん。力彌さんには氣の毒な。然し遲うても綾葉さんの三回忌が濟めば、必ず私が迎へにくる。私は今堅く約束する」と、何か決然と言ひきつた。

○

そのうちに夜が明けはなれた。

四人は其の朝に、他の宿に移つた。

力彌は其の日に、直ぐ舊の家に復り、おいんの意見によつて、「綾次」と名を換へて、再び棲をとるやうになつた。

次の日の拂曉に、綾葉の葬式が密かに行はれた。おいんも又四郎も丁二郎も綾次も、其の葬式を送つた。さうして、綾次の身代金で、おいんは綾葉の墓石を建立し、厚い供養を共に手向けた。その施主には、又四郎が成つてゐた。

彼は母親の指圖するまゝに、只だ從順に、悉く默從してゐた。

一七日を濟まして、おいん、又四郎、丁二郎の三人は、伊那町の在に歸つてきた。

馬平は糖尿病の爲に、床に就いてゐた。その介抱の手が離されぬために、おいんの名古屋行が遲れたのであつた。

綾次からは、度々と音信があり、おいんからも安否

を尋ねかはした。

〇

伊那町の本通りに、「まきわ屋」といふ宿屋がある。又四郎は其のまきわ屋に泊つたときに、隣室に一人の少尉が泊りあはせてゐた。その少尉は全く軍服を著けずに、信濃を旅行してゐた。又四郎は彼を軍人だとは知らなかつた。その宿の者達と一所に、一夜圓居したときに、その中の一人であつた少尉は幽靈の話を始めた。

又四郎は其處で自身の懺悔話を、皆に聞かせた。少尉は委曲を盡して、又四郎に質問した。又四郎は現在淺草の馬道あたりに住むでゐる。さうして、東京市の電車の車掌を勤めてゐる。馬平は長生をして一昨年亡くなつた。この物語の人達の姓名は、皆眞實である。

東京市の電車に乘る人は、又四郎を見ることが有らう。

歴代衆議院議長の議長振

鐵拳禪

一　十二議長の顔觸

政界は彈力を失つた。政客の心は彼岸の花桶のやうに干透きた。神經衰弱の顏と、倦怠の欠伸とが、議會の何處にも見られる。強ゐて夫れを破らうとして、現内閣彈劾、或は不信任と云つたやうな爆彈を投ずるが、何等の反響はない。混濁な空氣は、依然として混濁の儘に、不快な眠を貪つてゐる。其處に彈力のない魘されが開かれる。其處に熱病患者の徒らな昂奮がある。あると云へば、唯夫れだけであつて、緊張した氣分などは一瞬時も見られないのだ。其の裡に在つて、昂奮した議長と、昂奮した議員とが、銘々に何かやつて居る。統一の破れた、節制の保たれない、放恣なる自由の中に勝手な熱を吹いて居る。今議會は有史以來の墮落した議會で、現議長は未曾有の劣惡な議長だと稱されてゐる。墮落か、劣惡か、吾人は之を知らず、唯當面の事實は蜂の巣を突ついた喧騒と、夫れを收拾するの苦悶との不體裁を遺憾なく語つてゐる。

有史以來と云つても、我が憲政史は僅々三十年に過ぎぬ。憲法制定は明治二十二年二月十一日、即ち建國二千五百四十九年の紀元節である。而して第一回の總選擧は翌年七月一日に行はれ、第一期帝國議會は其の年十一月二十五日を以て東京に召集された。爾後總選擧の行はるゝこと第十二回に及び、議會の開かるゝこと第三十七回に及んだ。今議會は云ふ迄もなく、第三十七議會である。

總選擧も十二回行はれたが、議長も亦十二人更迭した。尤も總選擧毎に議長の選擧があるのだから、回數だけの人數であるのは別に不思議はないが、再選された人々もあるのだから、もつと少くも可い筈だが、除名されたとか、華族に列せられた爲めに失格したとか、辭職したとか、色んな事故があつて改選を見たので、總選擧の回數と同じく十二と云ふ偶合は面白い。十二支で云へば最う一週り廻つたので、現議長の島田三郎は其の最終の議長だ。之から新規蒔き直しになるのだから、大に箍が緩んで、倦怠氣味になつて、滅茶苦茶になるのも無理はない。或は然うした運命に囚はれてるのかも知れぬ、最終の『亥』に當るので、猪突猛進するのだとすれば、彼れの議長振も亦來者の參考とするに足るであらう。

史を溯つて第一期から現議長まで順に數へれば、中島信行、星亨、楠本正隆、鳩山和夫、片岡健吉、河野廣中、松田正久、杉田定一、長谷場純孝、大岡育造、奧繁三郎、夫れから今の島田と云ふ顔觸になる。就中在任年月の長かつたのは片岡、長谷場、松田で、短命なのは河野であつた。星は除名され、楠本は男爵となつた爲めに其の椅子を去り、長谷場は文相、大岡も亦文相に就任した爲めに中途辭職した。が長谷場は、中に大岡を挾んで再び議長になつた。此の更迭を漫然觀過すれば何でも無いが、仔細に觀察する時は、議會の大勢――政黨の勢力と非常の關係を持つてゐるのだ。だから議長の顔觸を見ただけで、當時各政黨の勢力消長の如何を知ることが出來る。併し本篇は夫れを知るの目的でないから須く其の方面の研究を略して、其の議長振を拜見する事にしよう。

二　最初の衆議院議長

何樣最初の議長だ。――如何に理窟を拔きにしても、中島信行を指して斯う云はねばならぬ。何樣最初の議長であるから、典故慣例など云ふ七面倒臭いものに囚はれないが、範を後世に貽すのだから、其の言動に苟もする事が出來ぬ。議長の創造者――若し然う云ふことが云へるなら彼れは議長型を作るべき使命を帶びて現はれた人だ。善かれ惡しかれ議長型の創造者だ。殊に當時の代議士は人物揃で、參政權を得た勝利の輝きに精神が緊張した。一人も政治を餘興や遊戯にやる者の無いと云ふ程に、眞面目な態度を持つて居た。彼等は少くとも人民の選良だと云ふ抱負、確信、氣節を持つて居た。此の間に推されて議長になつたのだから彼れの任は頗る重いのである。彼れも亦其の重任を覺悟して其の椅子に凭つたやうに、議長の沈著と、公平無比とを以て事を行らうとした。其の議長振に、幾多の不熟があつたにしても、其の行動に於て恕さるべき

ものである。

　衆議院議長の選擧！議場の心臓は皆一つに躍つた。召集の當日である。翰長曾根荒助は假に議長席に著いた。而して行はれた選擧の、三人の候補者中から勅任された筆頭の一人は中島であつた。彼れの議場に於て發した最初の一言は、就任の挨拶である。其の聲が如何にも低く、喧噪の議場ならば徹底すまいと思はれる程に、其の音量が乏しかつた。彼れは坂本龍馬の海援隊の參謀となり、次で伯板垣等と自由黨を組織した人物で、王事にも政治にも奔走したが、喉頭の喇叭を奏する雄辯家では無かつた。温厚の表皮で剛氣を包み、而も凛とした所は、却て衆望の上に立つ議長向きの性格と見えた。最初の全院委員長の選擧は、彼れが議長の下に行はれた。彼れは議長席に在つて、初め其の投票權を行はなかつたが、將に開票せんとするに臨んで此の權利を行使した態度は、洵に鮮かなものであつた。爾後議長は餘り此の權利を行使しないやうだが、議長に此の權利のあるは、憲法第四十七條の場合のみで無いことを明かにした。此處までは無難であつたが、第一投票の結果過半數を得た者がないので、更に最多數の投票を得た二名に就て決選投票を行ふ、夫れでも過半數を得た者が無いと來た。處で、衆議院規則の解釋に就て紛議が生じ、其の解釋の可否を採決する時分には、議場は可なり荒れて居た。夫れに其の採決の題目が議員に理解が出來なかつたり、採決の方法が拙かつたりしたので、まるで麻のやうに亂れた。が、振鈴のお蔭で喧噪が靜まり、規則に修正を加へて、やつと其の選擧を結了することが出來た。

何樣議事に熱心でも、勝手の分らぬ議員が多いので、ともすれば喧噪に陷る。夫れを制止する議長の骨折は並大抵の者で無かつた。で、そんな場合には、彼れは屹度振鈴を用ひた。振鈴は、彼れの音量を補ふ最善の方法であつた。振鈴議長の名、是に於てか有りと云ひたいのである。

　一紛擾が去つて第二の紛擾が來た。外相青木が答辯の爲めに縷々數萬言を費したが、毫も要領を得ないので質問より質問に移り、其の質問が何時終るとも見えなかつたので、外相は閾を排して場外に去つた。すると當局大臣不親切の聲が四隅に起り、怒號喧囂を極めた。再び外相の出席を求めて答辯させることとの動議を可決して鎭靜に歸したが、翌日外相は質問者の要求に應ずることが出來ぬと竹篦返しの覆牒を寄越したものだから、議場は再び紛擾を新にしたが、結局空騷ぎに終つた。次が第二議會に於ける海相樺山の演説である。海相が薩閥の爲めに氣を吐き、頻りに海軍の功績を自慢したので、議場が鼎のやうに沸き返り、叱る聲、罵る聲、笑ふ聲が四方に起つて、議長中島は殆んど其の整理に苦んだ。然るに海相は平氣で演説を續け、傍若無人にも薩長政府の讚美を試みたので、議會の反感は愈々高潮され、憤激怒罵の聲が益々盛んになつた。さうして議場は秒一秒と不穩の狀を呈するので、彼れは海相の背後より演説制止の命を與へたが、海相は聞かぬ振をして尚演説を續ける。で、滿場の憤怒は一時に勃發し、『議場の神聖を蔑視する大臣、議長の命令を聽かぬ大臣は場外に放逐せよ』と云ふ聲が荒浪のやうに押寄せ、中には演壇を目掛けて驅け上る者もあつた。彼れは頻りに振鈴を打鳴した。海相

は漸く悟つたかの如く壇を下つたので、議場は風の吹き去つた後の靜肅に歸つたが、海相の不法無禮を詰り、其の妄言に酬ゆる演説は容易に止まなかつた。當時の紛擾は大抵こんな風に黨人對官僚の論爭で、今日より見れば議場整理は樂であつたが、彼れの不慣れと、議員の不慣れと、政府者の傲慢とは何時も騷ぎを大きくした。其の爲めに、彼れを議長の不適才と見るのは、聊か酷であらう。

三 剛腹議長か妖星か

妖星現はる！ 政界に妖星現はる!! パリストル星亨が第二回の總選擧に選ばれて議會に送られた時、誰云ふとなく斯う云ふ聲が、蘆の葉の戰慄を帶びて夫れから夫れへと傳はつた。此の時の總選擧は解散後の夫れで、激烈なる選擧干渉が行はれた。而も彼れは八名程の負傷者を出した激戰地の栃木縣より選出され、民軍の中堅たる自由黨に隱然たる大勢力を擁して居た。妖星現はるの恐怖は獨り吏黨の恐怖のみでなく、政界全體の恐怖のやうであつた。

にも拘らず、彼れは推されて議長となつた。實際は『にも拘らず』でなく、其の異彩を認められたか、其の偉大を識られたかに依つて、議長に推されたと信ずべき理由もある。が、兎に角彼れは振鈴議長の後を承けて議長の椅子を占めた。さうして傲然と議長席に據つて、炯然と三百の頭顱を睥睨した。眉間に立皺を寄せ、無髯の肥大漢が、近眼鏡の底から鋭い眼を輝かす時は、議場は隼に狙はれた雀の群のやうにも見えた。何しろどつしり腰を下せば、梃でも動きさうで無かつた、其處に彼れの剛腹と、大膽なる沈着とを認めることが出來る。夫れに彼れの聲は、巨鐘を打鳴したやうな音聲と餘韻を持つて居た。腹の中では始終他を冷笑して居るやうだが、案外に親味があつて、大なる魔力を備へて居た。彼れの人から好かれもし、又憎まれもした點は此處にあつた。然らば、彼れの議長振は如何。果して此の魔力を發揮し、議員を魅了し得たであらうか。

彼れは惡く云へば獨斷的であつたが、才に任せて手腕を試み、手腕の働くに任せて議案を處理すると云つた風で、片付けるものは、片ッ端から颯さと片付けて了ふ。其の手際が、如何にも小氣味よく思はれた。けれども、彼れの意見が何でも行はれたと云ふ譯でない。第三議會に、追加豫算案で兩院の衝突した時、某議員が一動議を起したので、之を審査する爲めに全院委員會を開かうとした。其の時彼れは、會の範圍を決定すべく三個の討論條件を揭げて衆議に諮うたが、議院は夫れを採用しないで、忽ちに會議に附された事もあつた。又彼れは專斷で政府の要求を容れ、議事日程を變更し、夫れを議場に宣告すると、議員交も起つて彼れを非難し、果は大騷擾を惹起した事もあつた。が、彼れは飽まで落著き拂つて、議長の處置の當否を議場に問はうと云ふので起立を命じた。議員は何が何やら解らず騷いでゐる際に、忽ち『起立多數』と宣言したと、此の表決に異議を唱へる者があつたので、指名點呼と云ふ事になつた。處が何の指名點呼かと詰る者、違法の點呼に應ずる事ができぬと怒鳴る者、拳を以て卓を打つ者、靴で以て床を鳴す者、喧々囂々、議場の

神聖も何もあつたものでない。彼れは遂に尾崎行雄外四名に退場を命じ其の命を用ひざる者は守衛長に抓み出させて、點呼を强行した、此の喜劇的表決の下に、議長は議事日程を變更するの權能がある事となり、彼れの言分が通つた。『行らせれば行るたちさ』の一語は、此の際彼れを評するに最も適當な評語であつた。

然るに彼れは剛腹の爲めに怨を買ひ、第五議會に於て、非自由黨六派の聯合軍に攻め立てられ、院外に放逐さるゝに至つた。事の起因は、彼れが取引所問題に關して深夜密かに政商と會見したのは不可いと云ふにある。溫厚の議長ならば、辭職位で事濟になつたであらうが、此處が利かぬ氣の議長であるから治らない。開會の劈頭、議長不信任問題の動議が起つた。彼れは『內に顧みて疚しい所がないから、問題の決如何に關せず之を守るの義務はないが、事一身に關する事だから德義上姑く議長席を副議長に讓らう』と橫柄に言ひ放つて、其の席を退いた。時の副議長は楠本正隆である。彼れは議長席に著き、會議の結果、議長自決の議を可決した。が、星は院議に應ぜず、再び現はれて議長席に着き『先刻陳べた通り內に顧みて疚しい所が無いのだから、本件の決議があるけれども、之に從ふことが出來ぬ。で、此の問題は爰に終結したのだ。之から日程の議事に入らう』と、平氣の平左だ。議員は皆呆氣に取られた。そこで一動議が起り、議長に熟考の時間を與へる事となつて、其の日の會議を閉ぢた。翌日も星は平然として議長席に着いた。又緊要動議が起つて休會する事となつた。其の翌日も亦、彼れは平氣でやつて來た。遂に議長不信任の上奏案が提出された。將に其の議事に入らんとする時、彼れは『事一身に關するから、德義上姑く此の席を避けよう』と、嚴然闥を排して去つた。楠本が代つて議長席に着いた。甲論乙駁の末、多數で本案は通過したが、彼れは平氣で復席し『先日の議長不信任の決議は非立憲の動作で、帝國憲法史上に惡例を貽すものと認めるから、予は如何なる決議を蒙るも、斷然辭職せざる決心であつた。が、予の進退の事を以て天聞に訴へ、宸襟を惱まし奉るに至つては恐懼に堪へない。予は數日間此の席を副議長に讓つて、自ら謹愼しよう』と宣言したが、其後彼れは出席しなかつた。然るに上奏案に對しては『更に院議を盡せ』との思召あり。副議長は院議を定めて『恐懼の至に堪へず』と勅答するの餘儀なきに至り、議長不信任決議の目的を達することが出來なかつた。

處で今度は、星が先日の議場で『之を守る責任は無い』と云つた言葉尻を捉へて、懲罰委員に附するの動議を可決し、審査の結果、彼れをして議場に謝辭を述べさせる事にしたが、秘密會議の末一週間の出席停止と云ふ嚴罰を課する事となつた。其の期日が滿了すると、彼れは又平氣で議長席に着いた。二三の議事を進めた後、又もや『本日議長席に就いて其の職務を行ふのは、院議を侮蔑し、其の體面を汚すものだから、懲罰委員に附せんことを要求する』と云ふ緊急動議が起つた。けれども今回は、席を副議長に讓らず、傲然として議場を睥睨した。如何程剛腹でも此の不意打には多少慌てたと見えて『議長出席は果して懲罰事犯なるや否やを先決問題として討議しよう』と云つた。其の違法を難詰する聲は

四方に起つた。理が非でも彼れは之を押通さうしたが、一人も可とする者が無いので遂に屈して、悄然として席を去つた。而して彼れは、院議に依つて除名を決行され、院外に放逐されて了つた。併し臨時總選擧の結果、再び議會に返られ、其の猛威を揮つたのは人の知る所である。

三　楠本・鳩山・片岡・河野

非自由黨六派が星を逐うて、其の後釜に据えたのは楠本である。彼れは星の下に副となり、星放逐の議事を進行したが、然う大した手腕家ではなかつた。唯星が餘りに行り過ぎた後を承けたので、其の無能なやうに見える穏健な遣口が信望を繋いだのである。夫れに議長席に著けば、禿げ上つた額、凛とした眼、長い顔が、如何にも品格が有りさうに見えた。第六議會の民黨提出の彈劾上奏案開議の際などは、紛議雜然として起つて、議場の秩序は全く亂れた。斯うなると、彼れの品格ある態度だけでは制し切れず、議長席に突立つて、手などを打振つて『静粛に静粛に』と云つたが、其の音聲が議場に徹底しなかつたものだ。が、腹が出來てるので、然う周章狼狽せずに收拾し得たやうであつた。爾來第九議會まで在職し、漸く場馴れがしたので、議長振も少しは見られる樣になつた。星に比すれば、其の齒切れの善くない所、煮え切らない所は、其の短所であつたと思ふ。日清戰役の功で華族に列せられ、彼れの議長としての生命は其處に終つた。

法博鳩山和夫は松隈内閣時代の議長で、議會の形勢は頗る險惡を呈して居た。風采は花奧として居るが、頭腦が明晰で、辯舌にも達して居るから、議長としては必ずしも不適任ではなかつた。唯時の外相大隈の准乾兒で、大隈から目八方に見て居られるのが損な立場であつた。だから大隈の差出口を制止することが出來ず、議場の紛擾を惹起した事もあつた。何しろ大隈は傍若無人で、饒舌家と來て居るから、議員の質問には一々根氣よく答辯する。所が、其の答辯中、一議員が發言しようとした。大隈は一言の下に叱り付けて、之を制した。議長鳩山は目をぱちくつて居た。すると、之が問題になつた。非政府黨の連中は大に激昂して『議場を整理するは議長の職權で、國務大臣の關すべき限ではない』と數鬪いた。外相は面倒臭いと思つたものか、闘を排して去つた。議場は暫く外相失言問題の緊急動議で賑つたが、遂に否決されて、小ぜりあひの一幕が終つた。鳩山も始めて重荷を下したやうに晴々しい顔になつた。危く議長試驗に落第せんとした彼れは、纔かに其の信望を繫いだと云つては、ちと大袈裟だが、其の手腕を此の機微に認められたのは事實だ。彼れは之から出立して、其の手際は日一日と巧くなつた。殊に英照皇太后大喪發表協贊の際、彼れが恭しく起つて議案を朗讀したのは、大に其の體を得たものだと稱された。此の一種の莊重型は彼れの造つたもので、將來に範を貽したものだ。

片岡健吉は自由黨の領袖で、第十二議會より第十八議會まで議長の椅子を占めた。至つて謹直な人て、所謂蛙鳴蟬噪の徒とは其の選を異にする。演說は餘り行らない方であつたが、行れば必ず立派に行つてのけた。

性來寡言で、容易に蘊蓄を吐かないので、其の深沈な態度に敬服されて居た。雄辯家でもなく、手腕家でもなく、寧ろ徳望家と云つた風な人物であつた。辛烈果斷の荒型たる星に配して、此の温和な優型に、確かに黨内の調和劑たるを失はなかつた。既に調和劑であり、徳望家であるから、議長としての遣口も、才氣縱横な事態はなく、公平無私の態度で議員に接した。第十七議會の時、地租增徴案で政府と衝突したので、貴族院議長の公近衞は解散の不幸を見んことを憂ひて、片岡に會見して調停の任に當らうと申し出でたが、彼れは到底成功し難いことを説いて、寧ろ中止するが可からんと勸告した。果して此の調停は圓滿なる解決を見ず、行く所まで行かねば止まなかつた。之を以て見るも片岡の温和の中に、奪ふべからざる確信を裹んで居ることが解る。從つて彼れの議長としての動作も、輕躁な失敗はなく、行るだけの事は行つてのけた。

河野廣中は自由民權の權化のやうに持て囃された時代もあり、第十九議會に議長に推された時も、非常な人氣であつた。尤もあの風采骨柄は立派で、黃色な咳拂をやつて落着き拂つた所などは、何う見ても申分のない議長であつた。根が被煽動家で、煽り立てられると、何を行り出すか解らぬ所に、危險は無いでも無かつた。其の人物が、對露問題の囂々たる際に議長に推された。いざ奉答文の議事に取掛かると、彼れは美辭の中から銀鈴のやうな聲を奪かせて、『奉答文は議長に於て起草したのがあるから、夫れを諸君に御諮りをする』とばかりで、沈重の態度で奉答文を朗讀した。其の文中に『内政は彌縫を事とし、外交は機宜を失す』の彈劾的文字のある事には氣付かずに、滿場破れるばかりの拍手を以て迎へた。河野は更に念を押して『此の奉答文に異議なくば、宮中の御都合を伺つた上に、奉内捧呈の手續を行はう』と宣告したが、議場は再び喝采して異議なしと叫んだ。夫れで散會を告げたが、何だ變な事もあるものだと、眉に唾を付けたのは議員等である。漸く理智の眼が明いて見ると、狐に魅まれた事が解つた。議長室に赴いて前例に背いたことを詰ると、彼れは信ずる所あつて起草したのだと答へる。或者が再議の要求書を突き付けると、彼れは拒絶の覆牒を與へる。始末に負へないので、各派聯合して議長を懲罰に附することに内議したが、大勢は矢張再議否認に傾いて居た。翌日解散の命が下つたので、奉答文は捧呈せずに終つた。彼れの議長振と云へば、たつた是れだけのものだが、議會史上に特異の印象を殘した。

四　松田・杉田・長谷場

片岡歿後の政友會で衆望を荷ふ者は、不得要領の松田正久であつた。聯盟の必要上、一たびは議長を河野に讓つたが、總選擧後の形勢激變して議長以下の要地は多く政友會で占めた。松田は憲政黨内閣の藏相となり、伊藤内閣の文相となつて後、議長に就任したので、實際信望もあつたし、又貫祿も備つて居た。羅漢のやうな頭、凹んだ眼、[illegible]で物言ふやうな所に、何とも云へぬ崇嚴さがあつた。然らば端然と構へて居たかと云ふに、必ずしも然うでない。時々は滑稽が笑ふやうに、頰の肉の落ち來

んだ所に微笑を湛へる。『諸君にお詫りを致しますが』と來ると、春風が議場に吹き渡るやうな感じがした。とまあ斯様な調子で、彼れは議員の反感を買ふとか、喧嘩腰になるとか、挑戰的態度を示すことは毫も無かつた。反對派の議員にも、成るべく論議を盡させると云ふ方針で進んだ。穩健公平の四字は、彼れの議長振を説明するに足ると思ふ。夫れを齒痒いと云つて憤つたりするのは、議長を自黨の用に供せんとする黨人の我儘と云ふものだ。

松田が三期だけて失敗すると、妙な機會で擔がれたのは杉田定一だ。彼れは北信派の人望家で却々の野心家である。副議長に滿足せず、議長か大臣かに成りたいと、事毎に運動を開始する。政友會でも其の運動を五月蠅がつて、議長に一度は祭り込んだら可からうと云ふ者もあつた。處が、長谷場純孝が九州の勢力を率ゐて、頻りに議長に成りたがつて居る。彼れには反對者も尠くないので、自ら進んで江原素六を推す事にした。是に於て黨内に猛烈なる爭奪戰が開かれ、遂に杉田の勝利に歸した。固より感情で擔がれたのだから、議長の適材でない。緊急動議が突發したり、採決に異議があつたりすると、間誤つく様な事が多かつた。が流石に多年政界に馳驅しただけに、泰然として議長席に納まり、議案を片付けることは手馴れたものであつた。難問題さへ起らなければ、空虚な頭腦を見せる事はなかつた。

其の後を承けて議長に据つたのは、前年啀み合つた長谷場だ。彼れは杉田よりは策もあり、略もあり、機轉も利く男だ。音聲も清澄ではないが夫れを張りあげれば、議場の隅から隅まで響き渡るやうな力があつた。最初は小事に拘泥する氣味があつて、十分の手腕を揮へなかつたが、追々上達して、第二十七議會時分から、其の採決振は議會の一名物となつた。短く刈り込んだ胡麻鹽頭、たるみを帶びた眼瞼が、議長席に其の特徴を見せると、眼の光がサアチライトのやうに滿場に展開する。さうして自問自答しながら、鎚音を揮つて議案を片付けて行く。其の早さと云つたら、丁度蓄音機の圓盤が廻轉するやうであつた。採決も亦一種の技巧で、巧くやれば議員の目を喜ばせて、倦怠を防ぐに足るものなる事は始めて彼れの技巧に依つて證明された。最後に大岡の後を承けて議長となり、議場の紛擾を制する爲めに大聲を發し、其の爲め宿痾を再發して不歸の客となつたのは、有史以來の悲壯事であつた。

五　大正初頭の二議長

三十議會の頃、長谷場が文相に就任したので、其の後任に擧げられたのは大岡育造だ。彼れは日糖事件た豫審調書に其の名が載つて居るとか、人格に病む所があるとか、可なり非難の多い人である。元來が官僚の爪牙たる國民協會の領袖であつたので、政友會に入つても餘り好感を以て迎へられなかつた。夫れで何程か僻みを持つて居た。自ら舊自由黨員に遠ざかると云つた風であつた。夫れ等が原因で姑く不遇で居たのだが、長谷場が大臣となり。杉田が勅選となつたので、漸くお鉢が廻つて來た。議長席に据えて見ると、却つて長谷場よりも重味があつて、何となく緊

張を感ずる。其の緊張は、勿論平和を意味するものでなく、好戰的の緊張である。是れは彼れの人格の反映でもあらうが、彼れの態度、彼れの言語、其の總てが敢戰を喚る者のやうに思はれた。若い時分は八字髯を蓄へて居たが、彼れは其の朝鮮的亡國鬚なるに厭氣がさしてか、夫れを剃り落して了つた。爾來無髯で居る者だから、生來の無髯のやうに思ふ者が多い。此の無髯の人が、赤ら顔の、廣い額を見せて、傲然と議長席に免るのだから溜らない。神經質の議員なら、眞ぐ其の顔を見ただけでも喧嘩したくなるに相違ない。處で彼れの遣口は何うかと云ふに、動もすれば黨派的偏頗に陷し、事に臨んで議長の職權を極端まで濫用するの弊があつた。で、さもない事で、議場に波瀾が激成されるのであつた。

三十一議會は、海軍收賄問題の突發した議會で、政友會の爲めに實に容易ならぬ議會であつた。大正政變以來、政客の眼の色が變つて居るから、生温い攻擊、恒例の彈劾位では、承知が出來なかつた。切つて切つて、切り捲らなければ止まざるの概があつた。斯うなると、政友會でも山本内閣を擁護する爲に、諸有手段を講ぜざるを得なかつた。多數黨の横暴！　夫れが狂暴の濁流のやうに議場に溢れて來た。決議案の議場は其の第一例であつた。非政友派の發言中、政友派は盛んに彌次り立てる。政友派の發言中、又非政友派が野次る。黑須龍太郎の如きは盛んに野次る。始め政友派の彌次に寛大であつた議長は、黑須に對しては再三の注意を與へた。黑須は益々彌次の面目を發揮して、何うしても默從せぬ。議長に滿面朱を濺いで激昂し、黑須に退場を命じ、守衞をして抓み出させようとした。すると、非政友派は非常に激昂し、議場は火事場のやうな騷ぎを演じて、何うする事も出來ぬ。議長は止むなく退場命令を取消し、漸く解決するを得た。

其の第二例は、豫算案議場に於ける尾崎の發言を妨害した事件である。中正會の尾崎行雄は、豫算案に對する獨立の修正意見を述ぶべく豫て發言通告の手續を經て居た。其の順序が來て、いざ登壇となると、一議員は『尾崎の修正は獨立の修正案と認める事が出來ぬ。武富案の賛成意見である。宜しく後廻しにすべきだ』と云ふ動議を起した。議長は此の動議に同じて、尾崎を差措いて井上角五郎に登壇を命じた。そこで非政友派は非常に激昂し、議場は收拾すべからざる大混亂を惹起した。議長は茫然自失、議場整理の能力を缺いて了つた。法博花井の妥協的注文で議場は稍鎭靜したが、議長は再び井上の登壇を促したので、再び鼎の沸き返るやうな混亂に陷つた。議長は窮餘の一策として、尾崎に發言を許すべきや否やを議場に諮り、政友會總起立の結果、許すべからずと宣告するや、議場は又々大混亂を來し、議長席は議員で以て包圍さるゝに至つた。花井は再び動議を起したので漸く鎭靜したが、議場は三たび井上の登壇を促したので、議場は三たび騷擾の巷と化した。議長は止むなく、休憩を宣言するに至つた。休憩一時間後、妥協の成立せざる儘で會議に臨んだ。政友派は依然として前説を固執し、議長其の可否を記名投票に問ふたが、非政友派は一人の之に應ずる者なく、否とするもの零と云ふ奇怪なる結果を示した。井上は四度目に漸く登壇したが、非政友派の妨害に遇つて、何を

辯ずるのか少しも聽き取れなかつた。次で尾崎は登壇するを得たが、其發言は武官案の修正意見を陳ぶるものとして許されたと云ふ事であつた。

其他綾部及藏原の懲罰事件、加賀毆打事件等が起り、廢却案議場で、未だ何らの討論をさせずに、討論終結としようとする樣なことをしたのも、政友會が惡いに相違ないが、議長は議長の職權を嚴正に執行せずに、徒らに、與黨の爲めのみを謀つたからである。彼れ大岡の文相となつて議長席を去り、長谷場の來つて之に就いたのは、却て反對黨の感情を緩和する所以であつた。

長谷場の沒後、選ばれたのは疑問の奧繁三郎だ。黨內では不人望で危く村野に蹴落される所であつたが、彼れの讓歩に依つて漸く希望を達するを得た。彼れは第三十五議會まで、議會の數は多く踏んだが、臨時議會が多かつたので、大した難關に逢はなかつた。と云ふのは政友會は野黨となつて、別に私曲を行ふ必要もなく、公平に行れば可かつたせゐでも有らうが、紛擾に手古摺るやうは事もなくて濟んだ。何時も酒氣を借りて元氣を付け、『御異議がありましよまいか』で行つて退けたが、採決振は先づ普通であつた。

六　現議長の議長振

一世の能辯家島田三郎は、大隈内閣の下に、第三十六議會から議長の手習を始めた。老人の手習のせゐでもあらうが、容易に上達せぬ。偶ま巧く書からとすると、却て爲尻を出すと云つた風で、自分で氣を苛立たせて居るやうである。攻擊軍の鬪將振は立派なものであつたが、議長席に着くと丸で別人の樣に見劣りがする。頰の曲線が波打つて、始終笑つてるやうな所は、如何にも和風煦日の景であるが、天氣は俄かに時雨空のやうに變り易い。議長の冷靜と沈着を缺いて、往々鬪將の昂奮を露はす。凡而粗な男が、大岡の圖太い所を見せるのだから、議場の紛擾は彌が上にも大きくなる。火に油を注ぐと云ふ形容は、彼れの議長振の或場合を遺憾なく說明するものであらう。

議長島田の當惑初は、特別議會の五日目である。一議員に『速記錄の箕浦起草委員長の氏名の下に括孤して立憲同志會とあるが、これは法規先例に據られたるものか如何』と突込まれ、『追て取調の上答辯』と切り拔けたのは、瞬間の當惑後であつた。之は彼れが第一關で、其の次が賣國奴問題の紛擾である。外相加藤の演說中、『賣國奴！』と罵つた者がある。懲罰々々と云ふ怒號が同志會側から起つた。彼れは其の喧騷を排して、望月圭介に向ひ、『只今の失言を取消さば、今回に限り懲罰に問はぬ』と公平振を示す。望月は『激昂の餘り失言したから前言を取消す』と答へる。彼れは『激昂の餘りと云ふ意味では取消にならぬ、良心より取消さるゝか』と訊き返す。其の間に議場は亂れる。彼れは飽迄も望月の意志を聞かうとするが、望月は答へぬ。議場は益々喧囂を來す。懲罰の連呼が聞える。彼れが望月に注意すると、小聲で『失言を取消す』と云つたが、勿論一般には聞えぬ。彼れは『夫れにて宜しきや』と云つたが、一議員は懲罰の動議を起した。議場は又もや蜂のやうに亂れる。彼れは『討

論を用ひず採決しよう』と懲罰の動議賛成者に起立を命じ、忽ち『起立少數』と宣告した。與黨側の不平があつたが、野黨側は其の公平を冷笑した。

一波起て萬波起る、此の失言問題の餘波は容易に收まらぬ。翌々日の議場に、一議員が議長の處置を非難し、職權と注意との區別を明かにせん事を迫つたので、與黨側は無用を連呼し、一氣に揉み潰さうとする。と、野黨側でも負けては居ず。怒鳴る、喚く、卓を叩く、足を踏み鳴す、議場騒然耳を聾するばかりである。議長は茫然自失、色蒼ざめて居る。發言要求の聲が四方に起つた。許された者は登壇して頻りに辯ずる。答辯の限に非ずと與黨側で彌次る。議長は『決して命令要求を爲したのでないことは明かでないか。若し不服ならば採決するの外ない』と頑張ると、壇上に飛び上つて發言を求める者があると云ふ騒ぎだ。議長は野黨側から公平の態度を強要されて、一時議長席を副議長花井に讓るの止むなきに至つた。彼れの失態は總て此の通りで、議場整理の能力ないことを疑はしめた。

夫れより幾日も經たぬに、衆議院議員法中改正案の議事があつた。此の際にも、採決を宣告すると、野黨は何を採決するのかと騒ぎ立てが、與黨は一齊に起立したので『多數』と宣告して委員附託とした。刹那、異議ありと呼んで演壇に飛び上り、發言を求めた一議員があつたが、議長はさつと關外に去つた。これが問題となつて、議長は議場に失態を陳謝するに至つた。さうして彼れの無能は愈よ暴露され、次で內閣不信任案議場の閉鎖突破事件となり、議長不信任案の討議となり、武藤金吉退場問題となりて、第三十六議會最後の幕は下りた。が、今議會の幕が明くと、議長失策の宣告で衝突の端を啓いた。次で佐々木安五郎懲罰問題となり、次で議長の失言取消問題となり、彈劾案の議場となりて未曾有の混亂を惹起し、車夫馬丁の喧嘩かなんぞの樣な感を抱かせた。事毎に斯樣な混亂を惹起すのは、議員の不眞面目にも依らうが、議長島田の人物、手腕が議場の信服を買ふに足らぬ爲めでは無からうか。彼れは何かと云ふと直ぐ規則を振廻し、『不規則の發言を禁じます』とか『規則をお守りなさい』とか『規則に依つて警告します』とか餘計な事を云ふのみならず、忽ち昂奮し、忽ち喧嘩腰になる。議場の反感は、之が爲めに益々高潮するのだ。己れ自ら激昂して他を制するの不可なるは、議長大岡の失敗が何より確かな證言である。彼れたるもの、大に鑑みる所なくてはならぬ。

探梅

黒頭巾

其一

●南窓を横にし、暖かき春光を、吾が片頬（カタホ）に浴びつゝ、壁に向ひ、数莖の水仙花に對して筆を執る。

◎吾が卓上は、書卷、紙筆、雜然たる間を、少しく按排して、此の稿を起す。輝々たる晴日、硝子窓を透し

て、吾が手甲の上に光る。隣樓の女、今朝は、早くより琴聲を送り來るあり。

◉水仙花、滿開の三四莖、十日前の夜、携へ歸りて硝子瓶に挿み、高く、卓上に置く。瀟洒たる清容、少しも衰へず。すらりとして嫂婷たる女の姿かな。吾が卓を打つとき、花も亦た點頭しつゝ、梅花を思ひて想を練りつゝある吾輩に、嫣然一笑するに似たりけり。

◉梅花を思ひつゝ、水仙花を見れば、人を想ふの時、其の伴侶に逢ふが如し。眼前、知己に對するの情、太だ濃やかなるものありと雖、これに因つて、更に、人を想ふの心、切なるを加へずんばあらず。花若し人間なりせば、まさに、水仙花に依つて、梅花に傳語せんことを思ふ。

◉今朝、吾輩、卓上の氣分、清奇、言ふ可らず。水仙花を前にして、靜かにマッチを擦り、火を葉卷(ハマキ)に點ず。薄紫の烟、裊々として、卷きて騰る。烟の騰ること猶ほ少く、葉頭の白灰、銀白を帶びて、固塊を爲し、鮮やかに、堆かく、ひだを刻みて、疊み上げ行く。

◉實に、烟ぶりゆく葉卷の初の銀白塊の美しさよ。尖(セン)頭(トウ)五六分はかりの間、一端稍とがりて、末、ふつくらと膨らまり、火境一線は、微に痩せたり。此の銀白塊は、恍惚として、眞に、清き梅花の大なる一瓣を指頭に挿みたらんが如く、諦視しつゝあれば、銀白塊の底より、細々と、薄烟の、漏れてのぼりゆくは、髣髴として、紅旭に朝靄の消え行く梅林に、花に綢繆して細烟の、ひろがり行くならずんばあらず。

其二

◉春暖、今年の如きは稀なり。恐らくは吾輩の記憶する、尤も暖かき春なるべし。梅花は陽曆の冬の中に咲けども、關東は、つねに後くる。今年ばかりは、南邊の籬落、豐かに日を受るところ、清香、新春に薰じたるも少からざるべし。

◉吾輩、新春に、吾が小女と町に漫步して、盆栽の梅花一鉢を購ひ來る。枝容简疎、蕾ばかりにして、僅に一花を著く。

◉此の梅花鉢を南椽に放在するに、未だ十日ならずして、滿梢の淺紅珠、悉く破蕾して、蕾に似合はぬ大なる花を著く。吾輩の知らざりし間に、滿鉢の盛春となりぬ。吾輩は、此の春、未だ鶯語を聞きたりとも覺えず。此の可憐の花、ひそかに流鶯一聲を聽き得たりしや、否や。

◉吾が家は、梅花の蔭に門あり。春來、出入の時、仰いで、萬紅珠の燦々として、門を壓するを見る。時に、濟月の夕、歸り來りて、門前に佇みて望めば、宛然、一幅の墨梅の圖を、空に懸けたるに似たり。

◉數日、匆卒として過ぎ行きぬ。一朝、門を出んとして、忽然として仰ぎ見れば、南枝、梢頭、縹緲として數十花を捧げ、春色、既に、他の萬紅珠を漂はし來る。謡開の花、俯して、吾輩の懶けるを笑ふかと想ふ刹那、花の嬌態、一時に煥發するを見る。

其三

◉今春、吾輩、未だ南船北馬の途に上らず、征衣、空しく藏して、既に繋がれたる消防車の馬の如くなり。而して吾輩、日々、半ばを書齋の中に暮らして、都門の外に、一歩を出でず。未だ郊外の花を知らず。初めて吾が門頭の梅花を見たるなり。

◉花信、紛々として、遠近より到る。吾輩の征意を挑發して已まず。熱海、小田原は花、共に既に晩し。杉田は尙ほ早かるべし。水戸の好文亭は、梅花の名所となせども、花期尤も後くる。今年の暄暖を以てすと雖、師、三月に及ぶべし。青梅の梅花、清溪、寒村に磅礴して、梅花の理想境なりといへど、吾輩、宿緣、未だ熟せざるにや、一游の機を得ず。

◉吾輩、當年、本田種竹が青梅の十二律を讀み、其の刻意、以て、梅花を寫すの精、古詩人以外、一頭地を抽けるを感ず。然れども此の詩篇、恐らくは、宿構に屬するものならん。豫め梅花を寫して、境に觸れて、篇を成すものに非ずや。詩意、實に、梅花に專にして、探梅の興趣に、熱せず。探梅は興趣に在り。探梅の詩は、感興を描く可きなり。

◉吾輩は、寧ろ高野竹隱の「三人三處夢梅花」の一句を忘れず。三人、約して梅花を青梅に探る。尙ほ家を出でざるの時、三人、三處、齊しく探梅を夢みん。而して探梅の歸途、既に離散して、三人、三處、殘燈の下、再び探梅を夢みずんばあらざるべし。

◉吾輩、俳人鵜澤四丁の名を聞き、未だ其の人を識らず。近藤京魚に依つて、彼が職務を帶びて、青梅に居るを知る。蓋し詩人にして、梅花郷に祿仕する者は古今に無し。彼が詩嚢を開かば、梅花、繽紛として飛ばん。

其四

●花信の中、三溪園の綸葉書を送り來る者あり。右に森の岡あり、落木のかげに鳥居見ゆ。岡を繞つて池なり。大なる木橋を架し、橋を渡るの人二三、而して橋の左畔、老幹卓落、疎影橫斜、影、悉く水に蘸す。老梅花の盛開を想ふ。

●去秋、美術院に於ける下村觀山の「弱法師」金屏風の大なるに、布置、描法の精練なる、彼が近來の傑作たるは世評あり。圖面に一杯に、老幹の梅花を描き、一々大枝、小枝、梢頭、數千の梅花を寫すの精妙なる、單に、之れを梅花圖と見れば、此の如き大作、從來、稀觀のものなるべし。

●雪舟が壽星の圖、梅花を點綴して、花彩、燦爛、流石に大手筆たるに背かず。然れども多、且つ精に、梅花を寫せしこと、觀山の如きは得易からず。佐々木縮往、老來、屢、好んで墨梅を畫き、頗る梅花の神韻を得る。墨梅の大作、彼の如きは、又稀なるべし。

●墨梅の畫は、概ね筆意、氣韻を貴び、描寫は則ち粗と寒とに流れ易し。墨梅の大作を描き得て、天上千萬星、槎枒たる小枝、大枝に珠貫し、陸離、燦爛たるの光景を現出するは、詩興滿腹、筆端に詩ある者に非れば能はず。彼が、濟雲微月の夜、梅花下に逍遙し、低徊、多時、花神と默契し來りて、欣然、獨り微笑したりしを想像せずんばあらず。

●古來、能く梅花を描き得たる者は、必らず多く梅花を觀、梅花に心醉したる者ならざる可らず。則ち又た多く探梅の奇游を試みたる者ならずんばあらざるべし。

●梅花を賞するは、牽牛花を賞すると、興味、全然、相異なり。牽牛花は、家園に於てし、趣味は曉光に在り。梅花は、曉光も好く、月光、亦た大に可なり。而して梅花は、庭苑に千萬樹を栽ゑ得るとも、自然の風景に放在せるの、詩趣、畫趣、洵きて已まざると、同日の論に非ず。則ち梅花は、山水を背景として始めて無上の神韻を發す。梅花を描く者、探梅に耽らざるを得ず。

●探梅の游賞は興會に存するを以て、時に、必ずしも、多くの梅花を得ざるも亦た妨げず。時には梅花を思ふ。探梅の游中、或は途を誤り、或は風雨に逢ふも、奇游たるを失はず。吹雪に逢はヾ、自から雅游を得たるなり。

●探梅の游、背景の奇雅なるを得ば、或は梅花の早、晩に過ぐることありとも、須らく冥想の中に、此の背景に盛開せる梅花を、自から描き出して、樂まん事を要す。

◉吾輩、去春、偶、越ケ谷に探梅の游を試み、飄然、獨往、西新井を經て越ケ谷に到り、游賞、未だ一対ならず、日落ち、斜月、老杉の梢に懸る。茶店の提灯を梅花の枝に掛け、小酌、微醉、田圃道を茶店の男に送られ、陶然として停車場に到りし事を回憶す。

◉探梅は、必ずしも梅花の名所を求むるを要せず。無名の地、却つて奇景を得る。若し探梅の機を得ずんば、梅花の畫卷の中に向つて、探梅の興趣を冥想するも、又た風流たらずんばあらず。

其五

◉小杉未醒、琉球に往くの途次、和歌浦に泊し、小詩を寄せ來る。曰く、「旅情夜來雪、人去殘燈哀、衾中更喚酒、人生有限杯」結一句、杜詩を借る。彼は自ら五絶を好むといへり。詩は彼の本領に非ずと雖、詩趣、自から畫趣に似たり。旅中の彼を想見するに足る。

◉殘燈哀の字、稍奇拔、而して旅館、彼が寂寞として眠り得ず、臥して杯を喚ぶの活趣、却つて哀の一字より出づ。南紀は暖國、既に梅花の節を過ん。然れども雪降るといへば尙ほ梅花あらん。知らず、彼の枕上、一瓶の淸香花ありしや、如何。

其六

◉頃日、吾輩、國技館より歸るに、夜、駒籠の富士神社の森を過ぐ。滿天の月明に、欅(ケヤキ)の大木、悉く落葉せるが、千萬枝、半空に參差たり。忽然として想ふ、若し此の高枝、悉く梅花を著けしめば、月下の感興、果して如何ぞや。

◉探梅は梅花の興趣を見る。必ずしも一々、梅花を諦視せず。然れども時に、老梅、豐盛「弱法師」の梅花の如きを得て、恍惚として、諦視、時を忘れて佇立することあり。此の時、梅花の形影、人の眼中に印象して、歲を經て、消えざるもの無くんばあらず。

◉梅花を、悉く明視せんとも、花上に、詩人、畫人の顏を印象するを見ず。人の眼中には、則ち梅花を印象す。人の夢に梅花あり。梅花の夢に詩人、畫人、有りや、無しや。

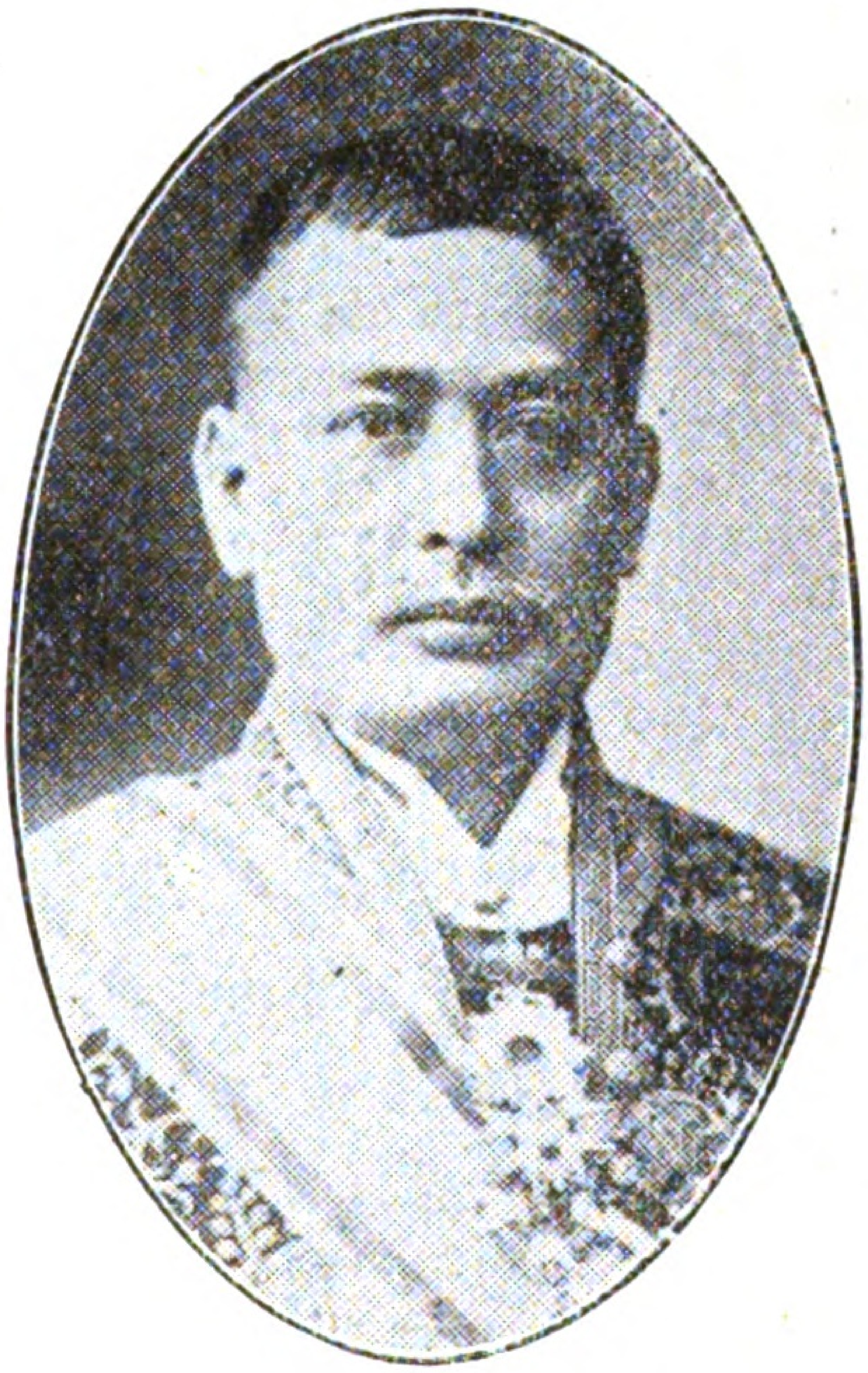
◉梅花を諦視し、印象し來れる、人の眼ばかりを、擴大して、撮影せよ。恐らくは瞳孔の中に、鮮かやに梅花を映出せずんばあらざる可し。

昨日、大錦、眞砂石に敗るの夜、月蝕、富士神社の森の、月下の奇景を見るを得ずして還る。今日、錦、大蛇潟に勝つの夜、稿了

黑頭巾再記

人物評論（六十八）

石井外相論



▽石井外相論

石川半山

外務大臣石井菊次郎男の事に付て、我が輩の所見を問はれても、實は我が輩は石井男の事を能く知らない、敢て一面識も無いとは云はないが、十分に其の性格を知るほど親交を得て居らない、大臣に就任されてから宴席で談話を交換した位のもので、兎ても其の人物を評し得て、適中すると云ふ事は出來まいが、然かしながら兎に角彼れの公人生活も決して短かいワケではないから、個人的交際は餘り無い我が輩と雖も、其の大體の性格位は知らないワケではない。

若かくはない

或は曰く、石井男は未だ若かい、大臣として貫目が足らないと、然かし此の評は大なる間違ひだ、決して若いことはない、彼れの年齢は既に五十一歳で有る、隨分老人で其の鬚などは白くなつて居る、サア、エドワード、グレイが初めてバンナルマン内閣の外務大臣となつた時は、四十三四歳の頃だ、加藤高明男が初めて伊藤内閣の外務大臣となつた時も、四十一二歳だ、五十を過ぎてから外務大臣になつた者を未だ若かいなどと云ふのは、正しき批評ではない、彼れは明治二十三年の大學卒業で、同級の柴田家門君も既に一度大臣になつた、彼れより二年遅くれて大學を卒業した若槻禮次郎君も、既に二回も大臣になつた事を思へば、彼れが若かいとか貫目が足らないとか言ふのは、大なる間違で有て、我輩共から評させるなら、石井君でも既に年を取り過ぎて居る、貫目が有り過ぎると言ひたい、全體日本の政治家には、老人が多くて困まるのだ、大隈伯が内閣總理大臣で、山縣公が樞密院議長では日本は未だ天保の世の中だ、コンな事では仕方がない、凡そ人間の能力の最も強大なるは、三十から五十迄だ、此の最も働く可き時を十分に働かせずして、既に老朽になつた者を、無理に重要の地位に据えて、重い責任を負擔させて、盛に鞭撻を加へると云ふのは、甚だ殘酷なる處置で有つて、實に人間の虐待之に過ぐる者は有るまい。

我輩の所見を正直に告白するなら、一國の重要なる地位に就く者には、年齢の制限をして、老人を一齊に排斥するが宜しい、内閣總理大臣や樞密院議長などの重要なる地位は、五十歳以下の人物に限り、各大臣は三十五歳以下に限るとするのだ、政黨の首領なども犬養、原、加藤、尾崎の諸老人は、悉く之を排斥し、二十代から三十代の新鮮なる人物ばかりにして、大に興國の氣運に乘ぜしむるが良い、特に外務大臣などは三十歳前後の活氣に充滿せる人物の中から舉げることにしたい、我輩の此の所見から言ふなら、石井男の如きは既に年を取り過ぎ、貫目の有り過ぎる方だ。

外交は國力に依る

石井外相の手腕を疑ふ者が有る、彼れは到底今日の如き重大なる時機に、外交を托すべき人物でないと云ふ者がある、然かし之れも間違ひだ、此の如き論を唱へる人は、近代の外交を解しない人と謂て宜しい。

凡そ近代の外交は、決して外務大臣の手腕ばかりで成功や失敗の定まる者ではない、其の成功と失敗は、大半其の國の實力に依る者で、グレー氏が外交上にアレだけの名聲を博し得たのも、全く大英國と云ふ强國を代表して居る爲めだ、外務大臣の手腕に依て國の實力以上に外交上の成功を收め得る場合が、絶對にないとは言はないが、それは稀有の事で、總べての外務大臣に之を望むのは無理な注文で有る、小村侯がポーツマス條約で失敗したのも、決して侯の罪ではない、全く日本の實力が足らなかつた爲めだ、伊藤公の遼東還附も、決して公の罪ではない、日本の實力が露佛獨の三國の力に及ばなかつた爲めだ、國家に實力がなくて、外務大臣は手品師ではあるまいし、ソンなに實力以上の成功が收められる

ワケの者ではない、其の代りに國の實力だけの事は、途方もない馬鹿でない限りは、誰れがヤッても。ソンなに失敗の有るワケの者ではない。

此の意味から言ふなら、石井男の如きは外務大臣として立派にヤッて往ける人物だ、永い間外交官をして、國際法も能く知て居れば、外國の事情にも精通し、外務次官も務め、又佛國の大使ともなり、其の經歴と云ひ、人物と云ひ、申分のない外務大臣で有る

外相の資格

今日の日本の外務大臣として望むべき第一の資格は、支那の事情に精通する事だが、石井男は曾て北京公使館の書記官たりし事あり、爾來常に支那の事情に留意して居るので、支那の事情は能く分つて居る人だ、それから第二の資格は米國の事情に精通する事だが、彼れは通商局長の時代に、特に排日問題を研究する爲めに、米國へ特派された人だ、彼れが日米兩國の親交を增進するに、最善の努力をなすべき誠意を有するのは勿論であるが、彼れは其の誠意を表現すべき方法を見出し得べき素養の有る人で有る、若し夫れ歐洲大戰亂の將來に對して、日本が外交上に活躍しなくてはならぬ場合、諸種の問題に對案を作る能力に至ては、此の戰亂開始の當初に於て其の中心の一たる佛國に在て之を研究したる彼れに及ぶ者は、甚だ少ないと考へる、然らば彼れは今日の日本の外務大臣としては、最も適當なる者と謂て宜しからう

後見附とは誣言

或は曰く、彼れは後見附きの外務大臣なりと、後見とは加藤前外相の事を言ふのだ、加藤男は外交上に於ては日本の一大オーソリチイで有る、若し自分が氣が附いたことが有れば、之を外務大臣に注意する事は、彼れが國家に貢獻する所以で、彼れも決して之を吝しむことは有るまい、少くも原敬君の如く、唯腹の中で憂慮ばかりして、少しも君國の爲めに盡さない樣な非愛國的態度は取るまい、石井男も亦其の先輩たる加藤男に向て、重大なる問題に付て、其の意見を徵する事は無いとは言はれない、然かしながら彼れも既に至尊の御信任を得て、進んで外交の當局者となつた者だ、其の責任を盡すに於ては、彼れ自ら毅然として自由意思を以て決することは申す迄もない事だ、局外に居る加藤男が、一々外交に干渉するワケもなく、石井男が一々加藤男の指令を受ける理由もない、若しもソンな事が有れば、それは加藤男が第二の元老となつたも同じ事だ、加藤男自ら外務の局に當れる時、各元老の後見顏のウルさいのに苦しんだ者だ、姑の干渉に苦しんだ嫁は、年を取つてから自分の嫁に優しかるべき筈だ、加藤男豈石井外相に對して、ソンなウルさい干渉などをなすべきや、我輩は世上の傳説の事實に非るとを思ふ者で有る。

元老の干渉

歷代の外務大臣が最も苦しく感じたのは、之れを內にしては元老の干涉、之を外にしては英國の掣肘で有る、元老も段々凋落して、今では山縣、松方の兩老ばかりとなつた、大山公はアノ通りの人で、別に意見がないから干渉もないが、伊藤、井上兩元老には、歷代の外務大臣が隨分手古摺ッた、今日でも山縣、松方兩老の干渉には、頗る持て餘まして居

る樣だ、石井男は此兩老の干渉に對して、如何なる手段を執るべきや、加藤男はブッキラボーで押し通したので、ヒドく反感を招いたが、石井男は果して如何に彼等を待遇する乎、列强に對する外交よりも、實は此の元老に對する外交の呼吸が六ケしいのだ

●●●●●英國との關係

それから英國が又厄介な國で有る、日英同盟と云ふと對等の樣だが、英國は親分子分の關係の如く考へて居る、日本を一段劣等に見て、金などの世話をする代りには萬事日本を指導する積りになつて居る、而して彼れの言ふ事を聞て居ると、世界には日本の外務省が倫敦のドウニング街に在ると云ふ噂が立つ、是れ迄は日本の外交は、何をなすにも先づ英國の鼻息を窺ふた者だから、日本の外務大臣はサア、エドワード、グレイのエジエントなりと言ふ評判も立つた、然かし我が大隈内閣の石井外相迄が英國のエジエントになつて貰ひたくない。

吾輩が石井男に向て望む所に、毅然として彼れの全責任を以て、君國の爲めに最善の努力をして貰らひたい事だ、元老の干渉は一切之を聽かず、英國や露國の提言と雖も、苟くも日本帝國の利害と背馳する者は、斷じて之を排斥して貰らひたい、今日は外交上最も大切なる時機で有るから、石井外相たる者は須らく大抱負を以て十分に自重してやつて貰らひたい者だ

▽貧弱なる外相

鵜崎鷺城

今日は政府も政黨も國民も容易ならざる時局だといふ。實際日本の國際的地位特に歐羅巴戰亂後の我が立場に考へ及べば、容易ならざる時局である。二大戰役を經て世界の一等國に爲つたと己惚れ、或は猫の額のやうな膠州灣を占領したからとて、鬼の首でも取つた積りで有頂天になり、歐洲戰爭を恰も向ふ河岸の火事の如く心得て居る時でない。始まつたものは晩かれ早かれ終るに相違ないが、歐洲戰亂後非常なる責任が日本に負ひ掛ると知らずに、茹蛸のやうに湧立つて居ると飛んでもない目に會ふ。政府も政黨も國民も唯だ口先許りで容易ならぬ時局といふ丈けが能でなく、緊ッかり褌を締めて掛る必要がある。日本が國の大方針を立てゝ此變局に處して行くには、政府全體の注意と努力に俟たねばならぬが、特に外務大臣其人を得なければならぬ。平常の場合ならば間に合せで濟むが、今日は有合せの人間でお茶を濁すことは出來ぬ。

處が此人物といふ點になると餘程困難である。今日は何の社會にも餘り傑出した人物は居ない。稍々傑出して居ると見えても、他に比較して人物上の點數に勝る器量がある譯でない。特に外交方面は人物が不景氣である。近世の外交家で兎に角陸奥と小村は其方の天才に近かつたが、今日は外交家といふ名があく丈けで、外交上の天分の卓然として優つたも

のは絶えて無いと言ふて好い。外務大臣といへば列國共に第一流の政治家を舉げ、少くも十人が十人見て一國の外政を支配するに足る力量貫祿あるものと定まつて居る。英のグレー、佛のデルカッセ、露のサゾノフ、獨のヤゴー、墺のベルヒトールド、伊のソンニノの如く、兎に角世界的人物と稱せられ、獨り內閣のみならず、其の國人の間に重きを爲して居る。我が現外相石井菊次郎は是等の代表的人物と比べものにならぬとして、少くも今日の時局に際し、霞ヶ關を背負ふて立つ丈けの外交家であるかといへば、何人も返答に困るであらう。お粗末な外務大臣とは言ひ過ぎであるにしても、兎に角隨分お粗末である。

石井は千葉の水呑百姓の子で、初め姓を大和久と稱したが、古い縣知事で後に元老院議員になつた故石井邦猷の養婿になつて今の姓を名乘ることになつた。然るに家附の令嬢即ち夫人は石井の領事時代に品行上の問題より離緣となり、其後醫學博士櫻村將德より現夫人を迎へた。大學を卒業したのは明治二十三年で、同じ外交官仲間の伊集院彥吉、大鳥富士太郎 秋山雅之助等と同級である。初め外交官試補として巴里に行き、其間に二等書記官に進み、日清戰爭後仁川領事となり、居ること僅かに一年にして北京公使館の首席書記官になつた。死んだ西德次郎の公使時代で、北淸事變の時は有名なる北京籠城をした一人である。此騷動が治まると同時に本省に轉じて電信課長となり、それより通商局長、次官を經て四十五年第二西園寺內閣の時佛國大使に進み、昨年外務大臣に至るまで前後四年間巴里生活をした。彼は特に是れといつて定まつた系統なく、通商局長及び次官として長く小村に仕へたから、小村の系統と見られぬでもないが、實際は八方向きの人物で初めより系統がないといふ方が當つて居る。通信局長としても次官としても、外交の働きの上に是れといふ特長なく、謂はゞ平々凡々なるものであつた。順序よりいふも手掛よりいふも小村に信用された故山座圓次郎が當然次官になるべきであつたが、山座は西園寺內閣の外相林董とソリが合はなんだ爲め、自ら運動して政務局長より英國大使館參事官に轉じ、まだ任地に到着しない中に、內閣更迭して駐英大使の小村が再び第二桂內閣の外相に任ぜられ、少しの違ひで小村は山座を失ひ、山座も好機を逸した。そこで石井は故參といふので意外の役儲けをした上に、丁度次官在職中に條約改正をしたので、御多分に漏れずして男爵になつた。

兎に角外務省の飯を久しく喰つたから、外交上の儀禮及び交際を心得、一通り佛蘭西語を操り、又た本省內の事情に通じて居るかも知らぬが、外交といふ事に就て高能といへない。迚も山座とは比較にならぬ。自ら進んで外務大臣になつたのだから、相當の抱負と自信があつての上と思はれるけれども、實際は單に外務大臣ならんが爲めに、外務大臣になつたのであるまいか。言ひ換へれば自己の閱歷に箔をつけるといふのが主もなる目的ではあるまいか。縱令さうで無いにしても、彼を以て一定の方針と國是の上より割出した外交を行ふ頭があるとは受取れぬ。成程當て書記官として支那に居たし、前後二度も佛蘭西に使ひしたし、多少歐洲及び支那の事情を解して居るかも知らぬが、對歐政策及び對支政策

に關して日本の肩身を廣くする丈けの經綸と膽略と力量とがあると思へぬ。彼れを推薦したのは加藤であるが、加藤よりも二三枚役者が下であり、現に加藤は彼の顧問兼監督者だと言はれて居る。大隈内閣の外交は果して加藤外交であるか、それとも石井外交であるか知らぬが、外交上自負心の強い加藤にしてアレまで無能呼はりされたのであるから、其以下に評價さるゝ石井は一層無能といふ結論に達し、加藤の眞似を下手にすると思へば好い。

石井が外務大臣になつてから起つた外交上の問題は、帝制延期警告と倫敦宣言加入の二つで、共に初陣の手柄として誇るに足らぬ。此對支警告の内情の一端をスッパ抜けば、政務局長の小池張造が何か一功名したいといふ腹があつて、丁度石井が外相に内定して日本に歸つた時、途中まで迎へに行つて此話を吹込むと、石井も外相になる以上何かしたいと考へたから、直ちに兩人の相談が纏まつたのと、今一つは恰も大浦乃木問題の輿論が沸騰して居る際であつたから、例の閣内政略に利用する爲め、陸海軍とも餘り議を練らずして警告を發したのである。現に當時或る集會の席上に於て、海軍々令部次長佐藤鐵太郎は小池政務局長に向ひ、我々の方に相談がない位だから、無論大したものではないのでせうれと皮肉な揶揄をしたさうである。石井としては無論推薦者の加藤に一應伺ひを立てたに相違ないが、其結果は袁世凱から體の好い肱鐵砲を喰つた形で、二の太刀を打つことが出來ずしてアヤフヤに過ぎ去つた。其後躇なく雲南の動亂が起つて、前の警告を有理に導き、事の必ずしも無意味ならざるを證したやうであるが、兎に角警告其物が何等權威を伴はずして、袁一派の帝政運動を著しく促進せしめたことは確に外交の失敗である。石井が外相で日置が公使である間は迚も對支政策に成功する望みはないと諦めるの外ない。倫敦宣言加入も石井が歸朝の途次英國に於てグレーと下相談をした結果と思はれるが、何故加入したかといふ理由に至つては極めて不徹底で、帝國の利害得喪を熟考した上の處置と思はれぬ。加藤前外相は曩に加入の必要なしといひ、石井は今に及んで加入の必要ありといひ、同じく大隈内閣の外相でありながら言ふことが矛盾して居る。然し其必要不必要は日本の必要不必要にあらずして、英國の必要不必要よりし、明かに英國本位たることが分る。尤も石井が加藤の相談者である以上、事毎に英國本位に傾く道理である。獨り單獨不講和條約加入問題のみならず、印度革命黨追ッ拂ひ事件の如き、其最も露骨なるものである。

帝國の外相として看れば、如何にも心細く感ぜざるを得ぬが、事務家としては少しも不足はない。初めから官僚風に育つて來たから、頭が几帳面であるし、職務に勵精であるし、特に秘密を重んずるし、時として屁のやうな事まで秘密にする。此點が曾て小村の氣に入り、又た加藤の眼鏡に叶うたので、長官の命令通りに官卓の上で事務を取扱はして置けば、確かに得易からざる循吏である。それ故に電信課長としては今までの中で一番適任であつた。次官ならば相當役に立つが、一たび事務を離れて政策の範圍になると、其天分が之れに副はない。普通の場合と違

ひ、此多事な時に誤つて外相になつたのは瘠馬に重荷である。

外交家にも二種類ある。一は自分の室と大臣の室とを往復して、他動的に外交文書を扱ふもの、一は腦味噌を絞つて自動的に仕事をするのである。前者を「手と足との外交家」と言ふべくんば、後者は「頭の外交家」である。陸奥、小村、山座等は頭の外交家に近かつたが、石井は手と足の外交家である。概して霞ヶ關の畠に育つたものは此種類に屬するが、同じ手と足を働かす外交家でも、外相として石井より氣の利いたものが大使中に有りさうなものである。

▽石井外相評

城西隱士

現外相石井菊次郎男の人物、性行、手腕に關しては予は不幸にして多くを知らず、彼れが明治二十三年に大學を卒業し外務省に入るや夙に秀才の名あり小村外相の下に次官として條約改正に參畫し功を以て男爵を授けられ、後ち佛國に大使となり未だ數年ならずして、一躍外務大臣となる、彼亦た幸運兒ならずや、其の性行に付ては圭角なき圓滿の人物にして、獨特の長所なき代り上にも下にも折合よく、外交の格式に通じ慣例を暗んずる一能吏と云ふを妨げず、然れども外交家としての所謂手腕に至りては何ほ未知數に屬し其評價未だ全く定まらず、但たし此點に付ては世間一般にも漸く疑を生じ、一部識者間にては疾くに彼に多く望を嘱すべからざるを知り居れるが如し、邦人某氏歐洲戰の開始に際し巴里に居合せ、當時佛國政府はボルドウに移され、在留邦人亦た其身の處分に迷へるに際し、彼れ石井大使亦た茫然として頗る處置に迷へるものの如くなりしを見て、大に彼の無能と冷淡を憤慨したりと聞く、蓋し彼れは今や果して手腕の人たるや否やに關し公けの試驗場に臨めり、即ち袁世凱に關する帝政延期勸告の是非得失是れなり、昨秋十月我國が英露佛を誘ふて延期勸告を發するや石井外相は得々然として人に語りて云はく、是れ余が佛國より歸途香港に於て帝政の企圖あるを耳にして直ちに腹案を定めたる處に基くと、然れども當時の下馬評にては、延期案は尾崎法相、高田文相等世間の人氣を釣らんとして唱へたる案にして、岡陸相の如きは之に反對を唱へし一人にして、石井外相は殆んど無我無中之に釣込れたるに外ならずと、彼れ若し經綸ある外交家ならば必ずや新たに開けたる支那動亂の局面を首尾よく收め得べきも、其實果して如何にや、支那を統一し得べきは袁一人にして、外に其人なしとは列國の公評なり、今袁の信用を剝奪し彼を失脚せしめ、果して如何にして支那の秩序を維持せんとするか、石井外相もし經綸の人たらば始めより延期勸告の結果今日の時局を生起すべき位のことは豫想したるべく、而して之に處する方策も必ず香港沖の船中にて疾に腹の奥に立て置けるなるべし、諺に云へる如く現在の支那の時局は彼の試驗場なり彼果して首尾よく及第すべきや否や、若し夫れ歐洲大戰の終局に至りては恐らくは彼れの手

腕——敏腕にせよ鈍腕にせよ——を煩はすことなからん、其の必ず他の内閣他の外相の手に委せらるべきは疑を容れず。

▽小手の利いた書記官

前田蓮山

一

▲瀧田詞兄、此度び石井外相論御徴求に候へども、目下政局多事、論ずべき事、報ずべき事多くして、人物評を弄ぶの餘暇なきを遺憾に存候。一體人物評なるものは、一面に於て評者自身の人物を自白するものに有之、所謂問ふに落ちずして語るに落つるものにて他を評するに非らず自分を評するなり。

▲されば小生は人物評を爲すに際しては、充分の用意を整へるの時日を要求致したく、殊に石井男の如きは小生の未だ曾て研究致したる事なき人物に有之、匆卒の間、之れを評し候は好ましからざる事に候へども、折角の御注文なれば、小生の印象のみを申上ぐべく候。

▲小生が初めて石井菊次郎なる名を知りたるは、清國團匪事件の際——明治三十三年の夏——彼れが公使館一等書記官として清國に在勤し、頗る小手の利きたる働きを爲したる時に有之候。而して小生の耳に入る以前に於て、既に彼れの名は北京外交團の夫人令孃の間に喧傳せられ、アツレの青年外交家よと持てはやされたる由に候。

▲實に彼の際は、各國使臣の北京籠城にて夫れは／＼大變な騒ぎ、外には匪徒の鬨の聲起り、内には婦女子が餓に泣くと云ふ有様、所謂高度の文明を有する西洋人等が如何に恐怖に襲はれ、如何に狼狽を極めたるかは御推察ありたく、此の間に處して强力なる軍隊を後に控ふる石井書記官の行き渡りたる斡旋盡力は、救世主を眼のあたりに見るの感ありたるなるべし。

▲官僚、實業家、政黨員皆な夫れ／＼の階級に依りて特殊の空氣を有する如く、外交團にも亦た一種の空氣あり、外交界にて持てんとならば、外交團中の有力者の御意に入ることとなり、否な有力者の夫人の御意に入ることとなり、否な令孃の御意に入ることとなり。

▲例へば東京にてマグドナルドの勢力ありし時代には、其の夫人の御意にさへ入れば外交官としての出世は出來たり。而して其の御意に入る條件と申せば、彼れは親切なり、彼れは容子が好し、彼れは英國贔負なりなどと云ふにありて、我が霞ヶ關の外交官先生達が毛唐人の眞似を爲して得々たるは此の故とぞ申す。

▲マクスオーレルは『一國の使臣に夫人の必要たるは良人に直覺力を加ふればなり』と申したり、婦人は怖ろしきものに候、彼等の判斷は主として直覺に基くなり。彼等にヂロリと睨まれた時が百年目、外交官としての運命は定まるものに候。

▲併し又た努力の結果御機嫌を取り直す事も絶對不可能事には無之候。

マクスオーレルの說に從へば『婦人の歡心を買ふの道三つあり、一は彼等を愛する事なり、二は彼等の嗜好に同情する事なり、三は彼等をして自らを偉しと思はしむる理由を與ふる事なり』。

▲第一の要件は結構なことなれども、第二は迷惑な話なり。婦人を愛する者を愛すべくんば、英國婦人の歡心を得んが爲めには英國を愛せざる可からず、佛國婦人の歡心を得んが爲めには佛國を愛せざる可からず、外交家として出世する事も亦た苦しからずや。

▲第三も亦た頗る六ヶ敷き藝當に候。元來婦人は直覺力のみ銳敏にして、理智の貧弱なるが故に、自分の偉い理由を自分で發見する事能はざるものなり。例へば自分は文學の才ありとの自稱ある婦人に對しては、文學の才ある理由を說明し、美貌自慢の婦人に對しては、細々と其の美なる點を擧げて美人たる理由を說明するを必要と致し候。

▲又曰く『古は男子は婦人の爲めに劍を拔きたり、今は小切手を引き出すなり』と。外交官に金の必要なるは申すまでもなし、されば加藤高明男を始めとし、外交官は自分に金を持たざれば金持ちの夫人を娶るの例なるは餘儀なき事なり。石井男の夫人は富裕なる櫻村醫學博士の娘にて、加藤恒忠氏の夫人は其の妹に候、櫻村家の負擔も並大抵にはあらざるべし。

▲斯の如き有樣にて、一旦外交團中の有力家の夫人令孃の御意に叶ふに於ては、夫人令孃に大騷ぎにて其の男の提灯を持ち廻はり、他の夫人令孃も亦たこれに附和雷同せざれば後難が怖ろしき故に、提灯持の手傳ひをすると云ふ次第にて、斯うなれば本國政府にても其の男を重用するに至るとぞ申す。

▲殊に彼が霞ケ關にては斯の如き事が外交にて候由、されば石井男が北京外交團にて得たる名聲は直ちに外務省の認むる所となり、第三次桂內閣に於て加藤高明男が外相となるに及び、直ちに本省に呼び寄せて電信課長に任じ、累進して通商課長となり次官と陞りぬ。

▲陸奧宗光伯や星亨氏が米國に公使たるや、女小供が何を言ふ……との態度にて、彼等を構ひ付けざりし結果、外交界にては頗る評判惡しく、殊に星氏に對しては我が內地の新聞までが、彼れは外交の手腕なしと評する者すらありき。星氏は短年月にして外交界を退きたれば其の眞價を知らざれども、陸奧伯は我國に於て最も成功せる外交家の一人なり。味ふべき事には候はずや。

二

▲人物を紹介するには其の經歷の大略を述べでは物足らぬ心地致し候。石井男は慶應二年千葉縣に生れ、明治二十三年に帝國大學英法科を卒業せり。其の同期生には首席に原嘉道氏次席に柴田家門氏ありて石井男は第三席を占めたり、學才の秀たる事は以て知るべし。

▲伺ほ其の同期生は三十一人にて、小山溫氏あり秋山定輔氏あり、伊集院彥吉氏も亦た其の中にありき。而して同年卒業の政治科にに石塚英藏、伽一強、井上辰九郎、床次竹次郎、橋本圭三郎、山之內一次、白仁武、鈴置倉次郎、長島鷲太郎など云ふ顏も見へたるが、此の中大臣となりた

る者は柴川氏石井男のみ、更に華族となりたる者は男一人に止る。

▲男は學窓より直ちに外務省に移りたる者にて、未だ曾て他の政務を見たる經驗なき代りに、所謂外交家としての蘊蓄には達せり、即ち明治廿三年十一月外務省試補に任じ、廿四年外交官試補として巴里に在勤し、廿六年二等書記官になりしが、其の間に於ける外務大臣は靑木周藏、榎本武揚、陸奥宗光、次官は林董、駐佛公使は野村靖と云ふ顏觸にて、政務局長に栗野愼一郎、通商局長に原敬などありき。

▲次で二十九年一等領事となりて仁川に駐在し、三十年二等書記官として淸國に勤務を命ぜられ、三十一年一等書記官に進みぬ。其の間外務大臣には西園寺公望、大隈重信、西德二郎、靑木周藏、次官には原敬、小村壽太郎、鳩山和夫、都筑馨六、駐鮮公使には原敬、加藤增雄、林權助、駐淸公使には林董、矢野文雄、西德二郎など去來し、政務局長には中田敬義、早川鐵冶、內田康哉、通商局長には高田早苗、內田康哉、重岡薫五郎、林權助、杉村濬の人々歷任したり。

▲卅三年末本省に入りて電信課長となり、通信局長を經て第二次桂內閣の時、小村外相の下に次官となり、條約改正の功に依りて男爵を授けられ、第二次西園寺內閣の時、內田子が外相となるに及び、幾くもなく出で丶駐佛大使となり以て昨年に及びし事は御承知の通りにて、くだくだしく申述べる必要も無之候。

▲昨年夏、加藤男の辭職するや、男は自ら其の後任者なかるべきを信じたるもの丶如し。然るに大隈伯は山縣公に對して外相後任の推薦を求めたるに、山縣公は幷は加藤男に相談せらる丶を可とせんと答へ、毫も取り合はざりしを以て、餘儀なく加藤男に諮りしに、男は單に紹介の意味を以て先づ珍田大使に交渉したるも其の拒絕する所となりたる結果、札は石井男に落ちたる次第。

▲恐らく加藤男は其の承諾の餘りに容易なりしに驚きたるべし。山縣公すら內務の後任は何人でも出來べく、海軍とても強ひて作らんとすれば如何やらにも相成るべけれど、唯だ外務のみは如何あらんか、是れ最も憂慮すべしと言ひ、大隈內閣は外務大臣の後任を求むる能はずして留任不可能に陷るべしと豫想したる如かりしが、公も亦た意外の感に打たれたる一人なりしならん。

▲若し石井男の承諾を得ずんば、大隈伯は自ら兼任するか、或は人物の如何に關せず間に合はせを作りたらんも知れざれども、先づ男の就任は大隈內閣留任の殊勳とも云ふべく、大隈伯は男に酬ふるに陞爵の奏請を以てするの義理あるべく、さすれば玉子夫人も滿足すべく候。併しながら國家は男の就任に依りて何物を得たるか、顧みて呆然たらざるを得ず。

三

▲男は外相に内定して歸朝するに際し、何は扨て置き先づ倫敦にグレーを訪へり。是れ所謂外交の爲めなりしなり。即ちグレー及びグレー夫人に敬意を拂ひ、バロン石井の名をして外交團內に感じ好からしむるを外相としての先決問題なりと考へたるものに候。

▲而してグレー及びグレー夫人の御引立に預からんとならば、彼等の愛する者を愛するの一要件を忘る可からず、即ち英國を愛せざる可からず。大外交家たる男にして何ぞ其邊に抜かりあらんや、男はグレーの要求に應じて直ちに倫敦宣言に加入したりき。

▲石井男は所謂外交家なれば、倫敦宣言加入を樞密院に諮詢することを忘却せるは寧ろ當然に候ふべきか、外交團の感觸を好くせんには本國の樞密院などは忘却せねば出來ぬ事ならん。されど大隈伯までが之れを忘却せりとは狼狽へるにも程こそあれ。

▲グレーの御機嫌を取り結びて、外交團に好感觸を與へたる石井外相は、歸來直ちに其の效果の如何に大なるかを示せり。幵は日英露佛が相携へて支那に帝制延期の勸告を爲したる事なり。尤も勸告其ものは石井外相の着任以前既に決定せられ居りたる由なるも、三國を誘ひたる事は新外相の御手柄ならん。

▲否な御手柄とは大隈伯の認むる所にして、小生は容易に其の可否を知らず。抑も小生は一種の東洋モンロウ主義を抱持し居り、支那問題に對しては日本の獨力を以て之れが解決の任に當り、其の代り歐米列國に向つて門戸開放、機會均等を實行せんとするものに候。是れ恐らく先帝以來日本の國是とする所ならんか。

▲右の主義より申せば三國を誘ひて支那に勸告したる如きは、日本自ら日本の權利を放棄する所以なり。支那に政治的勸告を爲すに於て、列國の力を借る必要何れにありや、帝制延期勸告に就て三國を誘ひたる如きは全くハイカラ外交とでも申すべきものにして、其の識見の卑きこと驚くべく候。

▲我が霞ケ關にては、外交團内にて持てる事を以て外交と心得居ること久しく、一時は之れが爲めに外交家には金あるを必要要件とし、劍の代りに銀行預金を引出し得る者を重寶とし、加藤高明男の如きも、大藏省官吏より一轉して外交官となり、外務大臣自ら其の部下に對して、金滿家と結婚する事を奬勵したる例もあるなり。

▲されど、如何に所謂外交家の手腕を發揮して、外交團の交際場裡に流行兒となりたればとて、歐洲一流の外交家が焉んぞ其の流行兒の爲めに自國の利益を分ち與へんや。結局は其の流行兒の爲めに流行兒自身の本國政府に對して其の地位を上ぼする運動を爲す位の事に候。而して其の流行兒が本國に於て勢力を得れば得る程、之れを愛する人の利益は增すべき道理なり。

▲第一、加藤高明男が久しく英國に公使大使たりしが故に、同男が外相となれば對英外交に宜しと云ひ、本野大使を外相とすれば日露親善に利益ありと云ひ、先年内田康哉子が外相となるや、對米外交に都合宜しと云ふが如き、奇怪千萬の義には無之や。貢探、獨探など〻騷げども、霞ケ關内に於て一種の貢探も、獨探も、英探も。佛探も、米探も、露探も居りはせずや。小生は陸奥や星や小村やの如き、外交團より惡まる〻外交家を渇望致し候。

▲過日「北一輝」なる人、支那革命黨に關する一書を小生に寄せ來れ

り。小生は北氏なる人に一面識無之。從つて其の說を聽くも初めてに候故、直ちに一讀致せしに、所論大に我意を得たり。同氏は曰く、我が政府は支那に帝制を布けば動亂の起る恐れありと言へども、帝制を布かざれば動亂の恐れなしと言ひ得るかと。

▲又曰く『支那の革命は實に愛國的革命にして、孫逸仙氏の如く共和主義自由主義を主張する者は殆んど之れなし』と。是れ小生が平常推測する所に同じ。石井外相は曾て駐清公使館書記官として名を顯はしたること前述の如きも、眞に支那を解するや否やは疑問と存じ候。

▲否な外相は恐らく支那を解せざるべし。外相が支那に於ける書記官としての働は前にも申述べたる如く、所謂外交なるものなり、即ち夫人令孃を相手に翻々として交際場裡に飛び廻り、御世話を燒く種類のものなりき。支那を解し、對支方針を立つると云ふが如き、然かく政治的理論のあらう筈は無之候。

▲客臘貴族院を傍聽したり。時に仲小路氏は『加藤外相は日英同盟の條項に依り、倫敦宣言加入の必要なしと云ひ、今は之れに加入せるを外交の成功なるかの如く言ふ。加藤前外相の說非なるか、今の爲す所是なるか、政府の所信如何』との質問を發したり。

▲外相の答辯如何と見てあれば、議場より向つて右の大臣席に、尾崎、箕浦、河野と並びて、其の次に着席せる石井男はチョコ〳〵と壇上に進みて、前外相が如何なる答辯を爲したるかを知らずと雖も、要するに我が爲したる倫敦宣言加入は至當にして利益なりと云ふの意を述べたり。

▲小生は其の答辯に就て批評する前に先づ外相の態度に就て失望せり。外相が答辯し終りて降壇せんとするに際し、仲小路氏は更に問ひ反せり。外相は歸りて着席せんとして之れを敢てせず、中途に立ち迷ひて仲小路氏の質問を聽取し居たる其の態度の如何に狼狽を極めたることよ、暫くして數步を自席に進めたるが、而かも着席する能はずして柱に身を靠たせながら顏色を變じて質問に耳を傾けたる、不用意の間に人品を曝露致したやに覺え候。

▲正直と言ば言へんも、小生は此の態度を見て思はず『ダメダ』と獨語致し候。内田康哉子が外相に任ぜらるゝや、貴族院の諸人は彼れを目して『青二才』と爲し、冷笑を以て迎へたりしに、彼れが壇上に起つや、全く議場を呑んで懸かれり。

▲加藤高明男は其の態度が傲慢なりとて貴族院の感情を害したるが、内田子の態度は男より少しく冗辯なるの差はありたれども、傲慢の態度は殆んど相等しかりき。

▲加藤男は第三桂内閣倒れて山本内閣組織せらるゝに際し、山本伯が極力男の留任を懇請するや『外務大臣の適任者は自分を除いて他に之れ無きことは自分も之れを知る』と答へたる由、内田には『日本にては自分が第一等の外交家、自分に次ぐものは伊集院なり』と傲語するを常とすと云ふ。此の男と子との獨天狗には恐縮の外なけれども、其の意氣は之れを壯とせずんばあらず。

▲石井男は到底小手の利きたる書記官に過ぎず、實質に於て彼が最得意

の時代は清國駐在の一等書記官時代ならんか、要するに小生は彼れの手腕に感服する能はざれども、彼れの人格が決して下品劣等に非らざる事は之を褒揚せんと欲するものなり。

▽委曲を盡した演説

外務省參政官　柴　四　郎

石井外相と予との交際は極めて淺いものであつて、今日まで實はまだ十回位しか顔を合せた事がないのだ。予が參政官になつた時でも、任命される三日前に、殆ど馴染もないと云つてい丶位な顔を合せて相談を受けたのである。だから石井外相がこれまで閲して來た官歴もよくは知らない。それに予の立場として、批評なぞする事は尠からず困る。他にいくらも適任者があるだらう。只一昨日（即ち一月二十一日）の秘密會議で、ある人の質問に答へて外相は演説をなした。其内容は秘密だから、絶對に洩らす事は出來ないが、其の演説は實に用意周到な、委曲を盡くしたものであつた。歸途、階段の所で尾崎君が予の肩を叩いて「石井君が何でも知り悉くしてゐるんだから、君などは隨分閑だらう」と笑つたが、實際あの演説は美事だつた。

まあ予には今の所こんな僅かな材料しかないんだから、到底石井外相論などは出來ない。

▽大なる失敗をせぬ人

早　川　鐵　冶

石井君は明治二十三年卒業の法學士である。其時は首席が原嘉道、次席が柴田家門で、石井君は三番だつた。此級の人は不思議と僕の友人が多い。二三の人を除いては皆親しい仲で、中には兄弟のやうに交際つて居る者もある。

法學士が外務省に入つたのは明治十八年が初めで、藤田四郎、坪野平太郎が其の嚆矢である。尤も鶴原定吉が十六年に文學士で入つて居る。鶴原、藤田時代には大學出身者は持てなかつた。と云ふのは大學出身者よりも海外歸朝者の方が外國語が達者であつたからだ。其頃の高等官は海外から歸つた留學生が多かつた。然しながら鶴原は仲々の才子で、文筆も可成立つたし、今日では大人しくなつて居るが藤田なども隨分覇氣があつたものだ。十九年には神代都之進も入つたがこれ亦才人であつた。二十年には留學生よりも英語の達者な宮岡恒次郎が入つた。かう云ふ連中が入つたため漸く大學出身者が認められるやうになつた。石井君はそれから遲れて、大學出身者が持てた時代に入つたので、ぶつつけ高等官七等と云ふんだから運が好い。藤田、坪野などは、入つた時は判任官の御用掛りであつたし、鶴原は判任御用掛から二年目に漸く領事館付書記生となつた。石井君と前後して大學出身者が隨分入つた。二十年には宮

郎の外、内田康哉、林權助などが入り、二十一年には日置益が入り、二十三年には内田定槌、神尾三郎と續々法學士が入つた。石井君の同級生も先づ石井君の外に秋山雅之介（今は朝鮮總督府參事官をしてゐる）伊集院彦吉などが入つた。此三人の二十三年組は孰れも前途多望を以て囑望された。秋山君は少し官歷が遲れて居るが、これは中途で病氣などをしたからだ。外務省に居た間は石井、伊集院と肩を竝べて居たが、思ふに秋山が一番伸びる所があつたらう。直ぐに政務局員に用ひられたんでも知れる。

石井君は當時金持の駙馬で、間もなく佛蘭西の公使館付となつて妻君同道で赴任した。交際官試補で妻帶在勤の出來るのは美しかつた。氏は至て謹直な循吏と云ふ事であつた。

僕が明治三十年外務省に歸つた時、石井君は仁川に領事をして居た。當時支那の公使をして居つた矢野文雄の下に内田康哉が居たが、内田は覇氣に滿ちた男で矢野の下に溫和しくして居なかつた。矢野は誰か溫和しい人はなからうかと云つたので、時の政務局長たる僕は石井君を薦めて飛入り公使の下に補導の任に當らしたのだ。石井君が今日外務大臣としての手腕は、思ふに當時素人公使の御師範役を爲て居た間に養成し來つたものである。だから僕は夜會の招待位されても好い義務があると思ふ。北支那に戰爭が起つた時、石井君は一等書記官を爲て居た。同僚の楢原陳政が流丸に當つて死んだに比して、石井君は武運目出度生還して勳章を貰ひ年金を賜はつた。其後外務省で電信課長をして居たが、二十五年卒業の後輩山座圓次郎が入つて來た。山座は東洋流の豪傑肌の男で、豪飲放談して、新聞記者や浪人者や野武士などゝ肌が合つて、其名聲は赫々たるものがあつた。時の外相小村壽太郎も亦似而非豪傑で酒を冠つて豪語する性質(たち)なので、山座はすつかり氣に入られて、先輩の石井君を飛び越えて政務局長に拔擢され勅任官となつた。石井君は後れて通商局長になつたが、其一年間は後輩に先を越されて嘸不愉快だつたらうと思ふ。小村が罷めて林董が外務大臣になつた。林は冷靜溫和な、英吉利流の紳士を氣取る人だつたから豪傑肌の山座とは肌が合はなかつた。大臣の更迭と共に次官珍田の後は當然山座が襲ふべき處を、山座は小村が英吉利大使となつて居たので、其處へ行つて大使館參事官となつた。そこで次官が石井君に廻つて來た。一體林と石井君とは等しく千葉の出身で、性質も似て居た。

日英同盟の條約改正で、次官たる石井君は男爵になつたが山座は敍爵されなかつた。次いで内閣更迭の際、石井君は佛蘭西に大使となり、山座は支那の公使となつた。こゝで初めて元に戻つて先輩後輩と順になつた。けれども聲望は山座にあつたが、惜しかな好漢、中央政府との間が圓滑に行かず遂に憤死した。所が石井君は今回加藤高明の後を承けて外務大臣となつた。人間の出世、一代の浮沈は判らないものである。一人は不幸憤死し、一人は運好く大臣男爵となるんだから。

歐洲動亂の結果、日本の持てる時代に外務大臣となつたのだから、彼れに手腕があれば、それを現はすにこんな絕好の機會は無いのである。

對支問題などに就ても、外務の地位を捨て、十數年になる此早川鐵冶にさへ、淡々として好い對策が湧き起る位だから、定めし其局にある石井君にも種々な妙算があるのだらう。けれども今日までの所では、これはと思ふ程の手腕も見せて貰へない。一體對策をする者は大成功もあるが、又一面大なる失敗も伴ふ。石井君は元來が平和な大事取りの人だ。赫々たる功名もなからうが、大した失敗もあるまい。文明流すぎるから新聞記者や浪人に對して人氣を得る事は六つかしい。併し平和な溫順な軌道を辿るに適した人だ。今日の内閣の如く、只一意內閣を維持するに汲々たるには、餘り遣り過ぎて失敗するものよりも、大事取りな溫和な人が必要だから、石井君などは適任者だらう。歐洲戰後ますます困難の伴ふべき外交の衝に當つて、石井君が外相とし遺憾なく其手腕を發揮せんことを僕は切に希望する。

▽眞摯、穩健、明晰、

特命全權大使　伊集院彦吉

石井君と私とは永らく一所に居た。一所に居ると却て其の人は解らないものだが、同窓として君を觀ると、一口に眞摯な、穩健な、而かも頭脳(あたま)の良い人であるといふことが出來る。同窓中の秀才で、學校に入つた頃は健康が餘り完全でなかつたが、其の後修養して恢復に努めた結果、今では如何なる困難にも堪へて行くやうになり、昨今では益々元氣になつたやうである、

兎に角眞面目で、才に任せて遣るといふ方ではない。才が無いのではなく、才有つて眞面目に勉强し努力して行くといふのが、あの人の一生を通じての遣方である。學校も二番か三番の成績で出たが、其後外務省に入つてからも常に其精神が支配して居る。各地の領事になつたり、書記官になつたりして、大使として歐羅巴に行くまでは外務省に次官を勤めて居た。其當時は極東に於て波瀾曲折のあつた時代で、君は其間の事情に能く通じて居り、又夙くより支那問題の重大なるに着眼して、支那に就いての知識觀念は十分に備へて居ると思ふ。私が大使として支那に行つた時も君が次官をして居られた時のことで、支那に關して趣味も有り知識も有る君だけに非常に仕事が仕易かつたのは事實である。

次官としては確か四五年勤めて居たやうであるが、小村さんの時代が一番永かつたやうに覺えて居る。小村さんは人も知つて居るやうに熱心であつただけに其成績も擧つた。其下に在つて支那に關する知識と經驗とを養つたのであるから、十分其手腕に信賴することが出來ると思ふ。

惟ふに最近五十年間に於ける外交の發達は實に目醒しきものであつて、其幸運は偏へに天佑に因るといふことが出來る。寧ろ餘りに幸運過ぎたくらゐである。今後は愼重な態度を以てこれまでに得た成績を失はないやうに力めなければならぬ。此時代に方つて、君のやうな外務大臣を頂いて居ることは我國民にとつて幸福であらうと思ふのである。

評論

内外時事評論

法學博士　古川學人

南支那の動亂

去年十二月の末、雲南を中心とする南支那は、袁政府に對していよ〳〵獨立の旗を擧げた。雲南將軍唐繼堯、雲南巡按史任可澄及び貴州護軍使劉顯世三名の名前を以て發表せる獨立宣言は『中華民國雲南貴州討逆軍檄文』とあるから、雲南と貴州とは十二月二十六日同時に起つたものと思はるゝ。北京政府の方面より來る電報は、動亂は主として雲南に限り、貴州は初め之に加つて居ないとか、或は後に至つて貴州も多少動搖して來たとか、又は貴州は今仍ほ中立の態度を執らんとして居るとか報じて居るけれども、之は恐らく中央政府が此動亂の形勢を過小に報道して、勉めて諸方に之に響應するものなからしめんとするの魂膽に出づるものではあるまいか。尤も結束の一番に堅きは雲南にして、貴州は或は雲南程纏つて居ないのかも知れない。然しながら貴州の劉顯世は唐繼堯と好く、且つ又今度の運動の中心たる蔡鍔の舊門下生であつたといふことから推して考へれば、雲南貴州相携へて起つたといふことは決して不可思議なことではない。加之此運動に密接の關係ある或有力なる支那亡命の一友人の許に達せる確實なる電報によれば、廣西省も四五日後れて此運動に參加したらしい。新聞にあらはるゝ電報には、或は廣西を以て形勢觀望中なりとなす者あり、其態度について明確なる判斷をなし得ない點もあるが、將軍陸榮廷の出身並びに革命黨に對する從來の關係等を考ふるに、廣西省も亦雲貴二州に策應したといふことは恐らく間違のない事實であらうと思ふ。上海で出る中華新報には、廣西省は一月七日を以て獨立の宣言を發したと明確に書いてあつた。日本に居る革命派の

諸氏は皆廣西の獨立を信じて居る。去れば一月中旬の電報に、廣西の軍容易に起たざるをもどかしがり、岑春煊遊説の爲めに廣西に赴けりと報ずるものもあつたけれども之れ恐らくは事實ではあるまい。岑は當時香港墺門の邊に在りて獨立軍と省外同志との連絡の中心となり、隱然として天下の同志に號令するの地位を占めて居つた。陸榮廷はもと岑の部下にして、假令親ら説得せらるゝまでもなく、岑の命令には從はねばならぬ義理合にある。

かくて南支那の動亂は、今日のところ雲南、貴州、廣西、の三省を根據として居ると見てよろしい。固より動亂の火の手は僅かに之れに限つたのではない。廣東も動搖の徴を示し、四川に至つては已に、少くとも雲南貴州と境を接する地方に於ては、大に動搖を初めて居る。而して廣東四川が動くといふことは實に獨立軍の前途に對して重大の意味を有するものである。元來雲南、貴州、廣西の如き偏僻にして容易に他の討伐を免れ得る地方を根據として起つたのは極めて地の利を得たものである。けれども此の三省に據る丈けでは、固より消極的の安全は之を期し得べけんも、積極的に天下の中心に向つて進出することは出來ない。之が爲めには差當り四川と廣東とを得るの必要があるのである。蓋し廣東を得ずんば外海に出ずることが出來ず、又四川を得ずんば天下の中心を流るゝ長江に接することが出來ないからである。是れ獨立軍が先づ以て四川、廣東の兩省を味方とせん事を努むる所以である。故に南支那の動亂は、孰れ早晩根據地たる前記三省の外更に廣東、四川の兩省にも傳播するものと見なければならぬ。然るに四川廣東の加擔によりて獨立軍が南方の五省を列ぬるといふことになれば、其勢容は最早北方に對して拔くべからざるものとなる。左すれば裡に反袁感情を抱きつゝ形勢觀望中なりし幾多の諸將は翕然として獨立軍に來り投ずるであらう。卽ち湖南、江西、浙江を始めとして、湖北、安徽、江蘇に及び、更に僻遠の地ではあるが、反袁熱の相當に强き陝西甘肅方面まで動亂は擴がるだらう。斯くなれば天下は最早袁氏のものではない。故に今度の動亂は見樣によつては、支那の將來の運命に關して決して輕々に看過するを許さないのである。尤も斯くの如くなるまでには、獨立軍が獨り其の根據地の民心を繋ぐことのみならず、又外界より軍器物資並びに資金の供給を受け、其上に天下所在の反袁者流を糾合し且つ連絡するに成

功するといふことがなければならぬ。此等の條件が備はらざれば、南方の獨立軍如何に反袁熱旺盛の機運に乘じて奮勵しても、終局の勝利を得ること決して容易のことではない。況んや一方には恫喝と買收とによつて巧みに反對黨の內部を離間攪亂するに絕妙の手腕を有する袁世凱がある。而して支那の多くの有力なる階級は、一身の利害安危を見るに餘りに明敏にして、主義の爲めに献身的奮闘を爲すの意思に乏しい。多くは形勢を觀望して、勢の强きに附くの例なるが故に、袁政府にして若し精銳なる兵と多額の金とを以て巧に南方に對するならば、彼の運動も亦必ずしも成功しないとは限らない。故に南支那の動亂の將來は他の一面の見樣によつては又大した事がなくして濟むかとも思はるゝ。只此運動は、何れの着眼點を取るとしても、去年十二月五日上海で起つた軍艦乘取事件の如く突如として起り突如として消滅するが如きものでないこと丈けは明白である。兎に角今後暫くは此動亂は支那政府を困却せしむる問題として繼續するであらうと思ふ。只結局の運命がどうなるかは、容易に斷言することは出來ない。

袁世凱政府は、前にも述べた通り、此の動亂はもともと大したものではない、早晩自滅するだらうと宣明して居る。何故自滅するかといへば、一つには此動亂は孤立無援である。も一つには一部軍人の壓迫に恐れて獨立の宣言は見たものゝ、內部に決して完全な統一があるのではない、故に早晚內輪の軋轢から敗るゝだらうといふのである。予の觀る所では此の考は必ずしも當つては居まいと思ふ。第一に南方の獨立軍は現在の形勢こそ孤立無援ではあるけれども、もと袁世凱反對といふ主義若くは感情そのものは精神的に決して孤立無援ではない。若し雲南省城が南境の一市河口を經、其對岸の老開より河內に通ずる鐵道の便を思ふとき、全く孤立無援ともいへない。只此方面は佛領によつて海より隔てられ居るが故に、獨立軍としては一に此通路のみに賴り難いのである。玆に於て彼等は早くも四川、廣東に着眼したのであるが、幸にして此の方面に於ては實際上已に之に加擔せんとして居る運動が起つて居るらしい。若し四川、廣東にして手に入らんか、前にも述べた通り、即ち外海と長江とに連絡することを得て、獨立軍は最早や事實上孤立無援の域を脫する。假りに四川、廣東が手に入らずとするも、此等の三省はもと生活の程度の極めて低き地方にして、外

界との交通によつて生活上の物資を得て居つた地方ではない。即ち土地が開けて居ない丈けに、外部の供給を頼まずして生活を續け得る地方である。故に孤立無援でも實際上餘り困らない。獨立を何時までも繼け得る國柄である。少くとも四川、廣東の地方が此三省に好意を持つて呉れるならば、彼れ等は極めて安全である。假りに四川・廣東が袁政府の命を奉じて此獨立運動に對抗するとしても、軍を進めて討伐するといふことはまた極めて困難である。地理上から言つても、雲南・貴州より出づるは易くして、之に入るは極めて難いからである。況んや四川・廣東の地方は、假令獨立運動に加擔せないまでも、中央政府の走狗となつて之に敵對するといふことは殆んど考へられないからである。又内部の軋轢で自滅するだらうといふ説の如き、之も運動の中心人物が夫の蔡鍔であるといふ點から見て容易に肯はれない。蔡鍔は日本留學當時から才識德望に於て衆の重ずるところであつた。雲南に於ては軍政の整理及び軍事教育の振興の爲めに盡して最も功勞があり、從つてまた最も人望を收めた。今日の將軍唐繼堯は卽ち其時の部下である。將校の大部分は皆彼の養成するところである。且つ雲南の軍隊と蔡鍔との關係を考ふるに見逃すべからざる點は、雲南の軍隊は支那の他の一般の軍隊に比して初め造られた時のまゝに最も純正に其の組織を維持せられて居るといふ事である。といふ譯は、一體各省の軍隊は、其初め何人かによつて造り上げられたとすると、袁世凱は其人の其地方に過大の勢力を占むるを忌み、多くは其の人を厚く聘用するの名義の下に之を北京に招致して、其人の造つた軍隊には新たに直屬の部下を送つて、從來の勢力關係を攪亂するといふ慣用手段に出でゝ居つた。黎元洪は其最も著しき適例である。又若し其目指す人を北京に招致する能はずんば、袁は必ず直屬腹心の者を送つて隊の幹部に据ゑ、以て頭首を牽制するを怠らなかつた。張勳は卽ち其術中に陷りし適例である。蔡鍔は第二次革命の時、南方の諸省を糾合し、其兵力を擁して革命政府と袁世凱との間に仲裁を試みんと提議してより、袁世凱の忌む所となつたが、後單身北京に入つて他意なきを示し、以て大に袁世凱を安心せしめたのである。そこで袁世凱は南方の軍隊に攪亂の手を加ふるとを急がなかつた。其後袁は南方の軍隊に二三密使を放つて警戒せしめたのであるが、蔡鍔は雲南に於ける同志の諸將と巧みに結托して表に袁政府に忠誠を裝

ひ以て最後まで袁の攪亂の手を避け得たのである。去年の夏頃袁世凱が多少南方の軍隊に手を着けんとするの勢を見るや、蔡鍔は唐繼堯をして逸早くも袁世凱に帝政を決行すべきの密電を發せしめたと傳へられて居る。時未だ籌安會の成立しなかつた以前のことである。斯くして袁は多少の疑惧を抱きつゝ、遂に攪亂の毒手を延ばすの機會を捉へ得ずして、雲南の軍隊は今日まで蔡鍔の扶植した勢力が其儘攪亂せられずに殘つて居つたのである。從つて蔡鍔が運動の中心たる以上は、少くとも雲南は結束が堅いものと見て間違はない。只貴州廣西の兩省に至つては、雲南程は堅くないかも知れないが、廣西の將軍陸榮廷が岑春煊の部下たりし事、又本來熱心なる革命主義者である事、並びに其目下の諸將間には唐繼堯と日本留學時代より同窓たりし革命黨の有力者李烈鈞の勢力が少からずある事等を思ひ合せ、又貴州の將軍劉顯世は嘗て唐繼堯の部下たり、且つ蔡鍔、唐繼堯兩人と早くから連絡があつたといふやうなことを思ひ合はすれば、此等三省の同志の者の間に於ても容易に結束の破れるといふことはあるまい。他の軍隊の如くに各種の分子が雜然と集つて居るものであれば、買收恫喝の離間手段も容易に行はれ得るだらうけれども、今述べたやうな次第であれば、南方の軍隊にはオイソレとは手を下しやうがあるまいかと思はるる。斯く考ふれば袁世凱は如何に巧妙なる手段を弄しても、赤手空拳を以てしては容易に南方を自滅せしむることは出來ないだらうと思ふ。

且つ夫れ運動の中心が蔡鍔であるといふことは、又此運動が各方面に於て廣き同情を得るに便宜であるといふことを想はしむる。今日支那の天下の於て袁世凱反對の思想感情が到る處に彌蔓して居るといふことは最早疑はない。けれども此等の連中は袁世凱に反對なりといふ點に於て偶然に一致して居るのであつて、積極的に事を共にする程の堅い相互間の連絡あるものではない。例へば孫逸仙の一派は昔から民主共和主義を執つて支那に於ける一大革命主義團であり、又黄興の一派も同じく民主々義を取つては居るけれども、孫逸仙派の餘りに理想に奔るに慊焉たらずして起つた、別個の一革命團である。此兩派は或は合し或は離れ、大體に於て相對立して發達して來たものである。只袁世凱の專制主義に反對なることは二者同一である。此外嚮きに滿清時代に清朝を立てゝ開明立憲の革新を叫んで起つた康有爲、梁啓超の一派があるが、彼等は清朝

の滅亡と共に一變して漸進的立憲民主々義者となり、革命當時には急進派たる國民黨と對抗して所謂進歩黨の埒内に閉籠つて立憲政治の建設に盡力したのであつた。之れも亦今日は袁世凱の專制主義に反對して居る。其外別に政黨ではないが普通に宗社黨と稱する一派が袁世凱に快らざるは固よりいふを俟たない。其他袁世凱ともと〳〵同穴たる官僚派の中でも、最近帝政問題の起ると共に非常に不快を感ずるに至つた連中が又非常に多い、徐世昌、趙爾巽、李經義、張謇の徒は即是である。以上列擧する各派の連中は袁世凱反對といふ考の上には一致して居るけれども、いろ〳〵從來の關係があるのでオイソレと協同一致することが出來ない情實もあるのであるが、幸にして蔡鍔は表向き此等の何れの派にも加つて居ず、而して此等多くのものと親しい關係にある。彼はもと梁啓超の門下生である。初め梁啓超の時務學堂に學び、梁啓超の康有爲の變に坐して日本に亡命するや、暫らく上海の南洋公學に學んで居つた。後ち、梁啓超の招に應じて日本に留學した。序にいふが支那が盛んに日本に留學生を送るやうになつたのは、實に此梁啓超の勸說の結果である。彼の名文は今日支那青年の最も愛讀するところであつて、今日彼ほど筆の力を以て人心を支配して居る者は又とあるまい。聞く所によれば彼は衷心愛國の情に溢れ、日本に亡命するや其勃興の跡を見て欣羨の情禁ずる能はず、即ち故國の青年に檄して來つて日本に學ぶべきことを說いたとの事である。支那の少年が踵を接して我國に來り學んだのは主として之から始まる。而して此等の日本に學んだ青年が實に今日支那に於ける革命運動の中心となつて居るのである。昔の革命黨には例へば孫逸仙などの如く西洋の自由民權の思想——殊に十八世紀末の思想、日本でいはゞ明治十六七年頃の思想——に動かされた、謂はゞユートピアンが多かつた。然るに今日の革命思想家は或は思想としては何等一貫したる、又徹底したる考を有つて居ない者が多いかも知れないが、其憂國の熱情に至つては實に燃ゆるが如きものあるを見るのである。蓋し彼等は日本に留學して始めて東洋の二大國の斯くも國運に隆頽の差あるを目擊した。共同の文明と共同の自然の下に發達して來た同文同種の兩民族が、一方は日本に於て盛んに勃興し一方は支那に於て衰殘を極めて居る現前の事實は如何に彼等の心根を激したか分らない。斯くして起つたところの年少慷慨家が期せずして一種の革命主義者とな

つたのである。此點に於て支那に於ける最近の革命運動は直接にも間接にも日本の勃興が其因をなして居ると謂つて差支ない。彼等は日本の勃興を見て翻つて祖國の現狀を憂ふるの念を深くしたのである。されば例へばかの去年の日支交渉の時などでも最も激烈に日本に反抗した者は此等の日本留學生であつた。殊に梁啓超の如きは當時最も痛激なる論難を日本の態度に加へたことは我々の記憶に新らたなるところである。吾人は之を以て彼の排日思想を斷定すべきではない。只彼の熱烈なる愛國者たる點を買つてやるべきである。而して蔡鍔は實に斯かる雰圍氣の間に養成され、斯かる憂國的志士を先生として生れ出でたる一代の麒麟兒である。從つて彼の天下有爲の青年に尊敬せらるゝことは決して偶然ではない。加之蔡鍔は梁啓超を通じて革命當時の進歩黨の諸名士と接近するの多くの機會を有した。且つ彼は先きに日本留學當時に於て特に黄興と相知り、之を縁故として彼は以後の革命當時の所謂國民黨に屬せし幾多の諸名士と接近するを得た。故に蔡鍔は即ち支那に於ける民主々義者中の急進派及び漸進派の繫ぎになる人物である。而して天下の青年から多大の尊敬を受けて居る人であるから、彼の運動は少くとも精神的に見て支那の全土に亘つて厚き同情を受けて居るといふことは疑を容れないのである。

啻にそればかりではない。實は今度の獨立運動は餘程前より計畫して居つたものらしい。どれ丈けの範圍にどんな人が中心となつて計畫したかといふとはよく解らない。けれども最近袁世凱の專制主義益々跋扈するに憤慨して、從來の民主々義の諸派並びに其他各般の反袁者流の間に自ら一種の脈絡が通ずる樣に進んだといふ噂が數ヶ月前からあつたから、此等の人々の間に愼重なる熟議が凝らされて其上で今度の動亂が起つたものと思はるゝ。左すれば其根柢は可なり鞏固なものと見なければならない。傳ふるところによれば、蔡鍔の北京を脱したのは十一月十九日であるといふ。蔡鍔は梁啓超や湯化龍等と共に袁世凱の爲めに北京に招致されたる連中である。多少有力なる反對黨ありと見るや、其領袖を手近に招いて之を優待し、以て一方に於ては其領袖の鋒鋩を緩和し、他方其領袖を懷柔するといふのは從來袁世凱の慣用手段であつた。彼の專制をなすに妨げとなる者は彼れ必ず之を北京に招ぐ。招に應ぜざれば即ち刺客を放つて之に酬ゆる。而して招に應ずれば、北京に於て高位高祿を以て外觀之を厚遇す

るけれども、固より何等の實權を與へざることはいふを俟たない。梁啓超は司法大臣であつた。湯化龍は文部大臣であつた。けれども彼等は事實に於ては高位高祿を以て封ぜられたる憫むべき捕虜に過ぎなかつた。蔡鍔も亦袁世凱の厚遇を受けて居つた一人であるけれども、彼は如何にかして警戒の網をくゞつて北京の外に逃れんとして隙を狙つて居つたのである。即ち十一月十九日事に托して天津に來り、天津より密かに日本船に乘じて病を別府溫泉に養ふを名として袁世凱に若干日の暇を乞ふたのである。日本には只數日滯在したのみであるが、數十通の手紙を書き殘して同志の友をして每日之を北京に送らしめ、以て恰かも現に日本に滯在するかの如く裝ひ密かに上海を經て香港に赴き、玆に南洋より來り待てる李烈鈞と相會し、雲南の師團長張子偵の迎を受け、佛領安南を經て十二月十九日雲南省城に入つたのである。それ迄ウッカリして居つた袁世凱にも手ぬかりはあるが、あれほど探偵政略に秀でた袁世凱の眼をば一ヶ月の長きに亘つて欺いた丈け蔡鍔一派の慘憺たる苦心は之を察するに難くない。それ丈け我々は又其間には各種の方面から多大の保護と後援とを受け、畢竟今度の動搖は此等の人々の愼重なる熟慮の結果に出でたるものなることを看取せざるを得ないのである。蔡鍔が雲南に入つてから同志の人と協議し廿二日大會を開いて袁世凱に對し「速に帝政を取消し且つ籌安會の發起者十三名を殺して以て罪を天下に謝すべし」との電報を打ち、廿六日正午に至り滿都歡呼の中に獨立の宣言を發したといふ事の詳報は、一月十二日の我國の諸新聞にもあらはれて居つた。

此等の形勢を見て予は此動亂の容易に自滅せず、場合によつては段々諸方に擴がるものではあるまいかと思ふのであるが、若し他の方面に擴がるものとすれば先づ第一着に問題に上るものは廣東・四川の兩省なることは言を俟たない。廣東の將軍龍濟光は以前岑春煊の部下であつたけれども、今は袁世凱派として知られて居る。けれども彼の部下たる幹部の約三分の二は雲南人で、他は廣西廣東人である。此形勢は廣東の軍隊は大體に於て今度の動亂に同情あるを思はしむる。加之龍濟光は廣東派を抑へる方針を執り、雲南人を賴みとして居つた人である。故に飽くまで雲南派の意に背くといふことは、彼にとつて決して容易の事ではない。況んや一月早々もと此地に都督たりし革命派の一飛將陳炯明が既に廣東省に入りて勸說に力めて居るといふに

於てをや。故に南方の獨立軍にして段々に勢力を得るに至らば、廣東軍の遂に龍將軍を脅迫して之に加擔するの日あることを想像せねばならぬ。少くとも廣東は北方政府よりも南方獨立軍に近いものと見るべきであると思ふ。四川省に至つては將軍陳宧は平凡なる官僚系統の出身で純然たる日和見黨である。けれども四川省は南方の諸省の中で最も開明したる地方で、從つて改革の思想は民間に相當に普及して居る。湖南湖北に次いでは革命黨の最も望みを囑して居るところの地方である。さればにや雲貴獨立の擧を擧ぐるや四川省中此兩省と境を接する地方には忽ち之に響應して動搖が起つたのである。已に瀘州、敍州の如きは南軍に降つたといふことである。一月半ばの電報によれば、重慶亦已に危しとあつたが、之は新聞の報ずるが如く、南方の軍隊が攻め入つた爲めに危いのではなくして、其土地の軍隊が南方に應じたが爲めに危いのであらう。南軍が遙かにこゝまで北上するといふことは、後にも述ぶるが如く、一寸想像することが出來ない。孰れにしても四川は恐らくは廣東よりも先きに南軍に加擔するであらう。現に革命黨の名士熊振鵬は蔡鍔と相前後して雲南に入つたとあるが、彼はもと四川省の產にして同省に相當な勢力を有つて居る人である。想ふに熊振鵬は蔡鍔の旨を受けて、四川省に運動に入つて居るのではあるまいか。四川省を動かす目的以外には、彼は何も雲南に入るの必要はないのである。四川省を動かすには四川省に特別の關係ある人を要し、雲南を動かすには雲南に特別の關係ある人を要するといふのは支那に於ける一般の風潮である。

之を要するに四川と廣東との態度は今後餘程我々の注目を要するのである。南方軍にして此兩省を手に入るゝことに成功せずば、或は今度の動亂は袁政府の聲言するが如く大した事にならずして濟むかも知れない。けれども此兩省にして手に入るならば、動亂の火の手は決して今日の儘にして熄むものではない。四川廣東は今や正に南北兩勢力の暗闘的爭奪の巷である。但し假りに此爭奪に於て結局南方が勝つと假定しても南方が先づ此兩省を手に入れて後漸次他の諸省をも風靡するか、或は目下諸處方々に派遣して居る秘密運動員の計畫功を奏して所在に反袁的動亂が起り、北京政府の奔命に疲れて居る有樣を見た上で後始めて四川廣東の起つを見るに至るかは今日のところは未だ豫測は出來ない。

最近の北京電報は、政府は中部支那屯在の將軍に令して盛んに軍容を整へしめ、更に北方より多數の軍隊を南下せしめて、一大鐵槌を南軍の頭上に加へんと擬して居る。北支那の精鋭なる軍隊が若干南方に移動したことは事實である。然しながら如何に北方よりの增援が來たからと言ふて、長江方面の軍隊が討伐の爲めに更に南下することが出來るかどうかは蓋し一大疑問である。此事を明かにするに第一着に考へねばならぬことは、目下中部支那に屯在する總ての軍隊は必ずしも皆袁政府に忠勤を擢んずるものとは限らないことである。武昌に於ける王占元の軍隊、岳州に於ける曹錕の軍隊、上海に於ける揚善德の軍隊が、袁政府の命令を忠實に奉ずるものたるべきは疑はない。けれども南京の馮國璋と徐州に於ける張勳とは最早や袁世凱の頤使に甘んぜざるものなることは公知の事實である。張勳が早くより袁世凱に對して一敵國をなして居つたことは、彼がもと清朝の遺臣であるといふ事ばかりに基くのではない。彼は亦幼時岑春煊より至大の恩義に與つた事もあるといふことである。馮國璋は初め袁世凱の四天王の一人を以て目せられて居つたけれども、帝政問題以來、袁世凱の嫉視を買ひ、最近は著しく相反目するやうになつた。彼は袁世凱の幕下でありながら、夫の段祺瑞と共に、「總統には臣事するけれども、少爺(長子袁克定)には臣事したくない」といふ一場の座談が圖らず袁世凱の耳に入つたが爲めに、甚だしく彼の怒を招いだといはるゝ人である。此有力なる二將軍が隱然として一敵國を作つて居る以上は、長江沿岸の兵隊をウッカリ南方に送る譯には行くまい。去年六月日支交涉の談判纒らずして最後通牒の發送を見た時、張馮兩將軍は管內の士民を安心せしむるため「日支交戰するも我は嚴正中立を守りて管內を戰亂の禍害より救はん」と布告したるが如きは理義をあやまれる所置には相違なきも、以て彼等が早くより必しも袁家の走狗たるに甘んぜざるの氣慨を見るべきである。南方の動くや袁は乃ち阮忠樞を派して張馮の北上を説かしめたる如きも、皆袁が此二人を憚るの意を忖度せしむるものである。殊に上海の軍は去年の十一月暗殺された鄭汝成の率ゐて居つた支那には珍らしい强い軍隊ではあるが、然し上海が香港と共に支那に於ける革命黨のあらゆる運動の策源地なるを思ふとき、容易に此地を見捨てゝ他に向ふことは出來ない。現に去年十二月初めには軍艦肇和號の乘取り、南洋機器局の攻擊などゝい

ふ事件があつて、上海の警戒決して之を緩ふすべからざることを示して居る。只武昌岳州の軍隊丈けは、或は南方に出動せしむることが出來るかも知れない。なぜなれば張勳と馮國璋とに對しては用意周到なる袁世凱は直參の倪嗣仲を安徽將軍に任じて暗に張馮を牽制せしめて居る。從つて曹錕、王占元の軍を南方に送つても後方に多少の備があるからである。斯くして袁政府は一月初旬曹錕を討伐總司令官に任じ、其精鋭なる陸軍を以て雲南貴州を席捲せしめんと聲明して居つた。更に最近の電報によれば北京政府は討伐軍を三隊に分ち三道より南方を壓せんとするの策を立てたといふことである。即ち一方は長江を遡つて宜昌より四川に入る。第二は洞庭湖より阮江を遡り銅仁府より貴州に入る。第三は長沙より湘江を遡りて廣西省に入るといふとである。地圖を開いて此等の地勢地形を見れば、此策略は一應尤のやうである。又事實兵力を以て南方を壓せんとすれば、此三道による外他に途はないやうである。けれども、詳かに地理を按ずる時は此等の策は何れも共に言ふべくして行ふべからざるものなることを看るのである。第一の途に付ては先づ宜昌までは汽船の便が開けて居る。宜昌以西は水勢俄に變じ幾多の危險を冒さずしては大船を遡航するの困難なることは洽く人の知るところである。況んや冬期減水の候は如何にしてよく大兵を之に依りて送ることが出來るか。假りに一歩を讓つて北軍四川の重慶を手に入れたりとしても、之より雲南省城に進むは更に困難である。普通の旅客ですら今日此間は約四十日の旅程である。況んや大軍の進入となれば何日掛るか分らない。否何日掛つても完全に軍隊を送り得るか如何か六つかしい。若し夫れ第二の洞庭湖の西岸常德より阮江を遡行するといふが如きは畢竟空論である。湖江共に今や減水の極端にある。阮江は夏期と雖も曳船を以て交通する所であつて、固より大軍を送るの公道ではない。陸上は所謂武陵挑源の幽境にして、山多く之れ亦極めて交通不便である。第三の長沙より湘江を遡るの道は比較的に交通に便なるも、然し低きより高きに上る地勢にあるの難は免れない。廣西より湖南に出づるには此途は極めて便利である。第一革命の際王芝祥は此途を取りて廣西の健兒を提げて中原に乘り込んだ。併し中原より南方に攻め上るとなると、談決して容易ではない。猶其外に一部の人の間には江西の兵を以て廣西を壓すべしとの論もある樣だが、之は尙一層困難である。江西

に在ては贛江を遡りて贛州邊までは兎も角も行ける。けれども之より南安を經、廣東湖南の境を縫うて廣西に到るの邊は非常な高山ではないけれども、所謂峰巒重疊、出づるに易くして入るに難い處である。南安より南昌に到るのみですら上り一ヶ月を要し、下りは僅かに一週間を以て足るといはれて居る。故に廣西より攻め降るならば格別、廣西に攻め上るといふことは決して容易の談ではない。此等の點を考へて見れば北軍の南下といふことは只聲を高くして虛勢を張るものたるに止り、其實行は甚だ覺束ないものと謂はねばならぬ。現に一月十三日の電報によれば、曹錕は僅かに軍を進めて長沙に着いたといふに過ぎない。それ以上を何處まで進み得るか甚だ心細い。斯く考ふれば兵力を以てする討伐は恐らくは全然不可能ではあるまいか。況んや湖南湖北の軍隊の中には密かに湯薌銘に心を寄する者が尠くない。湯薌銘は永く袁世凱の監視の下に心ならずも文部大臣を勤めて居つた湯化龍の弟にして、共に進步黨の名士、革命派の大いに望みを囑するところの志士である。今や袁世凱の嫉視に逢ひ蟄伏翼を潛めて居るけれども、彼の潛勢力は今日猶革命派の望を繫けて居るところである。故に曹錕、王占元の徒がウッカリ南の方へ遠出をすれば、湯薌銘の一派が起つて其後を斷つといふやうにならぬとも限らない。されば袁政府としては到底軍隊を遠く南に送ることは出來ない筈である。只盛んに威容を飾つて虛勢を天下に示すのは、之によつて天下幾多の日和見黨を洞喝し、戈を逆まにして我々に抗するなからしめんとするの手段ではあるまいか。

政府軍の討伐が不可能として、然らば南軍が更に北上して政府軍を屈することが出來るかといふに實は之も甚だ覺束ない。そは若し幾分でも此種の望があれば革命派の勢力は忽ちにして天下に擴がり袁政府は今頃は顚覆して居るべき筈であるからである。蓋し袁世凱反對の聲は今日殆んど全天下に漲つて居る。一體袁世凱が大總統となつた初めの頃は、彼に反抗せしものは僅かに國民黨の一派に過ぎなかつた。國民黨はもと東京で秘密結社として出來上つた中國同盟會の變體であり、即ち孫、黃の兩派が祖國の改革の爲めに相提携したのが本となつて居る。一方孫逸仙は米國流の民主々義を取り、他方黃興は自ら佛國流の民主々義を取るの大體の差はあつたが、共に民主共和の理想に基いて支那の改革をなさんとするの點は同一である。此兩派の

提携の結果たる同盟會が中堅となつて革命に成功し、いよ／＼南京政府を造つたが、北方の袁世凱と相對抗して居る中に、日露兩國滿蒙分割の說起り、斯の外難の爲めには一先づ內爭を歇めざるべからずとの愛國的感情に動かされて、遂に不徹底な妥協に應じて彼等は袁世凱に讓つたのである。當時國民黨は大總統の地位を袁世凱に讓り而かも大總統は之を佛國の大統領の如く政爭の外に超越せしめ、政治の實權は政黨の手に之を收めんと欲したのであつて、現に故宋教仁君の如きは自ら國民黨を提げて總理大臣たるべく人も許し自らも許して居つた。然るに袁世凱は飽くまで大總統專制主義を取り、之に反するものは悉く之を斥け、剩さへ宋教仁をば上海に於て暗殺するに至つた。こゝに於て國民黨は、初めて深く袁世凱の禍心を疑ふに至つたのである。後ち民國二年十月の袁世凱のクーデターは國民黨の勢力を中央より一掃し益々其の恨を買ふたが、然し此の頃から亦進步黨も袁世凱と反目するに至つた。進步黨の中堅は湯化龍、梁啓超の輩である。梁啓超は康有爲と共に、もと保皇革新派であつた。立憲政治の採用が彼等本來の理想である。今や淸朝の顚覆に會ひ、再び君主制の回復を夢想しては居ないが、兎に角名實相副ふの立憲政治を布くを以て當今の急務なりとするの點は變らない。此點に於て此派は更に日本其他外國に留學して列國の進步と祖國の衰運とを比較對照して憂國の血に湧く幾多有爲の青年を惹き附けることが出來た。斯くして進步黨は比較的溫和健全なる識者階級を網羅し、共和立憲の旗印の下に確實なる勢力を占むることを得た。此は國民黨の如く急進的ではなかつたから、初め袁世凱は與し易しと思つた。けれども國民黨の一掃せられて後進步黨は斷然袁世凱の意を斥けて支那將來の憲法は飽くまでも一人の專制を排せざるべからざることを主張し、且つ次期の大統領には溫厚無能なる黎元洪を推し立てんとするの意志を示したので、袁世凱は一方には黨中の名士梁啓超や湯化龍やを或は司法大臣或は文部大臣に任じて懷柔を計り、陽に其說を容れたるが如くに裝ひ、他方實は全然實權を剝ぎ、且つ密偵を放つて其行動を監視し、謂はゞ高祿を餌として彼等の足を拘束し彼等の口を箝したのである。ウッカリしたことを言へば忽ち暗殺せらるゝの憂があつたから、彼等は翼をひそめて眠れるが如く裝ふて居たのであるが、然し常にいかにかして身を脫して袁政府の監視の外に逃れんと考へぬ日は無かつた。此

等の事情は、袁世凱の獨裁政治の益々鋒鋩を逞うすると共に、進歩黨をして愈々袁世凱を離れしめ、更に進んで彼等をして國民黨と結托して袁政府顚覆の密謀を計畫せしむるに至つた。加之袁氏が常に一方には恫喝と買收とを以て辛うじて部下の心を繫ぎ、而かも他方に於ては專制政治の目的を達する爲めの資金を得んとして、悄氣もなく幾多の利權を提供して外國の借欵を得たことは、甚だしく青年の愛國心を傷けた。故に多少學問をした青年にして直接袁政府の用を勤めて居るに非る者は、凡て皆袁世凱の政府を呪ふやうになつたのである。故に最近に於て袁政府に反感を抱く者は、啻に袁世凱の爲めに志を奪はれた者のみには止らないのである。而して帝政問題の起るや、輙ち清朝の遺臣は勿論、古老先輩從來袁世凱の爲すがまゝに放任して居つた者までも亦著しく袁世凱に對して反感を抱くに至つた。加之第一革命の當時、革命黨は餘りに深く君主制憎惡の考を民間に植えつけた。當時清朝に對する民間の反感を挑發する爲めに、革命派は或は印刷物や或は活動寫眞、芝居等で、君主といふものは民を虐げるもの、民の財寶を貪るもの、總べての惡を敢行するものと敎えたのであるが、今や袁氏は此惡むべき皇帝の位に上るといふ。夫れだけでも長江沿岸などに於ては帝政反對の聲頓に民間に高くなつたといふ事である。凡そ帝政問題の起つてから以來、支那の形勢は斯くの如くであるから、袁世凱反對の運動は本來ならば燎原の火の如く忽ちにして四方に擴がるべき筈であると云ふのである。

然しながら此處が又支那と日本などとの異るところである。いかに對袁の反感が强くとも、支那民族は多年惡政に惱める結果、大體に於ては極端な個人主義である。成る程今日革命黨の志士の中には、眞に愛國の至情に驅られて一身の利害を顧みるに遑ない幾多奉公の義士に富む。今次の動亂の如きも予輩の知る範圍に於ては畢竟皆之等志士の止む能はずして起した運動である。けれども斯くの如きは支那民族全體の上からは極めて少數である。大部分は官吏といはず人民といはず矢張り一身の安危が先になつて、利害の打算の定まらない中は容易に起たない。即ち大體としては事大主義である。故にどんなに現在の政府が憎くとも、政府の旗色が著しく傾かない間は、決して進んで南軍に味方はしないであらう。且つ南軍はいはゞ原告である。北軍は則ち被告である。被告には三分の强味があるから

支那の官民をして南軍の爲めに起たしむるには、南軍に於て餘程優勢を示さなければならない。而して予輩の想像するところによれば南方三省は已に結束して起つたとはいへ、雲南省を除いては内部の纒りが未だ十分ではあるまいと思ふ。加ふるに雲南、貴州、廣西の三省は土地も開けず金も少ない。岑春煊が八百萬兩を懐にし香港にありとか李烈鈞も二百萬兩を懐にして雲南に入れりといつても、北軍と爭ふの軍資としては高が知れたものである。加之軍器彈藥も北軍に比しては極めて不完全であらう。又外界との交通が開けない間は新たな供給を得るといふとも易くは出來まい。幸に地勢上南北相接戰するの機會は少いからよいが、若し戰場に於て見ゆることゝなつたならば、恐らく南方は一溜りもなく負けるであらう。故に南方の運動は精神的には全天下の同情を得て居るだらうけれども、物質的勢力の比較の上からは、今日容易に北軍の敵と許すことは出來ない。是れ廣東・四川の容易に起たず、江西の李純、浙江の朱瑞の如き已に革命黨に同情ありと稱せられながら仍ほ容易に起たず、馮國璋、張勳の徒亦満を持して放たざる所以であらう。革命派の人は、雲南の軍は蔡鍔の多年訓練せるところ、廣西の健兒は嘗て王芝祥が革命當時之を提げて勇名を輝かせしところ以て北軍をおそれしむるに足るといふけれども、今日の戰爭は個人的勇氣のみを以ては勝敗を決することは出來ない。武器彈藥乃至各般物資の供給に於て南軍は遙かに北軍に劣る以上、戰場に於ける勝利は覺束ないと見なければならぬ。此等の點より考ふれば、南軍がいよ／＼軍容を整へて北上するといふことも亦極めて六かしい。故に予輩は豫々反袁熱が如何に全天下に漲つて居つても、政府反對の有力なる動亂は目下のところ容易に起るまじといふ見解をとつて居つた。即ち斯種動搖の起るべきを理由として我國が帝政延期の警告を發した時も、動搖の起るべしといふ觀測を非なりとして警告に反對したのであつた。今となつては予輩の見解の必ずしも當らなかつたことを耻ぢるものであるが、然しながら假令一旦動亂の火蓋が切り放たれても、支那官民一般に通ずる事大思想の容易に此運動をして大ならしめざるものあることは、之を斷言するに憚らない。只今度の運動が多年計畫の結果であり、且つ其人と其處とを得て居るといふ點からして、或は本物になるかとも考へらるゝ。

尤も今度の運動を帝政問題の直接の結果と見るのは

誤りである。袁世凱が皇帝になることを決心したが爲めに、之に激せられて初めて起つた運動と見るべきものではない。即ち今次の運動は、袁世凱の專制主義に反對するものであつて、彼の皇帝となると否とには拘らない。偶々帝政運動の爲めに上下の反袁熱は極めて旺盛を極むるに至つたから、好機乘ずべしとなして起つたまでの事である。現に南軍の發したる檄文の中にも、最後に四大綱領を掲げて、(一)に曰く『全國民と力を戮せ、共和國體を擁護し、帝政をして永く發生せざらしむ』る事、(二)に曰く『中央地方の權限を劃定し、各省民力の自由發展を圖る』事、(三)に曰く『名實相副ふの立憲政治を建設し、以て世界の大勢に適應せしむ』る事、及び(四)に曰く『誠意を以て邦交を鞏固にし、國際團體上の資格を增進す』る事を列擧して第一には帝制反對の意思を表明して居るけれども、主としては大總統就任以來の袁世凱の失政を數へて彼を斥けずんば四億の蒼生を奈何せんと慨して居る。故に今次の動亂は、袁世凱の隱退を見ずんば根本的には治らない。我國の論者の中には袁世凱が帝政を斷念さへすれば忽ち動亂が收まるかの如くに說くものもあるけれども、之は斷じて誤である。皇帝たると否とに拘らず袁世凱を斥けんとするのが彼等の目的である。只帝政問題による民間の反情を利用して、彼等が最近此運動を起したのである。帝政問題の爲めに革命派が絕好の機會を得たりとなして最近大いに焦つたことは、去年十二月五日の上海暴動事件にもあらはれて居る。あれは末派の革命派が輕卒に擧げた事であるといふことは、今日已に明白になつた。愼重の用意を缺きしが故に、直ちに鎭壓されて了つたが、今度のは上海事件の如く容易く討伐せられ了るものではないやうである。

以上述ぶるが如く、南軍は今や天下の精神的同情を得て居りながら、實力を以てしては未だ政府を壓するとが出來ず、而して政府軍は實力に於て稍優るところありと雖も、精神的反感天下に漲つて居るが爲めに、容易に兵を動かすことが出來ず、假令反感の憂ふべきなしとするも、地理上討伐の軍を進むることが出來ないとすれば、こゝ暫らくは睨合の姿を持續するの外はない。而して此間兩軍の策戰計畫は、自ら陰密の手段によつて敵を苦しめる方策をとるに至るであらう。南軍の恃むところは第一には四川・廣東の擧態である。第二には天下到るところに反袁團體が勃興して中央政府をして奔命に疲れしむることである。其爲めには革

命黨の志士は密かに全天下に遊說に行つて居ることゝ思ふ。予輩の知人にして日本に亡命して居つた者の中今次の動亂が起つてから蹶然本國に還つた者も少くない。此等は多く中部以北の同志を動かす爲めに運動して居るやうである。此等革命の同志者は多くもと日本などに留學した少壯の士である。又革命派は軍隊に於て大隊長以上には加盟を勸めないといふ內規になつて居る。身分の高い生活の饒かな者は、兎角一身の安危を思ふて說を變ずるの虞がある。もと大隊長位の時に革命黨に加擔し段々經上つた者の外は、旅團長師團長などに革命員はない。斯ういふ若い者の間に運動して居るのであるから、比較的に秘密が保たれるものと見える。斯くして所々方々に同志の蹶起を見るを得んことが、南軍の唯一の恃みであらう。然らば北方政府の之に對應するの策略も亦略察知するに難くない。即ち主として力を注ぐところは、動亂の蔓延を極力防ぐといふことである。一方には嚴罰を以て威嚇し、一方には贈賄を以て懷柔し、努めて事無からしめんとして居るやうである。されば動亂地方の景況の如きも、電報の檢閲などを嚴重にして、出來る丈け其形勢を小さいものに發表して居るやうである。今にも南方は一溜りもなく蹴散らされるかのやうに吹聽して居るのである。更に進んで動亂地方の內部に、例の密偵を放ち、反間苦肉の計を廻らして內部より擾亂するの手段を講ずるであらう。勿論之には多額の金を要する。是れ袁政府が速かに諸國の承認を求めて外資を利用するの策に苦心しつゝある所以であらう。袁政府の恫喝買收政策勝を占むるか。南軍有志の秘密勸誘運動功を奏するか。兩者の暗鬪は之を今後の成行に判斷するの外はない。

英國に於ける強制徵兵

英國に於ける陸軍の制度は、久しく世界の疑問であつた。必ずしも今度の戰爭が起つてからの問題ではない。殊に獨逸流の軍制が天下を風靡して居る時勢に於て、英吉利の如き生ぬるい制度を維持して居るといふことは、機關砲や航空機の物をいふ時代に、槍長刀を磨いて居るやうなものであると、他の諸國からは譏られて居つた。けれども英國は何等か深く信ずるところありと見えて、容易に軍制を改革せんとするの決心を

なさなかつた。曾て英佛兩國は、獨逸の壓迫に對抗する爲めに一九〇四年の協商關係を進めて攻守同盟の關係に立て直さんとしたことがあつたが、英國の陸軍があの態では佛國の陸上の負擔が徒らに多くなるばかりだといふので、立消えになつたと噂せられた事があつたが、事の眞相は暫く之を追究せずとして、英國の陸軍は兎も角も英國と關係の近い國をして常に心細く感ぜしめて居たのである。然るに今度の戰爭が起つて、いよ／＼英國も亦大いに大陸に陸軍を送るの必要に迫られ、玆に初めて英國自身其陸軍制度の缺陷を認めざるを得ざることゝなつた。而して孰れ早晩强制徵募の方法に出でなければなるまいとの事が、開戰當時から一部の人の問題になつて居つたが、いよ／＼去年九月十四日に再會した議會に於て此問題が討議せらるゝといふことになつた。

然しながら、英國政界に於ては强制徵兵といふ問題は、アイルランド自治問題以上の政治的暗礁である。アイルランド問題で無事難關を切りぬけても、强制徵兵問題に於て見事に暗礁を乘り超へるといふことは、本來英國に於ては殆んど不可能のことゝせられて居つた。强制徵兵に對する反感は從來英國に於ては一種の盲目的信仰である。英國は由來個人的自由を尊重するの國で、從つて出來る丈け國家の拘束を避くるといふのが多年の國是である。英國の政治家は一方には人類の國家的生活の必要を認めつゝ、尙個人的自由を尊重するの信念に囚へられ、國法を解して『必要なる禍（ネセツサリー・イヴイル）』と稱して居る。中にも兵役に强制せらるゝといふことは、彼等の最も忌み嫌ふところであつた。加ふるに兵員供給の主たる源泉をなすところの勞働者は一つには社會主義的の思想にかぶれたといふ點もあらうが、又一つには其實際上の利害關係から、强制制度には最も强き反感を有つて居るものである。されば去年九月議會再開の當時、徵兵問題の新議會に於て討議せらるべきの風說あるや、勞働組合中の最も有力なる團體たる鐵道從業員同盟は、月の十九日早くも反對の決議を發表した。獨り勞働者ばかりではない。政治家の中にも、一方には時勢の要求殊に外國の壓迫に動かされて熱心に强制制度採用を說く者續出するの側ら尙多數の有力なる政客の間には依然として反對の考が頗る盛んである。大體に於て統一黨は强制々度に傾いて居るが、然し其中でも前首領にして現聯合內閣の海軍大臣たるバルフォアの如きは最も熱心なる反對論者である。自由

黨大臣は首相アスキスを初めグレー、マッケンナー、シモン、ハーコート等皆反對論者である。只ロイド、ジョーヂの獨り統一黨の名士カルゾン、ランスダウン、チヤーチル、ボナーロー、チエンバレーン等と賛成者の列に伍する者あるのみである。若し夫れ勞働黨出身の大臣に至つては、首領ヘンダーソンを初め固より皆反對である。故に内閣員の顏觸を見ても賛否相半ばして居り、其間に一致點を見出すことは極めて困難である。强ゐて問題を惹き起せば、必ずや内閣動搖の禍を見るに至るであらう。而かも戰爭の形勢は時々刻々に英國の出兵增派を促して止まない。與國の輿論も亦之を促すこと切なるものがある。顧つて見るに募集に應ずる者は豫定の如く多くはない。政府之が爲めに如何に焦慮したかは之を察するに餘りある。而して差當り强制徵兵反對論者の賛成を得て先づ以て辛うじて實行し得たものは、去年七月五日大多數を以て衆議院を通過した國民登錄法の實施であつた。即ち之によれば、王國内に住する十五歲以上六十五歲以下の住民男子は、現に陸海軍に籍を有する者を除き、八月十五日を期して次の事項を公簿に登錄すべしといふのであつた。即ち姓名、住所、年齡、國籍、婚姻關係、子供の有無、其他職業に關する細かい事實を登錄するのである。之は何も兵員の募集の上に直接寄與するところはないのであるけれども、兎も角も之によつて國民中徵集に應じ得べき人數幾何なりやを明瞭にすることが出來たのである。これ丈けの事に對してすら之れ徵兵制度を布くの前提ではあるまいかとの懸念から、隨分世間の物議を釀したのであつた。而して此秋に入つて露西亞は益々窮境に陷り、バルカン方面も亦思はしくない。英國の奮勵を要するの聲は益々高くなつた。英國の出兵總數は約二百萬と稱して居るが、去年十二月下旬首相アスキスの言明するところによれば、十二月九日までの英軍の損害は死者十二萬、負傷者三十三萬九千、行衛不明六萬、合計約五十三萬に垂んとして居る。更にバルカン半島に於ける聯合軍の失敗は益々英國をして多數の兵員を徵集するの必要を感ぜしめた。是に於て彼のダルビー卿の五百萬募兵計畫といふものが起つた。而して此募兵計畫に就いても、豫定の通り運ばなかつた時にはどうするかといふ問題を起すものがあつて、十一月初旬首相アスキスは遂に其時には致方がない、先づ未婚者の中から强制徵集するの外はあるまいと言明するに至つたのである。而してダルビー卿の

募集計畫に對しては、適齡者と認むべき者五百萬人の中應募者は二百八十萬人に過ぎなかつた。是に於ていよ〳〵アスキスは約を履んで强制的手段に出でざるべからざることゝなり、十二月廿七八の兩日閣議を開いて最後の決心を表明し、玆に本年一月五日を以て陸軍法案の名の下に一つの强制徵兵法案を議會に提出することになつたのである。同日首相は議會に於て具さに其內容と理由とを說明したが、新案の骨子とするところは大體次の如きものであるといふことである。

(一)十八才以上四十一才以下の未婚者及び子供を有せざる鰥夫を强制して宣誓入隊せしむること。

(二)宗敎々師、宗敎上武器を取ることを得ざる信徒(例へばクウエーカーの如きもの)、一家唯一の扶養者たる者等に對しては、事情を具申して兵役に服せざるを得せしむること。

(三)此法律はアイルランドには適用せざること。

(四)此法律の適用は今度の戰爭の繼續中に限ること。

尙アスキスは法案の說明に當つて此新法は他日一般的强制徵兵制度を施行するの前提たるものにあらずといふことを繰り返し〳〵說明して居つた。此堅き約束の上に、强制々度の反對者も一時、應急の臨時的便法として此法案に贊成したのである。故に內閣に著しい動搖を見ることなくして、六日の第一讀會は百〇五票の反對に對する四〇三票の大多數で、又十二日の第二讀會は三九票の反對に對する四三一票の大多數の贊成で通過した。第一讀會に於てはアイルランド黨議員は全部反對したが、第二讀會に於てアイルランドを適用外に置くといふことに免じて全部贊成に轉じたから、反對は著しく減じたのである。獨り勞働黨は贊否兩派に分れて居つた。併し大勢は定つて仕舞つた。遠からず開かるべき第三讀會に於ても無論多數の贊成を得て、本月の末頃までには此等はいよ〳〵具體的の法律となることであらうと察せられる。

今度の問題の意味を明かにするには、英國從來の兵制如何を知らねばならぬ。英國今日の兵制は、一九〇八年、時の陸軍大臣ハルデン卿の立案編成せるものであつて、大體正規兵(レギユラーアーミー)と地方兵(テリトーリアルアーミー)との二つに別れて居る。

正規兵は文字通り平時正式の訓練を受けるもので、謂はゞ本當の兵隊である。一部は本國にも居るが、大部分は別れて殖民地に屯在して居る。殖民地に在る時之は又英國軍(ブリテッシユアーミー)と呼ばるる。なぜなれば殖民地に於ては此本國派遣の正規兵の外に、其地方〳〵の土民軍があるからである。例へば印度に於けるインデアン・アーミー、カナダ及び南アフリカに於けるローカル・フオアセスの如き之れである。殖民地のことは暫く措き、英本國のことについて言へば、前記正規兵は陸上防禦力の中心であるが、其外に專ら本國の防禦のみに用ひらるべき地方軍といふのがある。元來正

規兵の英本國に於けるものは戰時動員をしたところが約十六萬五千に過ぎない。然しこれ以上に澤山の兵隊を養ふ事は財政も許さず其他前にも述べたるが如きいろ〳〵の事情があつて事實出來ないので、玆に地方軍を以て其缺を補はんとするのである。之は各地方〳〵に於て有志の青年を集めて多少の訓練を施し、一旦有事の日に其地方の防備に充つるを目的とするもので、初めから外征には使はないとなつて居る。尤も細かいことをいへば、戰時二萬人を限つて外征に用ひ得るといふ特例もあるけれども、然し全體としては其地方の防備といふ丈けの條件で組み立てられて居るものである。然し之は軍とはいふけれども我々日本に於て想像するやうな、多年兵營生活をして嚴格なる訓練を受けたものではない。地方軍の兵役年限は四年となつて居るけれども、然し毎年兵事訓練を受けるのは、僅かに數週に止る。最初の訓練は一時間の訓練四十回以上を下るべからずとあるから、大したものでないことは明かである。二年目にはいくらか又減ずるのである。加ふるに志願制度であるから、どうしても嚴重な訓練は出來ない。英國人は義務の觀念が强いから、一旦志願した以上は十分其訓練に服するだらうとはいへ、人情として餘り嚴重に過ぐれば志願者が無くなるの惧がある。故に志願制度に於て嚴重なる訓練を見るといふとは先づ困難と見なければならぬ。してみれば四年間の兵役といひながら、其訓練の成績は恐らく我國の中學校等の兵式體操に毛の生えた位のものではあるまいか。百姓一揆や同盟罷工などの鎭定には之れでも澤山であらうが、固より大陸の十分なる訓練を受けた兵隊との對戰に用ふべき代物ではない。故に國際的戰爭を目當として英國の陸軍を論ずる時は、正規兵のみを眼中に置かなければならぬ。而して此正規兵は其數に限りあり、且つ雇兵の制度であるから戰時などに於て多くの兵員を得るといふことは困難である。獨り兵數を得るに困難であるばかりでなく、地方軍に於けると同じ理由で、餘り嚴しき訓練を與へ得ざる憂がある。十分にして完全なる訓練を與へるには、どうしても强制徴兵の制度でなければ行はれないやうに思ふ。此點に於て英國の兵制は確かに大陸の兵制に一籌を輸する。加ふるに豫定の兵員を募集するの困難は平時に於ても少からず苦心して居つたことは、予輩の現に彼地に於て目擊したところである。我々は英國の都會で、停車場や郵便局や多數群衆の寄り集る場所で、入隊勸誘の引札をぶら下げて居るのを見たことがある。新聞紙半頁大の大いさの紙へ裏表に細かいことが書いてある。例へば日給歩兵は五十錢、砲兵は六十錢やるとか、着物は一年に何枚新らしいのを與れるとか、クリスマスの時には何日暇をくれ、歸郷する者には特に新らしい着物を着せるとか、恰度我國の田舍に於ける工女募集の引札を思はしむるやうなことが書いてある。我國の新聞に、今度の戰爭になつてから英吉利はいろ〳〵な揭示をして入隊を勸誘して居ると報道して居るが、實は之は戰時に初めて起つたのではない。平時に於ても兵隊の募集には隨分苦んで居つたのである。

さういふ譯であるから、英國の識者の中にも、實は從來兵制改革の急務を叫ぶところの人が少なからずあつた。中にも最も有力なるは故ロバーツ將軍である。彼は南阿戰爭等の經驗に鑑み、又對岸大陸の軍事的勃興に動かされ、英國國防の危機を絶叫して强制兵役制度採用の急務を說いて居つた。彼は之を以て終生の事業となし、頽齡の身を以て南船北馬此主義の遊說の爲めに一日として席暖まるを得なかつた。國民兵役同盟（ナシヨナル・サーヴィス・リーグ）

は此主義に動かされて起り、彼は自ら其會長であつた去年の夏大陸戰場の視察中病の爲めに死んだが、彼の努力は段々朝野の間に認められて居つたのである。然し斯くても英國には從來個人的自由の思想が盛んであつて、どうしても强制されて兵役に就くといふ考にはならなかつたと見えて、いよ〳〵の場合となると矢張り强制々度の前に胄を脫がうとしない。

英國が思ひ切つて大陸的の强制々度を採るといふことは、今度の戰爭のやうな場合でも容易なことではない。然し從來の兵制では到底國家の急に應ずることが出來ないといふ思想は、戰爭の結果段々明白にはなつたやうである。尤も此考は戰爭の前から一部の識者の間には段々深く考へられて居つたのではある。卽ち現在の陸軍を以てしては、英國の國防は安全でないといふ思想は、十年以來段々一部の國民の間に盛んになつて居つたのである。尤も此種の考へを唱ふる者の中には色々の種類がある。一方には南阿戰爭などの經驗に鑑み、英國の目下の軍制では帝國內の動亂を鎭むるにさへ不十分ではないかといふ見地から軍制の改革を唱ふる者があつた。此議論も固より動かすべからざる眞理を道破して居るものであるが、然し之れ丈けではまだ多數の國民を動かすことは出來なかつた。そこで他方には獨逸陸海軍の勃興といふ現前の一大事實を提げて警鐘を叩くものがあつた。之には多くの國民は愕然として眼を開ひたのである。卽ち獨逸に於ける最近の軍事的勃興は、到底英國の軍事的覺醒を促さずんば止まない。今の儘にして居つては、英國の國防は累卵の危きにあると說くのである。從來英國人は英國の國防は專ら强大なる海軍によると說いて居つた。英國は島國である。海上に於て優越なる地位を占め、敵國の軍隊をして英本國に上陸するの機會なからしめ得ば、英國は永久に安全である。海軍さへ今日の如く强ければ陸軍の如きは全く之を顧みなくともよい。精々內亂の鎭定が出來る位の程度であれば結構であると思つて居た。さういふ見地から、英國は海主陸從といふよりも寧ろ全力を海軍に注ぐといふ方針を採つて居つた。之は政府當局の方針といふよりも寧ろ全英國民の信仰であつた。彼等は實は自ら陸上防禦力の極めて薄弱なることは知らぬでは無い。今日でも萬一獨逸の軍隊が上陸することがあるまいかといふ想像を描いて、非常な恐怖を感じて居る。曾てドーヴァー海峽に海底トンネルを穿ち、佛蘭西と大陸との陸上交通を計畫した者があ

つた時に、之が偶々佛蘭西兵の英國侵入の機會となるまいかといふ愚にもつかぬ想像を描いて、一時英佛の言論界を非常に騷がしめたことがある。これ皆英國人が昔から今日に至るまで常に陸上防禦力の極めて薄弱なるを自認して居る證據である。然し之程陸上の弱點を自認して居りながら、彼等が仍ほ陸軍制度の改革を敢てせざる所以は、一つには自由思想の中毒といふこともあるが、主として强大なる海軍に恃むの念の頗る固き結果である。そこで政府當局も海軍丈けには非常な精力を注いで居るし、國民も亦海軍に對しては全力を注ぐことを拒まない。此方針を繼續さへすれば、陸上に大いなる缺點があつても、先づ國防は安全であるといふ考である。玆に於て英國陸軍の改革を主張する者は、自ら所謂强盛なる海軍を以て滿足するの考に向つて更に大に抗論せねばならぬ。換言すれば所謂强大なる海軍に安ずる思想の謬妄を論證せなければならぬ。

或人は斯ういふ立場から此謬妄を論證せんと試みた曰く英國の海軍は昔は二國主義を採つた。卽ち英國に亞ぐ最大海軍國の二つに匹敵する丈けの力を養ふといふ主義である。英國が二大海軍國を敵として優に勝ち得る丈けの海軍力を備へて居る間は、或は國防の全責任を海軍に托して安心することが出來たらう。けれども近年獨逸海軍の勃興は、到底二國主義を維持すること能はざらしめ、遂に英國は獨逸のみを主たる假想敵となし、十對十六主義を以て滿足せねばならぬことになつた。然し獨逸の十の力に對し英國が十六の力を維持するといふことは、成程英國の海軍を依然優勝の地位に置くものではあるけれども、然し昔の如く英國の海軍が嶄然頭角を拔いて居つた時代とは、遙かに趣を異にする。獨逸は謂はゞ英國海軍の壘を摩せんとしつゝあるものである。斯く觀れば萬一の場合、獨逸の海軍は英國海軍の警戒線を突破して英國に陸兵を上陸せしむるといふことは、最早や全然不可能のことゝ見る譯には行かない。安全なる國防計畫としては、今日の形勢よりすれば、獨逸陸兵の上陸を全然計算の外に置くことは出來ないと。之も亦一應傾聽に値する議論である。更に他のものは斯ういふ立場から陸軍の改革を說く。曰く英本國の安全はいふまでもなく英國海軍の優勢に待つ。然しながら海軍の優勢なる地位は、單に頓數の多いといふことのみにあるのではない。其海軍をして十分なる活動の自由を得せしむることが必要である。而して海軍の活動が十分自由なるを得る爲めに

は、陸上の防禦が相當の程度に發達して居なければならない。陸上の防禦力が覺束なくては、海軍は思ふ通りに活動することが出來ない。思ふ通りの活動が出來なければ、いかに噸數が多くとも、海軍はたゞ木塀の如くに消極的地位をとるに止る。英國海軍の斯くの如き地位を取ることは、一方には海軍の有効力を減じ、又一方には英國と外國との交通を遮斷する所以である。斯くては國防の不安といふことばかりでなく、英國は經濟的に餓死するの外はあるまい。英國の海軍をして國防上十分なる責任を果さしめる爲めにも、英國は相當に强大なる陸軍を有することが必要であると。更に進んで斯ういふ立場から强大なる陸軍の必要を說く者がある。曰く昨今の如く獨逸の獨り隆々として勃興するを見ては、我々は和蘭、白耳義は勿論のこと、丁抹、佛蘭西の如きと雖ゝ永久に安全なるや否やを疑はざるを得ない。若し不幸にして此等の地方が獨逸の併呑するところとならんか、又は少くとも獨逸の勢力の下に歸ぜんか、英國は最早決して獨り安全なるを得ない。英國對岸の大陸が英國を敵とするもの丶占領に歸することは、少くとも英國をして經濟的に滅亡せしむる所以である。のみならず、之に依つて英國海軍の優越的地位は著しく危くなる。されば英國は今日の如き形勢の下にあつては、少くとも歐洲大陸西岸の地方に無關係であることは出來ない。英國自身の安危の上から此等の地方の運命を座視することが出來ないとすれば、英國は最早や從來の方針を改め、萬一の場合には大陸の事件に干涉するの覺悟を定むることが必要である。之には强大なる陸軍を要する。我等は國內動亂の鎭定といふ消極的の目的の爲めのみに陸軍を養つてはいけないと。

以上三つの說は、或は單獨に或は彼此相結んで、戰前に於て唱へられた軍制改革論の大要である。其中でも最も盛んに唱へられ且つ最も國民の耳目を聳動したものは、獨軍上陸の說である。國民は一般に英國の海軍は兎も角十分に沿岸を防備するに足るものであるといふことは疑はなかつた。けれども不慮の敵軍の侵入をも絕對に不可能ならしめ得る程度のものなりや否やといふことについては、多少ゝ掛念を持つて居つたやうである。之が絕對に不可能なるものならば英國は全く陸軍は要らないではないかといふやうな極端論は暫く論外としても、最近獨逸海軍の勃興は、獨軍の侵入を不可能とするの豫想をして多少動搖さして居るとい

ふことは疑ない。然らば陸軍の整備改革を說くの說は眞に國防を憂ふる者に取つては大いなる眞理であり、從つて識者の間に漸次多大の共鳴を感じつゝあつたことは之を想像するに餘りある。

斯く論ずれば英國に於ては軍制改革には一點の疑無かるべき筈である。即ち從來の制度に幾多の改善を加へ、殊に强制徵兵制度を採用すると云ふ事は、何人にも異議無かる可き筈であるが、實際はそうでない。國民の有らゆる階級の中に、非常に反對の考が强いのである。最も此制度に反對する者は、云ふ迄もなく勞働者である。其勞働者が堅密なる組合を造つて常に一致協同の運動をなし、社會に於て侮る可らざる勢力ある事は云ふを俟たぬ所である。而して彼等の中には社會主義者も尠なくはない。然らざる者でも社會主義的色彩を有する考に囚はれて居る者亦極めて多い。是等の者が社會主義的の立場から軍備の整頓改革に反對するのは固より怪しむを須ゐぬ。其他社會主義思想から縁遠い者でも、勞働者が一般に兵役に就く事を厭ふのは、獨り英國に限つた事ではない。何處の國でも强制制度であればこそ甘んじて兵役に服すれ。志願制度であれは容易に勞働者階級より多數の應募者を見る事能はざる事、皆英國と同一であらう。斯くして英國の勞働者は、或は勞働階級特有の思想より、又或は勞働者階級の利害の打算より、國家の急務を思ふ遑もあらずして極力徵兵制度に反對して居つたのである。現に去年の九月議會再會の際本問題の討議せらるべきの風說あるや、勞働組合中の尤も有力なる鐵道從業員組合が逸早くも反對の決議をなしたる事は前述の通りである。而して本年一月愈々此問題の議會に現はるゝや、是に對する態度を決する爲に一月六日に開いた勞働黨大會は、七萬八千三百餘票の贊成に對する百九十九萬八千餘票の大多數を以て、新兵制案に反對する事に決議した。されば勞働黨を代表して內閣に席を有つてゐたヘンダーソン氏以下の勞働黨大臣は辭表を呈せねばならぬ事になつたのであつた。ヘンダーソン氏等自身は首相アスキス氏の提案に贊成である。故に此點に於ては辭職すべき理由はないのであるけれども、彼等は元と勞働黨を代表するの意味に於て入閣したものであるから、今や自己の所信が勞働黨の決議に相反する事を見るに至つては、其確信に忠なる限り、勞働黨を代表する譯には行かぬ。そこで辭表を捧呈したのである。尤も月の半に至て辭表は撤回したと云ふ報道があつたが、要するに勞働黨は兵制の改革には斷然反對して何等讓歩の餘地を示さなかつた。一月十五日の新聞に表はれた電報に據れば、是亦有力な勞働組合の一たる坑夫組合大會も亦、三萬八千百餘票に對する六十五萬三千百九十餘票の大多數を以て反對の決議をしたと云ふ事である。是れもまた勞働者の本問題に對する態度を知るの一端になる。

然し徵兵制度反對の聲は、獨り勞働者から許り來るのではない。一般資本家階級に於ても、或は財政上或は產業上是を排斥するの考が仲々に强い。財政上と云ふのは、徵兵制度を布いて新たに大陸軍を養ふと云ふ事になれば、非常に財政が膨張する。而して其財源を何處に求む可きやが一ツの難關であると云ふのである。產業上と云ふのは、徵兵制度の施行に因て働き盛りの勞働者が兵士として徵集されては、英國の產業の現在の隆盛は妨けらるゝと云ふのである。是れも亦鈍重たる英國人の深く信じて徵兵制の採用に反對するの口實となす所である。加之英國には元來個人的自由の思想が旺であつて、所謂强制と云ふ事に對しては、其何れより來るものに就いても、是に反抗するを常とする。强制せらるゝを欲せずと云ふ念は、英國の國民性に附着する感情的迷信と云ふてもよい。

彼等が國家的拘束を叫んで「必要なる惡」と見做したるが如き、亦如何に個人主義自由主義に醉ふて居るかを示すものである。此點よりして徴兵問題は從來有力な政治家中にも仲々反對が多かつた。されば最近獨逸の壓迫に依て益々軍備整頓の急務を感じても、愈々英國が徴兵制度を執るに至るであらうと云ふ事は、到底吾々の豫想し得ざる所である。軍制改革運動の急先鋒たるロバーツ將軍の主張を見ても此事がわかる。其は彼なる最も熱心なる强制徴兵制度の主張者であつたけれども、然し彼の英國民に訴ふる所は、十八才の青年男子に兵役を三年間强制するのであると云ふけれども、然し第一年は數ヶ月、第二年第三年は數週を限て訓練すると云ふのであるから、極めて輕微なる負擔である。其上强制して徴集するのは本國防禦軍のみであつて、海外遠征軍は從來の通り志願兵制度を維持すると云ふのであつたから、我が國等に行はるゝ兵役制度等に比較すれば極めて寛大なものである。英國に於ける最も極端なる改革論者の主張が既に斯くの如くであるとすれば、亦以て英國民一般の兵役問題に對する考の如何を推知すべきである。

國內の輿論が前述の如くであるから、今度の兵制改革も、首相アスキス氏の議會に於ける言明の如く、戰爭の繼續中に係る一時的の便法にして、決して之を前提として將來一般的に徴兵制度を採用するに至らざる可きは明白である。故に今度の陸軍法案は、是を以て兵制改革問題の根本的解決と云ふ事は出來ぬ。唯之に依て英國民は强制制度の實地に伴ふ幾多の經驗を積むであらう。此經驗に基いて更に國民の考を一變し、他日改めてほんとうに强制々度を布くやうにならぬとも限らぬ。けれども始め條件を附して定めた事を、後に絶對的無條件的なものに直すと云ふやうな事、例令ば戰時非常税として議會の協賛を得た織物税や通行税をば戰後に至つて之を永久税に直すと云ふやうなペテンは、英國政治家の決して爲さゞる所である。故に英國では戰爭が終れば又もとの志願兵制度に復り、兵制改革論者をして再び口角泡を飛ばして論難せしむるであらう。一部の論者の中には、斯くの如き空前の時機に際してすら自由思想の迷夢より覺めず仍然として頑迷の態度を固守するの愚を嗤ふ者もあるけれども、英國が幾多の失敗を重ねて而かも尚ほ自由主義を捨てざらんとする事は今に始まつた事ではない。或る意味に於ては是れ英國國民性の缺點ではあるけれども、然し乍ら英國が戰爭には負け乍ら居然として底力のある大國民たるの態度を維持して居るのは畢竟是れあるがためではないか。

右述ぶるが如く、今度の法案は戰爭繼續中を限る一時的の方便である、即ち戰爭の急に應ずるの目的を以て立てられた者であるが、是れが爲に英國は果してどれだけの兵力を増す事が出來るかと云ふに、是れは決

して豫想の如く大なるものではない。第一に假令どれだけの數を增しても、急激に訓練をすると云ふのでは實際强大な力とはなるまい。而かも新法に依て新に强制徵集し得べき兵數は、政府の報ずる所に依れば百萬內外との事である。して見れば現在の兵數に加ふる所さして著しいものではない。況んや戰場に於ける彼我送兵數の全體に比較すれば極めて微々たるものである。故に今度の新法は、其聲のみ徒に高くして實際に加ふる所は左程大なるものではないと思はるゝ。唯然し乍ら、今度の新法の國の內外に與ふる所の精神的効果に至ては、極めて大なるものありと言はざるを得ぬと思ふ。何故なれば、第一に外國に對して英國の決心の牢として拔く可らざるものある事を示し、又國の內部に向つては盛に各方面からの出征者を出ださしめ、以て民間に於ける對戰爭の興味を嗾るからである。是れ迄出征するものは中流以上の壯者青年に多くして、勞働者階級から出るものは案外に尠なかつた。自分の仲間や親族故舊やが遠く戰場に出て居ると云ふでなければ、國民は戰爭に熱狂しない。勞働者が稍もすれば國難を他所に見てストライキ等を敢てするのは畢竟今度の戰爭は彼等より觀て彼等自身の爲す所の戰爭でないからである。而して强制々度は即ち戰爭に對する下層民間の風氣を一變し、英國民全體をして眞に舉國一致せしむる所以となるだらう。加之英國が萬難を排して此處置に出でたのは、最後迄戰爭を繼續せんとするの決心の堅きを示すものであつて、是に依て敵を脅かし與國を心强く思はしむるの精神的効果は、更に計る可らざるものがあると思ふ。

文藝時評

正宗白鳥

田舍より

××君。

私は二十年目で故鄕の家族の中に加はつて新年を迎へました。東京で正月が來るたびに、寂しい雜煮の膳に向ひながら、屢々田舍の家庭を思出しては懷かしがつてゐたので、今度の避寒旅行には大晦日前に歸省するやうに日取りを定めたのでした。しかし歸つて來て久振りで田舍の大晦日や元日の光景を見ると、永く記憶に潜んでゐた幼少時代のとはまるで違つた殺風景なものになつてゐました。一番鷄を聞いて起上つて、一

家の首長が裃を着けて、鏡餅を載せた三寶を捧げて氏神へ參詣したり、神棚の前に房々と垂れた注連飾の下で行燈を點して、黒塗の膳に向つて南天の箸で雜煮を喰べたり、その他先祖傳來の些細な儀式は大抵廢れてゐました。只雜煮餅を食つて炬燵に當つてゐるだけの新年でした。

私は無論古風な儀式などにさしたる愛着を持つてゐないから、温かい日光に浴してすが／＼した汐風を吸つて、心靜に寢たり起きたりしてゐられゝば、これを何より結構なお正月のつもりにして日を送つて居ります。儀式と云へば、旅行の途中京都へ立寄つて、御大典後の紫宸殿や大嘗宮や二條離宮の大饗宴式場などを拜觀しました。京都名物の時雨に會つたり、巡査に劍突を喰はされたりして、外套や帽子を抱へて狼狽へましたが、しかし、新聞の記事でぼんやり想像してゐたものが、明瞭に印象されて、いろ／＼な益を得ました。崇嚴とか雄大とかいふ感じを與へられるよりも單純素朴なのに驚かされました。上代の歴史が偲ばれて神々しくは思はれましたが、平明淸素で、神秘不可思議なところも威壓的なところもない神々しさです。宗教などにこだはつてゐる國々の即位式とは自から趣きが異つてゐるだらうと思はれます。

私は歸鄕後一度づゝ後の山へ登るのを日課として居りますが、毎日天氣はいゝし、目に觸れる限りの山や海が透明で一點の暗澹たる影も宿してゐません。紫宸殿を仰ぎ觀て威壓されるよりも親み易く懷かしみ易い感じを與へられるやうに、故鄕の山から見渡す自然もさういふ印象を私の心に與へるのです。內海を行交ふ汽船や漁船も、點々と浮んでゐる嶋嶼も、屋島や五劍山などの四國の山々も、透徹つて鮮かに見られる。左右の枯野の樹木の梢も枝も一つづゝはつきりと形を映してゐる。たとへ雲が隱してゐても、その向うの山が怪異不可思議であらうとは思はれません。

私は山頂の小祠の傍の石に腰を掛けて、周圍を眺めてゐると、あまりに平明なのに飽足らないことがあります。自然の神秘とか人世の不可思議とかいふやうな事が些とも念頭に浮ばなくなつて、平凡極まる氣持になつてしまう。目に見えぬ所に恐ろしいものか尊いものか何かゞ潜んでゐるといふやうな考へを眞面目に起されなくなります。瓦屋根に白壁の一群の人家も只の明るい繪として見下されます。南薰造氏のある繪畫を思出して、私はその眞實を感じました。私が山の上か

ら村々を見下した時の氣持は、あの繪畫に對して得たやうな氣持であります。

　私はこの平穏明快な景色に化せられて、かねて靜かに冥想に耽らうと企てゝゐた殊勝な考へをも掻消されて、只眠つてゐるが如き頭で弟妹の騷ぎを傍觀し傍聽してゐるので、机の上の奮闘や煩悶や熱情から暫く遠かつて、本來の我れに返つてゐるのですが、しかし、新年の雜誌は四五册寄贈されたので、退屈醒ましにぼつ〳〵開けて見ました。今のやうな境遇にゐて、炬燵の上で讀んだりしてゐる時に、雜誌といふものは最もその價値を發揮するのだらうと思ひます。殊に今月は新作批評の筆を執る筈ではなかつたのだから、尚更樂んで讀むことが出來たのでした。重な作家の苦心の作物でも、自分の今の氣持に適しなければ、一ページだけで中止したり、詰らない作物でも笑ひ草になると、二度も三度も讀返して獨りで面白がつたりしたのでした。

　私は最初に鷗外氏の「寒山拾得」を讀みました。私はしがらみ草紙以來氏の筆に成つたものは、あまり讀んでゐないし、偶に讀んでもさして敬服したことはなかつたが、最近の歴史物はどれも皆愛讀してゐるのです。尤もその重な面白味は比較的確實な講談ともいふべき點にあつて、材料の興味に惹寄せられるのであるが、そればかりではない。一つ〳〵の材料に對する取扱ひ方に聰明な氏の頭腦の働きを窺ふことが出來ます。氏の面白い着眼も材料の中に融込んで描かれてゐないで、稍々もすると抽象的の説明に留まつて道話めく弊のあるのが、何時も氏が傑れたる藝術家たるべくあまりに多く學者であると思はれるところです。

「寒山拾得」は有りふれた材料から組立てられてあつて、私にしても略々知つてゐることだから珍らしくはなかつたが、作者が狙つてゐる閭丘胤といふ官吏の態度にある興味が寄せられます。私は寒山詩集を讀み彼等に對する傳説をも讀んだことはありますが、閭に對しては何の感じをも抱かずに見過ごしてゐました。しかし、鷗外氏の新作によつて見ると、この人物の方に一層多くの共鳴を覺えさせられます。

　同じ作者の「高瀨舟」は前作よりも藝術味に富んでゐる上に、囚人と護送者との二人の氣持がそれ〳〵に私の同感を呼起しました。私はこの寂しい故郷に起臥して、時々滿二十年の東京生活を彼れこれと夢のやうに思出すこともありますが、囚人の喜助や護送者庄兵

衞の氣持に類似した考へがふと胸に浮ぶことがあるのです。背景といひ人物といひ、靜かに漂つてゐる人生味といひ、鷗外氏の近時の作中では最も傑れたものではないかと獨りで感心してゐたのでした。そして、閭丘胤や庄兵衞の氣持は作者その人の氣持ではないかと思つたりしてゐます。

　その次に小山内氏の「江島生島」を熱心に讀みました。この有名な事件の眞相を初めて詳しく知ることが出來たゞけでも作者に感謝します。どれだけが確實な事實でどれだけが作者の空想か私には明瞭に分りませんが、木に竹を接いだやうなところは尠いやうでした。お初の生立ちが最も巧みに描かれてあると思ひました。鷗外氏の歴史物に比べると叙述にムラがあつて繁簡宜しきを得ない感じがしますが、その代り鷗外氏からは得られさうでない多少の艶があります。しかし豫期してゐたやうな濃艶な描寫は見られませんでした。一體が事件を叙述してゐるといつたやうな作柄です。江島の心理の變遷にも團十郎と新五郎との對照に作者の脚色の才をも理解をも見ることは出來ますが、讀んで行く間に靴を隔てゝ痒きを掻くといつたやうな感じがありました。

高濱虚子氏の小説に久振りで接しました。「高瀨舟」中の人物の氣持に同感した私はまた虚子氏の「落葉降る下にて」の主人公の氣持に同感しなければならなくなつた。是でも非でも、かう云ふ氣持に衒氣なく人間を見詰めた人の眞心の影を私は認めるのです。私自身が現在この作中人物のやうな心になり切つてゐるのではありませんが、「これが本當だ。とゞのつまり其處へ行かなければ嘘だ」といふやうな言葉が私の耳元で囁かれて居ります。「何が善か何が惡か」といふこの小説の結末の句を讀むと、私は「何が善やら欠伸やら」といつた近松の文句を意味ありげに思出しました。

　氣持に同感してゐるばかりではない、この作にはホトヽギスなどでよく鼻につく虚子臭があまり出てゐないので快く讀みました。私は虚子氏一派の俳句論に、この「落葉降る下にて」の作中に含んでゐるやうな靜觀的態度があつたらばと思ひます。

　武者小路氏の脚本では「小さき運命」を通讀しました。前の二三の作家に比べると、年齡の相違が著く目につきます。强味も弱味もそこにあるのでせう。氏の「三和尙」といふ脚本は餘程面白く讀みましたが、今度の作には何處に價値があるのやら薩張り分りません

でした。若様と小間使とのいきさつが甘くも辛くもなく、なが〳〵と書かれてゐるだけで、随分讀みづらいのでした。父や母の會話も只凡庸な言葉が運ばれてゐるばかりのやうに思はれました。氏の作物にはよく非國家主義の傾向があらはれてゐると誰れからか聞いたことがありましたが、これまで私の目に觸れた數種の脚本について云へば、そんな主義が強く出てゐるとは思はれません。

田村俊子氏の「榮華」は私の心によく入つて來ませんでした。氏の多くの作は何等かの印象を殘すのであるが、この作は不思議に稀薄なものです。

中村星湖氏が堅實な作家であることは一作ごとに證據立てられます。どう間違つても浮つ調子な厭味なものは作らぬでせうが、稍もすると理窟つぽい煩瑣な説明に墮した作を出すことがあります。今度の「人間の夜」は私がこれまでに見た氏のどの小説よりも文章は引締つてゐて、しかも悠々と迫らない趣きが見えて、作者の進境を認めない譯に行きません。それにかゝはらずその一風變つた人間の理窟や表面的行動が私の頭に映るばかりなのはどういふ譯なのでせう。一つ急所を抉つた所があるか、一箇所でもヴイヴイツドな描寫があるかすれば、それ等の理窟も表面的行動も大いなる意味を有つて來るのでせうが、さういふ所も見つかりませんでした。

上司小劍氏の「巫女殺し」は辷るやうな筆致で、する〳〵と讀通される。頭にひつかゝつて來る所がないので、人殺しといふやうなことでも淡い繪のやうに輕く見過ごされます。殺し場の會話なり動作なり、作者は笑ひ〳〵書いてゐるやうに思はれますが、これは上方言葉から我々が受ける一種の滑稽味によるのかも知れません。私は氏の作も大分讀んで來たのですが、どうもまだ氏の正體が攫まへどころがないやうな氣がします。「巫女殺し」に對する是非の判斷も君などから敎へを受けやうとこそ思つて居ります。

北村清六氏の昨年の小説は初めを少し讀んだだけで中止しましたが、今度の一群の人々は通讀しました。ばさ〳〵した書振りで讀んでゐて可成り退屈を覺えましたが、衒氣のない純な作品だから、厭な感じはしませんでした。手薄ではあるが、讀後に一群の青年の動搖してゐる姿が世間の實相として顧みられました。

昨年の「絶壁」を讀み、今月の「毒藥」を讀み感想

錄をも讀むと、田山氏のこの頃の心持がよく窺はれます。氏ほど自分の感じをあけすけと書く人はない。强いて自分を重々しく見せやうとするやうな所のないのが氏の尊いところです。私は「絶壁」に於ても誠實な人間の目から出る涙を認めました。「毒藥」を讀んでゐる中に、私はふと小川未明氏の作物を連想しました。誠實な人の人生に對する戰さといふやうなところに類似を見たのだらうと思ひます。無論兩氏の作風を同一視するやうな沒分曉な考へを起すのではありませんが。……

小說はこのくらゐにして置いて、私は他の記事に目を向けました。

丘淺次郎氏の論文は私は常に愛誦してゐるのですが「題字序文校閲」は詰らなく思ひました。論旨は當を得てゐても、こんな平凡な常識的な意見を氏の如き人から聞くに及ばないと思ひます。その他の學者のいろいろな方面からの社會批評にも耳を傾けて敬聽するほどのものは見當りませんでした。

「太陽」誌上に於ける内田魯庵氏の隨筆を私は毎回缺かさずに愛讀して居ります。文學美術政治敎育、その他社會萬般のことについて、開けた見解を有つてゐるし、靑年評論家の企て及ばない旨味のある筆を有つてゐるので、こんな種類の雜錄に於ては、雜誌界に異彩を放つて居ります。そして氏は世間の出來事や作家については、絶えず面白い諷刺や皮肉や敎訓を與へてゐられるにかゝはらず、決して氏自分の實際問題や心中の悲喜哀歡について何等の感想をも洩らしません。自分の頭の蠅は追はうとしない人らしく思はれます。自分の事を何によらず書きつける花袋氏の「文章世界」上の隨筆といゝ對照をなして居ります。

××君。

私が歸鄕した時には、庭前の楓や櫻がまだ紅い葉をつけてゐましたが、この頃は名殘りなく散つてしまひました。私は長谷川天溪氏の「統一的風潮と生の溫味」といふ明晰な論文に全然同意して、現代の人心の險惡を歎じたり生の溫味を渴望したりしないではありませんが、それは世間に對する時の問題で、自分の心に目を向けて見ると「落葉降る下にて」や「高瀨舟」の人物の氣持に一層多くの同感が寄せられさうに思ひながら、靜かな溫かい冬枯の庭を眺めて居ります。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

理學博士 丘淺次郎先生新著

生物學講話

定價金四圓五十錢 送料内地十六錢

▼生物學は人生觀の基礎を確立す哲學宗教倫理教育文學藝術政治軍事その他人生百般の問題一としてその解決を生物學に俟たざるなし

▼生物學を知らざる者は因襲の謬見に囚はる生物學を知る者は思想自由にして判斷適實なり故に生物學を知る者は新なる生活を開く

▼生物學は輓近の學問にして未だ一定の體系なし本書は博士獨特の創案にして從來の所謂生物學とは大にその趣を異にす

▼博士の快筆は生物學を說いて文學となし讀者をして無限の興趣を感ぜしむ

三色版外插圖四百
洋裝頗美本函入

發行所 東京小石川小日向水道町
振替口座東京第五參貳貳
開成館

取次所 全國主要書店

(中付二の一)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

文學博士 三宅雄二郎先生著

青柳有美先生苦心の解説！

（忽ち五版）

縮刷解説 宇宙

●世界的大名著の解説出づ！

我々人間の居る此宇宙とは如何なるもの？……本書に依つて千古の疑問を解け！……

■原著の半額 ■金一圓五十錢

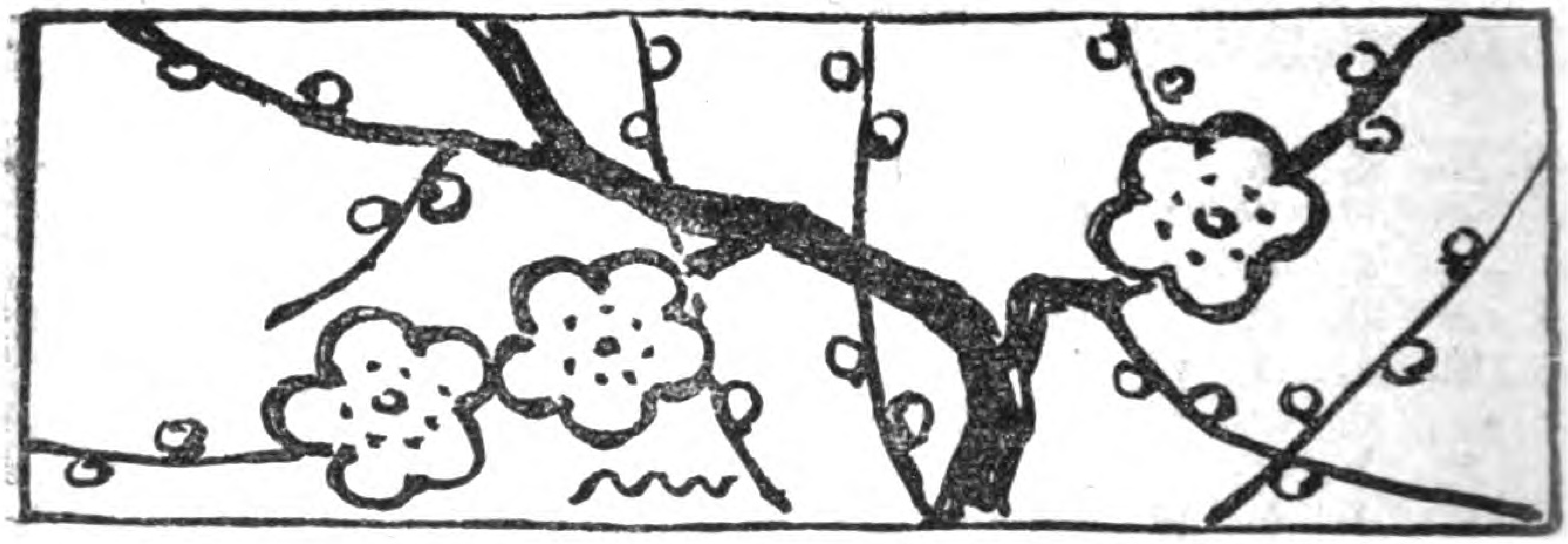
▲小形上製箱入▼

▲紙數七百頁▼

太陽、月、星、地球より人類草木魚介昆蟲山川岩石皆宇宙の一分子にして風月雷電皆宇宙の一現象である。抑も此宇宙とは如何なるものにして、人は其中に何を爲すべきであるか、是等の事は、遠く太古より考へられたる問題なるにかゝはらず未だ一人も是を解明せる者は無い、學識人格一代に高き三宅雪嶺先生は夙に「宇宙」を著しこの難問を解決された、併し其原著は既に絶版となり、偶々古本あるも原價三圓以上の價を示し且つ一般人には到底解し難いものである。本社は之を遺憾とし、三宅先生の許可を得て洽學博識なる靑柳有美氏が茲に平易懇切なる解説を著された。實に本書は世界最近のあらゆる知識を網羅せる近代文化の一大百科全書と稱すべきものである。苟も生きて甲斐ある生活を送らんとせば本書を讀み宇宙の何たるかを知るべきものである。宇宙の中にありて宇宙を知らざるは誠に殘念と言ふべきではあるまいか。

東京麴町區有樂町 實業之世界社 振替口座三四三三

（中付二の三）



（弴曰く。この作、篇中の「俺」なる人物が手記たるの感を表す上に於て、標題は啻に無用のものなるのみならず、却つて邪魔ものなるが故に敢て附せず。」

里見弴

——帳面の紙三枚破毀、並に數行の抹殺あり。次に——

……たうとう俺はその事を成し遂げて了つた。……注意深く手を拭いた手巾(はんけち)は丸めて袂に入れた。……手早く着物を着直して、部屋の偶に疊んで置いてあつた夏羽織をひつ掛けた。それから極めて平靜に薄暗い梯段を下りた。階下(した)ではかみさんが肌ぬぎになつて內職のミシンをガチ〳〵踏んでゐた。

「よく寢込んでゐますから……」と、一寸天井を指して、俺は女のことを云つてゐる肚(はら)を傳えた。その時、自分たちの戀の秘密を握られてゐる年上の女に對してよく若い男がする、靠れ掛かるやうな甘い信頼や、便(たより)なげな初々(うひうひ)しさが混り合つた或る弱々とした表情を現はしてゐるのに自分で氣がついた。そこま

で工らむだ覺えはないが、この場合に最も適應してゐる、巧みな、巧み過ぎる件の表情がひとりでに浮び出たのに心づいた時に、俺は自分ながら嫌惡と云へるほどの不快を感じた。こんなことも或る目的の爲めに意識的にしてゐるのならばまだしもだが、自然とこんな情ない表情になるやうでは駄目だ。肚の薄い證據だ。かう心で自分を叱りつけながら、

「……私はこれから用達しに行つて來なければならないんだが、さう、今何時でせう」と柱時計を見上げて、「六時半と、ぢやア晩くも八時迄には歸つて來る心算だと、若し起きたらさう云つといて下さい」

……若し起きたら？　ギヨツとした。

この言葉は一週間ほど前から殆どそつくりその儘の形で何遍か腦のなかで繰り返へされ、訂正されて出來上つてゐたのだが、(それ故にまたスラ〳〵と少しの澁滯もなく出たのだが)それを初めて音にして、實際の「現在」に役立てゝ見た時に、俺は震ひ上つた。若し起きたら！　……こんな陷穽を自分で自分の行手に用意してゐやうとは。

……だが、死んで了つた者が起きやう筈がない。こんなことで一度々々ビク〳〵してゐてどうする。それは單にかみさんに怪しまれない爲めの虚言に過ぎないぢやあないか。若し起きたらと云つたつて、死骸が起き上つてどうする。考へて見ろ、今から三四時間しても女は起きて來ず、俺も戻つて來ないのに不審を起してかみさんが二階へ上つて行つて見た時、あの心臟病らしい靑ンぶくれの顏が驚きと怖れの爲めにどんなに歪むか。若し女が起きて便所にでも下りて來たら、あの無愛想なかみさんの顏は

振り向いて、「お目覺め？」とでも云ふだらうが、必ず歪みはしない。所が、氣の毒なことだが、あの顔はこゝ數時間のうちにどうしても歪まなければならないことに運命づけられてゐるのだ。俺は努めて冷靜にならうとして、かう云ふ風な條理的な考へ方をした。

總ては先達から幾度も思ひ描いた通りだつた。かみさんは眞鍮椽の眼鏡をはづしてミシン臺の上に置いてから、「濟みませんが……」を附けて定められた席料を要求した。俺は故意と、「直ぐ歸つちやあ來るが、それでは……」と云つて金を拂つてやつた。それからそこを出た。

七時前と云つても戸外はまだ赤々とした斜な夕陽が往來や屋根の上に反射へつてゐた。撒水車が通つた跡の水が汁粉の上に浮くやうな汚い泡をチブ／＼云はせてゐた。電車がチン／＼通つたり、小供の群が往來を駈けぬけたり、色の黒い豆屋が大聲で可笑しなことを怒鳴つたり、自動車が埃を立てゝブウブウと横町を曲つたりしてゐる。どことなく氷屋の大鋸屑が甘つたるく匂つて來る。何一つ變つたことはない。右ひだりに往來してゐる人間ばかりではなく、暑さと埃にめげた街路樹でも、銀行の建物でも、濁川に落ち込んでゐる下水でも、甘酒屋の朱塗りの荷でも、耀き亘る大空でも、何一つとして俺の出現を特別な注意を以て待ち設けてゐるものはなかつた。總ては極く普通な夏の或る夕方らしく、何事もない顔をして、暮れかけてゐる。これも然し俺は豫め思ひ描いた心の繪のなかで眺めた光景の一つであつたから、さして不思議にも思はなかつた。――またちつとも不思議なことはない。……一體俺はそれから殺人犯人として逮捕されるまでの時間に書いて置きたいことがあつた。三面記事や人の噂などから漠然と得てゐる日本警察の探索の力倆と、俺の犯罪の諸條件とをつもつて見て、凡そ三晝夜位は

自由な時間が得られると信じてゐた。然しそれにしても、あのかみさんの家を出たら早速宿屋をとつて、書きものにかゝることに極めてゐたのだが、(不思議でも何んでもない)世間が餘り俺に特別な注意を拂はないと云ふことが、矢ッ張り俺に或る思ひ設けぬ結果を惹き起したか、俺はその晩T市の町々を一時過ぎまで歩き廻つて了つた。それには、俺が書かうと思つてゐたことが、急に面倒臭くなつて、もう書く氣がなくなつて了つたと云ふ、別な動機も働いてはゐるが。

俺の足は坂を轉がり出した毬のやうに停らなくなつて了つた。普段から市街の散歩を好む俺は、わりに廣いT市じうの町々に通じてゐた。そのうちでも常に好むで歩きつけた道筋へ、最初俺の足は動いて行つた。どこへ行つても變りはなかつた。二三日前にも通つて、席亭の看板に三人並んだ落語家の名をまだよく覺えてゐる角なども曲つた。それだのに俺は、久し振りでO市から歸つて來て、T市の舊い友達と、以前よく一緒に歩き廻つた街を、もの珍らしく、懷しげに歩いた一年ほど前の或る晩のやうな心持になつて來た。

「これが娑婆の見納め、か」などゝ一方にはそのセンティメンタルな心持を自分で冷笑する餘裕も有つてゐた。即ち、他方にはさう云ふセンティメンタリズムがあつたことも俺は認めてゐる。

「しかし、意識さへしてゐれば、それも必竟慥かな己の感情だ。ちつとも貶めることはない」――かう思つた。

N區の或る町でふと嘗て二三度行つたことのある料理屋の前へ通りかゝつて、いつかそこで鰍の一日乾しを甘がつて食べたことを思ひ出した。いつの間にかもう普通の夕食時分を過ごしてゐたが、俺は食

事のことはまるで忘れてゐた。で、その時鰺の一日乾しを思ひ出すと急に食慾が起つて來た。直ぐそこへ行つて見ると相憎もう火を落したあとだつた。他では、どこへ行つても、とても今茲で食ふやうには甘く食へさうもない氣が妙に强かつたので、無理とは思つたが執拗く賴んでみた。が、矢ッ張り斷られた。俺の落膽は豫想外だつた。仕方なしにまた的もなく步き出したが、その內また食事のことをすつかり忘れて了つた。——こんなことは今から考へてみると少し變だ。何か或る考に沒頭してゞもゐたやうに思へる。然しその實俺は案外呑氣だつた。明るい延び〳〵とした心持でゐた。それに、晩になつてまで暑かつた日で、俺は何軒となくノベツに氷屋へ這入つたから、實際さう腹もすいてゐなかつたやうだ。

俺はF區で或る反りのヒドい、古風な橋の上に來かゝつた。そこには男や女が世間話しをしながら涼んでゐる浴衣姿がポツ〳〵見えた。俺も初めは何んの氣なしに、欄干に靠れかゝつて休むことにしたが、暫く暗い水の面を眺めてゐるうちに、ふと、あの血のついた手巾がまだ袂のなかにあることを思ひ出した。これを捨てるに屈强な場處はそれまでにも通つた。兩側に人道のついた長い鐵橋を渡る時にもさう思つたが、そこにでは誰も餘りに俺の行動に注意を拂ふまいと思はれたのが、却つて、どこかに俺をジッと見詰めてゐるたつた一つの目がありさうな氣をさせたので、見合せて置いた。俺は一間以內に澤山人がゐる所で、同じやうに川風に吹かれながら先づ卷煙草を出して火を點けた。それがお仕舞になる頃、大袈裟に咽をカッと鳴らして水面に唾をはいた。續いて野球で投手がするやうに、大きく腕を振つて出來るだけ遠くへ煙草の吹ひ殼を投げた。それから約三十秒ほどおいて、例の手巾の玉を寄すやうに掌から落した。——かう云ふ、傍の人の心理にまで深い注意を行き亙らせたやうな仕草は、然し、

脳で工風したのではなくて、ひとりでに神經が命じたので。尋常に刑に服する氣でゐる俺には、別に證據を湮滅させることにさう苦心する必要とてはなかつた。だから、かう云ふ要愼深い行爲を卑怯とも、隨つてまだ不快とも思はなかつた。それは俺の神經だ。銳敏な健全な神經が働いてゐた證據だ。同樣に俺の脳も健全なのだ。俺は自分のしたことに少しも病的な點を認めない。遂げ難い願望を成遂して了つた俺は非常に快活でこそあれ、些々たる證據物件位のことで心を碎いて、兎やかう工風を凝らした譯ではない。

　俺の遠足は大分長かつた。三ところで緣日の町へ通りかゝつた。カンテラと人間の匂ひを嗅ぎながら、二度目の時先の緣日を歩いてゐた時を思ふと、二日も三日も、乃至十日も前のことのやうな氣がした。しかしそれ以前へ、その日の午後へ記憶を遡泝ることはしなかつた。たゞ、若しも敢てさうしたなら、矢ッ張り最近の出來事のやうに生々しく思はれさうに想像された。或る裏通りで、荒物屋の店先の緣臺で始まつてゐる將棊を暫く立見した。王と銀とその頭の步と敵の成角との位置が、步き出してからまで、繰り返し〳〵目さきにチラついてゐた。俺は脳が少し勞れだしてゐることに氣がついた。

　大分夜が更けて來たが俺の足はまだ停らなかつた。世間が暗くなつて、色彩で目を惹くものがなくなるにつれて、建物の大さなどが目に附きだした時、俺は小學校と云ふものが案外澤山あるのに驚いた。よく小供が足りる、などゝ悧然考へながら歩いた。同じ道を二度通らないやうに注意して歩いてゐたうちには、勢ひ生れて初めて通る街へも曲らなければならないことがあつた。初めての、餘り暗い通りは心持が惡かつた。若し非常線にでも引ッ掛つて、出發點や行先を調べられた時に、答を造るのがムヅカ

しさうだつたからだ。然し風態から云へば俺は怪まれる氣支はなかつた。折目立つた羽織も引ッ掛けてゐるし、麥藁帽子だつてまだ天井の盛り上らないピンとしたのを被つてゐた。携帯品としては、懐中ものや時計などの外には、新らしい洋紙の帳面と、萬年筆と、先刻買つた半折の手巾のうち五枚とを包んだ風呂敷包があるばかりだつた。また俺は時刻に適はしい程の歩調に、歩みを早めることも忘れなかつた。——交番の赤い灯も、洋劍の音も、少しも俺を不安にする威力を有たなかつた。

たうとう俺は腹をすかして蕎麥屋へ這入ることにした。暖簾を潜らうとして、俺はふと或る事を思ひ出して躊躇して了つた。それは大分以前に鏡花の小説で讀んだことゝ思ふが、慥か女の怨靈に取り憑かれた男だつたかゞ、俥夫を呼んだら二人乗を持つて來た。その俥夫にはもう一人女の連れがゐるやうに見えた、と云ふのだ。俺は然し突嗟に心を決して、ツカ／＼と這入つて行つた。出前持の若者と小女が一齊に、「おいでなさい。お上んなさい」と云ふ。俺は直ぐ若者の視線に鋭い注意を向けた。が、それは慥かに二つのものに注がれはしなかつた。興味のない視線を一寸俺に投げると、その瞬間に鳴り始めた電話口の方へ直ぐ振り向いて了つた。俺はまづよしと思つたが、まだ要愼深く、ヒドク穩かな調子で云つた。

「蒸籠を二人前、二人前だよ」

然しその瞬間に、俺はブル／＼と總毛立つて思はず立ち上つた。俺に餘計な一人前を注文させたものがそこらにゐる！

「よし／＼、一人前でいゝや」

(7)

お吉は蕎麥好きで、夜更しでもするとよく寢しなに食べたがつた。思へば蕎麥屋は鬼門だつたのに。俺の尖つた神經は一體どうなつたのだ、と、急にムカ〳〵腹が立つて來た。

「オイ解つたのかい。一人前だよ」と、思はず小女の背後へぶッつけるやうに怒鳴つて了つた。……しかし……

「あゝ、矢ッ張り二人前だ」

何んとも知れず込み上げて來て、俺は自分の分すら食べきれなかつた。蒸籠の上にポタ〳〵涙が落ちた。

お吉が俺の生きてゐるこの世の中に一緒に生きてゐないと云ふことは、何んと云つても俺には堪え難い淋しさだつた。お吉の好物だつた蒸籠を食ひながら、俺はしみ〳〵とそのことを感じた。昂つてゐた意氣は力なく沈んで行つた。俄に烈しい疲勞をも感じだした。――しかし、俺は哀なお吉のために泣くことを惡いとは思はないが、勞れや何かゝら來る一時的の感傷に馴れ親しんで、徒らなセンティメンタリズムに陷ることは恐れた。早く宿を取つて深い眠りにつかうと思つた。その晩は晩くなつて了つたので、朝飯附き四十五錢と云ふ商人宿へ這入つた。その時分には俺はフラ〳〵してゐた。

……ヒヨイと見ると、つい鼻のさきで、お吉が眠りながらクス〳〵笑つてゐる。俺はその笑ひ聲で目を覺したのだ。何が可笑しいのだと訊くと、あなたが川を渡らうとしてどうとかかうとか、ムニヤ〳〵云つてゐる。可笑しな夢を見てゐたのかと云ふと、頷いて、明日の朝話して上げると云ふ。明日の朝までに忘れて了つちやあ駄目だよ、と云ふと、大丈夫々々々と呟きながら、もうスヤ〳〵寢入つて了つ

た。これで、明日の朝訊いてみたつてきつと何んにも覺えてやあしないんだ。などゝ思ひながら俺もウト〳〵となる。その次に目を覺した時、俺は直ぐ昨夜のことを訊いてやらうと思つて、見ると、俺は見馴れない部屋で、竹の繪の掛つた床の間に面して、固い布團のなかに一人で寢てゐた。安普請の、この暑さに汚れた絨毯を敷き詰めた六疊の間に、晝間がもういつぱいに來てゐる。電車がゴウ〳〵云つてゐる。同時に、俺はすつかりハッキりした。直ぐ飛び起きたが大分脹脛が痛い。それに下痢の氣味で二度續け樣に便所へ行つた。その通りがゝりに見た洗面所の金盥の垢に恐れをなして、俺は顏も洗はずにその宿屋を飛び出し、途中で楊子齒磨を買つて錢湯へ行つた。

　腕に松茸と杯とを彫つた老人がたつた一人皺くちやな體を洗つてゐた。餘り湯が熱いので這入り兼ねてゐると、爺さんは、「ちつと熱ウがすかね」と笑ひかけて、「德さん〳〵」と三助へ聲をかけてうめさせてくれた。俺は勞れた體を湯のなかに沈めた。高い硝子天井から落ち込んで來る光は洗ひ立てた俺の流しや女湯との隔壁の羽目を柔かに照してゐる。流しの、乾いてゐる部分は、ポッとした白い木地が殊更ら美しく見える。爺さんは長閑かにチャプリ〳〵湯の音をさせてゐる。女湯の方からはゆつたりとした話聲が聞える。その聲の主は何故か懷姙女でありさうな氣がする。呼吸の出し入れにも心持表面が上下するほど靜まつた湯がチク〳〵と肌に滲みるのが、痒いやうでいかにも快い。俺は湯槽の椽に盆窪を靠せかけたまゝ暫くウッとりとなつてゐた。何んと云ふ穩かな心持だらう。これが前の日人殺しをした人間の心だらうか。「お爺さん〳〵。私や昨日人殺しをしたんだがね」と、その時の心持で、そのまゝの姿勢で云つたとしたら、爺さんも相變らずゴシ〳〵腕を擦りながら、「さうでがすかい。そりやあまア：

「……」とでも答へさうな氣がした。

俺はサッパリなつて、兼て心にきめて置いたA區の、或る可なりな宿屋へ俥を飛ばした。俥の上の俺は、そのまゝ友達を尋ねるなり、連れ立つてH――あたりに晝寢でもしに行くなり、平常の生活に返りたいやうな氣がした。同時にそれを抑へる心持は、逮捕を恐れると云ふやうな意味ではなくて、俺はもうそんな呑氣な眞似をしてゐる暇はない、充實した、眞摯な生活が開けて來てゐるぢやあないか、と云ふ昂つた心持であつた。然し俺は先づ何をしたらいゝんだ！

尋ねて行つた宿屋は、自分は宿つたことはないが、度々人を尋ねて行つて、女主人にも顏馴染があつたから、注文通りの、奧まつた八疊へ案内してくれた。

俺はそこで、唐木の机に凭つて、今一氣にこれだけを書いて了つたところだ。然しこんなことをいくら詳しく書いたつて仕方がなかつた。俺は唯、俺がどんなにお吉を愛してゐたか、また今も愛してゐるか、それが書いて置きたかつたのだ。それとても、功利的な必要に迫られて是非書かなければならぬと云ふ譯は少しもない。例へば、これを通してお吉の家族に詫びやうとか、或は俺の公判廷で有利な證言の役に立てやうとか、さう云ふ類の目的は更にない。たゞ書きたくて書くまでのことだ。（八月十二日、夜十一時四十分）

お吉は役者と藝者との間に生れた私生兒だ。十三の時から妓藉に這入つて、藝ごとの外には一切智德の教養を受けたことがないと云つて差支ない。性質は小心で、隨つて正直であるが、一方には快活な、

随つて放律なところもある。幼時から虐げられつけた勝氣と、一家を支える主な稼ぎ人であると云ふ高慢とで、何か氣に入らないことがあると、往々拗たり不貞腐れたりする。さう云ふ場合に愛想を盡かして了へばそれきりの女だけれども、その不貞腐れの腫物を押し切つてやる愛さへあれば、直ぐ痛々しい赤むけの地肌を出して泣く。仲々詫びることはしないが、心では自分の非を責めぬいてゐる。その時優しく云つてやれば大低なことは解る。決して馬鹿ではない。しかしそれだけの愛と根氣を有つてゐれば、誰にでも御することの出來る至つて單純な女で、深みも何もない。尤もお吉とは比べものにならないと云ふ程の深みを有つた女を俺はまだ知らない。女の底は大低直ぐ知れるものと思つてゐる。反對にまた、僅かそれだけの愛と根氣とを有ち得ない男にとつては、お吉は殆ど價値のない馬鹿だ。序だから、また少しは癪にもさはるから書いて置くが、嘗て俺がお吉と俺との戀愛を小説に書いた時、或る批評家が、思想の理解のない女にさう深い戀愛が成り立つわけがない、と云ふやうなことを書いた。若しこの男と戀をなさらうと云ふ特志な御婦人があるなら、是非とも二三の「思想」を御用意なさることを御勸めする。其際急を要するならば、日本で流行る外國の思想家數名の名前だけなりとも暗んじていらつしやい。それでもまだその男の思想を理解するに不充分だつたら、平常その男が師事してゐる大思想家の門を叩くより仕方がありますまい。――そんなことはどうでもいゝ。とんだ暇つぶしをした。

俺はO市で偶然にお吉の「屋形」の二階に間借りをした。そこでは大低の藝者は自分で一戸を構へてゐる、それを屋形と云ふのだ。夜書き物をして、書けなくなると散歩に出たくなる癖の俺には、晩くまで賑かな町を近所に控えてゐて、階下は夜更しを平氣な商買であり、家は露次の奥でわりに靜であつた

この屋形が大變都合よかつた。

最初友達の妻君の所へ來る髪結ひが、菊丸さんの屋形で二階を借したいと云つてゐる、と云つてその家を敎へてくれたので、行つて見ると、もう十月だと云ふのに汚い浴衣一枚で、五十格構の女が露次へ出て洗濯をしてゐた。俺は一緒に行つて貰つた友達に、「オイ〳〵大變な菊丸さんだぜ」と私語いたりした。その時きめて、二三日して荷物を持つて行くと、今度はもう一人若いのが恐い顔をして長火鉢の向ふからジロ〳〵睨んでゐた。直ぐにそれが親子で、二人とも藝者であることだけは解つたが、どつちが美しい名の持主だかは暫く後まで知れなかつた。俺は十一時頃朝晝兼代に、冷え切つたまづい辨當を食つて、晩は外に食ひに出ることにしてゐたから、當分階下との交渉は殆どなかつた。それに俺は道樂がイヤになつた時分で、藝者と云はれる女に特殊な興味など有てなかつたし、娘の方でもヒドク無愛想だつた。

或る朝俺が便所で屈んでゐると、娘が朝毎にする十幾つかの神佛の禮拜を片ッぱしからかたづけて、最後に俺が這入つてゐるとも知らず、うッさま妙王様とか稱へる便所の神様の禮拜を始めた。その目的のために便所の明り窓の外側には、燈明や線香立を載せる棚が釣つてあつた。明り窓は普通のより低く、丁度鼻の先にあたつてゐたが、その障子に小さな、指先で突いた程の穴があいてゐた。俺は何んの氣なしにヒョイとそこから窺いて見ると、娘が眉間に縦皺をよせて、壓し潰されさうな聲をして一生懸命に掌を擦り合せてゐた。拜まれてゐる俺(何も俺を拜んでゐた譯でもないが)の格構と、娘の熱烈さとの對比が堪らなく可笑しくつて、俺は人知れず難澁した。——この滑稽は、俺の、娘に對する無關心、

それ以上輕い反感を全く吹き飛ばして了つた。これは二十六七まで親の側で我が儘に育つて、初めて忙しい旅の生活に這入つたその當時の俺と云ふことまで考に入れなければ、本當によく解らない心持かも知れない。その後俺は菊丸のお吉が十六だと云ふことを聞いて、更に心安く覺えた。俺には二十才位に見えたから、生意氣盛りの好かない奴ときめ込んでゐたのだが、「何んだ、それぢやあまだほんの小供ぢやないか」と、その時急に、すつかり上から見下ろす態度に變つて了つた。然しお吉が俺を見る「この青生ッぽが」と云ふ目附は、まだその後も暫く續いたが、それはもう、俺の目には滑稽或は愛嬌に見えるばかりのものになつて了つた。

　初めの約束では、二階は四疊半と三疊の二間とも俺の領分ときまつてゐたのだが、二月たゝないうちに、いつからともなくお吉の床が三疊の方へ敷かれるやうになつた。その時分にはお吉も、火種くらゐは持つて上つてくれたり、餘り埃だらけになると、部屋の掃除もしてくれたりする位の親しみは示すやうになつた。隨つて俺も、話の序にいつかの便所の滑稽なども打ちあけたりした。

　この頃お吉は懐姙してゐたが、その胎兒の父である客は、お吉にとつては通り一遍の「旦那」ではなくて、戀人であつた。そんなことまで段々俺は知るやうになつた。時にはお吉は俺をつかまへて、その不仕合せな戀を訴へた。その年若な客は、その頃、型の如くに金につまつて了つたばかりでなく、性の惡い一現茶屋の女將に引ッ掛つて、たうとう男妾同樣にその茶屋の長火鉢へ金縛りに縛られてゐた。この事に關する惡い報知を得る程に、お吉はよく俺のところに泣きに來た。俺はその客と云ふ奴を輕蔑しきつてゐたし、また二人の通り一遍な、花柳社界的戀愛に同情も有てなかつたけれども、兎も角、お吉だ

けは可哀想に思つた。俺から見れば下らなくつても、お吉には大事な戀なのだから、その話しになると、いゝ、よく、唯一念になれ、一念になれば何事もきつと成就する、と云ふ俺の信念を說敎してやつた。お吉は大人しく、然し上わの空で聞いてゐた。この世間見ずが……世の中はさうお誂へ通りにはいかないよ、と云ふ心持だつたらう。――或る時お吉は俺の鼻の頭を觸らして見ろと云つた。そこが割れてゐれば童貞でないと云ふ、通俗に行はれる鑑定法をすら知るまいと思ふまでに、俺を小供扱ひにしてゐた。そしてその鑑定　結果も、十中八九割れてはゐまいと豫想されてゐるらしかつた。俺もこの滑稽な童貞檢査には何んと返事のしやうもなかつた。道樂のために、勘當同樣に家から放たれてゐた俺だが、猫を被るなど云ふ術も知らないだけに、半期か一年もすると側へよつてさへ道樂の匂がプンと來さうな、世間普通の、所謂道樂者にも、幸にして、ならなかつた。それにしても、それほど純潔に俺を見てくれる無邪氣な娘心が、珍らしくも、可愛らしくも思はれた。男と云ふものはどんなに眞面目らしく見えても、仲々油斷のなつたものぢやアない。と云ふ(馬鹿げた)世學の一頁を、この、一人ですれッからしのつもりでゐる無邪氣な娘に繙かせるのが、あたら花を散らせるやうに惜しい氣がした。

その內に、毎晩外に食事をしに出るのや、夜具の上げ下ろしなどが面倒で堪らなくなつたので、俺は階下と兼用の女中を雇ひ、食事は階下で賄つて貰ふことにした。かうして階下の親子と食膳を共にするやうになつてから、俺たちの間はまた目に見えて近づいた。

六月のかゝりからお吉は商賣を休むやうになつたが、すると母親は、至つて圓滑に、お吉をつれてどこぞに旅行してはどうだと、頻りと俺に勸め始めた。そこには、花代なしに藝者をつれて歩けるのだ

ぞ、と云ふ恩典、（彼等の蟲のいゝ目にはそれは莫大な恩典と認められる）が、口にこそ出さね、表看板として掲げられてゐた。然しその裏には、お吉の休業中の損失を償ふべき金の出所を、あの一現茶屋の女將に横取りされて了つた客の方では愈々絶望だと早くも見て取つた母親が、この際右の候補として、お吉を俺に押しつけて置くのも或は一策かと思ひついた肚の底は、その持ち掛け方が圓滑なだけ、露骨らしく、俺にも見え透いてゐた。俺は無遠慮にも、その魂膽を、お吉と差し向ひの折に話してやつたが、この傀儡は、「まさか！」と云つて、却つて母親の目妻を盗まうと企てゝゐた自分の下心で赤面するほどの迂濶さ加減だつた。母親の側に潜んでゐるこの旅行の危險性よりも、その時俺は、この迂濶な娘の側に却つてそれが潜んでゐると感じた。それ所か、その危險は、俺の頭よりも却つて娘の上に懸つてゐるとも云へる位だつた。若しも俺が以前の狠であつたなら、この娘は又もや泣かなければならないことになつたに、と。今では俺は狠ぢやあないが、しかし、母親が貪慾な罠の綱を手繰らうなどゝ企てたなら、俺も、「狠比べならまたそれで、俺だつてお前達にやあ負けやしない」位の氣持にならないものでもない。けれども俺が自分でその墮落を許さない限り、この旅行で若し俺が繋がれるとすれば、それは母親の罠ではなくて、却つて娘の善良な好意であらう。工らむ母親より。工らまぬ娘の側に危險、（若しそれを危險と云ふならば）があると感じたのは、さう云ふ譯であつた。――そこで俺は考へてみたが、意力次第でこの旅行は何事もなく濟ませられるとも、またそれは困難なこととも、兩方に思はれた。俺は運命の波に捲かれてみたい氣が起つた。またツマラない紛擾でゴタつきでもしたら面倒だとも思つた。その時分もうだいぶ好きになつてゐたお吉と戀に落ちることは、イヤどころか大變結構だが、娘が

馬鹿氣て餘計に背負はされてゐる借金を思ふと、到底夫婦になれさうな的はない。俺は迷つた。迷ふほど、どうなるものか、行ける所まで行つて見ろ、と云ふ氣が頭を擡げて來た。そこをまた情慾が隱然とあほり立てる。ひとの申し出を斷り憎がる性分が手傳ふ。たうとう俺は無理算段までして、伊勢參宮から二見、鳥羽へと出かけることにした。この目的地に就いても、俺は一切親子の意見に從つた。

三日二晩の旅は、早くも俺の心をお吉の可憐な心に結びつけて了つた。母親の思ふ壺へは、お誂へ通り嵌り込んだ譯だ。稍々亢奮の狀態で旅から歸つて來た俺は、お吉が心配して止めるのも聽かずに、その晩直ぐ、俺たちの間に體の關係の出來たことを、母親に話して聞かせた。母親の顏には、明かに、「オヤ〳〵、この餌食は自分で罠の紐を締めてくれる。呆れ返つた……」と誌るされた。それを見ると俺は、却つて尻こそばゆい氣がした。「お前は自分の善良を賣り物にして、この老猾まで捕虜にするつもりだな」そこまで反省した。そして自分で自分の洞察力に感動して、それほどの惡でもないのに、恐縮して、冷汗を流した。然し何んにも知らない母親は、「まづこの按配なら大丈夫」と、「あなたはほんとに正直でいゝ」などゝ俺を褒めてくれた。その時には俺は心中でセヽラ笑つたが、しかし、俺のいゝところは、ほんとにそのあんまり當にならない正直くらゐなものかも知れない。鼬のやうに敏捷に裏廻りをして、兎角俺の「正直」を引ッくり返しては面白がつてゐた「猿智慧」奴を、段々に締め上げてくれたのは、全くお吉の「馬鹿正直」の力であつた。（十三日夜）

お喋りな俺はまた餘計なことを長々と書いて了つた。その上昨日は下痢と先日來の勞れとで一日寢て

了つたから急がなければならない。十二日からの新聞は床の間に重ねて置いてある。一寸讀んでみたいが餘計な芥勞になることでも出てゐると困るから、我慢してゐる。だから一向に探偵の進捗のほども知られないが、何しろこの宿屋の宿帳にはチャンと本名が書いてあるのだから、俺の所爲と解ればもうお仕舞た。兎も角もうあんまり長いことはあるまい。今夜は何んとなく近づいて來る足音が聞えるやうな氣が時々する。さあどん／＼書いて了はう。（十四日夜）

やがてお吉は女の子を産み落したが、それは發育が惡くて一時間半ほどの壽命で死んで了つた。この子の死因に就いて俺は、自分に禁慾の力の足らなかつたことを苦しんだ。他人の子だからと云つて、俺は人の命を輕んずるやうな低級な考は有つてゐないが、今から考へてもあれはよくなかつた。その當時の苦悶は仲々のものだつた。この苦悶がお吉に對する俺の戀を、隔段に嚴肅にし且つ深めた。一方お吉の方を云へば、彼女の戀は必竟以前の客を思つたゐた心で、唯對象が變つたものと云つて大過なかつた。彼女は普通の藝者がする型の如き戀よりほか知らなかつた。俺はまた情人の役には倦き々々してゐた。もつと素朴な、强い戀を欲してゐた。だから時にはウンザリすることがあつた。そしてその度に彼女の戀の淺墓なことを責めた。それがもとでよく俺たちは喧嘩した。お吉はそんな時、「あなたは雷(かみなり)の火性で、私は平地の木なんだから仕方がないけれど……」などゝ云つて、唯俺か無理を云ふやうにばかり釋(と)つた。しかしそれでもいくらかづゝは、彼女の心にある、出來合ひの「型の如き戀」が崩されて行つた。その跡には新蘇な芽生が頭を擡げて、段々に生長した。お吉は初めて世に生長する戀のあることを

知つた。

お吉が產褥を離れてから商買を始めるまでの數週間が俺たちの密月だつた。恰も、一番性交を愼まなければならない時機にあつたから、俺たちはまるで西洋の小說にある許嫁のやうに樂しかつた。しかし程なく俺たちには、輕少ながらも壓迫が來た。お吉が茶屋の座敷に、下賤な客と云ふもの丶前に曝されてゐる時間は、俺にとつて常に快くなかつた。殊に彼女が一晩中歸つて來ない晩は、(それは十二時過ぎに箱屋が何か取りに來る物音で二階にゐる俺にも豫知された)とても眠られなかつた。その外に、俺たちの噂、殊に俺の噂は露次内の合壁から波紋のやうに擴がり出して、やがて冷笑、惡評、批難などに變形して、また俺たちの前に戻つて來る、と云ふやうな不快事も生じて來た。母親はまた何か娘に對して氣に入らないことがあると、きつと俺のことを持ち出して、「勤めの憂さ晴らしにあんなことも大目に見てゐれば增長して……」とか、「一文にもならない者を、何もそんなに大事にかけることはない」とか、少し俺の歸りでも晚いと、「まんた(女郎)でも買ひに行つてるんだらう」とか、よくそんな風なことを云つてお吉に當り散らしたさうだ。俺は小供の時からそんな風な言葉で、(例令蔭からでも)話されたことは全くなかつたから、口惜し泣きに泣いてゐるお吉の口からそれを聞くと、その舌の持主を八ッ裂きにしてやりたいほど腹を立てた。然し俺はお吉のために、お吉を愛するが故に總てを忍んだ。――――俺たちの身の末がかう云ふことになると知つてゐたなら、俺はその當時溜飮を下げて置けばよかつた!

かくして二年近い月日がたつた。その間に俺は、或る時は自發的に、或る時は他動的に、お吉の傍(そば)を離れて、遠くM市やT市や避暑地、避寒地へも移つて、二三ヶ月、永い時は半期ほども別れ〳〵に暮し

たこともある。けれども本當の戀人同士の間は、いくら時間や空間が遮つても、却つて近よりこそすれ、冷め遠ざかるものではない。今はお吉も昔のお吉ではなかつた。俺と云ふ大地からは、いくら延びても離れることの出來ない樹木だつた。次第〳〵に俺のなかに深い根を下ろし、そこに培はれて枝葉も大分延びてゐた。

その時俺はお吉の懷姙を知つた。愈々俺は、どのやうな困難と戰つても、お吉と、生れて來る者の上に、立派な保護の位置と實力とをシッカリ握らなければならない時が來たのを感じた。それは俺の尊い任務であり、同時に特權であつた。さうして總ての解決をつけるには、たゞ「金」さへあればよかつたのだ。併もその額は、金持ちにとつては、貧乏な日本の金持ちにとつてすらホンの鼻屎ほどの、五千圓足らずの金だ。それが俺にとつては、龍の顎にある珠とやらであつた。俺が今更もの珍らしげに書き立てないでも、こんな悲劇の種は、世間一般等ではくほどザラにあるが、誰も俺のやうに眞劍になつて狂ひはしない。しかし、俺がその時世間並みに諦らめて了ふか、でなければ心中でもして了つてゐたなら、今かうやつて血眼になつてこれを書く光榮は擔ふことが出來なかつたのだ。世間の奴等はこの「光榮」と云ふ字を見て、さぞ鼻の先でまた例の賤しいセヽラ笑ひをするだらう!

俺は早速T市に歸つて兩親に說きつけてみたが、まるで氣違ひ扱ひにされて了つた。それから、剛い頸を屈して親類の間に賴み廻つたが、どこでも同情の言葉だけで實質は得られなかつた。お吉の母親の側ではテンデ問題にもされなかつた。そのうちお吉は愈々商賣の出來ない體になつて了つた。その時分には旣に母親は商賣をやめてゐたし、勿論貯へなどあらう筈はなし、玆に一家はその日〳〵のことにも

困るやうになつた。箪笥は立所ろに空ッぽになり、昨日あつた道具か今日見えないやうな日が來たが、しかし到底焼け石に水だつた。母親は蟀谷に青筋を怒張させて、齒をガチ〳〵云はせた。娘は青くなつて、白痴のやうに、開き切つた瞳孔から一つ所を見詰めてゐた。月が重るにつれて困難は量んで來た。月末にはみんな病人だつた。或る朝洋服を着た男と、短いトンビの下からインキだらけな袴を出した男とが這入つて來たが、誰れも驚き騒ぐ者もなかつた。二人の男は、「何んにもないんだなア」などゝ云ひながら、そこらの物にペタ〳〵札を張つて歸つて行つた。更に怖ろしい日が來た。俺が外から歸つて來ると、家の中には凄いほど陰慘とした空氣が漂つてゐた。母親は俺の顔を見ると、齒をむいて、聲を立てずに笑つて次の間に這入つて了つた。娘はうつ伏しになつて震へてゐた。――あとで二人きりの時の話に、その日俺の留守に、どうも體が惡いやうだから一度診て貰へと云つて、母親が、木綿の紋附を着た中老人を連れて來て、イヤがるお吉を腹ン匍ひに寢かして置いて、腰に針を打たせたと云ふ。そして俺が歸つて來た時には、死んでもそのことは俺に云ふなと、母親から嚴しく云ひ渡されてゐた所だつたのださうだ。俺は二階から駈け下りた。母親は床の中で目をつぶつてゐて、剛情に返事をしなかつた。俺は哀なお吉を殘して再びT市に出た。然し今度も同じ結果より得られなかつた。

この困難の最中へ、天は、健全な、美しい人生の芽生を送つて寄こした。俺たちは、俺とお吉は、涙を流して喜んだ。これに鼓舞されて俺は三度兩親の前に頭を下げた。流石に父も動かされた。しかし五千圓は父の身にとつても大金だつた。俺は氣違ひのやうになつて見ず知らずの高利貸の家へ飛び込んで行つて、手ヒドク撲き出された。――俺は誰も恨まなかつた。みんなその人にとつての眞實を話して

ゐる。殊に父の言葉からは、言葉の外の言葉さへ聞えて來た。俺は誰も恨まなかつた。却つてみんなに迷惑をかけて濟まなく思つた。對手になつてくれる人は有難いと思つた。たゞ「金」だけは恨んだ。――恥しい話だが、俺は往來を歩くにも下を見て歩くやうにさへなつた。

生れて來た者は五十日足らずで、營養不良で死んで了つた。運命の惡戯者奴！　生れた時に泣いた俺は、今度は腹を立てた。五日ゝたつてから受け取つたその報知を不審に思ひながらも、俺はO市に飛んで歸つた。すると、蛇のやうな母親は、お吉をどこかに隱して了つてゐて、何んと云つても居所を告げなかつた。俺は千辛萬苦して漸くお吉の在所を探し出して、直ぐ二人でT市へ逃げて了つた。俺たちは同情ある友達の、郊外の家に忍んでゐた。所がお吉がどうも變だつた。俺の云ふことに一々逆らつて、小さく自分一人に固まつてゐる。まるで利己的な、醜い、小さなけだものだつた。十年も女郎をしてゐた女のやうに、だらけ切つてゐた。頭には南京綿でも詰まつてゐるかと思はれるほどメチヤクチヤを云つた。幾度か俺は彼女を打うとしたが、こらえた。俺は唯彼女に口を開かれることゝを恐れた。そして自分で自分に云つた。「この頃のお前の、緊張しきつた興奮の高嶺から見下ろせば、誰だつて少し間抜けに見えるのだ。女と云ふものはこんな場合でもさう一生懸命になれるもんぢやあない。そこは男と女とは違ふんだから、彼女がお前と同じやうに興奮の高嶺に登らないからと云つてそれを責めてはいけない。若し强ゐて責めたければ、哀な彼女を一人谷底に殘して置いて、そこから引き上げてゆく力もないお前自身を責めるがいゝ。實際お吉は少しも普段と變つてやしない。どころか、あれでも普段よりはづツとハキハキしてゐるのだ。さうお前のやうに、今お前の立つてゐる、その興奮の高嶺からばかりひとを見

てはいけない」と。然しそれは不幸にして俺の自ら慰める言葉に過ぎなかつた。醫者は、彼女が烈しい腦病で、次第に白痴に近づきつゝあることを宣言した。

たうとう俺は一人になつて了つた。

そこに、或る日、警察の男が友達の家へ來て、俺たちが來てゐないか尋ねて行つた。その翌る日俺たちは、友達の止めるのも聽かずに、大膽にも白晝T市へ出て行つた。お吉は始終俺の袂の先をつかまえてゐた。往來を歩きながら、俺は終にあのことを決心した。それから必要なものを調へて、例の青ンぶれくのかみさんの家へ行つた。……そこの二階でお吉を後ろから抱いて、片手で口から流れ出る血潮を手巾でうけてやりながら、俺は初めて、

「死んどくれ！」と耳もとで私語いた。

お吉はそれを聞いて急に後ろへ振り向かうとした。――「よし〳〵、解つた〳〵、俺も一緒に死んでやりたい！　しかし俺には仕事がある。これで死刑になればそれまでの話だが、俺は自分ではどうしても、自分を殺す譯にいかない。殺してはならないんだ。解つたらう？　え？」

靜かに俺の言葉に耳を傾けてゐたお吉は、又もや急に身悶えをして、手巾の奥で何か云つた。俺は手巾を少しのけてやつた。お吉は暫く口をムチャ〳〵云はせてゐたが、

「わたしも死にたくない〳〵」と掠れたやうな聲で二三度繰り返へした。

「俺だつて殺したくはない。然しお前も知つてる通り、俺はお前を幸福に生かさうと思つて隨分骨を折つた。だけれども俺にはそれだけの力がなかつた。この後お前を生して置くことは、たゞお前に不仕合

せな目を見せるだけのことだ。どうぞ幸福に死んでくれ。死んでから幸福になつてくれ。――俺も、もつと早くに、仕事を捨てる氣にさへなつたら、或はお前を幸福に生かせたかも知れない。俺には實際その方が樂な道だつた。然したうとうさうはしなかつた。それはお前にも褒めて貰はなくつちやあならない……」

お吉はもう一度俺の手を烈しく押しのけた。さうして顔を顰めた。鯉のやうに口をアプ〳〵させた。

……しかし、もう何んにも云はなかつた。

こゝまで書いて了へばもう安心だ。今階下の便所に下りたら帳場に妙な奴がゐた。俺の自由ももう數十分のうちらしい。しかし自由がある限りは書き續けやう。書けさへすればまた書きたいことも殘つてゐる。その一つは、何故俺が最愛のお吉を殺ろさなければならなかつたか、その根本の解決だ。慥かに周圍の事情ばかりではない。俺には解らない。氣が急いて考へてみる氣にもなれない。それにはお誂へだ。俺は多分今後澤山暇な、暇過ぎる時間を持つだらうから。

もう一つ、是非これは書いて置かなければならないことが出來た。今この瞬間に出來た。

それは、俺は今、お吉を殺した俺を、心から憎む！　多分今後一生涯憎まなければならないだらう！　俺は惡黨だ！　少くとも、骨の髓まで染み込んだエゴイストだ！　そして今この瞬間に、俺はあらゆる心の力を集めて、あらゆる意味と强度とに於ての、總てのエゴイズムに呪をかける！　俺は大嘘つきだ

つた！　ちつともお吉を愛してはゐなかつた！

足音が來る――いま！　左の手はその貴い自由を失ふ――振り向きもしずに書いてゐると、なんだ、讀んでやがるな――來た〳〵、昨夜から五時間萬年筆を握り續けてゐた光榮ある右の手へも――もう……

大正五年一月十九日作

法燈

長田幹彦

野を罩め、町を罩め、山をこめた一面の曉靄のなかに、銀閣寺畔の村々で落葉を焚く煙がほのぼのと薄紫にのぼりそめる朝まだき、近江がよひの荷馬の後について道芝に置く露を踏み分けながら白川口から登山しだした私は、漸次と日が高くなるに從つて琵琶の湖面を双眸におさめる尾根を越え、老杉森々とした無動寺の谷も過ぎて、十時少し過ぎる頃には、黄褐にうら枯れた四明嶽を左手に仰ぎながら胸を突くやうな急阪を根本中堂の方へ向つて息せき登りつづけてゐた。宿院からうへの磴道は落葉に埋んで、その下の苔蒸した平石がともすると横樣に足先をとらうとする。疲れ果てた四肢はいつか冷たく汗ばみ、吐く息はほの暗い森の樹がくれに白く凝つて、二抱へも三かゝへもあるやうな樹々の立重なつた彼方にやつと大講堂の大屋根を見出した時にはさすがに私もほつとしずにはゐられなかつた。角の茶屋で名物の力餅と息つぎの澁茶をよばれなが

らひと休みして、少し疲れが休まると私はまた魂を喚られるやうな氣持ちに急かれて、すぐさまそこを起つて、廣いだらだら下りの阪路を根本中堂の方へ下りて行つた。

阪を下りきつた處には落葉の散り零れた廣場があつて、その左手に根本中堂は魏然として林間に聳えたつてゐる。廻廊の丹塗も暗く錆びて、四邊には行人の影もなく、靜寂の極みを盡くした寺域には唯梢を洩れる日の光が細かい斑のやうになつて、ちらちら零れてゐるばかりである。風の嘆息も木の葉を鳴らさず、森林の奥には飛鳥の囀りも絶えて、今閑寂な秋日の精が凝つて一山の堂塔伽藍をば隅から隅まで引き包んでゐるかと疑はれるばかりである。

私は廣場の眞中に佇立して、廻廊を越えてみえる本堂の大屋根を振り仰いでゐるうちに何とも名狀することの出來ぬ感激が漸次と胸に迫つて來た。この大屋根の壯嚴な線の流れをみただけでも、三里に餘る山路を越えてはるばる此處まで登つて來た甲斐はあると思つた。此頃では果敢ない酒と女の生活に飽き、徒らに生命の火を浪費する熱鬧のその日その日に勞れて、響ひ形貌のうへからでも寺院とか佛像とか云ふやうな枯淡な、靜謐な物象を好む傾向を生じて來た私には、さうした感激に身も心も浸しつくしてしまふことが決して不自然ではなかつた。妙に偉大な或力に賴り縋り度いやうな、從順な氣になつて、たつたひとり町をぬけだして、こつそりこんな靈地へ登山して來たことが、それだけでも人には秘めた非常な歡びなのであつた。今この根本中堂が自分の心持ちにぴたりと合つて、私の欲する處のものは何んでも頒け與へてくれさうな力をもつてゐるのをみると、私は心の底から湧き上つて來る嬉れしさを覺えずにはゐられなかつた。

私はやがて廻廊を西へ廻つて、本堂のすぐ横手にある拜觀者入口へ行つた。四五級の石階をのぼると本堂と廻廊との境ひのところに二間ばかりの小庇があつて、そこに小机を据ゑて六十ばかりの痩せ姿んだ老爺がしよんぼり坐つてゐた。机の上には木版ですつた大日如來のお守や、傳敎大師の御影などを並べた箱が斜に立てかけてあつて、今日はまだ一人も參詣者がないとみえて古びた錢入れには剩錢に出す一錢銅貨が三十ほどきちんと並べてある。

私の足音が寺內の靜けさに響くと、その老爺はふいと人の好さゝうな皺だらけの顏を振りあげた。秋寂びて參詣者のない日には終日かうして何をするでもなくしよんぼり寺內の靜けさと落葉の音の中に坐つてゐる老爺の姿が私にはひどく氣に入つてしまつた。さういへば白髮まじりの毛の薄い頭を少し斜に傾げて、色の變つた木綿の布子に破れ袴を穿いたその樣子までがまるで世捨て人のやうに奧床しい。

老爺は私がまだ小机の前まで行かないうちに少し嗄れた聲で、

「貴方はん、御堂拜觀でつか?」と訊ねた。朝まだきから今まで坐つてゐてやつと初めて人の顏を見たといふやうな人懷こいその調子が私には山上の寺の生活の寂しさをそのまゝ云ひ現はしてゐるやうに思はれた。

私は小机の前に寄つて、微笑みながら默つて合點してみせた。と、老爺は所定の僅かな拜觀料を收めて、それを錢入れの剩錢のうへへきちんと置き並べたあとで、やをら起つて來た。そして机の傍にぬぎ捨てゝある尻切れ草履を手にとつてはいて、さも坐り草臥れたと云ふやうに腰をふらふらさせながら堂の廣緣を先へ立つた。

堂の正面の庇へ來ると彼は立止まつて、先づ中庭の兩側にある玉垣をした小笹の叢を見降ろしながら改まつた聲で、

「彼處に見えますのが竹臺、開山傳敎大師樣が唐の國へお渡りの砌、天台山圓宗寺筬篠の竹林を切取りお歸りになつて後この中庭にお挿しになつたのがあれで御座ります。南方の竹臺を筬篠と申しまして、あれには山王七社の權現を勸請して御坐ります。北方のが筠篠、これには日本國中の大小神祇がすべて勸請して御坐ります。…………」さういふ文句は所謂案內人の口吻を離れなかつたが、しかし處柄だけに私には洛中洛外のありふれた寺院で聞くのはとは違つて何處となく莊嚴に聞かれた。

荒神塚の來歷などを說明してしまうと彼は今度はその廣緣を眞直に行き盡くして、東側の大扉をぎいつと開けて、御本堂のなかへ入つて行つた。扉は啜り泣くやうなひつそりした餘韻を殘して、私の眼の前には堂內の黑白もわかぬ暗闇がいきなり立塞がつて來た。一步高い閾を越えると、中はもうまるで幽冥境のやうな恐ろしい闇だつた。

正面あたりと思はれるところに大扉がたつた一枚細めに開けてあるので、そこからは絲のやうな外光がほのかに忍び入つて來る。その光は漸次と眼に馴れてきて、堂內に林立する大柱や、蔀戶などが次第に朦朧と視覺に映じて來る。なにが不思議だといつて、この薄明ほど不思議なものはあるまい。その薄明がたゆたふやうにほのめく爲めに、四邊には人語を絕した神秘の影が生れて、じつと見つめてゐると闇が泉から湧き出す水のやうになつて堂の底の方からもくもくと滲み上つて來る。或ものは煙のやうにまた或るものは雲のやうに、私の頰を掠め、手足にまつはりついてゆくのである。

先に立つ老爺の足音は堂内を罩めた靜けさのなかへ深沈と響いていつた。一歩、二歩、三歩、その音は漸次と忍ぶやうに低くなつて、やがてはたと止まつたかと思ふと、

「さあ、どうぞこつちやへ。」

私は足さぐりにやつとその聲の方へ歩いていつた。その暗闇には老爺がいつの間にか板敷のうへへきつと端坐してゐる。

と、みると、此の堂は世の常の寺づくりと違つて、板敷のすぐ向ふは眞暗な谷になつてゐて、その彼方に五座の小堂が並立してゐる。唯一色の暗闇なので、御本尊を除いてはいづれも識別するに難く、また谷になつた暗闇の底に何があるのだか、それも全く分らなかつた。そしてその暗闇の眞唯中に三個の銅燈が黄くほのかに點つて、御本尊の厨子の扉を朦朧と照らし出し、そのあたりに夢のやうな光の環を描いてゐる。その燈がまた何とも云へない神秘な色をしてゐた。

闇のなかゝら突如として聲が聞えた。

「此の根本中堂は人皇五十代、桓武帝の御宇延暦四年、御開山傳敎大師様が當山草創の最初に御建立遊ばした一乘止觀院で御座りまして、赤栴檀の靈木を以つて御自分でお刻み遊ばした藥師如來が御本尊で御座ります。最初は藥師堂、文殊堂、經藏、この三宇を各別に建立遊ばしたので御座りまするが、仁和の頃智證大師様がその三宇を合はせて一宇となし、藥師堂がその中間に御座りまするので、根本中堂と申しまする。御正面のが御本尊、あすこに點つて居りまする御燈明は御開山以來一度も消えたことのない有難い御燈。あちらが大師堂、こちらが毘沙門堂、あすこに御座りまするのが文殊堂、こちらに御座

りまするのが護摩檀、これは延暦十三年御堂供養の砌、桓武帝の行幸が御座いまして、延暦寺の勅額を賜ひ國家鎭護の道場とお定め遊ばして以來、護摩の密修怠ることなく、寶祚無窮天下泰平を祈願し奉る處で御座りまする。‥本堂は桁行二十四間、梁行十八間、圍り七尺三寸の大柱が七十三本……。」と、老爺は莊嚴なる口調で淀みもなく說明して聞かせる。その聲は宏大な殿堂の天井へ陰々と谺してゆく。

私は何よりもまづ傳敎大師以來一千有餘年の間一度も消えたことのないと云ふその三個の法燈を凝視しずにはゐられなかつた。冷嚴な暗闇にほのめく黃いその燈の色、それは無明の闇にさまよふ者に靈魂の故鄕を示す唯一の道しるべか。人間の迷妄を照らし、夢幻の現世に唯一無二の歸趣を敎ふる燈火か、なにしても私は期待してゐたとほり佛敎の內觀的な思索を具象する最も力强い暗示をばその燈の色から充分に享受しずにはゐられなかつた。

私は沈默のうちに漸次と私の心に働きかけてくる或不可解な力を覺えて來た。その力は心の戰きをいつか筋肉の間にまで移して、私はいくら抑へやうとしても五體の底から湧きあがつて來る戰慄を抑へることが出來なかつた。原始的な、何等の修飾もない三個の油燈、二十四時の間人間の僧侶に依つて護られる單なる火、しかしそれは宗祖以來此處に一千有餘年の間、人間界の果敢ない迷蒙を照明し、西方淨土のかすけきおとづれを暗示し、そして又沈默の間に長い歲月の歷史の推移を洞觀してゐた燈火なのである。人生れ、人死し、時代は流水のごとく流れ去つて、泡沫夢幻の譬へのみ殘る人の世に、此の燈ばかりは最初に點ぜられたまゝの色を堂內の闇にほのめかして、こゝに詣でた幾千幾萬の人間に安心立命の靈光を頒け與へてゐたのである。今電燈の文明を誇る町から登つて來た私が、却つてそのほの暗い油燈

の威力に耐力もなく屈服させられてしまつたのも、全くその燈が持つてゐる或大きな歴史的な背景のためなのであつた。

私が佛前を動かないので、少時すると老爺は待ちくたびれたやうに

「まだでつか。」と、訊ねた。

私はふつと氣がついて、

「あゝあの氣の毒だが、私をもう少しの間此處へ置いといて貰ふ譯にはいくまいか。私はせめて三十分間でもかうして此處に坐つてゐたい。」

「そら構まやしまへんが……」老爺は稍當惑したらしかつたが、私の擧動をみると安心がいつたかして、「ほんならお歸りには矢張りあの扉口をおでやして、今來た道をあの入口まで出とくれやしたらえゝのどすさかい……」と云つて、そのまゝ寒さうに肩をすくめながらすたすた堂の外へ出て行つてしまつた。その足音は扉口から堂の外を廻はつて、漸次と彼方へ遠のいてゆく。

私は心が靜まるともう一度燈明を眺めた。光の色は漸次と眼に馴れて、黄いなかゝら今度は灼熱した白い光環が幾重にも幾重にも湧きあがつて來るやうに見える。その光環は傳教、慈覺、仁忠、慈惠などの聖者が點した智惠の光のやうに、瞑目した御本尊の厨子の扉にそつと匐ひかゝつて、そこから大乘、密教の暗示が人の心に微妙な影を投げてくるやうに思はれる。

私はふと、今迄自分が營んで來た生活を振顧るやうな氣になつた。高きに登つて平原の國を下瞰するやうに、そこには海もあれば、丘陵の起伏もあり、また幾山川の限りない迂曲もあつた。その間を辿つ

て、汝の通つて來た路は此れだぞと云はぬばかりに唯一線汚穢の赤線が引かれてあるのは私の過去であつた。娑婆の穢瀆に塗れ、五慾の迷ひに轉輾して私はこれまで悶き、苦しみ、泣き、喚めきして來た。生活の記錄は何だと訊かれたら、私は即ち過去の鄕國に痕づけられた野獸の足跡を示すより外はないのである。生れて三十年、夢のやうにして過ぎ去つた少年時代を除いてあとはすべて此れ自己冒瀆の歴史のみである。女を姦淫し、人を欺き、智惠の聖火を踏みにじつてその上に情慾の劫火を點じた。罪障といふことを取つて除けたら跡に何が殘るであらう。私はさう考へて來ると、何かしら急に心細く、頼りなくなつて、此の瞬間なりとも此の寺で落髮得度して寂しい僧侶の生活に入り度いと思つた。僧侶の生活一口に云つてしまへばそれも亦虛僞の生活である。しかし今この比叡の聖地にかうした根本中堂が存在してゐる限り、私は身に墨染めの法衣をまとつて、口に十念を誦し、朝に夕にこの法燈の光を凝視することが出來ればそれで大きな滿足を得ることが出來ると思つた。少くとも靜寂な、禁慾の生活に入ることが出來れば今の心は佛陀の力に縋らずとも或安心を得ることが出來るのである。

「色即是空、空即是色、心耳を澄まさねば眞如の月みゆることなく、眞如の月を見ざれば一念發起の扉開くことなし、この理一あつて二あることなし、罪障の雲來れば五慾煩惱必ずそれ應じ、夢幻の世に身を狹くす。彌陀の淨土に達するはこれ煩惱を厭離し、念佛に一向するの謂なり。……」

何處からともなく聞ゆる聲なき聲は悉く私の胸に共鳴する。私は悚然として戰いた。

と、その時何處からともなく異樣な物音が聞えて來る。漸次と近寄つて來るのをみるとそれは外廊を傳ふ人の足音で、又新らしい參詣人が來たとみえて、正面の廣緣のところではさつきの案內の老爺がぶ

つぶつ説明してゐる聲が聞える。

やがて扉口から入つて來たのは西國する人々と見えて、年老つた男と女が二組ばかりひそやかな足どりで歩いて來る。背には笈と菅笠を負つて、白の手甲脚絆も山路の露に濡れ、いたく旅疲れはしてゐるやうであつたが、しかし身装の賤しからぬ處をみると念佛三昧に日を送る大阪あたりの隱居づれと覺しかつた。その人達は暫らくの間扉口の明るみへ立澱んでゐたが、やがて衣紋をつくろひながら堂內へ入つて、三步四步の間にみるみる眞黑な影となつてしまつた。

「此の根本中堂は人皇五十代……………。」老爺は御本尊の正面へ立つてさつきと一言一句違はぬ說明の言葉を印で捺したやうな調子で呟きだした。句々の抑揚までさつきと少しも變らない。

「本堂は桁行二十四間、梁行十八間、廻り七尺三寸の大柱が七十三本……。」と、云ふところで言葉を切ると、ひとつれの老人達はことことひそやかな物音をたてながら板敷のうへゝ腰を下ろして、暗闇のなかで「南無阿彌陀佛。」「南無阿彌陀佛。」と、口々に念佛を唱へだした。その聲はいつの間にかひとつの讀經に變つて、彼等は佛前の香爐に香を薰じながら交互に般若心經を誦した。

ところへ今度はまた遠くの方から突然、

「誰れもおゐしまへんか。御免やす。御免やす。」と、云ふ若い女の聲がかすかに聞えて來た。丁度朝まだきに京の町をでると今頃はどんな弱い足でもこの御堂へ達する頃なので、拜觀人はともするとこ三組も四組も一時に立込むのであつた。

老爺は我々をそこへ置き去りにしたまゝ又そゝくさ外へ出て行つた。

やがて又堂の外廊では

「あすこに見えますのが竹臺、開山傳教大師様が唐の國へお渡りの砌、天台山圓宗寺の……」と、云ふ聲が繰り返して聞える。今度は大連と見えて、足音がばたばたと喧しい。そして角のところで足音がばらばらになつたかと思ふと、やがて扉口のところでは派手やかな着物の染色が外の光にぽうつと映つて藝妓らしい女と舞妓らしい少女が五人ほどかたまつて案内をも待たずについと入つて來た。

「なあ、へ、おつさん。此處から入つてもよろしいか。ふわッ　暗い、暗い。私何んやしら恐いわ。」

「阿呆らしい、なんで恐いことがありまつかいな。今梅村はんが來やはりまつせ。」

そんな聲と一緒に今度は客と見えて洋服を着た男と外套を着た男が二人つながつて入つて來た。老爺は物臭さゝうにしよんぼりその後に隨いて來る。

又正面へ來て、「この本堂は人皇五十代……」をやり出すと、その時私のすぐ傍で、

「ふわッ　恐わッ。誰れぞ居やはるッ。」と叫んで、女のひとりはそこに坐つたさつきの西國衆のひとりに躓きでもしたやうに消魂しい物音をたてる。

「何んや、何んや。」と男の聲がそつちへ寄つて、

「お、ほんに誰れぞ坐つてやはるのどすか。こらまあえらい濟まんこと。暗うてちよつとも見えまへんよつて、ほんまに鈍なことでした。どうぞ勘忍しとくれやす。はゝゝゝ。」

その笑聲は森閑とした堂の隅々へ賤しげに響いてゆく。

西國衆は返事もしずに低聲で讀經してゐる。

老爺は老爺で「……赤栴檀の靈木を以つて御自分でお刻み遊ばした藥師如來が御本尊で御坐ります。最初は藥師堂、文珠堂、經藏、この三字を各別に御建立遊ばしたので御座りまするが、仁和の頃……」と、紋切り形な言葉を繰り返してゐる。

舞妓達は山いきで氣が浮いてゐるのか、じつと聞いてもゐないで、

「赤栴檀の靈木を以つてちやはる、怪體な云ひやうどつせなあ。」などゝ囁きかはしながらくすくす笑つてゐる。

やがて「七尺三寸の大柱が七十三本。」で説明がすむと、舞妓の聲は、

「なあ、へ、おつさん。あのお蠟燭あげたらいきまへんか。」と、頓狂な聲で訊く。

「御蠟燭は一錢どす。」老爺の聲がそれに答へる。

「お蠟燭一錢どすて。なあ、へ、照蝶はん、姐はん皆して一本づゝ上げまへういな。暗うて私恐わうおすわ。」

「梅村はん、あんたはんもおあげやす。お精進の惡いあんたはんどすさかい、一錢ぐらゐではあきまへんえ。十錢ほどお出しやすな。」

「はゝゝゝ。阿呆かいな、佛さんに十錢上げるより、力餅買うていぬわい。お賽錢のかわりに一本上げたらそれで宜しいがな。」

何處かで錢の音がちやらちやらしたかと思ふと、私のすぐ傍のとこでぱつとマッチが光つた。そしてその焔がたゆたふやうに闇にほのめくと、やがて皺ばんだ手がとつて出す小蠟燭にその火は移されてす

ぐ前の四ッ目格子のところにある蠟燭立へ立てられる。

また錢の音がすると、マッチがぱつと光つて、「今度は私につけさしとくれやす。」と、云ふ聲とともに白い纖細い手が白い蠟燭をとつてそれへその火を移しては蠟燭立へたてる。

それからは二三本の手がともすると消えさうになる燈のまわりへつと寄つて、四邊をほの白くみせながらかわるがわるに一つの蠟燭から他の蠟燭へ火を移しては蠟燭の列を廣げてゆく。みるみるうちにその數は十二三本になつてしまつた。

それと一緒に四邊の闇は漸次と明るんで、しまひには彼等の坐つた處から私の膝のところまで明るく照らし出されて、そこらに坐つた西國衆も、藝妓の顏も、舞妓の顏も、客の顏も一樣に朦朧と浮きあがつてみえる。西國衆は四人とも珠數を結んだ手を鼻の先へ合掌しながら瞑目してゐる。女達は他處いきの着物の大柄な模樣を四邊に振り零して、厚く化粧した顏をさまざまな形に浮かしながらきよろきよろそこらを眺めまわしてゐる。その後から出てゐる客達二人の脂ぎつた顏と、皺だらけな翁。の假面のやうな老爺の顏とは異樣な對照をなしてゐた。私は西國衆の影へ隱れて、それとなく女達の顏をみたが、そのなかの照蝶と、政千代とは見知り越しの間柄である。私は今此處で聲をかけられるのが厭さに態と西國衆の肩の影へ顏を隱して、祈念を凝らしてゐるやうな風を裝つた。

「ほ、こないに燈をともしてもあこの御厨子は見えまへんなあ。ほんまに辛氣くさ。」と、誰れかゞ呟く聲にそつと眼をあげてみると、なるほどかよわい蠟燭の光は暗闇の谷の中程で消えて、それから先はさつきと同じやうに陰暗とした莊嚴な薄明の底に包まれてゐる。三個の法燈は聖者の眼のやうに默して

瞬きもせずに朦朧と點つてゐる。

「もう十本ほども點したら明うなりまつしやろなあ。へ、梅村はん。蠟燭買うとくれやすな。」

「阿呆やなあ、佛さんを玩弄にしてよる。見世もんとは違ふぜ。はゝゝ。」

「いけずやなあ、もうちよつと明うしたら面白うおつしやろ。そんなこと云はんと買ふとくれやすな。」

「ほんまに。錢おだしやす。」可愛い聲が甘えるやうに云ふ。

「はゝゝ。せうむない。そんな阿呆なことしたら佛さんの罰が當つて、明日からお花が賣れんえ。」

「罰が當つたかて大事おへん。なあ、おつさん、こゝの御本尊さん、えゝ佛さんどすさかい、罰ちうなもん當てやはらしまへんなあ。さうどつしやろ。」紅い唇が白い前齒を少しみせながら上を向く。

老爺は子煩惱のやうな顏をしてにこにこ笑つてゐる。

「ほれお見やすな、たんとたんと蠟燭を買ふてあげたらおつさん喜ばゝるわ。」

笑ひ聲と一緒に又錢の音がした。蠟燭の數は白い手に操られて一本一本增えてゆく。

その隙に參詣をおへた西國衆は影のやうにふらふら起ち上つて、

「どうもえらいお邪魔さんで。」と、そこらへ挨拶しながら扉口の方へ出ていつてしまう。私はそつと大柱の影まで居坐り寄つて、そこへ顏を隱しながら唯一心に法燈のあたりを眺めてゐた。

蠟燭の數はいくらふえても、暗闇の谷を罩める暗闇は明るまなかつた。唯巨きな柱の影が末廣がりにふるへながらその暗闇のうへゝ黑々と倒れかゝつてゆくばかりであつた。

女達はひとかたまりになつて、白い顏を蠟燭の光に集めながら口やかましく饒舌りあつてゐたがその

うちに誰れかゞ、「あ、こらなんぼ點したかてあかへん。御堂ぢう一杯蠟燭にしたかて明うならんわ。てれくさ。私もう往なう。」

「お待ちやすな。私も一緒にいきますわ。」

「私もいきますわ。」かたまつたなかゝら二三人がばらばらと立つと、客もそれに應じて、

「さ、もう宜しいやろ。こんな處であぼしてゐたかて面白いことないわ。早う往んで、阪本へ降りて大津の紅葉館へいかうやないか。」

「さうどす、さうどす。私ら今朝朝の御飯もようたべなんださかい、なんやしらお腹が頼りなうなつて來た。」

「ほんまに早う往にまへう。なんぼこんな暗い暗いとこへ入つてゐたかて、活動寫眞映して見せてくれはるのと違ひまつせ。ほゝゝゝ。」

そんなことを云ひながら彼等は皆一緒に立ちあがつて、ざわざわ足音をたてながら扉口の方へ出て行つてしまつた。彼等が通りすがる時、裾さばきと一緒に艶めかしい脂粉の匂ひがすうつと流れて來て。堂を罩める香の匂ひと力を爭ひながらいつまでもいつまでもそこらに殘つてゐた。そして彼等の足音は外廊を傳つて、透き徹るやうな高笑ひの聲が漸次と遠のいてゆく。

私は何故かほつとしたやうな氣になつた。そしてまるで邪鬼でも追拂つたやうな氣安さに胸を包まれながら御本尊の方を見まもつた。そこには宏大な御堂の暗闇に、風なきにはためく數多い裸蠟燭の火と私とがあるばかりである。先人の殘して行つた靈魂の紀念は枯骨のやうになつて今ほの暗い法燈の火影に際涯もなく埋まつてゐる。形なき形、聲なき聲はそこに無限の神秘をさゝやいて、私の心はいくら法燈

を凝視してもうさつきのやうな平靜をとりかへすことがどうしても出來なかつた。山下の世界からのおとづれが私を惑はしたのではない。私は唯一向に法燈の神秘に徹底していくことが出來ない焦悶かしさに耐へられなくなつて來たのである。

それから少時經つて私は到頭御堂の外へ出た。暗闇に馴れた眼は外光の鋭さに眩めいて。一時は眼蓋をあけてゐられないやうだつたが。ふつと氣付くと私は戶外の光景が僅かの時間の間にまるで一變してしまつてゐるのにひどく驚ろかされた。

今まで弱々しいながら明るい光を輝やかしゐた日の影は何處かへ隱れて、四邊には見渡す限り灰銀色の靄が濛々と立罩めてゐる。と、みるとその靄は幾塊にも幾塊にも分れて、或ものは老杉の梢から瀧のやうに又或ものは外廊の屋根から湧きあがるやうに、もくもくと物凄く蠢めいて、いづれも云ひ合はせたやうに南へ南へと流れてゆく。あらゆるものゝ象には濃淡のけぢめが著しく動いて、天地にあるものはすべて羽化登仙しくゆくやうに見える。それは琵琶の湖面から立騰る雲層が今山上の伽藍や森林を罩めだしたのであつた。

私にはその雲の姿が何とも名狀することの出來ない重苦しい不安となつて壓しかゝつて來るやうに思はれた。月常住の燈をかゝげ。霧不斷の香をたくといふさながらの境地は私にとつては餘りに重い負擔だつた。私はこれでも落髮して僧になる氣があるかと云はれてゐるやうな氣がした。

御堂を出てゆく私の足どりはひどく慌たゞしかつた。入口のところでしよんぼり守札を折つてゐるさつきの老爺が、

「もうお歸りでつか。京へお下りやすのやつたら早うおいなはんと、もうぢつきに時雨が來まつせ。」

と、云ひかけるのもはつきり耳にはとめず私は石階のところで私を待つてゐた下駄を突かけてそのまま一散に茶屋の方へ上つて行つた。

廣場のところには今迄堂内で一緒にゐた參詣の人々がもうそゝくさ下山の支度をしてゐる。藝妓達は甲斐々々しく裾をからげて、白足袋のうへから草履をくゝりつけて、各自に太い杖を突きながら今にも歩きださうといふやうな格好をしてゐる。阪路のところには粗末な山駕籠が二丁かきすゑてあつて、ふとみるとその傍には緋鹿の子の振袖がはみだしたやうにふり零れてゐる。大方二人の舞妓がそれに乘つてゐるのであらう。

笈をかけた西國衆はやがて寂しい鉦を鳴らしながら雲の絶え間を無動寺の谷から京の方へ下りていつた。それと一緒に、「さ、雨の來んうちにひと走りに降りてしまはう。」と云ふ男づれの聲に急かれて、藝妓達のひとつれも阪本の方への下向道を聲高に饒舌り合ひながら動いていつた。雲霧は石階の下から幻のやうにもくもくと吹きあげて、先づ藝妓達の紅い蹴出しを包んでしまう。男づれの姿もすぐさま淡墨で描いた影繪のやうになつて、そのあとからゆく二丁の山駕籠は先の駕舁から影が薄くなつてゆく。ふりこぼれた緋鹿の子の袖は雲のなかに瞬く一點の花だつた。

少しづつ動いて來た風はやがてからからゝ乾きゝつたやうな音をたてゝ高い梢から落葉をふり落し來る。人去つたがらんとした廣場には地に敷いた落葉が右往左往に迷ひ歩いて、漸次と濃くなつて來る雲霧とゝもに身をひき絞るやうな寂寥が何處からともなく湧きあがつて來る。

「色即是空、空即是色。………」

「是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂。………」聲なき聲はその落葉のさゝやきから生れて、私はふと法燈の影を思ひだすと、悚然として戰かずにはゐられなかつた。

雲霧は凝つて、闃寂とした一山の堂塔伽藍はやがてひそかやな時雨の音につゝまれて來た。



窓

徳田秋聲

田舍の官吏あがりの磯川は、今日も朝から後の家の窓が氣になつて、二度も三度も二階の物干のところから顔を出して覗いた。

二階から見える近所の家建は、どこを見ても癪にさはるほど汚かつた。模範市街だといはれる自分の店から見える往來を越えて、向側の大きな學校の嚴めしい煉瓦塀や鐵柵や、鐵柵をこえて木立の間に、幾箇もの宏壯な建物の棟やが眺められたが、裏の人家と脊中合せになつて居る側では、向合つてゐる物干や勝手口などに、下等な裏町らしいせゝこましさと汚らしさとが目に觸れて不快であつた。

磯川老人が、今歳三十一になる出戻の娘と共に長いあひだ勤めてゐた役所を罷めて、住古した東北の方の或町を引拂つて、そこで貯蓄した少許りの金や年金を當てに、この通りに空家を見つけて文房具の店を開いてから、もう二年た

らずの月日がたつたが、その間に物干と物干との間が、つい六尺も隔つてゐないやうな裏の家の若い妾が、旦那であつた表通りの藥屋の主人から暇を出されて、世帯を仕舞つて行つたり、その後へお新といふ若い女髮結が引越して來たりした。その右隣の二階にゐた支那人が、夏の休暇時分から、眉の薄い橙色の丸い顏を見せなくなつて、角張つた顏の醫者らしい男が、入替つて來たりした。

冬の日射の暖かい日などには、淋しげに窓の外を眺めてゐるヒステリー性の老人の娘のおしげの目の先で、女髮結のお新が赤い裏の夜具や、意氣な浴衣に襲ねた荒い縞の寢衣などを竿にかけながら、「お早やうございます」などゝ、その當座よく愛相のいゝ聲をかけたものだが、この女が父親の舊が役人だといふことを鼻にでもかけてゐるらしく、つんと澄してゐることや、おそろしい機嫌買ひなことなどに氣がついてから、餘り口を利かないことにしてしまつた。

お新は賣出しの腕ッこきらしく、裏通りへまはつてみると朝はやくから髮を結ひに來る近所の奥さんや上さん連が、それから夫へと詰かけて來てゐたが、二階には可也年取つた五分刈頭の細面な、色の淺黑い、ちよつと俠な肌合の男が、朝の十時十一時頃まで寢てゐて、日脚が角の曖昧屋らしい出張つた家の高い廂をすべつて、物干から障子一杯にほか〱するやうなその光を投げかける時分に、やつと眼ぼつたい眼をして起きて來るのがお定まりであつた。

お新の口によつて、お前さんと呼ばれるその男の窓先に腰かけながら、新聞を讀んでゐる褞袍姿が、自分の薄暗い二階にゐるおしげの眼に時々觸れたが、それは彼女が今迄見なれてゐた田舍の町の周圍の人たちとは、まるで別の世界の人間のやうに自墮落な下等な人間のやうに見えた。

「ねえお父さん、家ぢや田舍にゐた時分には隨分廣い家にゐたわねえ」。

おしげは氣の燥ぐときなどは、いつもの沈んだ樣子とは、まるで別の人のやうな高調子で、物干へ出て安火に紙を張つて澁を塗つてゐる父親に話しかけた。五十五六にもなる痩ぎすな老人の頭髮は、白髮でちかゝゝ光つて、眼鏡をかけた目眦や、口の端の硬い皮膚や細い手首が筋張つてみえた。

何を言出すかと云ふやうな顏をして、老人は刷毛の手をちよつと休めたが、逆ふとめそ〳〵泣出して、いつまでも暗い隅の方にへばりついたまゝ、ぶす〳〵言つては二日も三日も鬱いでゐる彼女のヒステリーの發作を知つてゐるので、好い加減に遇ふことにしてゐた。それに、事實彼女の片著いてゐた家は、自分の任地から、五里ほど隔つた田舍の可也な素封家でもあつた。田地や山林は、色々の不幸續きや、子供の多かつたためなどで、大半は亡してしまつたが家屋敷はまだ歷きとして遺つてゐた。小姑や嫂や、親類などの交渉の煩いその家に、おしげは三年と辛抱してゐられなかつた。そして子供を一人早産してから、そこを出て、前年母親の亡くなつた生家へ歸つて來た時には、彼女の氣質も餘程變つてゐた。

それから六七年のあひだ、おしげは父親の側で暮して來た。遠國の礦山へ行つてゐた弟が死んだり、彼女が片著く時分にはまだ小かつた妹が、土地の敎育家に片著いたりした。

「庭だつて隨分廣かつたんですわね。」

おしげは簞笥のなかから、何やら古い軟かものを引張りだして見てゐながら、今迄つい鼻の先に、亭主とも情夫ともつかぬやうな男と一緒に、何かぶつ〳〵言合ひをしてゐたお新が直りしめた窓の障子の方へ聞えよがしに、甲だかな聲で言つた。

お新は下脹れのした、色の小白い、二十二にしてはどこか更けたところのある女であつた。それに不斷は口數を利かない、雪のなかにでも育つたらしい沈んだ質であつたが、浮氣ものだと言ふことは、つい去年の夏にも、亭主の友達であつた一人の男を引張つて、そつちこつち遊びあるいてゐたので見ても、明かであつた。下町の可也な商家の子息だと云ふ今の亭主とは、同じ女髮結をしてゐる叔母の家にゐるときから知合つて、相場や地所の賣買などをしてゐた彼が、遊蕩や商賣の手違ひなどから、ふと調子を取はづして悉皆仲間の信用を亡してゐた頃、自分の腕でかせぎ得るだけのものを貢いで救つて來た。

障子をしめ切つた二階の部屋で、夜おそくまでぴちん／＼と音をさせて花をひいてゐる男や女たちの不思議な光景を、おしげは何のことゝも知らずに、無遠慮に物干から覗いてゐた。夜があけても、夜通し遊びに耽りつかれた彼等の黄色い顏が、簾の蔭から見られた。八時頃の朝日がかん／＼差して來る比には、彼等の或者は、片蔭の方で、蒲團を枕にして、ごろ／＼眠つてゐた。そしてそんな事が幾晩も續いた揚句に、お新の亭主と、新しい情夫とのあひだに、ある日の晩方はげしい爭鬪が持あがつた。

「よくないですな。近所迷惑でもあるし、警察の方へでも知れたら、尙更ら事ですぜ。私は近所の好誼を重んじて忠告しますが、以來こんな事はおやめになつた方が可うござんせう。」

磯川老人は、その時も外から歸つて來て、裏の井戸ばたで體をふいてゐたその亭主に談じつけた。

お新と年の十八九もちがふその男は、しかし物馴れた男で、その忠告を感謝した。

「毎度どうも濟みません。まあ成たけやらせない事に致しますから、何分どうか大目に……。」

その亭主が、つか／＼と二階へ上つて行つたかと思ふと、先刻から花に夢中になつてゐた連中のなか

へ飛込んでいきなり男に莨盆を投げつけた。
「こん畜生野郎」と奴鳴る聲が、老人たちの耳へまで劇しく響いた。
お新の髮が、きりきりと彼の手に二捲三捲き捲きつけられて、部屋中引ぎずりまはされた。
「この畜生阿魔、生かしちやおかねえから覺悟をしろッ。」
逆上せきつた彼はさうも言つて狂氣のやうに罵つた。どたばたと人の立騷ぐ音、襖の倒れる音、ひいひい言ふ女の泣聲、物を投つける響、どしみし爭鬪する音、罵じる聲などが、しばらく聞えた。
下町育ちの、隣の曖昧屋の上さんが、お新を兇暴な男の手から引離して、自分の家へつれ込んでいつた頃には、彼の怒も漸く落着きかけてゐた。
髮を振亂して、帶を引きずりながら、跣足で裏から出てゆくお新の姿が、二階の窓に立つて見てゐたおしげや老人の眼に、分明見えた。
「刄物を持つてゐなかつたゞけが、まだしも見つけものさ。刄物があつたら、彼奴は生命がありやしないんだ。」
男が大分たつてから、仲人に入つてゐる曖昧屋の亭主に言つてゐるのが、筒ぬけに聞えた。
顏に繃帶などをして、二日ばかり寢てゐたお新が、全く自分の家へ歸つて來るまでには、一週間の餘も間があつた。繃帶がとれると、お新はまたせつせと得意まはりをしはじめた。
小綺麗な身裝をして、芝居や活動へでも行くらしい、睦まじい夫婦の姿が、やがておしげの目にもついた。客が多勢つめかけるまで、お新が二階から降りて來ないやうな日が、幾日となく續いた。

「お嫁になんぞ行くものぢやありやしないわね。」

おしんの浮氣騷ぎが、全く鎭つてからも、二人の姿が目に入ると、見て見ぬふりをしてふと引込んでしまふおしげは、此方へも聞えるやうな聲で、父親に言つた。

おしん夫婦は、湯あがり姿で、風の吹通しな物干へ花蓙や椅子などを持出して、薄暗いなかに浮出したやうにみえる白い顔や腕を動かしながら、いつまでも睦しげに話してゐた。

「夫婦喧嘩なんかするのは、ほんとに見つともないわね。」

おしげは何か洗つてゐた勝手口をたつて、明い店の方にゐる父親の方へ、さうも言つて話しかけた。

「お父さま、家のお二階の窓へ、目隱しを拵へませうね。」

奥の方でそんな事を言つてゐるおしげの聲が、物干に引くら返つてゐるお新たちの耳へ、續いて聞えた。

「本來ならば、あの人たちが自分で目隱しを拵へるのが當然だわね。東京つてところは、ほんとに遠慮のない人たちばかりね。」

「何を言つてやがんだいヒステリー女」

お新が「およしなさい、〳〵」と制するのも聞かずに、男のさう言つて笑つてゐる聲が、おしげたちの方へ筒ぬけに聞えた。

「三十にもなつて、獨身でゐるものだから、やきもきしてやがら。」

男はさうも言つて、部屋のなかへ引込んで行つた。

「お父さま、私お琴のおさらひをしてもよくつて。ねえ、下でしませうか二階でしませうか。」

おしげは機嫌のいゝ時いつも利くやうな小娘らしい甘つたれた聲で、店二階の方へ姿を現はすと、ころ〳〵と琴の調子をしらべはじめた。そして燥いだときの癖で、高い聲を張揚げて、曲を歌ひながら、調子に乗つて彈きだした。

琴の音が途絶えると、四下が急にしんとして來たが、おしげのはづんだ指頭が、容易に絃から離れさうに見えなかつた。

二三日たつと、直にヒステリーの發作が彼女をまるで別の人間のやうに陰鬱にした。そして些とした父親の言を氣にかけていつまでもめそ〳〵泣いたり、ぶす〳〵小言をいつたりした。

その筋の壓迫に堪えなくなつて、暮に郡部の方へ引越して行つた角の曖昧屋のあとへ、アメリカ歸りだとか云ふ一品料理屋が入つて來て、店に硝子のドアをはめたり、天井や壁に白い壁紙を貼つたり、段梯子を附けかへたりした。

前から始終磯川老人の小言の種子になつてゐた、そこの裏二階の窓の目隱しが取はづされて、紙障子のかはりに硝子戸が入れられた。二人の年子らしい子供を有つてゐる洋食屋夫婦は、裏の圍ひの板塀の上に、檐から檐へ高く繩を引張つて、そこへ襁褓を干したりするのが、老人の坐つてゐる茶の間の方から一目に見えた。

髯などを生して、髮を長くしてゐる三十四五の亭主が、コックらしい白いエプロンをつけて、裏へ出て、魚や鳥や野菜の仕入をしてゐるのが、よく目についた。棟の外へ高く突出した黒いペンキ塗の煙突

から、煙が時々思出したやうに長い影を、隣近所の物干の上へ曳いた。

　そこから鍵の手なりに、老人の隣の靴屋と隣あつてゐる盲のおでんやでは、ずつと以前からやつてゐた曖昧な商賣を、尙懲りずまに續けてゐた。

「こんな商賣はいゝ加減に年貢をあげた方が可ござんすよ。家ぢやそれでも一度もお上の御厄介にならずに濟みましたけれど、長いあひだには如何せ碌なことはありません。だから私共では今のうち思斷つて足を洗つてしまひませうと思つて……。」

　下町の方から逐込められて、こゝへ巣を張つてゐた前の家の上さんが、洋行歸りに讓渡したその家を引拂つて行く前に、おでんやの憐な盲目夫婦に暇乞ひかた〳〵意見をして行つた頃には、しばらく暗いところへ入つてゐたおでんやの上さんや、そこの抱へであつた二人の女たちは、保釋金が漸とのことで調つたところで、下げられてぞろ〳〵と家へ歸つてゐた。

「乳呑兒のうちから、警察の飯なんか食つて來たあの子供の行末が思遣られますな。」

　おしんの亭主は、ぎやあ〳〵泣立てゝゐる子供の聲を聞きながら、引越しの暇乞ひにやつて來た隣の上さんと、裏口で話して笑つてゐたが、上さんは長いあひだ窓の目隱しのことなどで、啀みあひの絶えなかつた磯川老人の裏口へも顔を出して、同じやうなことを喋つて來たのであつた。

「や然うですか。」磯川老人は前垂をした膝のうへで見てゐた新聞を下において、眼鏡をはづしながら、縁側の方へ出て來たが、子供二人に常盤津を敎へながら、澁皮のむけた二三人の女をおいて、自分は軟かものを引張りながら、ぞろりとして暮してゐたこの女の顔を、じろ〳〵見てゐた。

「長いこと御近所へ御迷惑をかけました稼業も、これでふつゝり止めてしまふことになりまして……。」

夏の頃、情夫ができたとか、苦しい家の遣繰のことから亭主と喧嘩をしたとかで、一月ばかり産れ故郷の千葉の方へ行つてゐたりした上さんは、裏口で家主などゝ能く切端つまつた論判をやつてゐたものだが、その物馴れた調子が、どこまで度胸がすわつてゐるか知れないと思はれた。

「貴女が正業におつきだと聞けば、それほど結構なことはありません。」

老人は酔漢などが來て、夜おそくまで騒いだり、學生らしい客の姿が見えたりすると、時々警察へあてゝ密告の葉書を出したり、刑事を勝手口へ忍ばせたりしたことを思出しながら、切口上で機嫌よく挨拶をしてゐた。

「この町内の風儀も、それで先づ良くなるといふものです。しかしあのおでんやは迚も止めませんな。あんなにやられても、一向改悛の狀がみえんやうです。」老人は嘆息するやうに言つた。

「私どもと違つて、あのお上さんはあれで叩きあげて來た腕ですから、一度や二度あゝな目に逢つたつて平氣なものです。それにあの方は、この稼業を大層好い商買のやうに思つてゐるんですよ。尤も、今あれをやめた日には、親子三人が日干にならなければなりません。何しろ旦那が、中年のお盲さんですからね。」

「困りものですな。」と老人は溜息をついたが、夏の頃出してゐた氷店に使つた杉の皮で張つた屋臺などを、雨ざらしに投出してある、そこの汚い物干が、こゝから斜ひに見えて、薄暗いその二階にも、客に出てゐる見苦しい女たちの姿が始終目障りになつてゐた。子持の上さんのところへ來る、どこかの隱居

らしい男が、勝手元から透かして覗られる茶の間の長火鉢の前に坐つて、酒を飲んでゐると、眞白にお化粧をした瘦せぎすな上さんが善くお酌をしたりしてゐた。勝手の直ぐ横にある狹い物置のやうな三疊で、その間盲目の亭主は、上の女の子を相手に、赤子のお守をしてゐた。盲目は自分や子供たちの口を過すために、女房を時々そんな男の前へ出さなければならなかつた。どうかすると、彼自身も旦那と一緒になつて、長火鉢の前に坐つてゐることもあつた。

それでも盲目の上さんは、偶には軟かいものなどを引張つて、旦那と一緒に外を出歩いたりしてゐた。食べものも配がはれずに棄てゝおかれる盲目父子のために、女髮結のお新は裏から丼のものを運んでやつたり、自分たちの牛乳を呑ませるために、赤子を抱取つて來たりした。

「家の嬶くらゐ薄情な奴はありませんぜ。何しろお晝から乳呑兒を目のみえない私に叩きつけておいて、餘所を遊んであるいてるですからな。」

若いをりには可也好い腕をもつてゐたらしい、大工あがりの盲目は毒で潰れたくしや／＼の目から、ぽろ／＼涙を出して口惜しがつた。

「でもあのお上さんにはかなひません。私共も感心してゐるのでございますよ。子供を投りつけて、逃出されたつて、お盲目さんの方では爲方がないぢやありませんか。」

「まあ、あれも今に如何かなるでせう。」老人は苦々しさうに言つた。「あんな商賣の成立つて行きやうがないですからな。」

それで二人の女を解放して――偶然としたら證文ごと人手に渡して――長いあひだ老人の目障りであつ

た曖昧屋の一家が、溜り〳〵してゐた店賃の方などの話をつけて、そこを引拂つて行つたのは、暮のうちであつた。間もなく、アメリカ歸りの夫婦が、移つて來た。そして寸法や傾斜の角度などについて、始終小言を持込んでゐた、そこの裏向きの二階の窓の目隱しが、取りはづされ、卓子や椅子などをならべた部屋から、老人の二階や勝手口が、何の障壁なしに、明け透けに見下されるやうになつたりした。

鳶色の女唐服に、黑い天鵞絨の冠りものを戴いた掃溜の鶴といつた風をした上さんが、頰骨の出張つた赭ら顔に白粉を塗り、二人の子供にも愛くるしい洋服を着せて餘所行きの出がけに、スカートの裾をかゝげて近所へ開店の挨拶にまはつたのは、それから大分たつて、壁やペンキが悉皆乾いて、店の仕度が全く調つてからであつた。

「私共では、決して胡散な商賣などは致しません。私共はそんな不正なものではございませんから、どうぞ御安心なすつて。」

洋裝の上さんは、その時老人から窓の故障を言立てられて、さう言つて、長くアメリカにゐた自分たちの經歷などを話しだした。

「前住の方は何をなすつて入らしやいましたか、そんなことは、私共一向存じませんので、たとひ小いながらも料理屋を初めます以上、お客さまの目障りになるやうな、あんな鬱陶しいものはつけておく譯にはまゐらないのでございます。」上さんは黃色い聲で、言立てた。

老人は幾日も〳〵氣になつてゐた、その目隱しの取はづされたことや、鼻の先に突立つてゐる煙突などについて、長いあひだ彼女と言爭つた。

「たとひ商買は正當でも、飲食店は飲食店に違ひないので、傍の迷惑にならんやうに設備は十分氣をつ

けてもらはにやならん。」

「ですから成るたけ私共でも氣をつけたつもりでございますがね。煙突も御覧のとほり出來るだけ高くしまして、窓の方も、硝子に紙を貼りましたやうな譯なんです。」上さんは色澤のいゝ顏を一層赤くして主張した。

「煙突はとにかく、窓の目隱しは規則上、貴方の方で取つけるのが當然なので、何なら私の方で屋主に懸合つてもよろしい。」

「日本の法律は如何か、私どもは存じませんけれど、恐らくそれは德義上のお話だらうと存じますよ。」

「勿論お互に德義に基いて、お附合はしなければならんので……。」

「德義上から申しますと、私共は別に不正なことしてゐる筈ぢやなからうと信じますよ。目隱しは、部屋が暗くなりますから、私共家業のうへに、大變に迷惑致すのでございます。」

「それでは、あの硝子戶は閉きりにでもしておいて貰はんと、私の方が困るので……。」

「成るべく不斷は閉めておくことに注意しませうが、何分客商賣のことですから、お客さまのお開けになるのまで、一々私共で干涉する譯にもまゐりませんからね。」

さう言つて引取つて來た上さんと亭主と、英語まじりで何か話してゐる聲が、しばらくコック場の方から聞えてゐた。

コック場の入口と向合つてゐる隣の勝手口では、お新夫婦の、惘れたやうな顏が覗いてゐた。おでんやの物干からも、白首が二人、物見高い目を瞬つて、先刻から洋裝婦人の辯說に聽とれてゐた。

暫くすると、おしげが負けない氣で彈きはじめる琴の音が、彼女の前二階の方から、洩れて來た。(をはり)